

東関東自動車道(千葉・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 7

－ 木更津市芝野遺跡 －

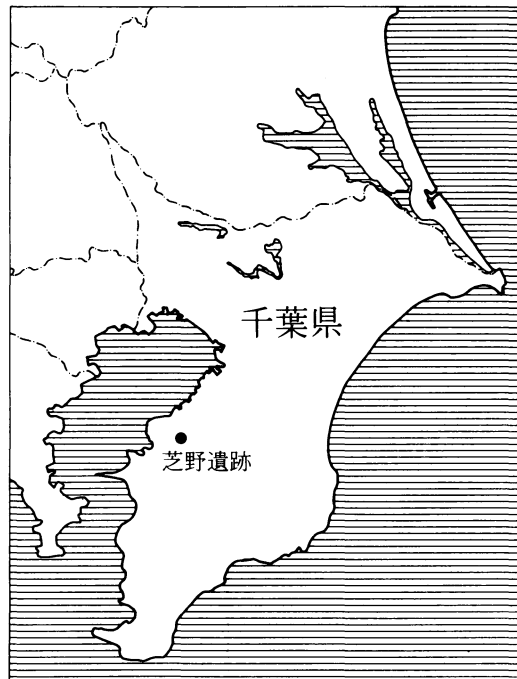
平成13年 3 月

日 本 道 路 公 団

財団法人 千葉県文化財センター

東関東自動車道(千葉・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 7

— 木更津市芝野遺跡 —





SD-45 拡張部 (溜井状遺構) 遺物出土状況

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第409集として、日本道路公団の東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に伴って実施した木更津市芝野遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代後期の水田・古墳時代前期の大溝を初め、古墳時代後期から中世にかけての集落が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年 3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中 村 好 成

凡 例

- 1 本書は、日本道路公団による東関東自動車道（千葉・富津線）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第7集である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県木更津市下望陀字芝野507ほかに所在する芝野遺跡（遺跡コード 206-002）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の編集・執筆は研究員 笹生 衛が行った。
- 6 土壌の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団、木更津市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「奈良輪」（N I - 54 - 25 - 4 - 1）
1/25,000地形図「木更津」（N I - 54 - 25 - 4 - 2）
1/25,000地形図「姉崎」（N I - 54 - 19 - 16 - 3）
1/25,000地形図「上総横田」（N I - 54 - 19 - 16 - 4）
 - 第2図 木更津市役所発行 1/2,500都市計画図
袖ヶ浦市役所発行 1/2,500都市計画図
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成4年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面等の方位はすべて座標北である。
- 11 図面等におけるスクリーン・トーン及び記号等の用例はそれぞれに明示した。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

- 1 調査に至る経緯…………… 1
- 2 調査の経過…………… 1

第2節 遺跡の位置と環境

- 1 遺跡の位置と地理的環境…………… 2
- 2 周辺の遺跡と歴史的環境…………… 2

第3節 調査方法と基本土層

- 1 グリッド設定…………… 6
- 2 基本土層…………… 6
- 3 調査方法…………… 6

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 III層上面の遺構と遺物

- 1 掘立柱建物跡・柱穴…………… 9
- 2 竪穴住居跡…………… 21
- 3 井戸…………… 28
- 4 方形竪穴遺構…………… 47
- 5 土坑…………… 54
- 6 古墳…………… 68
- 7 不明遺構…………… 70
- 8 溝状遺構…………… 81

第2節 IV層上面の遺構と遺物

- 1 竪穴住居跡…………… 100
- 2 円形周溝遺構…………… 104
- 3 不明遺構…………… 117
- 4 土坑…………… 120
- 5 溝状遺構…………… 122
- 6 水田跡…………… 135

第3節 遺構外出土遺物

- 1 弥生時代後期～古墳時代前期の土器…………… 147
- 2 古墳時代後期～奈良・平安時代の土器…………… 151

3	中・近世の陶磁器・土器	156
4	土製品・木製品・銭貨	158
5	表採遺物	160
第3章 まとめ－芝野遺跡の景観変化について－		
第1節	弥生時代後期	161
第2節	古墳時代前期	163
第3節	古墳時代後期	163
第4節	奈良・平安時代	164
第5節	中世	165
付章	芝野遺跡の古環境変遷と稲作の消長（パリノ・サーヴェイ株式会社）	171
報告書抄録		巻末

挿 図 目 次

第1図	芝野遺跡と周辺の遺跡	3	第21図	SE-2と出土遺物	30
第2図	調査区と周辺地形	7	第22図	SE-3・4と出土遺物	32
第3図	調査区とグリッド設定図	7	第23図	SE-5と出土遺物	34
第4図	基本土層図	7	第24図	SE-5出土遺物	35
第5図	Ⅲ層上面検出遺構	10	第25図	SE-6・7と出土遺物	37
第6図	SB-1	11	第26図	SE-8・9と出土遺物	38
第7図	SB-5	11	第27図	SE-10と出土遺物	40
第8図	SB-6・7・8	13	第28図	SE-11と出土遺物	41
第9図	SB-9・10・11・14	15	第29図	SE-11出土遺物	42
第10図	SB-12	17	第30図	SE-16・17・18と出土遺物	43
第11図	SB-13	17	第31図	SE-19・20・21・22・23と出土遺物	46
第12図	SB-16・18	18	第32図	SE-12と出土遺物	48
第13図	柱穴(Pit)出土遺物	20	第33図	SE-12と出土遺物	49
第14図	SI-1	21	第34図	SE-13と出土遺物	51
第15図	SI-1出土遺物	22	第35図	SE-14と出土遺物	52
第16図	SI-2と出土遺物	24	第36図	SE-15と出土遺物	54
第17図	SI-4	25	第37図	SK-1・4・5・6・7・8と出土遺物	55
第18図	SB-4と出土遺物	26			
第19図	SB-4出土遺物	27	第38図	SK-3と出土遺物	56
第20図	SE-1と出土遺物	29	第39図	SK-3出土遺物	57

第40図	SK-9と出土遺物	60	第75図	2号周溝遺構	112
第41図	SK-10・11・12・13と出土遺物	62	第76図	4号周溝遺構	113
第42図	SK-14・15・16・17・20と出土遺物	64	第77図	4号周溝遺構出土遺物	114
第43図	SK-21・22・23・24・25・26・28と 出土遺物	66	第78図	5号周溝遺構と出土遺物	116
第44図	SD-29・30と出土遺物	69	第79図	5号周溝遺構出土遺物	117
第45図	SX-1出土遺物(1)	71	第80図	SX-3・10と出土遺物	118
第46図	SX-1出土遺物(2)	72	第81図	SX-11・12・13と出土遺物	119
第47図	SX-1出土遺物(3)	73	第82図	SK-2・29・30・31と出土遺物	121
第48図	SX-1出土遺物(4)	74	第83図	SD-45拡張部	123
第49図	SX-1出土遺物(5)	75	第84図	Ⅳ層上面溝状遺構土層断面図	123
第50図	SX-1出土遺物(6)	76	第85図	SD-45出土遺物(1)	124
第51図	SX-2と出土遺物	78	第86図	SD-45出土遺物(2)	125
第52図	SX-5・7・9と出土遺物	79	第87図	SD-45出土遺物(3)	127
第53図	Pit430と出土遺物	81	第88図	SD-45出土遺物(4)	128
第54図	Ⅲ層上面溝状遺構土層断面図(1)	82	第89図	SD-45出土遺物(5)	130
第55図	Ⅲ層上面溝状遺構土層断面図(2)	83	第90図	SD-45出土遺物(6)	131
第56図	SD-7・8・9・20・21・24出土遺物	85	第91図	SD-45出土遺物(7)	132
第57図	SD-28・33・36・37出土遺物	86	第92図	SD-94A出土遺物	134
第58図	SD-37・41出土遺物	89	第93図	水田面土層断面図	136
第59図	SD-44・50・55・102出土遺物	92	第94図	配列遺構と出土遺物	139
第60図	Ⅲ層上面遺構全体図(1)	94	第95図	配列遺構出土遺物	140
第61図	Ⅲ層上面遺構全体図(2)	95	第96図	Ⅳ層上面遺構全体図(1)	141
第62図	Ⅲ層上面遺構全体図(3)	96	第97図	Ⅳ層上面遺構全体図(2)	142
第63図	Ⅲ層上面遺構全体図(4)	97	第98図	Ⅳ層上面遺構全体図(3)	143
第64図	Ⅲ層上面遺構全体図(5)	98	第99図	Ⅳ層上面遺構全体図(4)	144
第65図	Ⅲ層上面遺構全体図(6)	99	第100図	Ⅳ層上面遺構全体図(5)	145
第66図	Ⅳ層上面検出遺構	101	第101図	Ⅳ層上面遺構全体図(6)	146
第67図	SB-2	102	第102図	遺構外出土遺物(1)	148
第68図	SB-3と出土遺物	103	第103図	遺構外出土遺物(2)	149
第69図	SB-3出土遺物	104	第104図	遺構外出土遺物(3)	151
第70図	1号周溝遺構及びSD-108	105	第105図	遺構外出土遺物(4)	152
第71図	1号周溝遺構出土遺物	106	第106図	遺構外出土遺物(5)	153
第72図	2号周溝遺構と出土遺物(1)	108	第107図	遺構外出土遺物(6)	155
第73図	2号周溝遺構と出土遺物(2)	109	第108図	遺構外出土遺物(7)	157
第74図	2号周溝遺構と出土遺物(3)	110	第109図	遺構外出土遺物(8)	159
			第110図	表採遺物	160
			第111図	中世陶磁器・土器組成(1)	167

第112図	中世陶磁器時期別割合	167	第119図	植物珪酸体層位分布図	183
第113図	中世陶磁器・土器組成(2)	167	第120図	珪藻化石	187
第114図	中世建物面積分布	167	第121図	花粉化石	188
第115図	試料採取地点	172	第122図	花粉化石	189
第116図	分析用試料採取層位	173	第123図	植物珪酸体	190
第117図	珪藻化石層位分布図	178	第124図	植物珪酸体	191
第118図	花粉化石層位分布図	181			

表 目 次

第1表	芝野遺跡全体中世陶磁器・土器組成表(破片数)	167	第4表	珪藻分析結果	176
第2表	古代・中世建物規模比較表	167	第5表	花粉分析結果	180
第3表	珪藻化石の生態性	174	第6表	植物珪酸体分析結果	182

図 版 目 次

卷首図版	SD-45拡張部(溜井状遺構)遺物出土状況	図版18	畦畔 畦畔 土器配列遺構
図版1	遺跡周辺航空写真(平成4年撮影)	図版19	水田跡
図版2	Ⅲ層上面の遺構	図版20	出土土器(1)
図版3	SB-5 SB-11 SB-13	図版21	出土土器(2)
図版4	SI-1 SI-2 SB-4	図版22	出土土器(3)
図版5	SE-1 SE-2 SE-2	図版23	出土土器(4)
図版6	SE-3 SE-4 SE-5	図版24	出土土器(5)
図版7	SE-5 SE-5 SE-8	図版25	出土土器(6)
図版8	SE-9 SE-10 SE-11	図版26	出土土器(7)
図版9	SE-11 SE-11 SE-11	図版27	出土土器(8)
図版10	SE-16 SE-17 SE-18	図版28	出土土器(9)
図版11	SE-12 SK-5 SK-9	図版29	出土土器(10)
図版12	SK-14 SD-29・30 SX-2	図版30	出土土器(11)
図版13	SD-41 SD-41 SD-44	図版31	出土土器(12)
図版14	Ⅳ層上面の遺構	図版32	出土土器(13)
図版15	1号・2号周溝遺構 1号周溝遺構 2号周溝遺構	図版33	出土土器(14)
図版16	SD-45 SD-45 SD-45	図版34	中世陶磁器(1)
図版17	SD-45 SD-45 SD-45	図版35	中世陶磁器(2)
		図版36	木製品

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

日本道路公団では、千葉市から富津市に至る高速自動車道である東関東自動車道館山線を計画した。この路線のうち、千葉市から市原市、袖ヶ浦市を経て木更津市に至る約35kmの区間が事業化され、千葉・富津線として建設が行われることとなった。

用地内には数多くの遺跡が所在することから、その取扱いについて、千葉県教育委員会と日本道路公団との慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

調査は、平成元年1月から開始され、平成6年6月に全ての発掘が終了した。平成5年度から各遺跡ごとの本格的な整理作業が開始され、順次報告書を刊行し、現在に至っている。

2 調査の経過

芝野遺跡の発掘調査は、平成元年4月から対象面積8,100㎡のうち、上層3,000㎡についての確認調査を行った。その結果、全域から遺構及び遺物が検出されたため、この部分については全域を本調査対象とし、平成元年度にそのうち1,500㎡の本調査を実施した。平成2年度は平成3年1月から対象面積8,100㎡の確認調査未了部分5,100㎡の確認調査を実施した。その結果は場整備による削平を受けた1,050㎡を除いた4,050㎡について本調査対象とし、平成2年度中にそのうちの1,000㎡の本調査を実施した。そして平成3年度は、平成元年度本調査範囲の未了部分とあわせて4,550㎡について本調査を実施し、すべての現地での調査を終了した。

整理作業は平成4・5年度及び平成10・11年度に実施し、報告書刊行は平成12年度に行った。発掘調査および整理作業に係る各年度の組織及び担当職員並びに作業内容は以下のとおりである。

平成元年度	組織	調査部長 堀部昭夫、班長 佐久間豊
	期間	平成元年4月1日～平成元年6月28日、確認調査(3,000㎡)・本調査(A1区)
	担当	技師 半澤幹雄
平成2年度	組織	調査部長 堀部昭夫、班長 郷田良一
	期間	平成3年1月17日～平成元年3月31日、確認調査(5,100㎡)・本調査(B1区)
	担当	技師 井上哲朗
平成3年度	組織	調査部長 天野努、班長 郷田良一
	期間	平成3年4月1日～平成3年11月30日、本調査(A2区・B2区)
	担当	班長代理 加藤修司、技師 神野信・糸原清・沖松信隆
平成4年度	組織	調査部長 天野努、班長 郷田良一
	内容	水洗・注記から遺物の復元
	担当	班長 郷田良一

- 平成5年度 組織 調査研究部長 高木博彦, 所長 石田広美
内容 図面・写真の整理, トレースの一部
担当 副所長 西川博孝
- 平成10年度 組織 調査部長 沼沢豊, 所長 高田博
内容 実測・トレースの一部
担当 主任技師 福田誠・糸原清, 技師 城田義友
- 平成11年度 組織 調査部長 沼沢豊, 所長 高田博
内容 実測, 挿図・図版作成, 原稿執筆
担当 副所長 小久貫隆史, 研究員 小原邦夫・笹生衛・井上哲朗, 技師 城田義友

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

芝野遺跡は、木更津市下望陀字芝野に所在し、小櫃川中流北岸、標高12 m前後の自然堤防上に立地する。小櫃川は房総丘陵に源を発し、東京湾に注ぐ2級河川であり、遺跡周辺では幅3 kmほどの沖積平野を形成している。この沖積平野をはさみ、北側ではローム層を基盤層とする洪積台地が広がり、南側では上総層群を基盤層とする丘陵部が展開している。

芝野遺跡周辺の沖積平野部分では、小櫃川に沿って自然堤防が発達し、その後背低地部分には、航空写真などの観察から複数の古い旧河道が確認できる。芝野遺跡が立地する自然堤防の北側にも小櫃川支流跡と推定できる旧河道が存在しており、芝野遺跡が立地する自然堤防上と后背低地・旧河道上との比高差は、1 mから2 mほどとなっている。このような地形状況により、芝野遺跡は小櫃川に面した南側から北側にかけての緩やかな傾斜面となっており、芝野遺跡は自然堤防頂部から后背低地に面した斜面部に立地する遺跡といえることができる。

2 周辺の遺跡と歴史的環境（第1図）

第1図に示したとおり、この地域には芝野遺跡（1）とほぼ同時期の遺跡が多数確認できる。ここでは、そのうち調査が実施され、芝野遺跡と関連性の高い遺跡について簡単に述べる。

北側台地上では、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落跡や墓域が多数確認されている。代表的な遺跡例として、関畑遺跡（2）¹⁾、根形台遺跡群（3）²⁾、谷ノ台遺跡（4）³⁾、鼻欠遺跡（5）⁴⁾などを挙げる事ができる。なかでも根形台遺跡群は、芝野遺跡の北側3 kmの台地平坦面に立地するきわめて大規模な遺跡である。かつては便宜的に境、境No.2、西ノ窪と別々の遺跡として扱われていたが、近年の調査では同一の遺跡として扱われるようになり遺跡群としてまとめられたものである。西ノ窪遺跡部分は西ノ窪遺跡調査会が昭和55年度に、その他の部分については君津都市文化財センターが昭和62年度以降、断続的に調査を行っている。これまでの調査の総計で、竪穴住居跡328軒、方形周溝墓62基、円墳周溝跡3基、方墳周溝跡2基、弥生時代中期の環濠3条、そのほか溝や土坑など夥しい数の遺構が検出されており、時代も弥生時代中期～奈良・平安時代にわたっている。特に弥生時代中期では推定で南北160 m、東西140 mという規模の環濠集落が台地中央南端部に、方形周溝墓群がその西側に展開する様相が確認されている。なお古墳時代後期～古代の集落は西ノ窪遺跡として調査された台地西部を中心に展開するようである。



第1図 芝野遺跡と周辺の遺跡 (1:25,000)

谷ノ台遺跡は、芝野遺跡の北西、約4kmの台地平坦面に立地する。平成4年度から平成6年度にかけて君津都市文化財センターが調査を行った。遺跡の南東部では弥生時代中期の方形周溝墓群と古墳時代後期の古墳周溝跡、北西部では奈良・平安時代の方形区画墓群や土壇群を検出しており、墓域を中心とする遺跡であることが判明している。

南側丘陵上遺跡の例として、椿古墳群(6)⁵⁾、滝ノ口向台遺跡(7)⁶⁾、大作古墳群(8)⁷⁾、笹子城跡(9)⁸⁾などを挙げることができる。

椿古墳群は、芝野遺跡の南約1km、小櫃川を隔てた南側の丘陵上に立地する古墳群で、前方後円墳を含む65基で構成される。このうち前方後円墳1基、円墳9基、方墳1基の11基を当センターで調査している。古墳時代前期の方墳1基を除くと、古墳時代後期の古墳が中心となっている。古墳の下層からは弥生時代中期～後期の集落と方形周溝墓などを検出している。

滝ノ口向台遺跡は椿古墳群の南側、芝野遺跡からはおよそ2kmの丘陵上およびその南東側斜面に立地する。昭和63年度に当センターが調査を行い、弥生時代中期～後期の集落、古墳時代前期の古墳及び後期の土坑墓群を検出している。古墳は調査したものが方墳4基と円墳1基の5基、調査区域外の前方後方墳1基と方墳1基を含めて、遺存していたのは合計7基である。出土遺物により、年代は古墳時代初頭～古墳時代前期と推定できる。なお古墳時代後期と推定される土坑墓群は斜面部に構築されている。

大作古墳群は椿古墳群の南側、芝野遺跡から1.5kmの丘陵上に立地する。平成3年度に当センターが調査を行った。検出された古墳はすべて径10m前後の小規模な円墳で合計6基となっている。また本遺跡では古墳の下層から弥生時代後期及び古墳時代前期の集落と土坑墓などが検出された。

中世の遺跡としては笹子城跡があり、芝野遺跡の南西約2kmの台地上に立地する。当センターが平成3年度から平成4年度まで調査を行い、15世紀後半を中心とした遺構・遺物を多数検出しており、15世紀後半から16世紀前半にかけて上総地方を支配した真里谷武田氏の居城・真里谷城との関連が指摘されている。

一方、芝野遺跡と類似した低地遺跡の例としては菅生遺跡(10)⁹⁾と大寺廃寺(11)¹⁰⁾が挙げられる。菅生遺跡は芝野遺跡から西へ2km程下った、小櫃川左岸の海岸砂丘上及びその後背湿地域に立地する。菅生遺跡調査会により砂丘部分が昭和12年から昭和55年にかけて調査されている。その際、弥生時代中期の集落や古墳時代中期の大溝などが検出され、その後、後背湿地部分については平成4年から平成7年まで当センターが調査を実施し、弥生時代末～古墳前期及び古代、中世に比定される3層の水田面などを検出している。

大寺廃寺は、芝野遺跡の西側約3kmに位置する寺院跡で、川原寺系の軒丸瓦が出土していることで知られている。瓦の年代により、7世紀後半の創建年代が推定されており、馬来田国造の氏寺としての性格が考えられる初期寺院である。この寺院跡の存在により、大寺廃寺や芝野遺跡周辺の下望陀地区が望陀郡の中心地域と考えられている。大寺廃寺の東側に広がる大寺遺跡(12)は、君津都市文化財センターが送電線の鉄塔建設に伴って調査を実施しており、その結果、古墳時代後期～古代の水田跡、およびそれに伴うと考えられる溝、水路や土坑などを検出している。特に芝野遺跡の西北西方向0.5km付近に位置する地点では、3面の水田面を検出し、最も古い第3水田面(古墳時代後期)からは弥生時代後期に遡りうる暗褐色腐植土層を検出しており、芝野遺跡との時代的な連続性が窺える。

また、芝野遺跡の南東約1.5kmの位置する袖ヶ浦市横田地区¹¹⁾は、15世紀初頭、応永年間の『検注帳』及び『名寄帳』が鎌倉覚園寺に残されており、これに基づき15世紀初頭段階の景観復元が可能な場所であ

る。横田地区は、小櫃川の自然堤防上に立地するという芝野遺跡と共通する地形環境にあり、芝野遺跡で検出された中世の遺構・遺物を検討する上で重要な地域である。

- 注1 財団法人千葉県文化財センター 1992 「千葉県文化財センター年報No.17」
財団法人千葉県文化財センター 1993 「千葉県文化財センター年報No.18」
- 2 小沢 洋 1985 『境遺跡』 財団法人君津郡市文化財センター
能城秀喜 1988 『境遺跡-第2次調査-』 財団法人君津郡市文化財センター
鈴木久美子 1995 『境遺跡-第3次調査-』 財団法人君津郡市文化財センター
牛房茂行 1985 『境No.2遺跡』 財団法人君津郡市文化財センター
井口 崇・蓑島正弘 1982 『西ノ窪遺跡発掘調査報告書』 袖ヶ浦町教育委員会
能城秀喜 1997 『袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 -根形台遺跡群-』 袖ヶ浦市教育委員会
安藤道由・黒澤 聡 1998 「根形台遺跡群」『君津郡市文化財センター年報』 No.15
- 3 蓑島正広 1995 「谷ノ台遺跡」『君津郡市文化財センター年報』 No.12
今坂公一 1996 『谷ノ台遺跡(B遺跡)』 財団法人君津郡市文化財センター
- 4 光江 章・井口崇 1984 『鼻欠遺跡』財団法人君津郡市文化財センター
- 5 高梨俊夫 1992 「椿古墳群3号墳調査について」『研究連絡誌』36 財団法人千葉県文化財センター
中能 隆ほか 1998 『木更津市内遺跡発掘調査報告書-椿古墳群・菅生遺跡・金鈴塚古墳-』 木更津市教育委員会
中能 隆 1998 『椿古墳群』 財団法人君津郡市文化財センター
安藤道由 1999 『椿古墳群Ⅱ』 財団法人君津郡市文化財センター
安藤道由 1999 『椿古墳群Ⅲ』 財団法人君津郡市文化財センター
安藤道由 1999 『袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書-椿古墳群-』 袖ヶ浦市教育委員会
- 6 小高春雄 1993 『袖ヶ浦町滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』 財団法人千葉県文化財センター
- 7 6に同じ
- 8 柴田龍司 1993 「笹子城跡の概要」『研究連絡誌』37 財団法人千葉県文化財センター
- 9 乙益重隆ほか 1980 『上総菅生遺跡』 木更津市教育委員会・菅生遺跡調査会
乙益重隆ほか 1978 『木更津市菅生第2遺跡』 菅生遺跡調査会
土屋治雄・城田義友 1998 『一般国道409号(木更津工区)埋蔵文化財調査報告書-木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群-』 財団法人千葉県文化財センター
中能 隆ほか 1998 『木更津市内遺跡発掘調査報告書-椿古墳群・菅生遺跡・金鈴塚古墳-』 木更津市教育委員会
- 10 糸原 清 1997 「上総国大寺廃寺」『シンポジウム関東の初期寺院資料集』 関東古瓦研究会
諸墨知義 1998 「大寺遺跡」『君津郡市文化財センター年報』 No.15
- 11 笹生 衛ほか 1995 「上総国畔蒜庄横田郷の荘園調査報告」『千葉県史研究』第3号

第3節 調査方法と基本土層

1 グリッド設定(第2・3図)

発掘調査着手に当たり、遺跡範囲全体を覆う形で国家座標に基づいた6m方眼のグリッドを設定した。グリッドの基点は国家座標第Ⅸ系 $Y=+15.900\text{m}$ 、 $X=-67.390\text{m}$ の地点とした。各グリッドの呼称方法は、南北方向では、基点から北側にZからMを、南側にAからLまでのアルファベットを付け、東西方向では、基点から東側に10から16を、西側には9から1までのアラビア数字を割り振った。つまり、6m方眼の各グリッドの名称は、基点グリッドがA-10となるように、アルファベットと数字の組み合わせで表現することとした。

2 基本土層(第4図)

芝野遺跡の基本土層は、Ⅰ層からⅥ層までの6層に分けることができる。Ⅰ層：表土層、Ⅱ層：黒褐色土、Ⅲ層：灰白色砂質土層、Ⅳ層：暗灰褐色粘質土、Ⅴ層：黒色泥土、Ⅵ層：青灰白色粘土層である。

Ⅰ層は近現代における水田・畑の耕作土を主体としている。

Ⅱ層は古墳時代後期から中世までの遺物を多く含んでいる。

Ⅲ層は、小櫃川の洪水により形成されたと考えられる砂質土で、遺物はほとんど含まない。調査区南側の川に面した地点では10cm前後、北側の地点では30cmから40cmの厚さを確認でき、北側ほど厚く堆積する傾向が認められる。Ⅲ層上面が古墳時代後期以降の遺構確認面であり、Ⅲ層中に古墳前期の溝(SD-45)が掘り込まれている。

Ⅳ層は地点により、黄色白色土塊を含むⅣ-1層、酸化鉄・マンガン粒を含むⅣ-2層、粘性が強く硬く締まるⅣ-3層に細分が可能である。このⅣ層上面は、弥生時代後期の遺構確認面で、南側から北側にかけての傾斜面となっている。南側の微高地上では弥生時代後期の竪穴住居跡などが確認され、北側の低地部分では水田跡が検出されている。

Ⅴ層は植物腐植土に起因する黒色泥土であり、Ⅵ層は標高10.5m前後の高さに水平に堆積する粘土層である。ともに、無遺物層であり、調査区北端部(P-15グリッド周辺)では、Ⅵ層を掘り込む形で、自然流路の痕跡が確認できる。

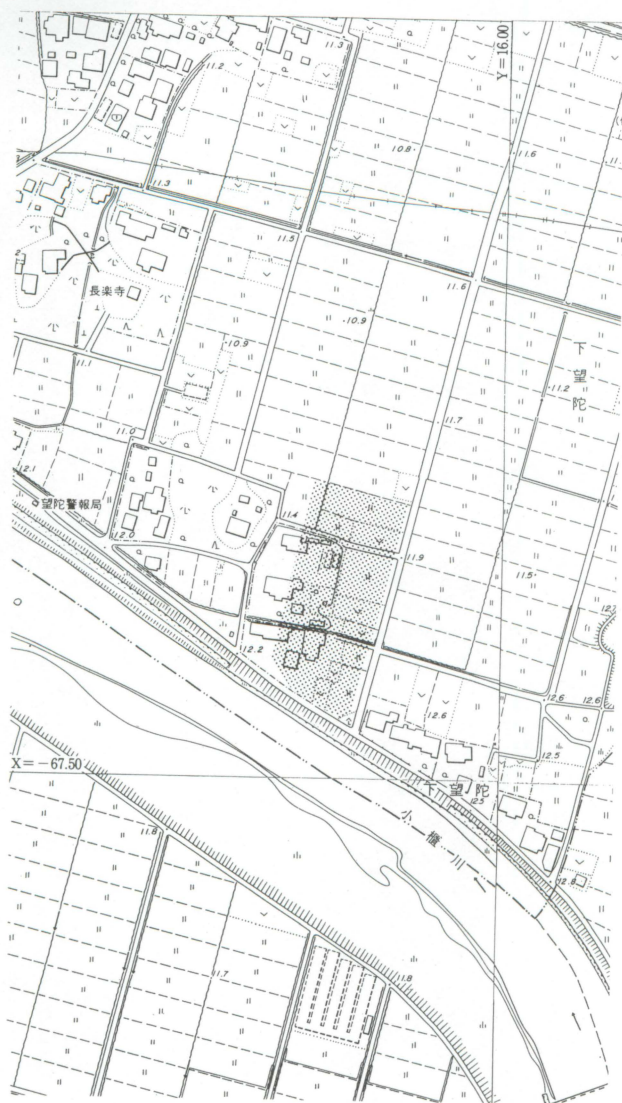
3 調査方法

確認調査は、対象面積8,100 m^2 の10%をトレンチ調査により実施した。その結果、過去のは場整備により遺構が削平された、調査区北端部分(1,050 m^2)以外では、ほぼ全域で弥生時代後期から中世にかけての遺構・遺物を確認することができた。このため、削平部分を除く7,050 m^2 を対象に本調査を実施した。

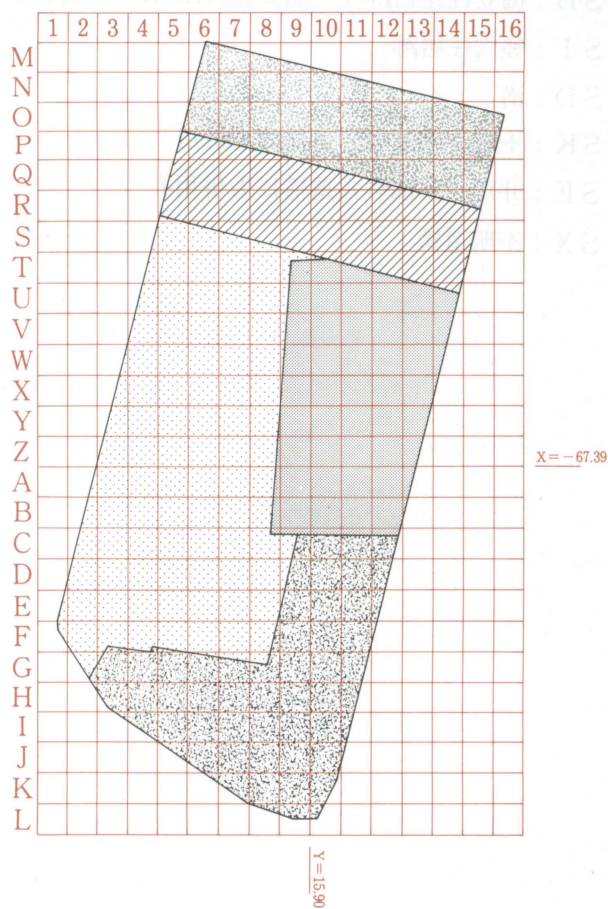
本調査は、まず、基本土層のⅠ層からⅡ層下部までの土層をバックホウにより除去するところから開始し、Ⅲ層上面で、第一回目の遺構検出を行い、遺構の精査を実施した。Ⅲ層上面での調査が終了した段階で、再びバックホウにより基本土層のⅢ層を除去し、Ⅳ層上面で第二回目の遺構検出を実施している。

検出遺構の測量は、設定したグリッドを基準として、平板と簡易遣り方を併用して行った。遺構平面図、セクション図、遺物出土状況図などは原則として、縮尺20分の1で作成したが、遺構の状況に応じて40分の1及び10分の1縮尺も併用した。

遺構の呼称には、以下の略号を使用し、本報告書においては、原則として調査時の名称を踏襲している。

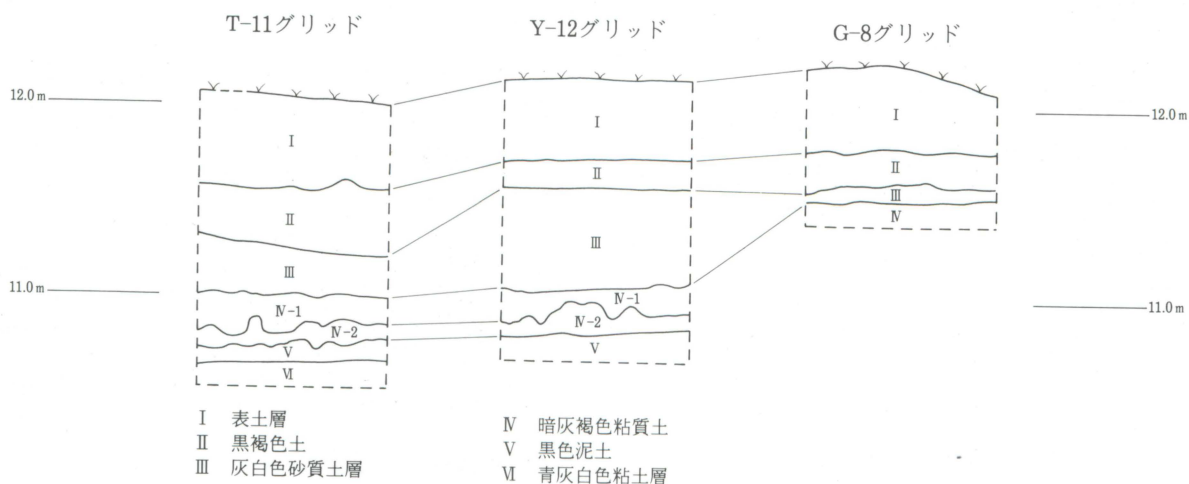


第2図 調査区と周辺地形 (1:5,000)



- 平成元年度確認・本調査終了範囲
- 平成元年度確認調査・平成3年度本調査終了範囲
- 平成2年度確認・本調査終了範囲
- 平成2年度確認調査のみで終了範囲
- 平成3年度確認・本調査終了範囲

第3図 調査区とグリッド設定図 (1:1,500)



第4図 基本土層図 (1:40)

SB : 掘立柱建物跡 (一部で竪穴住居跡にも併用)

SI : 竪穴住居跡

SD : 溝

SK : 土坑 (一部竪穴遺構にも併用)

SE : 井戸 (一部竪穴遺構にも併用)

SX : 不明遺構

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 Ⅲ層上面の遺構と遺物

基本土層のⅢ層上面で検出した遺構には、掘立柱建物跡13棟、竪穴住居跡4軒、井戸19基、方形竪穴遺構4基、土坑24基、不明遺構6基、古墳1基、溝80条がある。遺物より推定できる年代は、古墳時代後期から中世を中心としている。

1 掘立柱建物跡・柱穴

SB-1

遺構（第6図）

調査区南部、H-5グリッドからI-6グリッドにかけて位置する。建物規模は桁行3間（7.2m）、梁間2間（4.4m）、棟（桁行）方位はN-75°-Wとなり、ほぼ東西棟の建物である。柱間は、桁行で2.4m（8尺）、梁間で2.2m（7尺強）となっている。

柱穴掘方は、径20cm～80cmの円形で、確認面からの掘込みの深さは15cm～40cmとなり、底面は平坦である。柱穴掘方内では明確な柱痕跡は確認できなかった。

遺物

遺物は出土していない。

SB-5

遺構（第7図、図版3）

調査区中央部、Z-11からA-11グリッドにかけて位置する。建物規模は桁行3間（6.3m）、梁間3間（4.3m）、棟（桁行）方位はN-2°-Wとなる南北棟の建物である。柱間は、桁行で2.1m（7尺）、梁間で1.43m（5尺弱）となっている。

柱穴掘方は、径20cm～74cmの円形のもの、長径70cm～1m前後の楕円形のもの、そして80cm四方と60cm×70cm前後の方形のものが存在する。柱掘方の一部には、底面に柱の当たりと思われる径20cm、深さ15cm前後の円形の落込みも確認でき、柱材の径を反映している可能性がある。確認面からの柱穴掘方の深さは、底面の当たり部分を含めて20cm～38cmである。

柱穴掘方内は暗灰褐色土と灰褐色土を交互に突き固めており、中心部には10cm～14cm程度の柱痕跡が明瞭に残されている。

遺物

柱穴内から土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SB-6

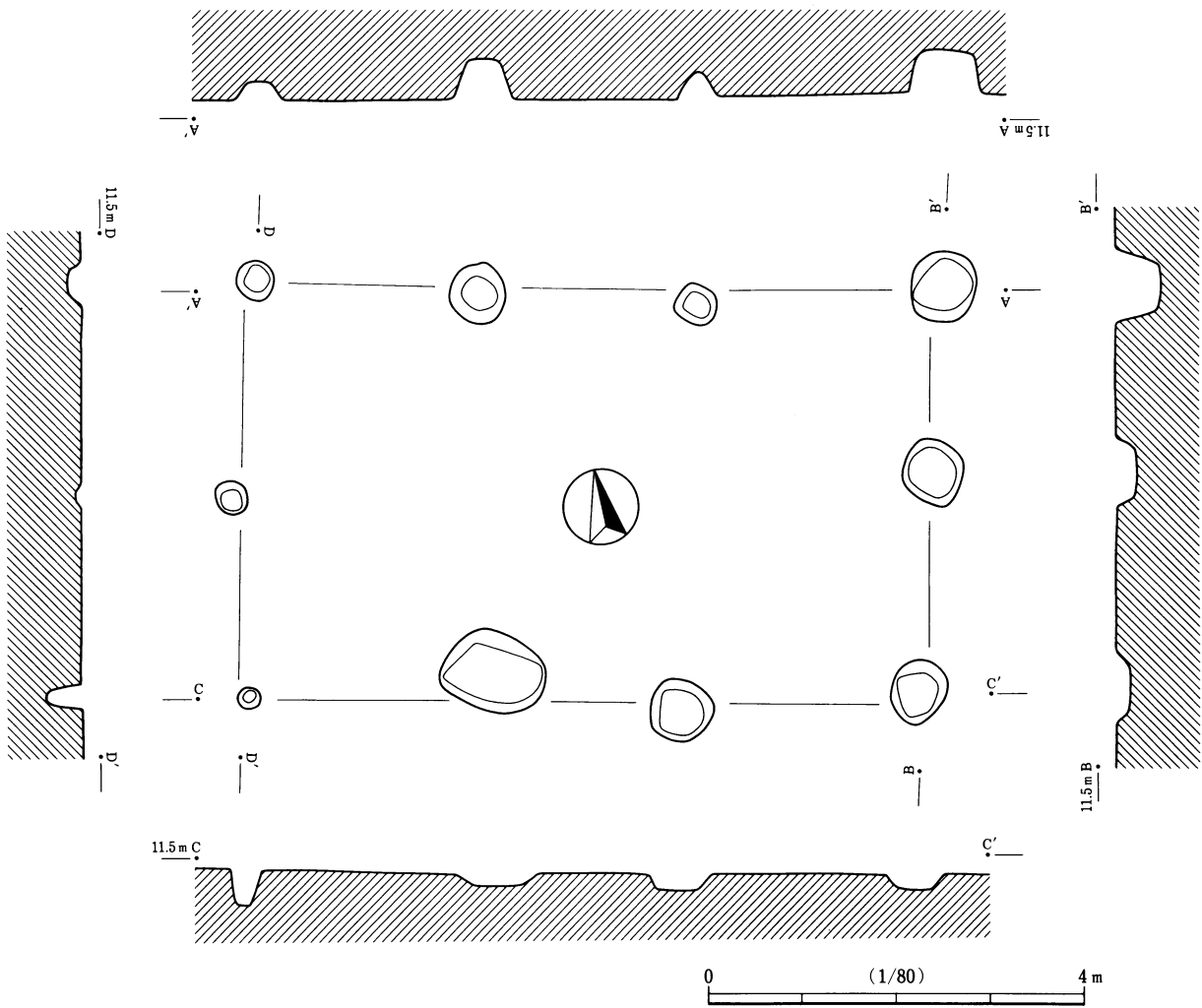
遺構（第8図）

調査区北部、R-11グリッドに位置する。溝SD-28と重複し、建物の東側部分が失われている。建物規模は桁行2間以上（2.6m以上）、梁間2間（3.4m）、棟（桁行）方位はN-87°-Wの東西棟の建物と

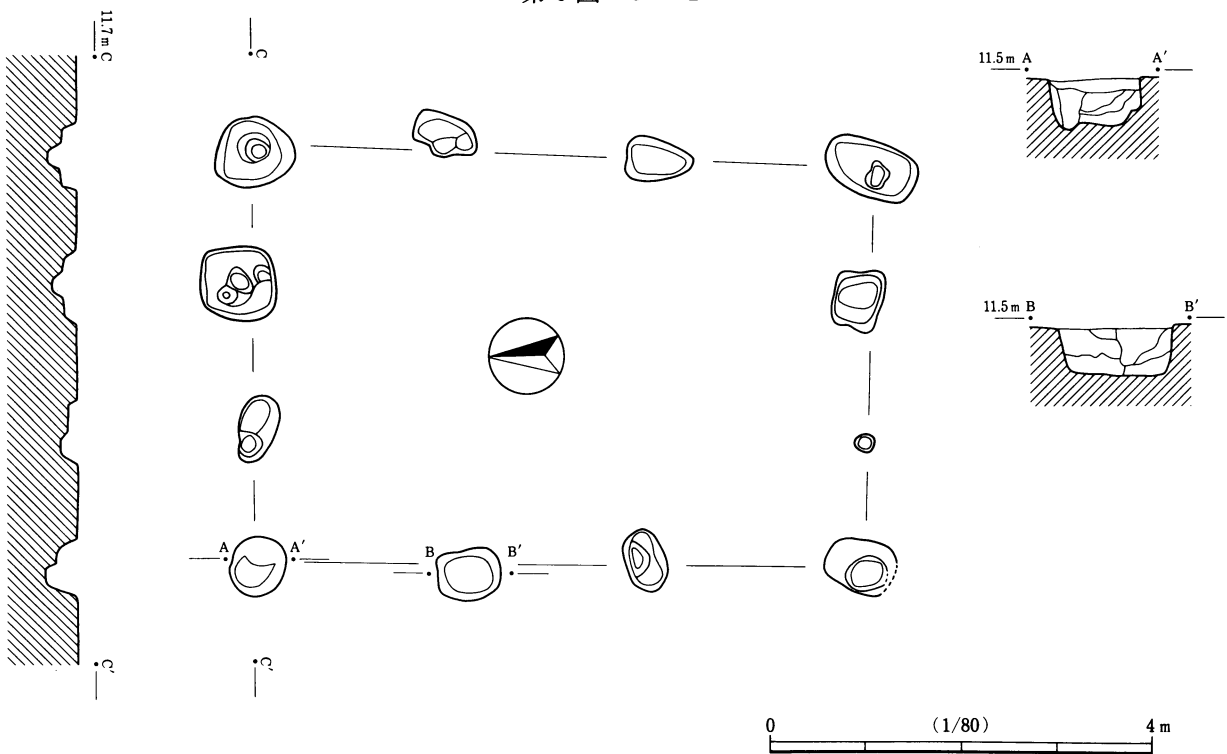


0 (1/600) 30 m

第5圖 III層上面遺構



第6图 SB-1



第7图 SB-5

考えられる。

柱穴掘方は径20cm～39cmの円形で、深さは14cm～28cmである。柱穴掘方内では明確な柱痕跡は確認できなかった。

遺物

遺物は出土していない。

SB-7

遺構（第8図）

調査区北部、S-9グリッドからT-9グリッドにかけて位置する。SD-77と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。柱穴は、桁行・梁間ともに2間分（南北3.2m・東西2.5m）しか確認できず、建物の全体規模は不明である。また、2間分のうちで、桁行・梁間ともに特定できないので棟方位も決定できないが、柱間の狭い東西方向の柱列を梁間と仮定すると、棟（桁行）方位は、N-12°-Wとなり、南北棟の建物に復元が可能である。

柱穴掘方は、45cm×50cmの方形のものと、径30cm～40cmの円形のものがあり、確認面からの掘込みの深さは、18cm～40cmである。柱穴掘方内では明確な柱痕跡は確認できなかった。

遺物

遺物は出土していない。

SB-8

遺構（第8図）

調査区中央部、X-8、X-9、Y-8、Y-9の各グリッドにかけて位置する。SD-50と重複し、SD-50よりも新しい。建物規模は桁行2間（6.2m）、梁間2間（5.6m）の総柱建物である。棟（桁行）方位は、N-161°-Wとなり、ほぼ東西棟の建物である。柱間は全体でやや不揃いであり、桁行西側2間が2.1m前後（約7尺）、東側1間が2m弱となり、梁間では北側2間が2m前後、南側1間が1.6m（約5.5尺）となり、南側と東側1間分の柱間が狭くなっている。

柱穴掘方は、径26cm～80cmの円形であり、確認面からの掘込みの深さは20cm～60cmである。柱穴掘方の覆土は、灰褐色土と明灰褐色土を主体として部分的に白灰色土を含んでおり、径15cm～20cmの柱痕跡も明瞭に確認できる。

なお、SB-8周辺には、柱穴掘方の形態や覆土が類似する柱穴が多数存在しており、近接して建替えが行われている可能性が考えられる。

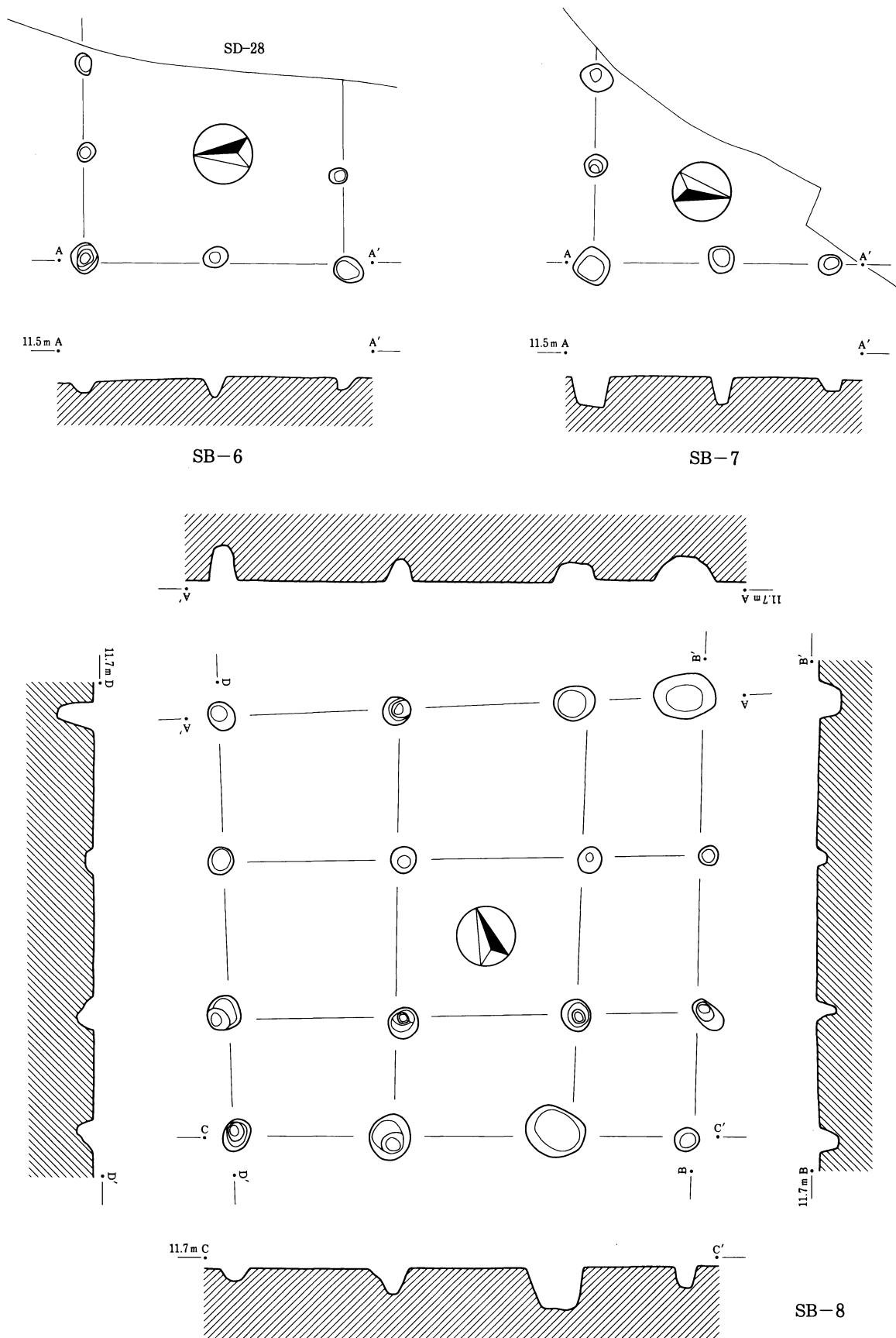
遺物

柱穴掘方内から土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

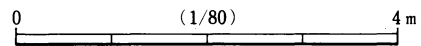
SB-9

遺構（第9図）

調査区中央部、Y-11、Y-12グリッドに位置する。SD-48と重複し、SD-48よりも新しい。建物規模は、検出した柱穴の柱間が不揃いで特定できないが、桁行3間～4間（4m前後）、梁間2間（3.4m



第8图 SB-6·7·8



前後)、棟(桁行)方位N-44°-Wの建物に復元が可能である。

柱穴掘方は径20cm~40cmの円形で、確認面からの掘込みの深さは10cm~38cmである。柱穴掘方の覆土は灰褐色粘質土を主体としており、柱痕跡は全体に不明瞭で、明確に確認できない。

なお、近接して類似した柱穴が存在することにより、同一場所もしくは近接して建物の建替えが行われた可能性が考えられる。

遺物

柱穴掘方内から土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SB-10

遺構(第9図)

調査区中央部、W-12グリッドに位置する。四隅の柱穴により、桁行3.6m、梁間3.2m、棟(桁行)方位N-7°-Wの南北棟建物に復元が可能であるが、桁行、梁間ともに柱間が不揃いとなっている。柱穴掘方は、20cm~30cmの円形で、確認面からの掘込みの深さは8cm~56cmである。柱穴掘方の覆土は暗灰褐色土を主体としており、明確な柱痕跡は認められない。

遺物

柱穴掘方内から土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SB-11

遺構(第9図、図版3)

調査区中央部、V-10、W-10グリッドに位置している。南東隅の柱穴は失われているが、桁行2間(3m)、梁間2間(2.3m)、棟(桁行)方位はN-153°-Wの東西棟建物に復元できる。柱間は桁行で1.5m(5尺)、梁間で1.15m(約4尺)である。柱穴掘方は径28cm~32cmの円形で、掘込みの深さは確認面から、15cm~32cmである。

柱穴掘方の覆土は、暗灰褐色土層と黒灰褐色土層を主体としており、柱痕跡は明瞭ではない。

遺物

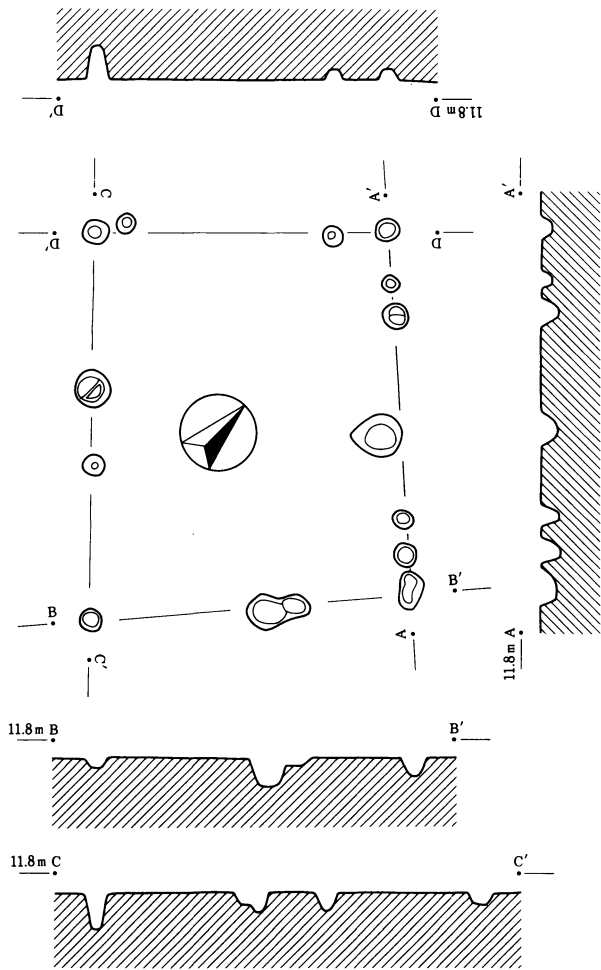
柱穴掘方内から土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SB-12

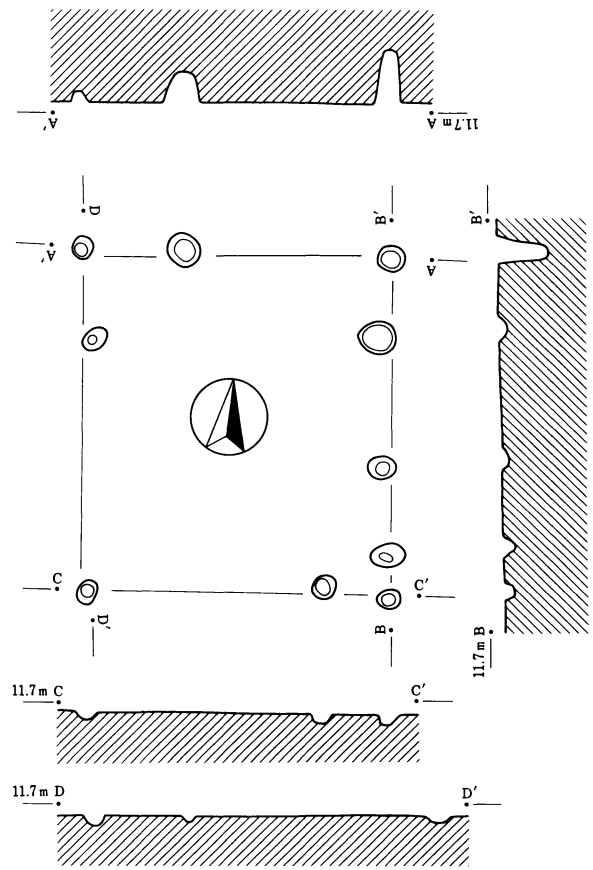
遺構(第10図)

調査区中央部、V-7、V-8、W-7、W-8の各グリッドにかけて位置する。SK-25・26と重複し、SK-25・26よりも新しい。四隅の柱穴の位置により、桁行6.6m、梁間6.3m、棟(桁行)方位N-167°-Wの東西棟建物に復元できる。しかし、柱間は不揃いで、建物構造は明確にできないが、桁行3間前後(6.6m)、梁間2間前後(4.5m)の身舎の北側に、出が1.8m(6尺)の片庇が付く構造を想定することもできよう。

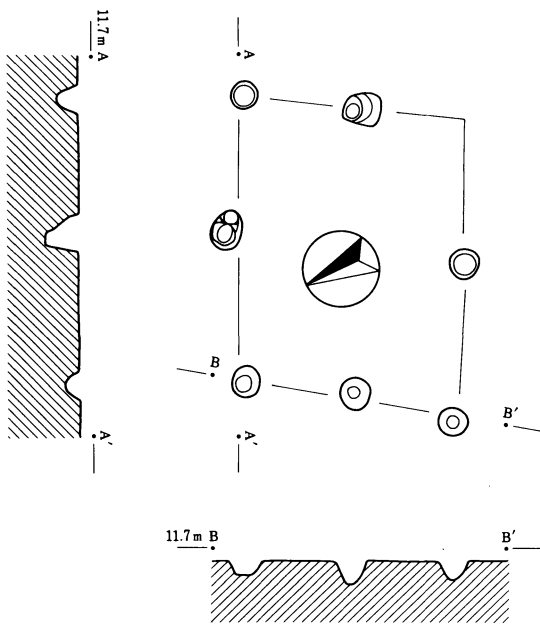
柱穴掘方は、径が25cm~60cm程度の円形のもの、65cm×70cmの隅丸方形のものがあり、確認面からの掘込みの深さは、10cm~32cmである。柱穴掘方の覆土は暗灰褐色土と灰褐色土を主体としており、柱痕跡は明確には確認できない。



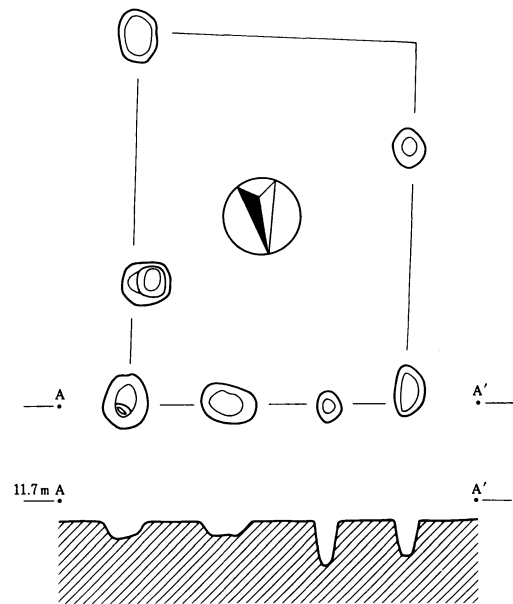
SB-9



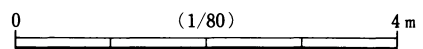
SB-10



SB-11



SB-14



第9图 SB-9·10·11·14

遺物

柱穴掘方内から土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SB-13

遺構（第11図，図版3）

調査区中央部，X-7，Y-7，Y-8の各グリッドにかけて位置する。柱穴がSE-20と重複していた可能性が高いが、新旧関係は明確にできなかった。桁行3間（5.4m），梁間3間（5.2m）の身舎の西側に，出が1.2m（4尺）の庇か縁が付く構造が推定できる。棟（桁行）方位はN-162°-Wとなり，東側に隣接するSB-8とほぼ一致する。

身舎の柱間は，不揃いで変則的な形となっている。桁行の柱間は，西側2間分が2.1m（7尺），東側の1間が1.2m（4尺）となっており，梁間は南側の2間分が2m前後（6.5尺），北側の1間が1.2m（4尺）となっている。北側と東側の1間分が，西側の庇（縁）の出と共通する1.2mであることにより，この部分も庇や縁として使用されていた可能性が考えられよう。

柱穴掘方は，径40cm～70cmの円形のもので，確認面からの掘込みの深さは12cm～58cmである。柱穴掘方の覆土は，黒灰色土と暗灰色土を主体としており，明瞭な柱痕跡は認められず，柱は抜き取られている可能性がある。

遺物（第13図）

東側梁間の柱穴・Pit-591から弥生土器が出土している。第13図1は，弥生時代後期の鉢である。口縁部を欠損しているが，破断面が滑らかになっており，口縁部が破損した後も破断面を研磨し使用している可能性が考えられる。現存口径11.6cm，器高3.5cm，底径4.8cmであり，内外面はヘラ磨きの後，赤彩されている。

SB-14

遺構（第9図）

調査区中央部，Z-9グリッドからA-10グリッドにかけて位置する。部分的に柱穴が失われているが，桁行3間（4.8m），梁間3間（3m），棟（桁行）方位N-14°-Eの南北棟建物に復元できる。柱間は多少不揃いであるが，桁行で1.6m前後（約5.5尺），梁間で1m前後（約3.5尺）となる。

柱穴掘方は，長径が32cm～58cmの楕円形で，確認面からの掘込みの深さは15cm～48cmである。柱穴掘方の覆土は，黒灰褐色土と灰褐色土を主体とし，明瞭な柱痕跡は確認できない。

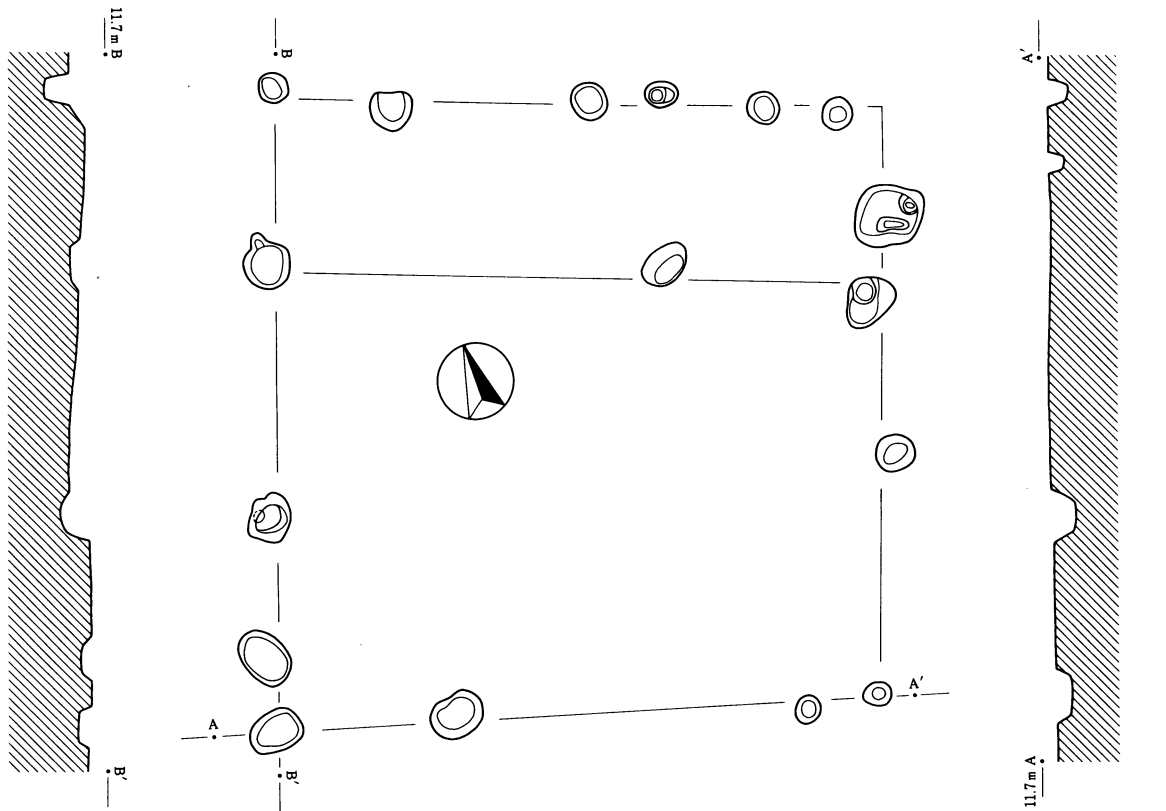
遺物

柱穴掘方内から土器細片が出土しているが，実測可能な個体は存在しない。

SB-16

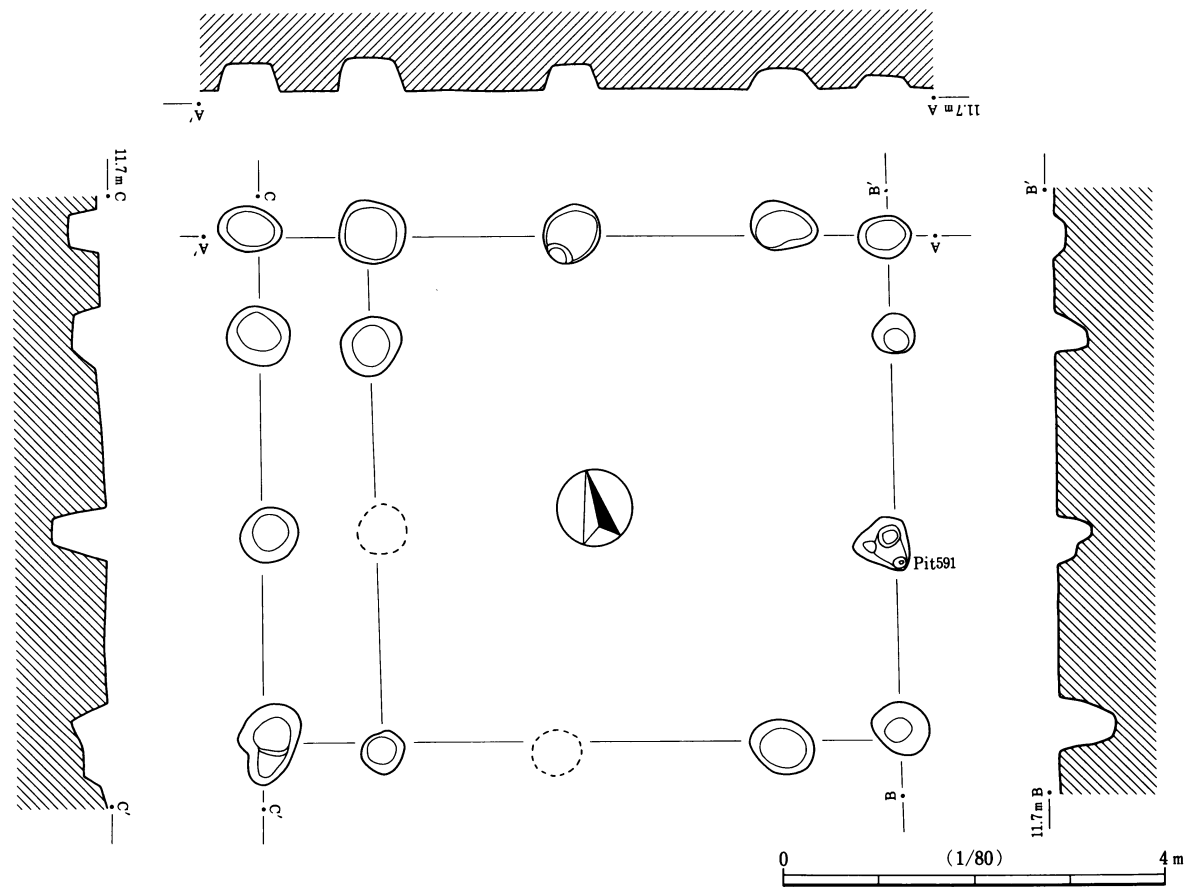
遺構（第12図）

調査区中央部，W-5グリッドからX-5グリッドにかけて位置する。南西の隅柱は確認できなかったが，桁行3間程度（5m），梁間2間（4.2m），棟（桁行）方位N-176°-Wの東西棟建物に復元が可能である。柱間は不揃いで近接して柱穴が存在していることにより，同一場所や近接して建替えが行われた



第10图 SB-12

0 (1/80) 4 m



第11图 SB-13

0 (1/80) 4 m

と考えられる。

柱穴掘方は径24cm～57cmの円形で、確認面からの掘込みの深さは3cm～30cmである。柱穴掘方の覆土は、灰褐色土を主体としており、径15cm～20cm程度の柱痕跡が確認できる。

遺物

図示した範囲の柱穴掘方では、遺物は出土していない。

SB-18

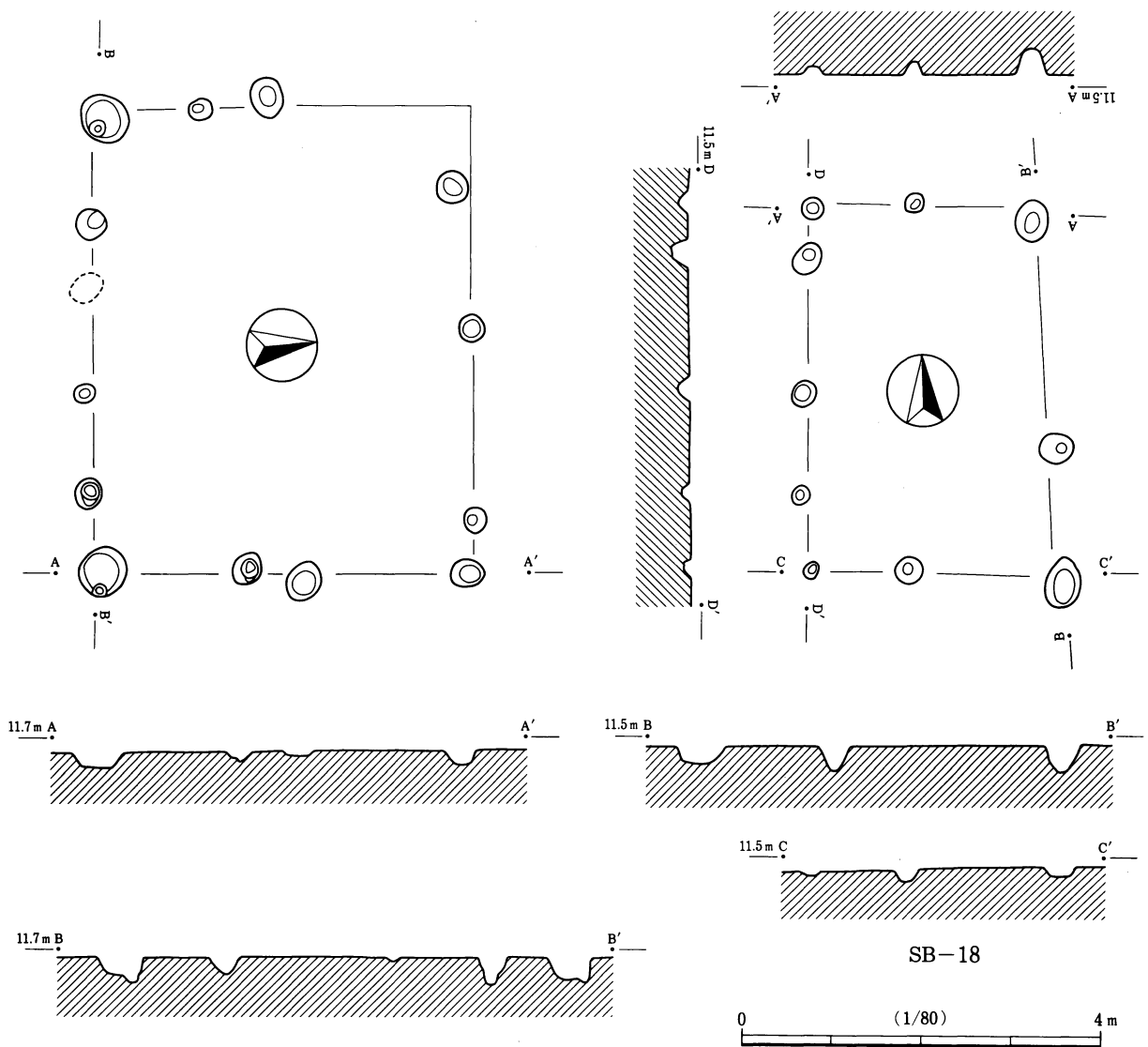
遺構（第12図）

調査区南部，D-3，E-3グリッドに位置する。柱間が不揃いであるが，桁行4間（4m），梁間2間（2.8m），棟（桁行）方位N-2°-Eの南北棟建物に復元できる。

柱穴掘方は，長径が46cm～54cmの楕円形のもの、径20cm前後の円形のものがあるが，小形円形の後者が中心となっており，柱痕跡は明確には確認できなかった。

遺物

図示した範囲の柱穴掘方では，遺物は出土していない。



SB-16

第12図 SB-16・18

Pit-2

遺構（第61図）

調査区北部，U-10グリッドに位置する。径40cm，深さ25cmの柱穴である。覆土は明灰褐色土を主体とする。周辺には掘立柱建物は存在せず，中世の井戸SE-4に隣接しており，井戸の付属施設に関連した柱穴である可能性が考えられる。

遺物（第13図）

遺物では北宋銭が1枚出土している。第13図6が北宋銭で，篆書体の「熙寧元寶」である。外縁径2.49cm～2.48cm，外縁内径2.05cm～2.10cm，外縁厚0.10cm，文字面厚0.10cm，重量1.48gを測る。

Pit-80

遺構（第63図）

調査区中央部，X-12グリッドに位置する。SX-2と重複関係にあり，SX-2よりも新しい。平面形は長径90cmの楕円形であり，底面に径30cmの柱穴状の落込みが2か所掘られている。掘込みの深さは，確認面から19cmである。覆土は，焼土を含んだ灰褐色土を主体としており，16cm～20cmの柱痕跡が認められる。

遺物（第13図）

遺物は土師器甑が1点出土している。第13図3が土師器甑で，口径30cm，器高30cm，底径11.8cmである。内面はヘラナデ，口縁部はヨコナデ調整されており，胴部外面は縦方向のヘラ削りが加えられている。胎土は白色針状物質，赤色スコリア粒を含み，色調は灰白色である。

Pit-365

遺構（第63図）

調査区の中央部，X-9グリッドに位置する。径45cmの円形の柱穴で，確認面からの掘込みの深さは31cmである。覆土は，焼土を含んだ暗灰色土を主体としている。SB-8の北側1.2mの地点に位置しており，同遺構に関連する柱穴である可能性も考えられる。

遺物（第13図）

土師器杯1点が出土している。第13図5が，上総型土師器杯である。復元口径14cm，器高3.3cm，底径9.6cmで，体部外面はヘラ削り調整である。胎土には白色針状物質を含み，色調は赤橙色である。

Pit-624

遺構（第62図）

調査区中央部，B-7グリッドに位置する。径60cmの円形の柱穴で，確認面からの掘込みの深さは48cmである。この柱穴は，SB-5・8のものと類似しており，B-7グリッドにはPit-624のほかに同規模の柱穴が5か所で確認でき，これらの柱穴を使用して，SB-5・8と類似した構造の掘立柱建物を復元できる可能性が高い。

遺物（第13図）

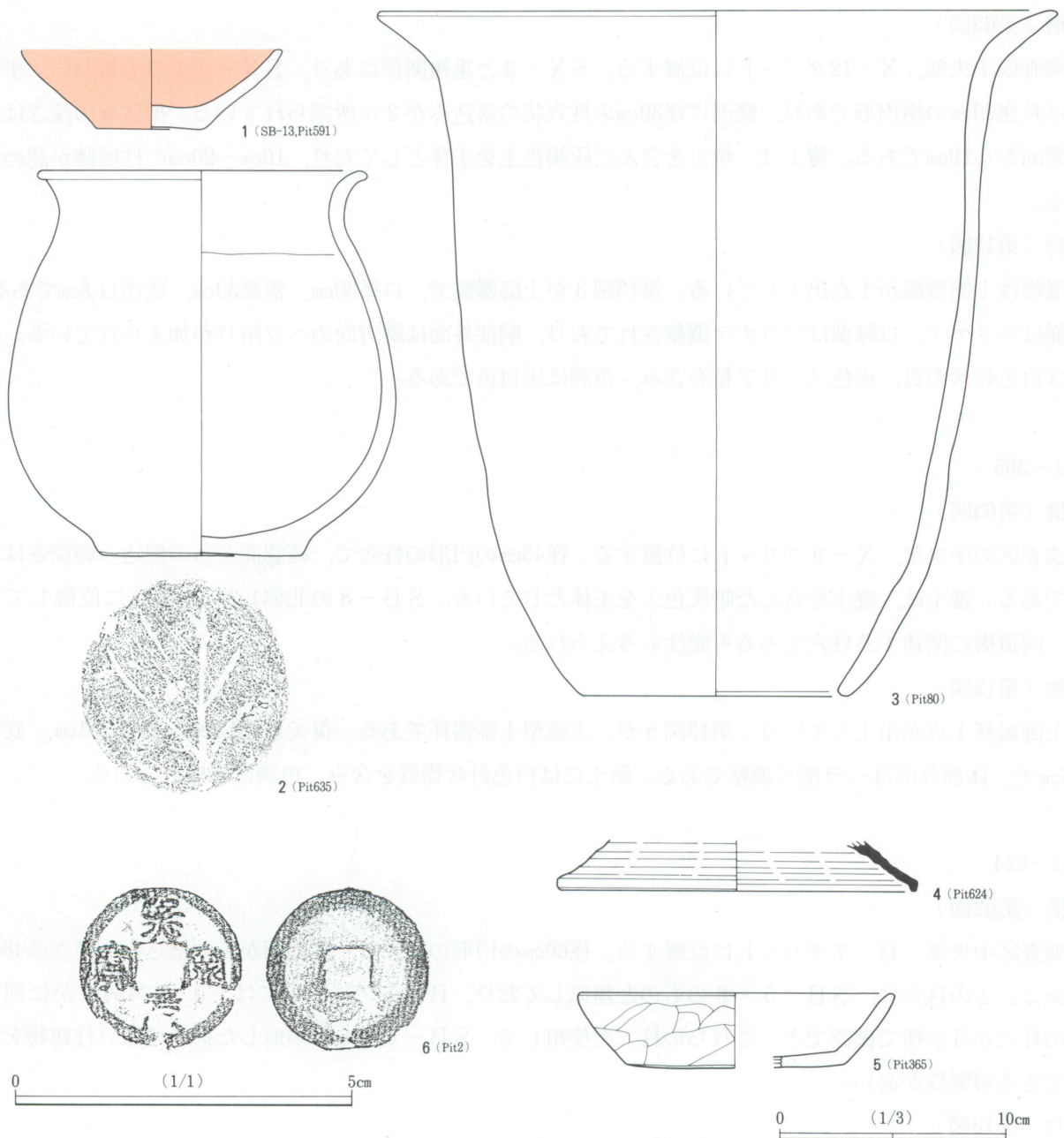
須恵器蓋が1点出土している。第13図4は，湖西窯産の須恵器蓋である。口径15.8cmであり，摘み部分

は失われている。蓋上面には明緑色の自然釉が付着している。胎土は砂粒と長石粒を含み、色調は灰白色である。

Pit-635

遺構（第63図）

調査区中央部、Z-10グリッドに位置する。SB-14と位置的には重なるが、柱穴の重複はない。平面形態は径85cmの歪んだ円形で、覆土は焼土を含んだ黒灰褐色である。柱穴か土坑かの識別は困難であり、SB-14との関連も推定できるが断定はできない。



第13図 柱穴（Pit）出土遺物

遺物（第13図）

土師器小型甕が1点出土している。第13図2が土師器小型甕である。口径14.6cm，器高16.9cm，底径9.2cmで，口縁部をヨコナデ，胴部内外面をヘラナデ調整し，底部外面には木葉痕が残る。胎土は赤色スコリア粒と小石を多量に含み，粗い。色調はにぶい橙色～黒褐色である。

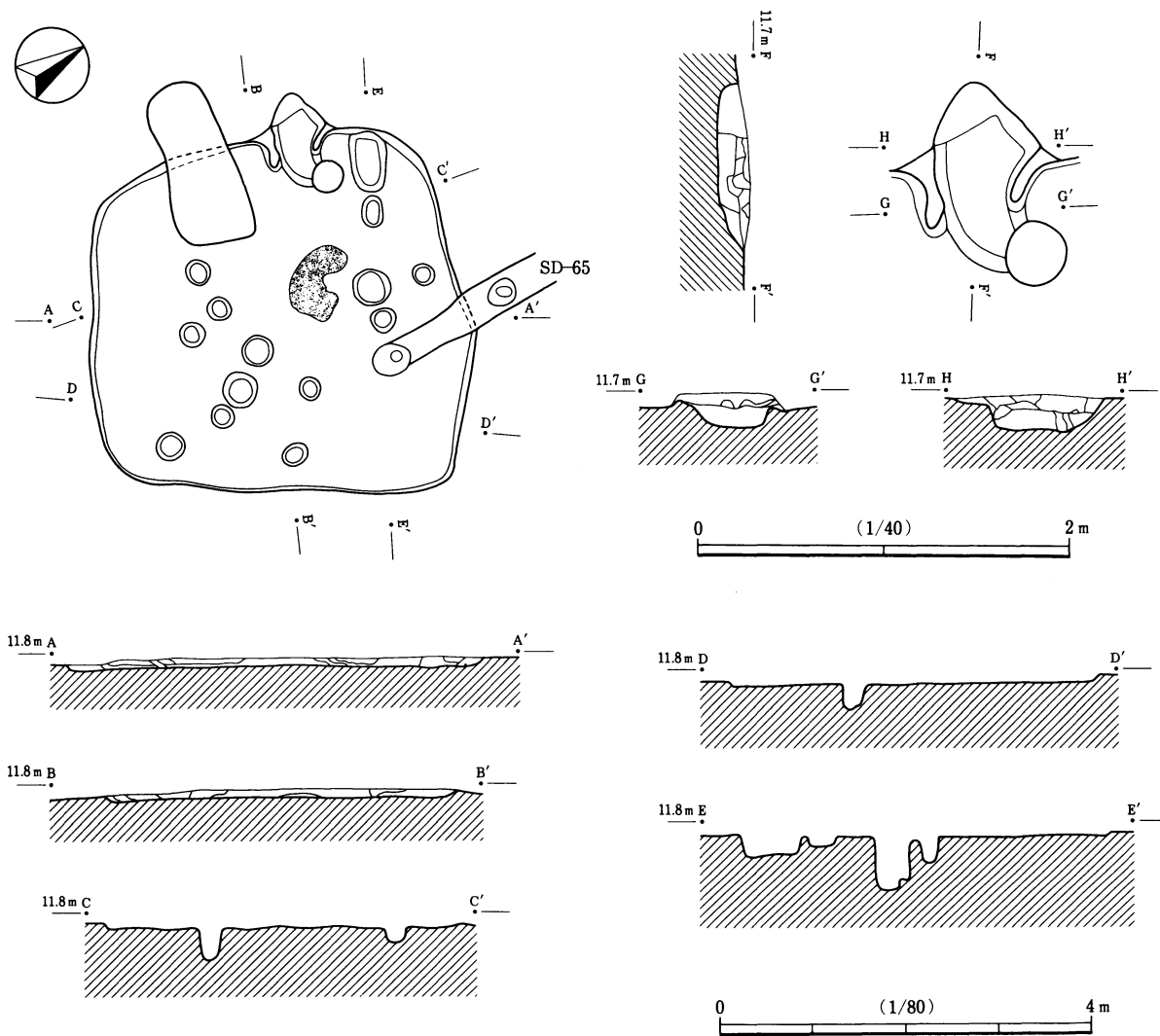
2 竪穴住居跡

SI-1

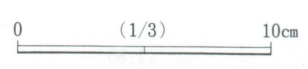
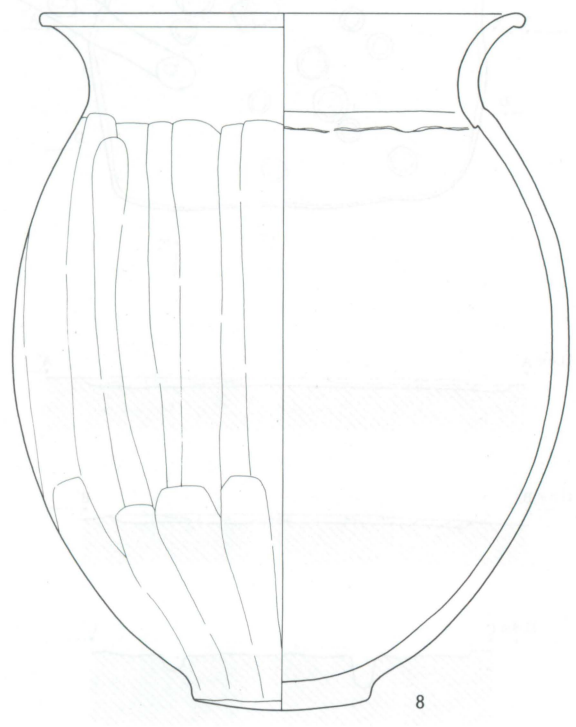
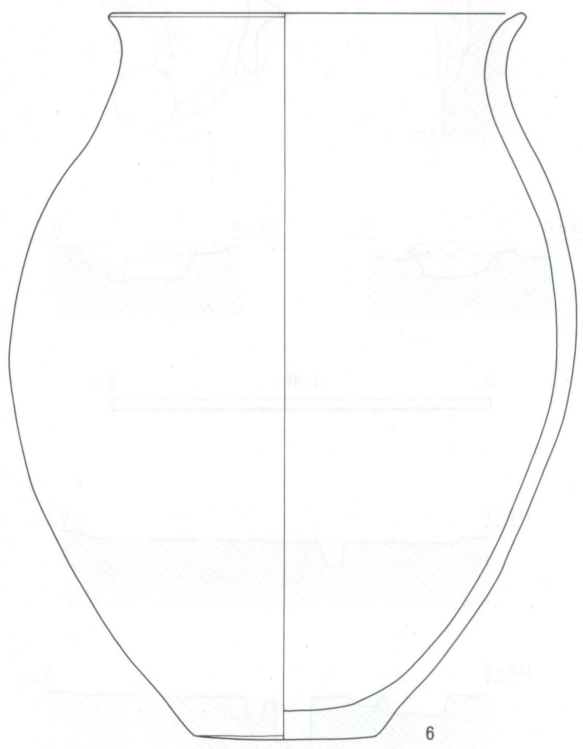
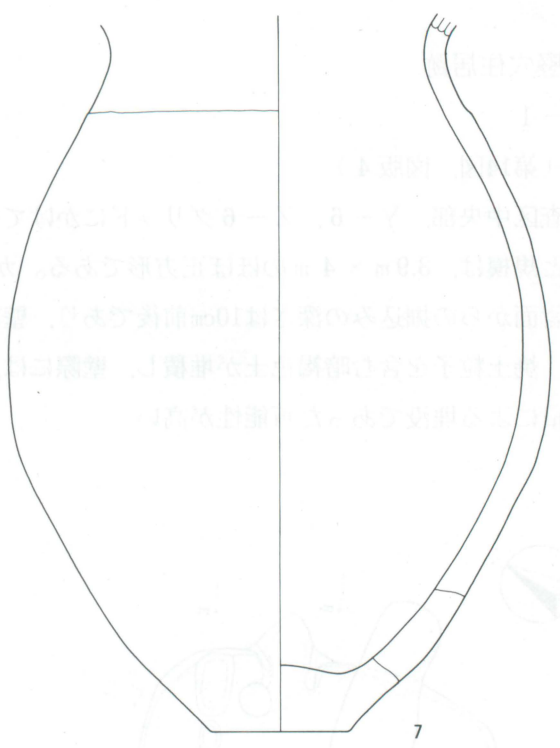
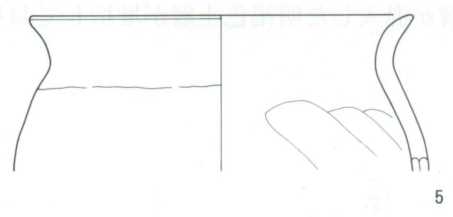
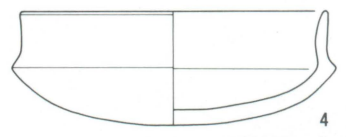
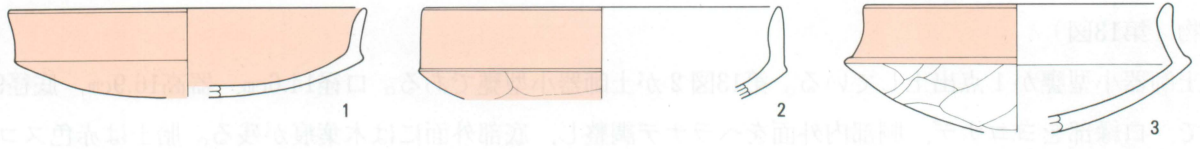
遺構（第14図，図版4）

調査区中央部，Y-6，Z-6グリッドにかけて位置する。SD-65と重複し，SI-1が古い。平面形態と規模は，3.9m×4mのほぼ正方形である。カマドの中心を通る主軸方位はN-31°-Wである。

確認面からの掘込みの深さは10cm前後であり，壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は，住居跡中央部に，焼土粒子を含む暗褐色土が堆積し，壁際には，基盤土層が混入した明褐色土層が堆積しており，自然堆積による埋没であった可能性が高い。



第14図 SI-1



第15図 SI-1出土遺物

カマドは、西壁の北寄り部分に位置し、袖部がわずかに残存するのみで全体に遺存状況は悪い。

覆土は焼土粒子・炭化物粒子を多く含む暗褐色土が中心であり、カマド構築材と思われる焼土ブロックも含まれている。また、カマド北側に隣接して貯蔵穴と思われる楕円形の掘込みがあり、長径65cm、深さ24cmを測る。

床面は全体に平坦で、床面上に焼土と炭化物粒子の堆積が確認できる。

柱穴は、明確な主柱穴は確認できなかったが、床面上に14か所の柱穴が存在している。掘方は径20cm～38cmの円形であり、床面からの掘込みの深さは14cm～58cmである。

遺物（第15図、図版20）

古墳時代後期の土師器杯4点、土師器甕4点が出土している。1～4は、須恵器蓋杯の模倣杯である。1・2は杯蓋の模倣杯で口径14cm、器高3.4cm～3.5cm、3・4は杯身の模倣杯でいずれも口径12cm、器高4.4cm～5cmを測る。1は内外面赤彩、2は外面を赤彩、3は口縁部外面を赤彩している。調整は口縁部の内外面と内面をヨコナデし、体部にはヘラ削りを行っている。胎土には、砂粒と赤色スコリア粒が含まれる。

5～8は土師器甕である。5は口径15cmの小型甕であり、口縁部内外面にはヨコナデ、体部内面はヘラナデが行われている。体部外面の調整は明確ではないが、縦方向のヘラ削りであろう。胎土は、黄褐色粒子を多く含んでいる。6～8は大型の長胴甕で、口径16.2cm～19cm、器高27.4cm～28.4cm、底径5.4cm～7.3cmを測る。調整は小型甕と同様である。胎土は砂粒と小石を多く含んでいる。

SI-2

遺構（第16図、図版4）

調査区中央部、SI-1の東約3.5m、Z-7グリッドに位置する。平面形態と規模は2.6m×2.25mのやや歪んだ長方形である。カマドは南辺中央に作られており、カマド中央を通る主軸方位は、N-28°-Eである。確認面からの掘込みの深さは、10cm～15cmで、壁の立上がりは緩やかである。

カマドは、わずかに煙道部分が南壁に残されるのみで、既に袖部分は失われている。

覆土は、暗灰褐色土を主体としており、下層の床面付近で焼土粒子・炭化物粒子が多く含まれている。

床面は、平坦ではなく、中央部分に10cm前後の落込みが確認できる。柱穴は認められない。

遺物（第16図）

古墳時代後期の土師器甕1点と弥生時代後期の壺1点が出土しているが、弥生土器は混入品である。1は、古墳時代後期の土師器大型甕であり、口径15cmである。胴部外面には粗いヘラナデ調整が行われており、胎土には赤色スコリア粒を多量に含んでいる。2は、弥生時代後期の壺口縁部片である。折返し口縁の外面には棒状浮文と円形浮文を貼付け、折返し部の下端には押捺が加えられている。内面にはS字状結節文を3段に施し、赤彩されている。胎土は雲母粒、石英粒などを多量に含んでいる。

SI-4

遺構（第17図）

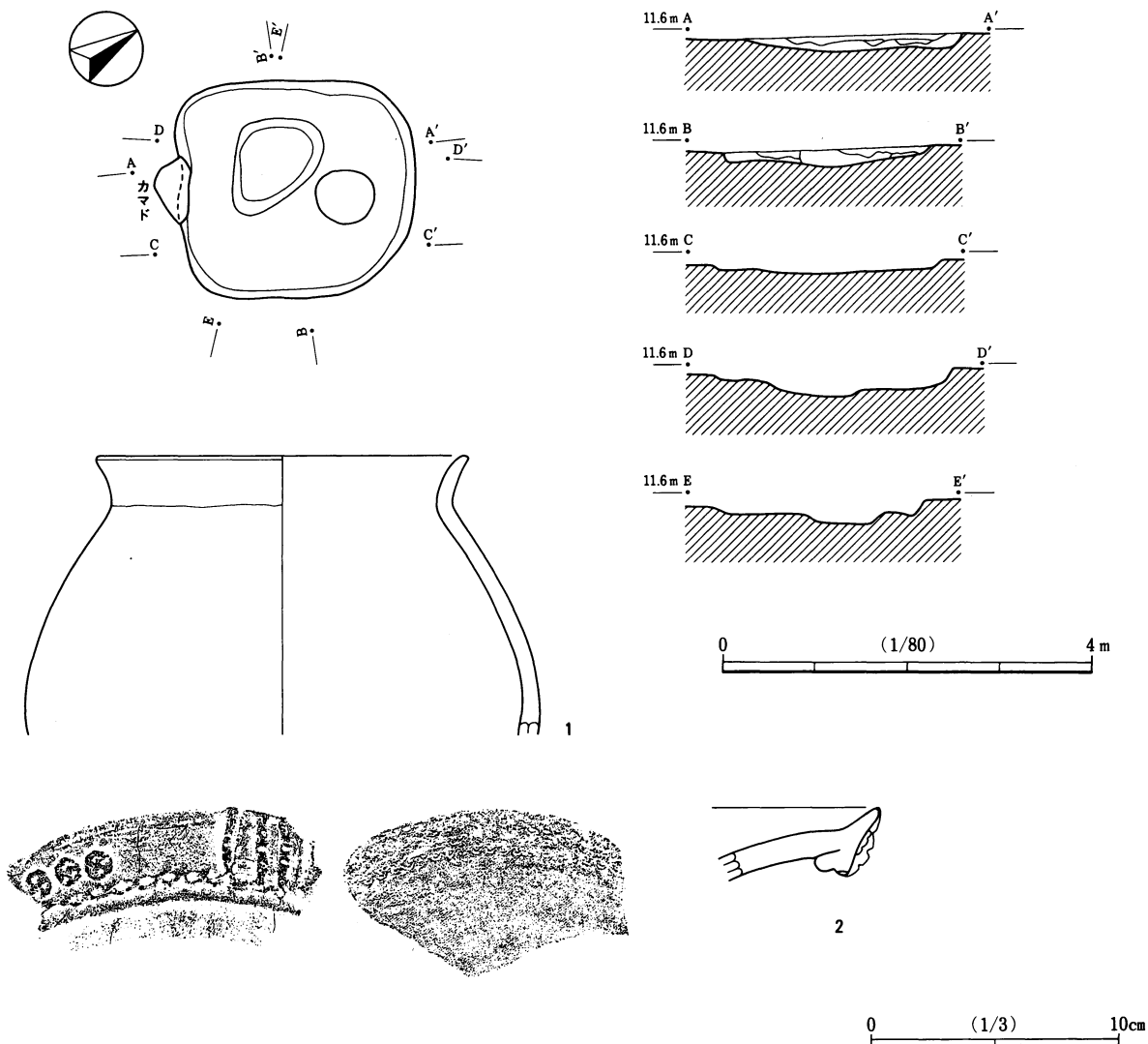
調査区中央部、SI-2の北側に隣接し、Y-8グリッドからZ-8グリッドにかけて位置する。平面形態と規模は、南東コーナーが歪んだ、2.4m×2.4mの正方形に復元でき、カマドや炉は確認できなかった。

た。また、この遺構に伴う柱穴も検出していない。

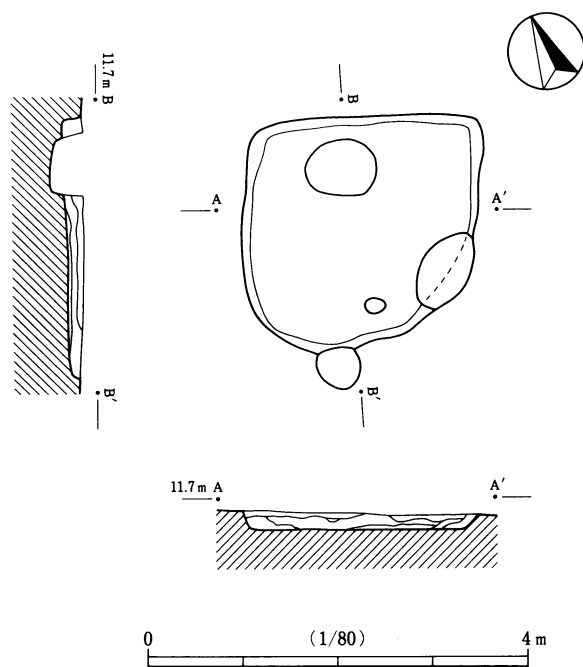
覆土は、壁際に褐色土が堆積し、中央部分では床面上から暗灰褐色土が堆積している。

遺物

遺物は出土していない。



第16図 SI-2と出土遺物



第17図 SI-4

SB-4

遺構（第18図，図版4）

調査区北端部，Q-10グリッドからR-11グリッドにかけて位置する。SD-33・39・104の各遺構と重複し，いずれの遺構よりもSB-4が古い。遺構の西端部は失われており，全体の規模は確認できないが，調査範囲では南北3.1m，東西3.9m以上の長方形の平面形態である。床面は，平坦ではなく，中央部分が緩やかに低くなっており床面中央部は硬化面となっている。また，壁の立上がりも全体に緩やかな傾斜となっている。確認面からの掘込みの深さは，床面の最も深い部分で30cmである。

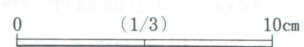
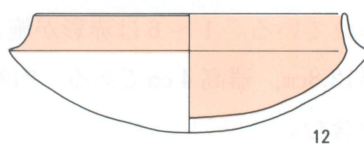
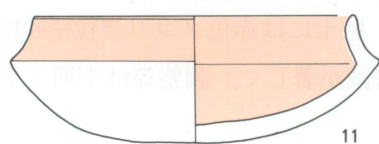
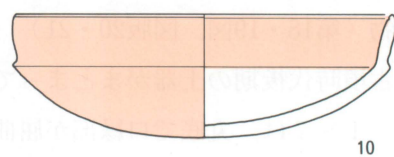
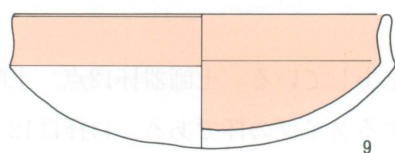
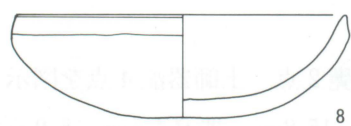
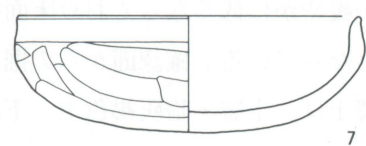
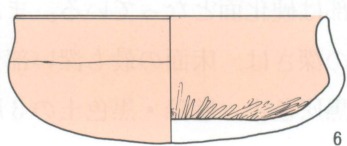
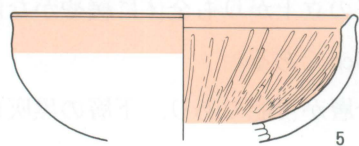
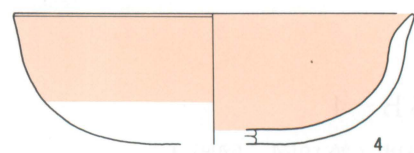
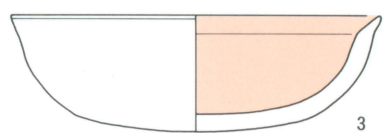
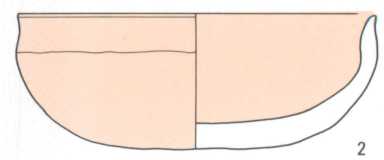
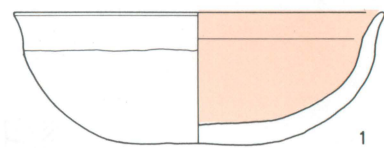
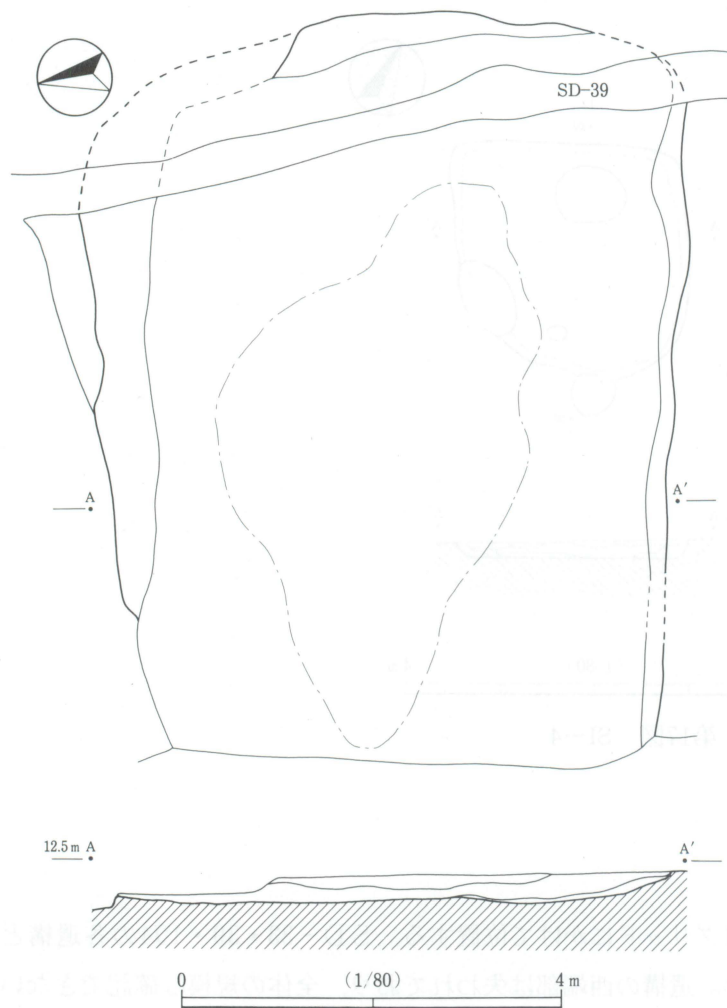
覆土は，上層・暗灰褐色土，下層・黒灰色土，壁際・黒色土の3層に分層が可能であり，下層の黒灰色土には焼土ブロックと多量の土器が含まれている。

カマドや柱穴は確認していない。

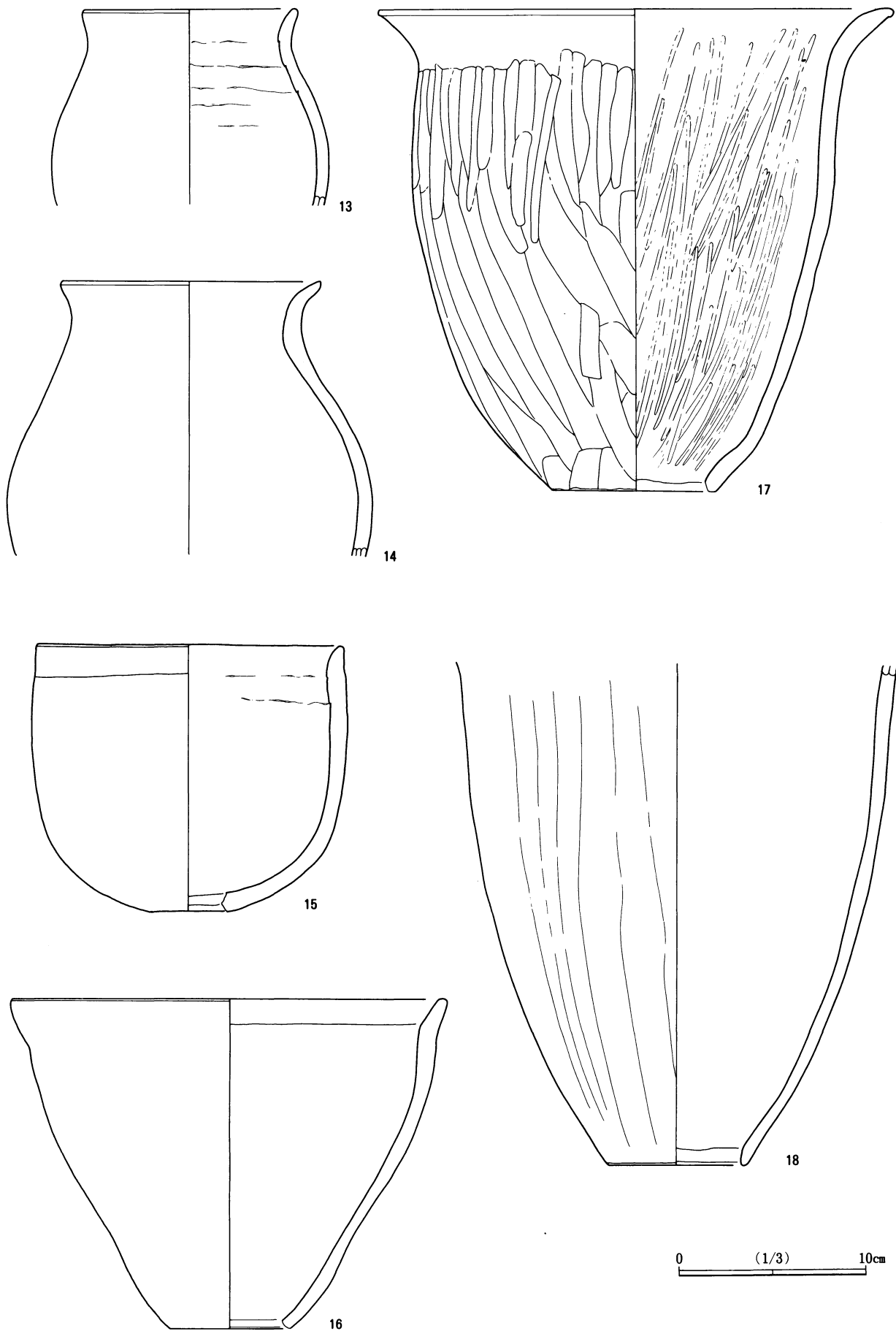
遺物（第18・19図，図版20・21）

古墳時代後期の土器がまとまって出土している。土師器杯12点，土師器甕2点，土師器甌4点を図示した。1～7は，丸底で口縁部が屈曲するタイプの杯である。口径は12.6cm～15.8cm，器高4.5cm～5.2cmである。調整は，1～6は体部内面をヘラ磨きする点に特徴があり，口縁部をヨコナデ，体部外面はヘラ削りを行っている。特に5・6の体部内面にはヘラ磨きによる放射状の暗文が施されている。7の内面は，丁寧なナデが加えられている。1～6は赤色が施されている。胎土には赤色スコリア粒や砂粒が含まれる。8は丸底杯で，口径12.8cm，器高4cmである。内外面ともに磨滅が著しく，調整等は不明である。胎土には赤色スコリア粒を含む。

9～12は，須恵器蓋杯の模倣杯である。9・10は杯蓋の模倣杯で，口径14.7cm～14.8cm，器高4.8cm～5.2cmである。9は内面をヘラ磨き，10はヘラナデしており，体部外面はいずれもヘラ削りの後，ナデが加えられている。11・12は杯身の模倣杯で，口径12.2cm～12.6cm，器高4.7cm～5cmで，調整は，ともに内面へ



第18図 SB-4と出土遺物



第19図 SB-4出土遺物

ラ磨き、体部外面はヘラ削りされている。胎土は赤色スコリア粒を含み、いずれも赤彩が施されている。

13・14は土師器の小型甕である。13は、口径11.4cmであり、胴部内面から口縁部にかけてナデ調整が行われ、胴部内面には、粘土紐の輪積痕が残されている。胴部外面は磨滅が著しいが、ヘラ削り調整が行われているようである。14は口径13.8cmであり、胴部の内外面にはヘラナデ調整が加えられている。13・14ともに、胎土は赤色スコリア粒と砂粒を含んでいる。

15～18は、土師器甕である。15は、丸底形の小型甕で、口径16.4cm、器高13.8cmである。底部の円孔は丁寧に面取りされており、径は4cmである。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部内面は丁寧なヘラナデ調整が行われ、胴部外面はヘラ削りの後、ヘラナデ調整が行われている。胎土は赤色スコリア粒と石英粒を多く含んでいる。16は逆台形の甕である。口径23.3cm、器高17.5cmで、底部の円孔は径6.4cmである。器表面の磨滅が著しく、調整は不明である。胎土には赤色スコリア粒と小石を少量含む。17・18は、砲弾型の甕である。17は口径27.6cm、器高25cm、底部の円孔は径7.6cmであり、17は口縁部を欠くが、器高26.1cm以上、底部の円孔径は7cmの大型品である。2点とも調整は共通しており、胴部内面はヘラナデの後、粗いヘラ磨き、胴部外面は縦方向のヘラ削りである。胎土は赤色スコリア粒と石英粒・砂粒を含んでいる。

3 井戸

SE-1

遺構（第20図、図版5）

調査区南部、I-6グリッドに位置する。SD-13と重複関係にあり、SD-13が新しい。平面形態は、長径2.42m、短径2mの楕円形であり、確認面から底面までの深さは1mほどで、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦であり、径10cm～15cm、深さ10cm～18cmのピットが3か所に掘られている。

覆土は、黄灰色～黒灰色土を中心とする下層、黒褐色土で構成される上層に分けることができ、上下層ともに、炭化物粒子や土器片を含んでいる。

遺物（第20図、図版21）

古墳時代後期の土師器甕が2点出土している。1は、口径14.4cm、器高13.4cm、底径7.2cmの小型甕で、胴部最大径は15.3cmである。胴部内面はヘラナデ調整、外面には丁寧なヘラ削り調整が行われている。胎土には赤色スコリア粒と白色針状物質を含み、色調は橙色～黒色である。2は、口縁部が失われているが、残存器高30.7cm、底径7.8cm、胴部最大径28.8cmの大型甕である。調整技法は1と同様である。胎土には砂粒、赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は灰黄色～黒色である。

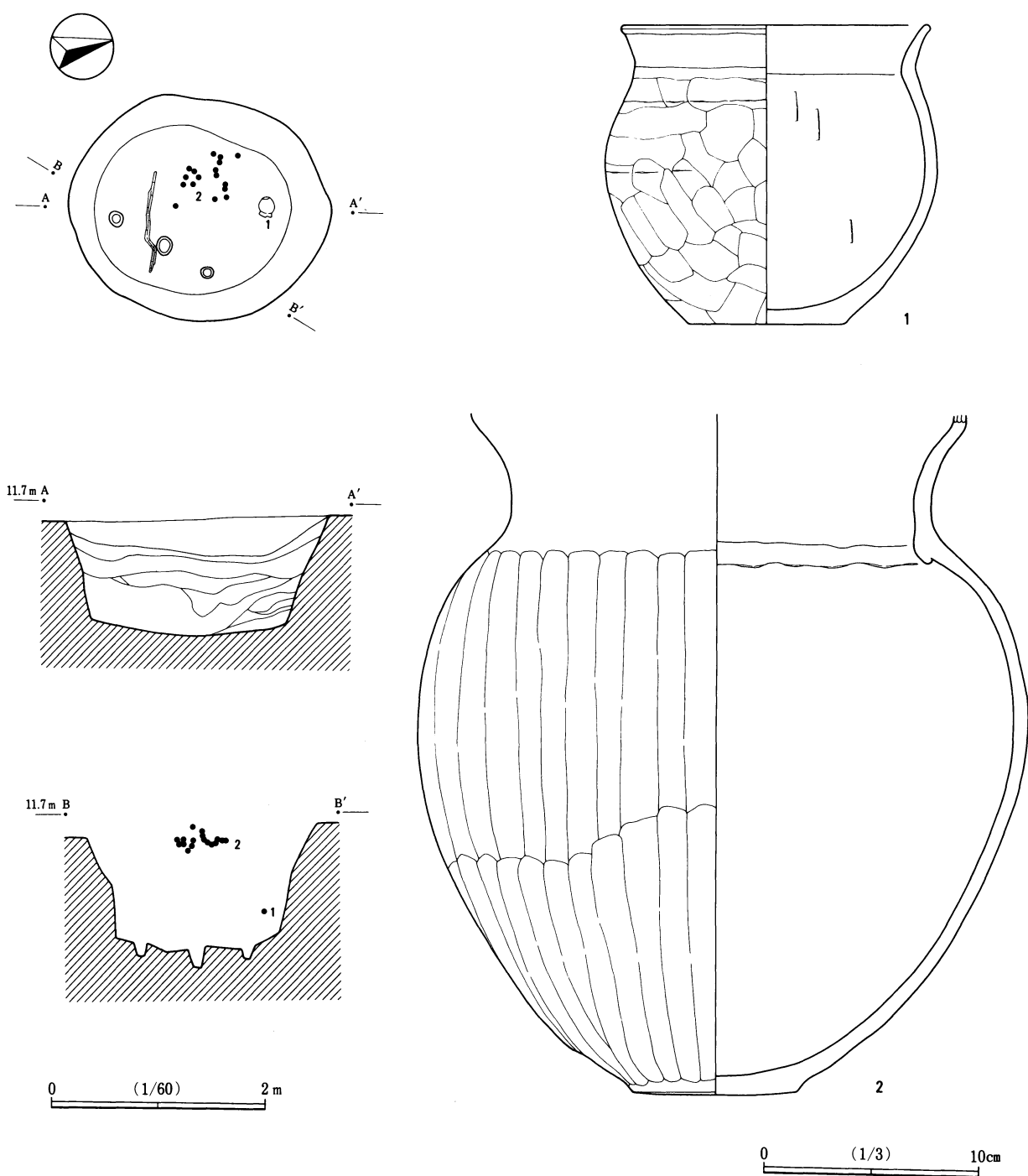
1は覆土下層から、2は覆土上層からの出土である。

SE-2

遺構（第21図、図版5）

調査区南端、I-6グリッドに位置する。平面形態は、南北2.5m、東西2.2mの長方形で、確認面から底面までの深さは1.1mである。底面は、ほぼ平坦となっており、南北1.3m、東西1.2mの長方形である。東側には60cm前後、深さ15cmほどのテラス状の段が掘られている。底面周辺の壁には、木質の痕跡が残されており、井戸枠が存在した可能性が高い。

覆土は、暗褐色土の下層、黄褐色土と赤褐色土を中心とした中層、暗褐色土の上層に分けることができ



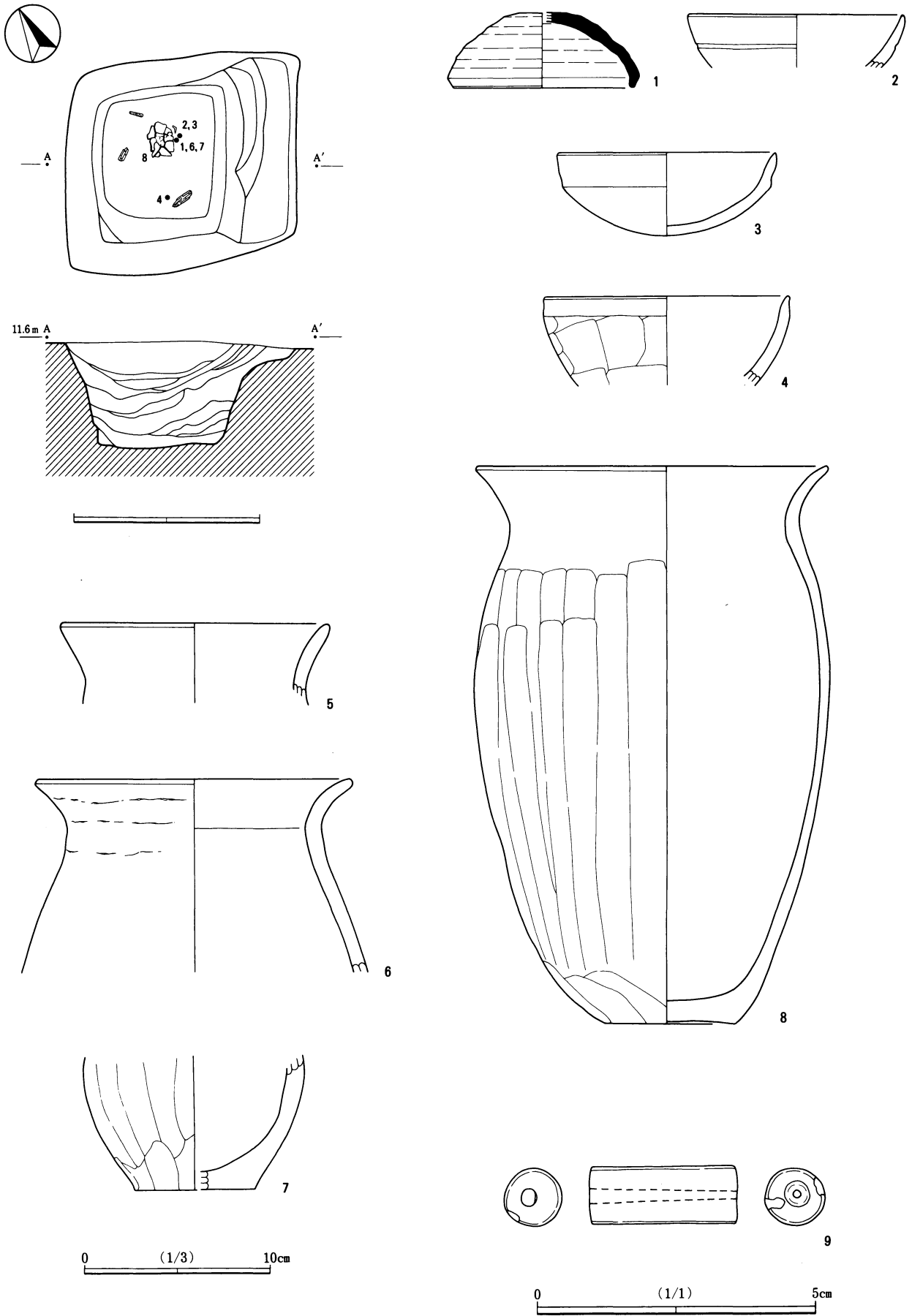
第20図 SE-1と出土遺物

る。中層以下には、黄色粘土ブロックが多量に含まれる傾向があり、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、覆土中からは、多量の土器片、炭化物、木片、玉類とともに、馬と思われる獣骨・歯が出土しており、井戸の埋め戻しに伴い何らかの祭祀行為が行われた可能性も考えられよう。

遺物（第21図、図版21・22）

古墳時代後期の土器、玉類、獣骨・歯、木片が出土しているが、須恵器蓋1点、土師器杯3点、土師器甕4点、管玉1点を図示する。

1は須恵器蓋杯の蓋で、口径9.6cm、器高3.9cm、TK217型式並行の製品である。ロクロ成形、頂部に



第21図 SE-2と出土遺物

回転ヘラ削りが施されている。胎土には白色粒子と石英粒を含み、色調は灰色～黒灰色である。2・3は須恵器蓋の模倣杯である。口径11.4cm～11.7cm、器高4.2cmである。2は内面にヘラ磨きを加えられ、3は、内面ナデ調整、外面はヘラ削りの後、ナデ調整となっている。胎土は、赤色スコリア粒と白色粒子、砂粒を含む。4は、底部が失われているが、丸底の土師器杯と思われ、口径は13cmである。内面はヘラ磨き、外面はヘラ削り調整となっている。胎土は砂粒を含み、色調は黄橙色である。

5～8は土師器甕である。5は、口径14.3cmの中型の甕、7は底径6.5cmの小型甕の胴部片である。8は口径18.8cm、器高29.2cm、底径7cmの長胴甕で、6は口径16.8cm、長胴甕の口縁部片であろう。いずれも、内面をヘラナデしており、7・8は胴部外面をヘラ削り調整としている。6は、口縁部外面に粘土紐の輪積み痕が残され、胴部外面はナデ調整のようである。胎土の特徴では、5・7・8は小石や石英粒を多く含み、6は赤色スコリア粒を含んでいる。

9は、蛇紋岩製の管玉である。径は1.1cm、長さ2.6cm、重さは5.51gを測る。孔は片側穿孔で、穿孔径は開始側で径3.2mm、貫通側で径1.5mmである。色調は濃緑色を呈し、光沢がある。

SE-3

遺構（第22図、図版6）

調査区南部の東寄り、E-9グリッドからF-9グリッドにかけて位置する。他の遺構との重複関係はない。平面形は、長径2.8m、短径2.4mの楕円形であり、確認面から底面までの深さは2.2m、断面形は漏斗状となっている。底面は一辺50cmの隅丸方形である。

覆土の堆積状況は自然堆積で、覆土の上層は炭化粒や焼土粒を含んだ黒褐色土層、中層は粘土ブロックや酸化鉄を多く含む灰褐色土層、下層は未分解の植物遺体を含む黒色土層とグライ化した青灰色の砂層である。

遺物（第22図）

中世前半の土師質土器と古墳時代後期の須恵器長頸瓶が出土している。いずれも中層からの出土である。

1は土師質土器小皿の底部片で、底径6.4cm、回転糸切り痕が残されている。胎土は白色粒子と石英粒を含み、色調は明褐色である。2は台付きの長頸瓶であり、胴部から底部にかけての破片で、高台径は10.2cmである。胴部下端に回転ヘラ削りを施し、高台部を貼り付けている。胎土には長石粒子と砂粒を多く含み、色調は灰白色である。

SE-4

遺構（第22図、図版6）

調査区北部のほぼ中央、U-9グリッドからU-10グリッドにかけて位置する。SD-49・SD-54・SD-55と重複しており、これらの中でSE-4が最も新しい。平面形は、長径3.4m、短径3.1mの楕円形で、確認面から底面までの深さは2.4m、底面は長径60cmの楕円形である。断面形は、逆円錐形である。

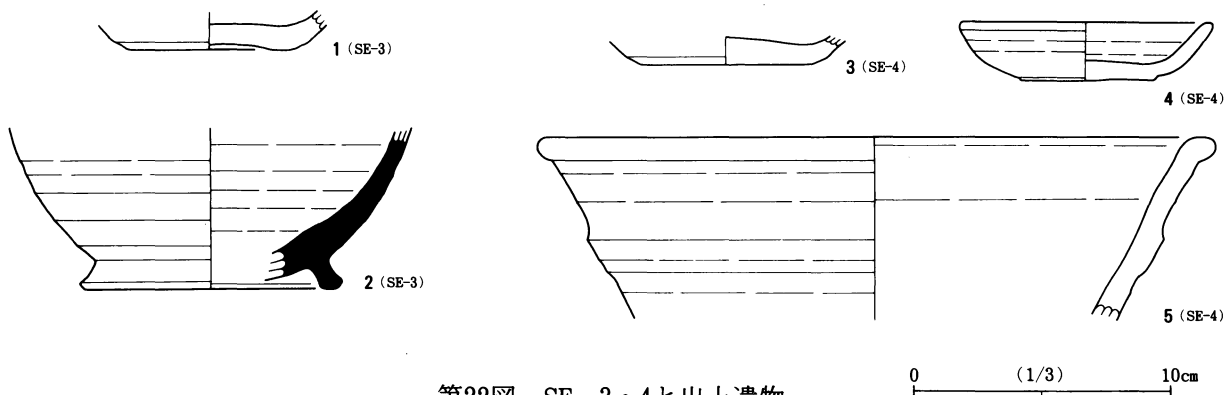
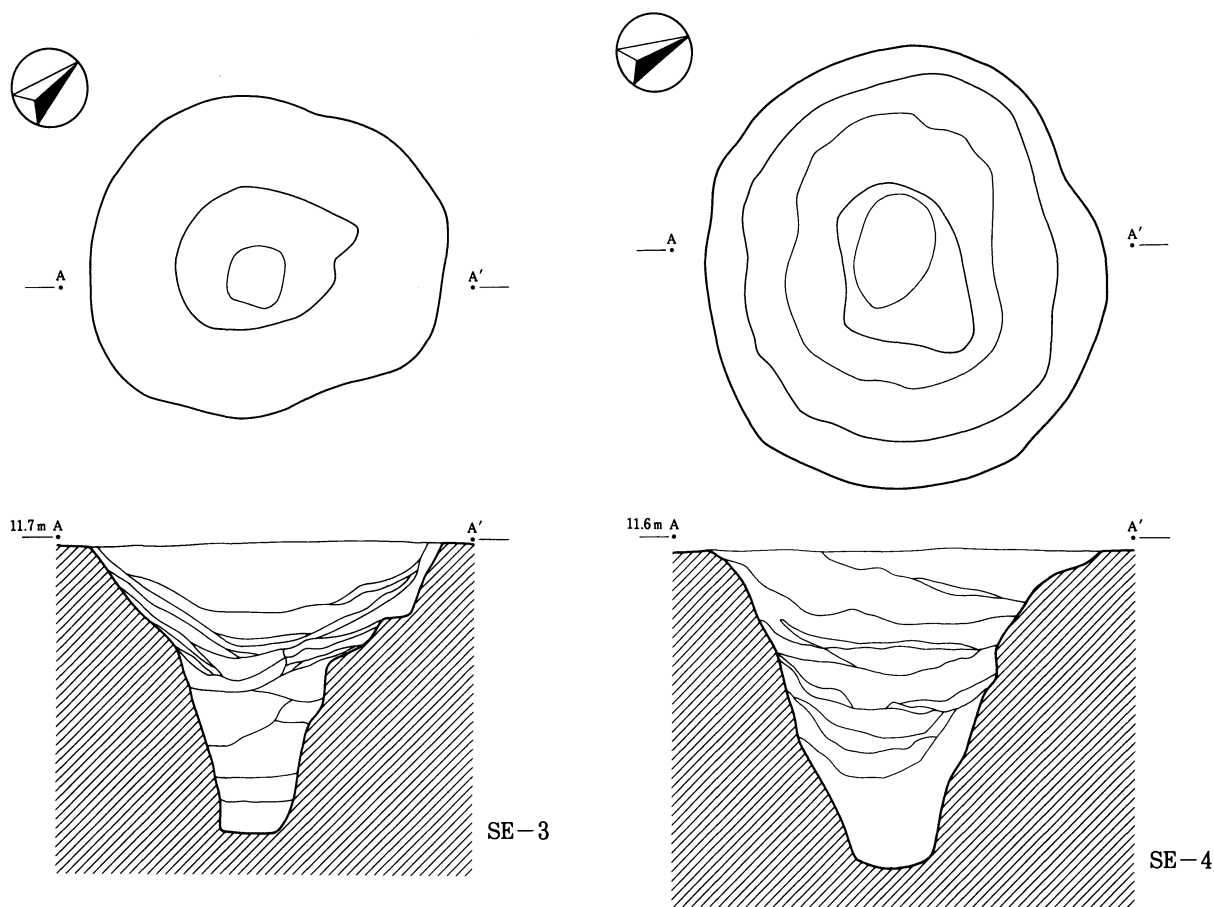
覆土の堆積状況は片側からの自然堆積で、上層が灰褐色～黒褐色土層、中層が灰色～灰褐色土層、下層が灰色土層と砂層である。

遺物（第22図）

平安時代から中世前半にかけての土器、陶器が出土しており、図示した遺物は、いずれも中層からの出

土である。

3はロクロ土師器杯の底部片で、平安時代前期（9世紀代）の製品である。底径6.6cmであり、体部下端から底部にかけて手持ちへラ削り調整が行われている。胎土は白色粒子を多量に含み、色調は赤褐色である。4は中世前半の土師質土器小皿で、口径9.8cm、器高2.2cm、底径5.2cmである。ロクロ成形により、底部外面には回転系切り痕が残されている。胎土は砂粒を多く含み、色調は黒褐色である。5は常滑窯産の捏鉢であり、常滑窯編年の6a型式前後の製品である。胎土は長石粒を多く含み、色調は灰白色である。



第22図 SE-3・4と出土遺物

SE-5

遺構（第23図，図版6・7）

調査区中央部のやや東寄り，X-11グリッドに位置する。SD-110およびピットと重複関係にあり，SE-5が最も古い。平面形は径3mの円形であり，確認面から底面までの深さは2.6m，底面は長径2.6mの楕円形である。断面形は円筒形であるが，北側に幅80cm，深さ1mほどのテラス状の掘込みが作られている。

遺物（第23・24図，図版36）

図示した遺物は中世陶器8点，古墳時代後期の土師器，須恵器3点，木製品9点で，いずれも中層～下層一括の出土である。

1は，瀬戸窯産の卸皿であり，古瀬戸中期様式Ⅰ期～Ⅱ期の製品である。口径14.2cm，残存する部分の器高は3.7cmである。内面見込みにはヘラ状工具による卸目が作られ，底部付近を除き刷毛塗りの灰釉が施される。灰釉の色調は黄灰白色である。胎土は，微細な長石粒を含み，色調は灰白色である。

2・3は瀬戸窯産の水注片であり，胎土や釉調により同一個体と考えられる。古瀬戸前期様式Ⅳ期～古瀬戸中期様式Ⅰ期頃の製品である。2は注口部分，3は肩部片であり，肩部片には3条の沈線が横方向に引かれている。いずれも外面には灰釉が施されており，灰釉の色調はオリーブ色～青緑色である。胎土は微細な長石粒を含み，色調は灰白色である。

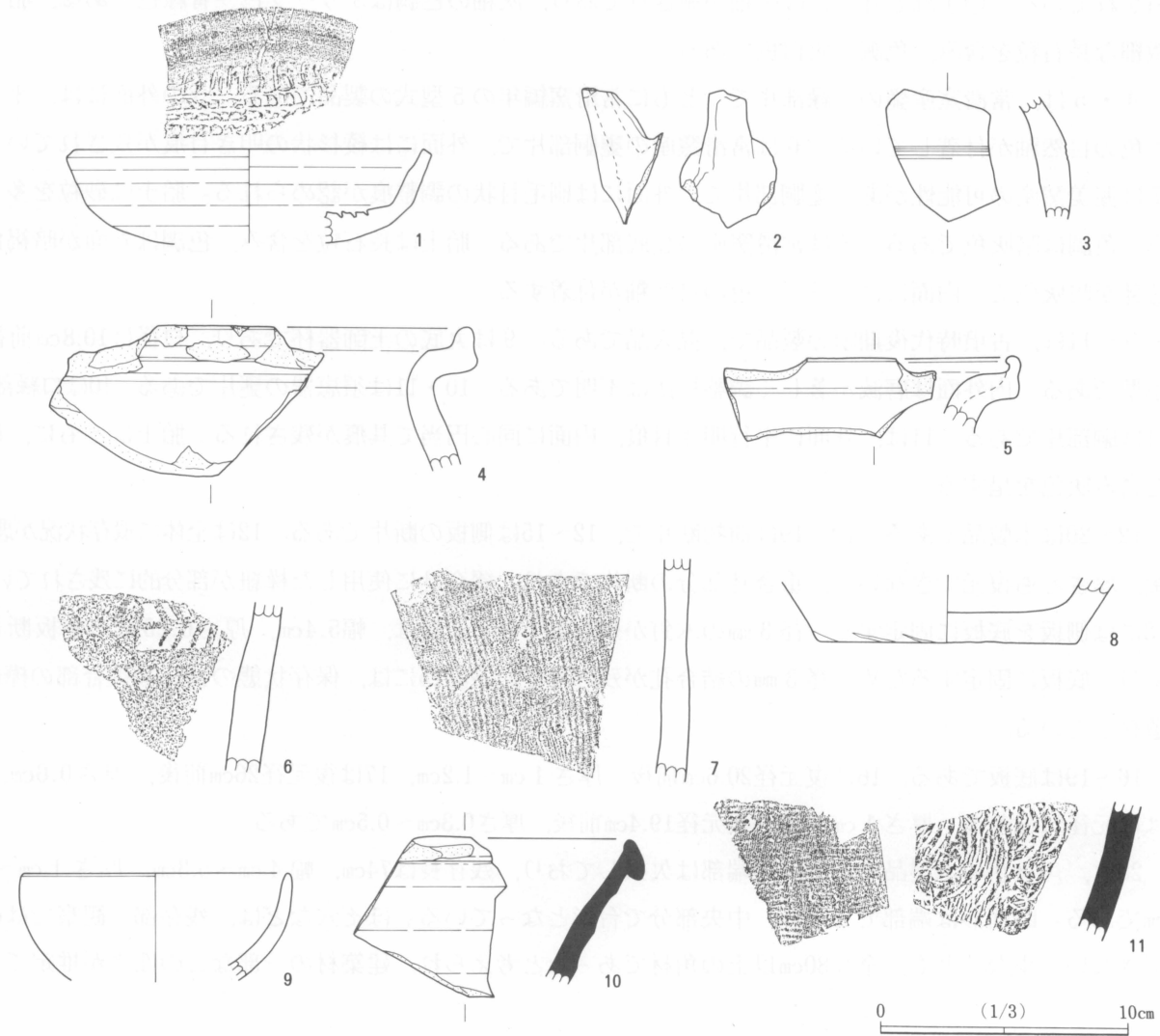
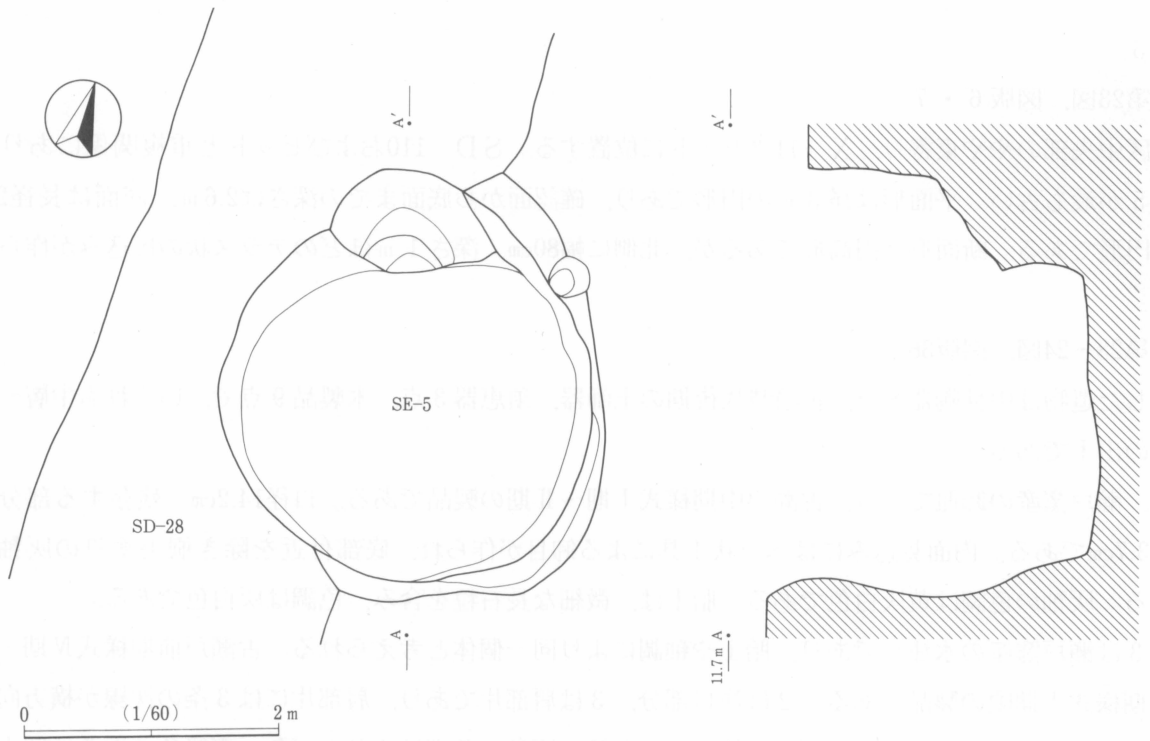
4・5は，常滑窯産甕の口縁部片で，ともに常滑窯編年の5型式の製品である。5の外面には，オリーブ色の自然釉が付着している。6は常滑窯産の甕胴部片で，外面には綾杉状の叩き目痕が残されている。7は渥美窯産の可能性のある甕胴部片で，外面には刷毛目状の調整痕が認められる。胎土は砂粒を多く含み，色調は暗灰色である。8は常滑窯産の甕底部片である。胎土は長石粒を含み，色調は外面が暗褐色，芯部が暗灰色で，内面にはオリーブ色の自然釉が付着する。

9～11は，古墳時代後期頃の製品で，混入品である。9は丸底の土師器杯であり，口径は10.8cm前後と小型である。内外面は磨滅が著しく調整技法は不明である。10・11は須恵器の甕片である。10は口縁部片，11は胴部片である。11は，外面に平行叩き目痕，内面に同心円当て具痕が残される。胎土はともに，砂粒を含み灰色を呈する。

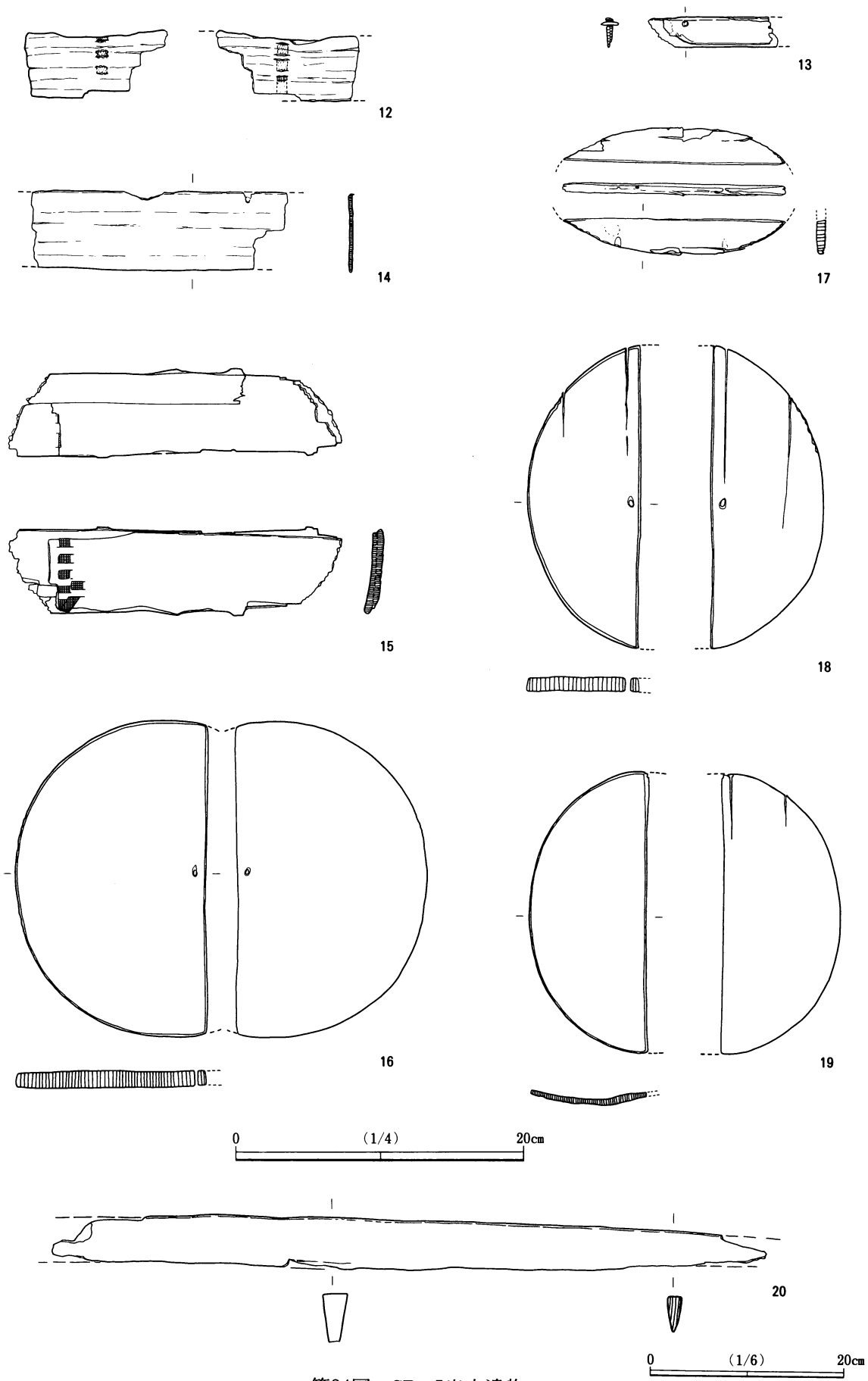
12～20は木製品である。12～19は曲物断片で，12～15は側板の断片である。12は全体に遺存状況が悪く，幅，厚さとも復元できないが，重合せ部分の断片であり，綴合せに使用した樫紐が部分的に残されている。13には側板を底板に固定する，径3mmの木釘が残存している。14は，幅5.4cm，厚さ0.25mmの側板断片であり，底板に固定するための径3mmの結合孔が残されている。15には，保存状態の良好な接合部の樫紐が遺存している。

16～19は底板である。16は復元径20.6cm前後，厚さ1cm～1.2cm，17は復元径26cm前後，厚さ0.6cm，18は復元径21cm前後，厚さ1cm，19は復元径19.4cm前後，厚さ0.3cm～0.5cmである。

20は，角材状の木製品である。両端部は欠損しており，残存長は74cm，幅4cm～5.3cm，厚さ1cm～2.5cmである。断面形は端部で三角形，中央部分で台形となっている。ほぞ穴などは，残存部の観察では確認できない。少なくとも，全長80cm以上の角材であったと考えられ，建築材の一部などの性格が推定できよう。



第23図 SE-5と出土遺物



第24図 SE-5出土遺物

SE-6

遺構（第25図）

調査区中央部、X-11からY-11グリッドに位置する。SD-48と重複しており、切り合い関係ではSD-48が古い。平面形は長径2.22m、短径2.07mの楕円形であり、確認面からの深さは2.2m、底面は径80cmの円形である。断面形は逆台形を呈する。

覆土の堆積状況は自然堆積で、覆土は上層が焼土粒を含む暗灰褐色土層、中層が黄白色粘土粒を含む黒灰色土層、下層は焼土粒や黄白色土粒を含み粘性の強い、黒色～黒褐色土層である。

遺物（第25図、図版36）

下層から曲物底板1点が出土している。1が曲物底板であり、ほぼ原形を留めている。径14.8cm、厚さ0.3cm～0.8cmの小型の製品である。

SE-7

遺構（第25図）

調査区北部のほぼ中央付近、W-9グリッドに位置する。SD-51と重複しており、切り合い関係ではSD-51より古い。平面形は、長径2.4m、短径2.3mの楕円形で、確認面からの深さは2m、底面は長径60cmの楕円形となっている。断面形は逆円錐形を呈する。

覆土の堆積状況は自然堆積で、上層が焼土粒を含む黒褐色土層、中層が焼土粒や黄白色土粒を含む暗褐色土層、下層が褐色土層もしくは灰色砂層である。

遺物（第25図）

遺物は平安時代前期の土師器が出土している。覆土中層からの出土で、本遺構に伴うものではない可能性が高い。

2は、9世紀代のロクロ土師器杯の底部片である。底径7.4cmであり、体部下端から底部にかけて回転ヘラ削り調整が施されている。胎土は白色針状物質を少量含み、色調は淡橙色である。

SE-8

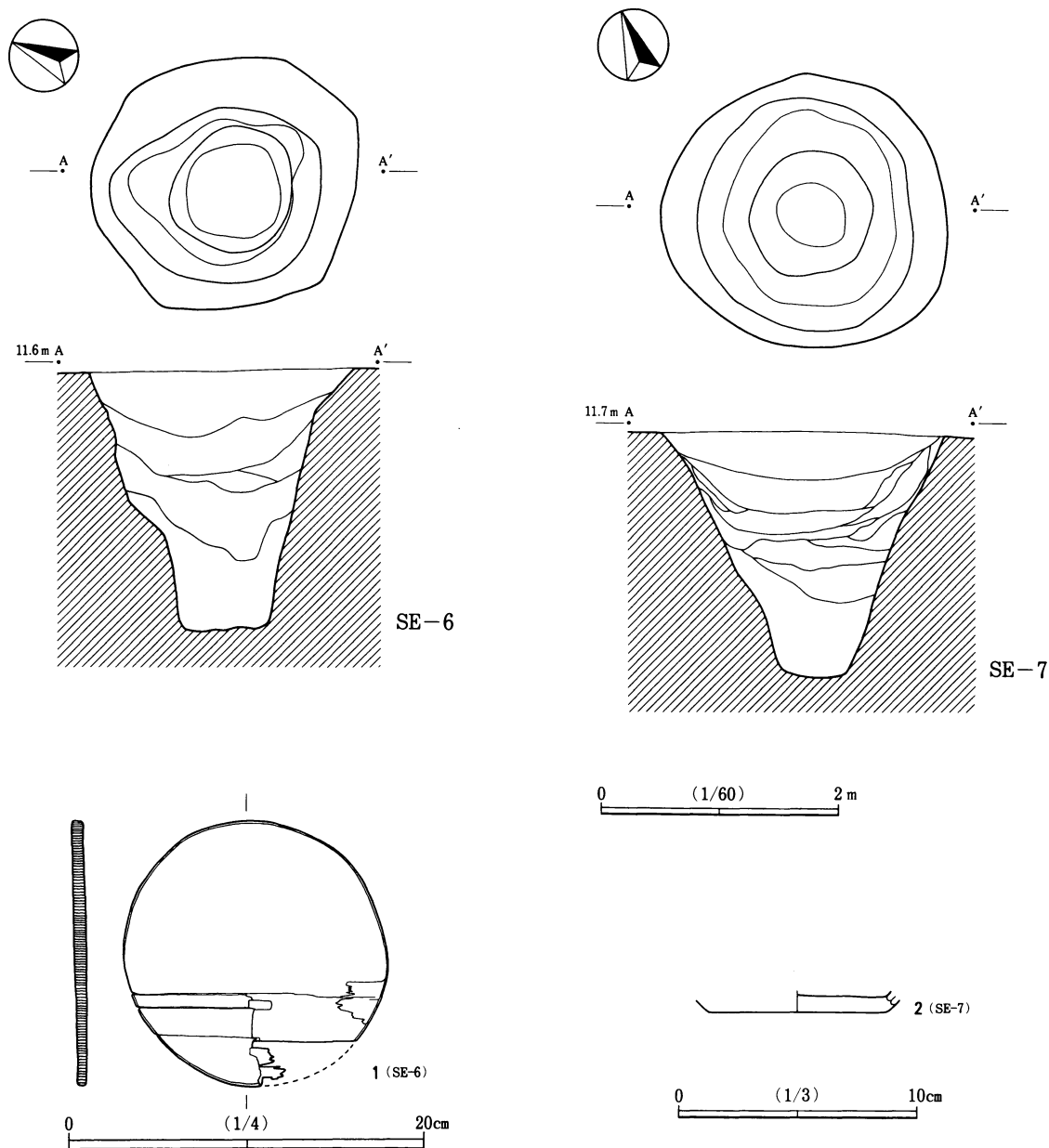
遺構（第26図、図版7）

調査区中央部、B-8グリッドに位置する。平面形態は長径1.56m、短径1.45mの楕円形で、確認面からの深さは1.43m、底面は長径36cmの楕円形である。断面形は逆円錐形を呈する。

覆土の堆積状況は自然堆積であり、焼土粒を含む暗褐色土の上層、焼土粒子を含む黒褐色土の中層、灰白色粘質土を含む暗灰色土の下層に分けることができる。

遺物（第26図、図版22）

遺物は、古墳時代後期の土師器杯と甕が下層から出土している。1は須恵器蓋杯の模倣杯であり、口径12.2cm、器高6.1cmである。器表面は剥離が著しいが、赤彩の痕跡が確認できる。2は、口径18.4cm、器高26.2cm、底径6.2cmの長胴甕である。胴部内面は横方向のヘラナデ調整、外面には縦方向のヘラ削り調整が行われている。胎土は赤色スコリア粒、白色粒子などを含み、色調は橙色～黒色である。3は甕の底部片で、底径7.3cmである。調整技法と胎土の特徴は1と同様である。4は、口径14.5cm、器高16cm、底径7.3cmの小型甕である。胴部内面はヘラナデ調整、外面はヘラ削り調整されている。胎土は小石や石英粒を含



第25図 SE-6・7と出土遺物

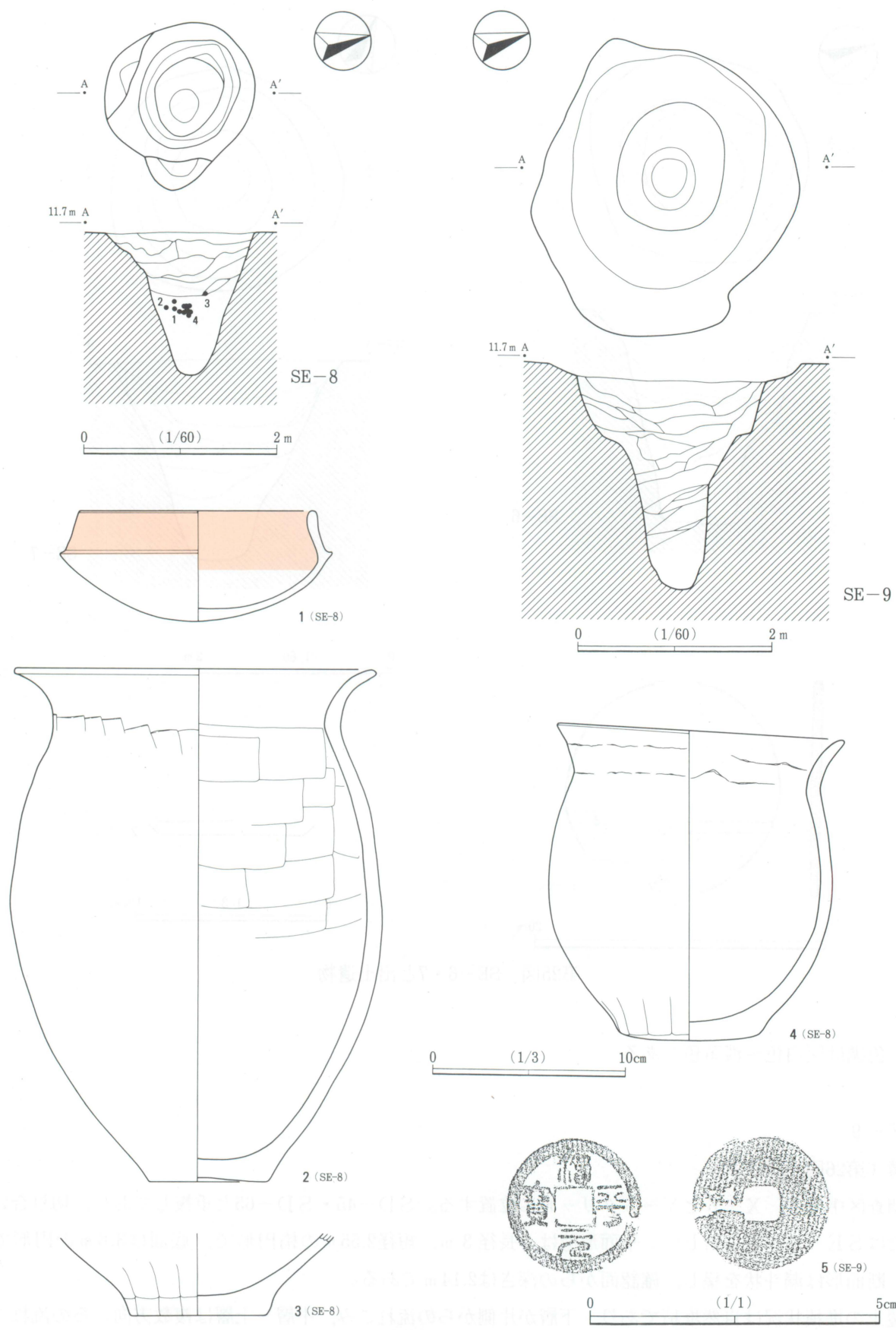
み、色調は灰白色～淡黄色である。

SE-9

遺構（第26図，図版8）

調査区中央部，X-6とY-6グリッドに位置する。SD-45・SD-65と重複しており，切り合い関係ではSE-9が最も新しい。平面形態は，長径3m，短径2.55mの楕円形で，底面は3.6mの円形である。断面形は漏斗状を呈し，確認面からの深さは2.14mである。

覆土の堆積状況は自然堆積であり，下層が片側からの流れこみ，中層～上層は複数方向からの流れこみである。覆土は，焼土粒および黄白色粘土粒を含む暗灰褐色土を中心とした上層，中層が黄白色粘土粒を含む黒灰色土を中心とした中層，黒灰色ないし黒色砂質土を中心とした下層に分けることができる。



第26図 SE-8・9と出土遺物

遺物（第26図）

北宋銭1点が出土している。5が北宋銭で、篆書体の「治平元寶」である。外縁径2.31cm～2.32cm，外縁内径1.91cm～1.97cm，外縁厚0.1cm，文字面厚0.12cm，重量2.41gである。

SE-10

遺構（第27図，図版8）

調査区中央部の西寄り，Y-6グリッドに位置する。平面形態は径1.56mの円形で，底面は長径1.1m，短径92cmの楕円形である。壁は垂直で，断面形はほぼ円筒形となっており，確認面からの深さは，2.3mである。

覆土の堆積状況は，片側から流れ込んだ自然堆積である。覆土は，焼土粒や炭化物粒を含む暗褐色土の上層，焼土粒や炭化粒を含み粘性が強い黒褐色～黒灰色土の中層，灰色砂塊を含むグライ化した灰色砂質土の下層に分けることができる。

遺物（第27図）

遺物は中層からの一括遺物であり，渥美窯産の大甕2点と棒状木製品1点が出土している。1・2が渥美窯産の大甕片である。1は頸部から肩部にかけての破片，2が胴部中位の破片であり，外面には平行叩き目痕が残されている。胎土は，1・2ともに微細な砂粒を含み，色調は暗灰色であり，同一個体の可能性が高い。

3は棒状木製品である。現存長82.2cm，断面は円形で径5.2cmである。全体に湾曲し樹皮が残されており，表面を面取りするような明瞭な加工痕は確認できないが，枝は落としているようである。自然木に簡単な加工を加え，杭や棒として使用された可能性が高い。

SE-11

遺構（第28図，図版8・9）

調査区中央部，Y-8グリッドに位置する。平面形態は，長径1.18m，短径0.97mの楕円形であり，底面は長径10.6cm，短径10cmの楕円形，確認面からの深さは1.55mである。断面形は漏斗状となっている。

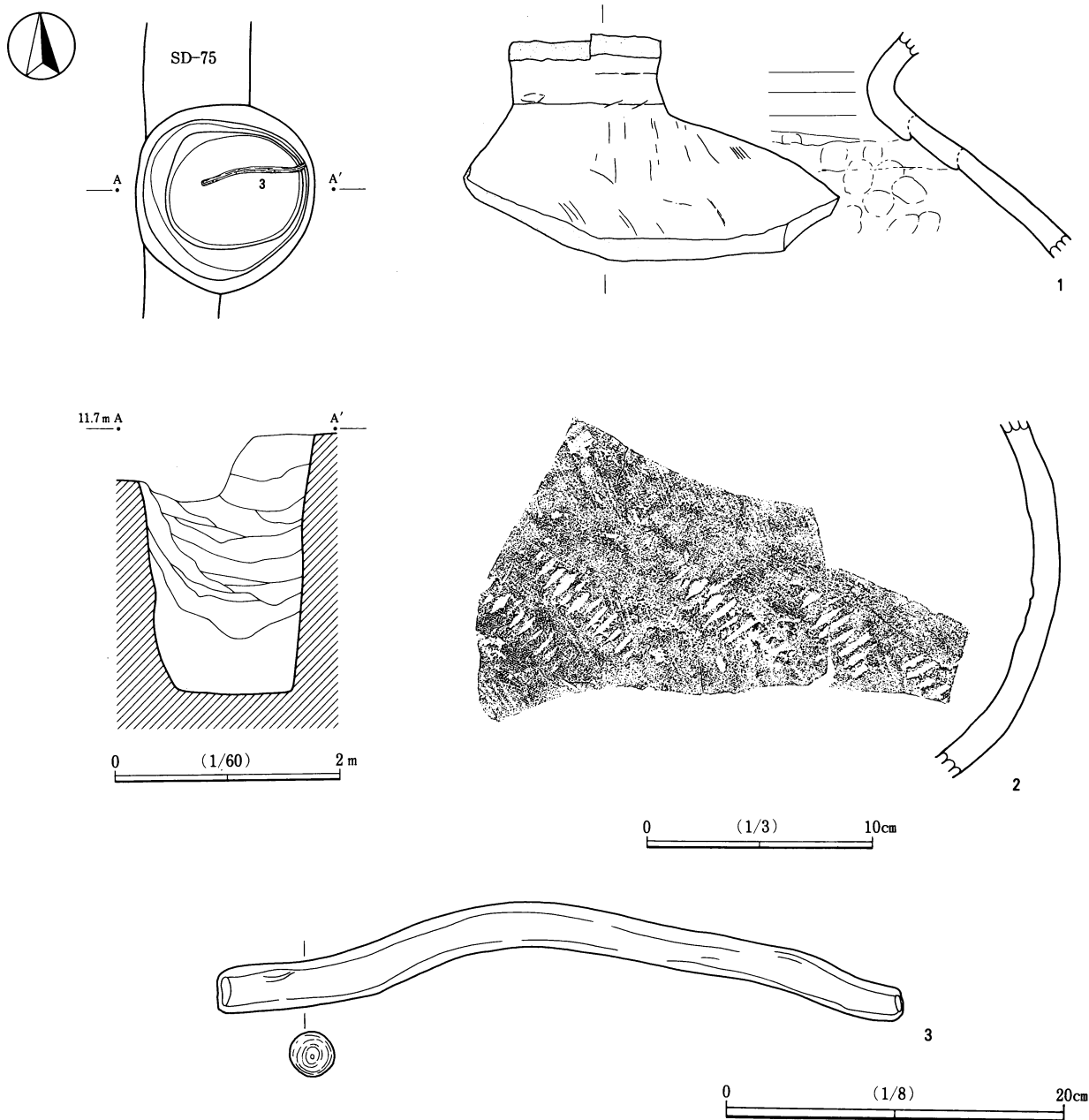
覆土は，黒灰褐色土を主体とした上層と黒灰色土の下層に分けることができる。

遺物（第28・29図，図版22）

遺物は，上層下部で古墳時代後期の土器と板状木片が出土している。特に，甕と鉢がまとまって出土しており，鉢は合わせ口の状態で出土している点が特徴的である。なお，板状木製品は遺存状況が悪く，土器類のみを図示する。

1は，須恵器蓋杯の蓋で，口径11cm，頂部を欠損しており，TK217型式の製品である。胎土は白色粒子と長石粒を含み，色調は灰色である。2・3は土師器鉢である。2は，口径12.2cm，器高7.3cm，底径5.8cmであり，体部内面はヘラナデ調整，外面はヘラ削り調整となっている。胎土は赤色スコリア粒や石英粒を含み，色調は黄褐色～黒色である。3は，口径18.7cm，器高10cm，底径8.7cmの大型の鉢である。体部内面はヘラ磨き調整，外面はヘラ削りの後，丁寧なヘラナデ調整となっている。胎土は，赤色スコリア粒と白色針状物質を含み，色調は灰黄色～暗灰黄色である。

4～9は土師器甕である。4は口径9.8cm，器高9.6cm，底径5.9cmの小型甕である。胴部内面はナデ調整，

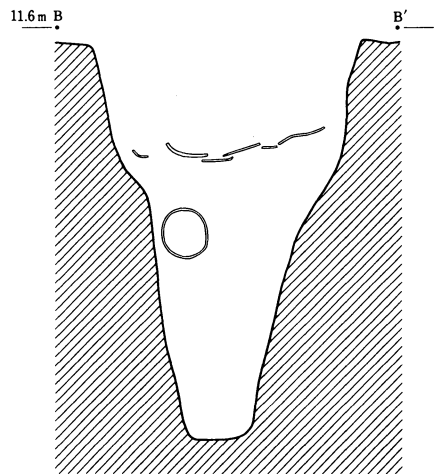
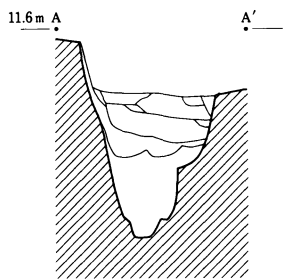
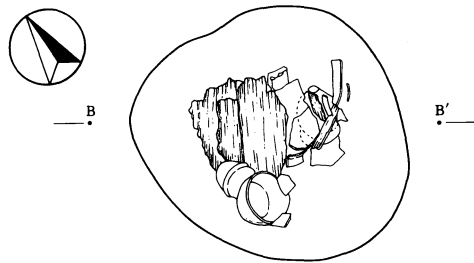
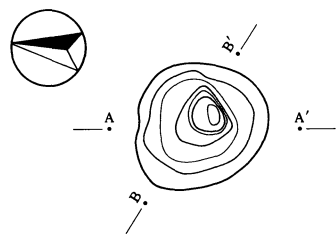


第27図 SE-10と出土遺物

外面はヘラ削り調整であり、底部外面には木葉痕が残されている。胎土は白色粒子と石英粒を含み、色調は黄橙色である。また、胴部内面には、暗褐色の有機質の付着物が、胴部中位以上まで残されている。5は、口径14.6cm、器高18cm、底径6.4cmである。胎土は赤色スコリア粒、黄褐色粒子、石英粒などを含み、色調は明黄褐色～黒色である。

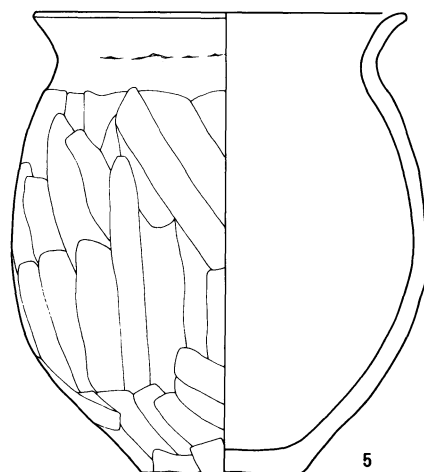
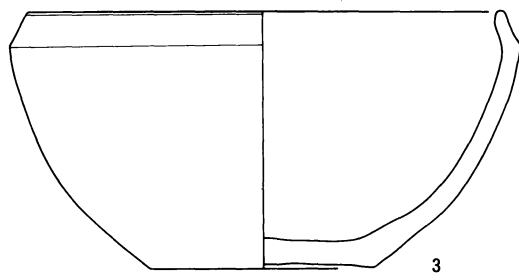
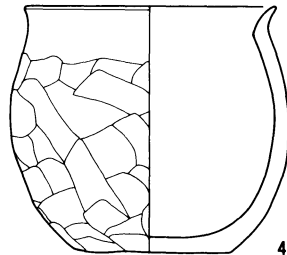
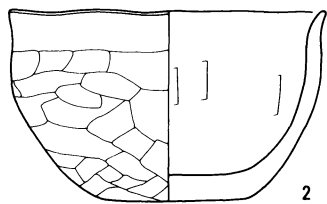
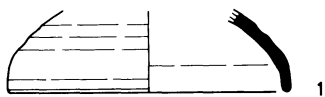
6は甕の口縁部から肩部にかけての破片である。胴部の外面は縦方向のヘラ削り調整、口縁部の内外面と胴部内面はヨコナデ調整となっており、外面と口縁部の内面に赤彩が施されている。胎土は赤色スコリア粒を含む良好なもので、色調は明橙色である。

7・8は甕底部片で、底径5.2cm～6.4cmである。7は胴部外面をヘラ削りの後、ヘラナデ調整しており、8は胴部外面から底部にかけてヘラ削り調整となっている。7の胎土は赤色スコリア粒と白色粒を含み、



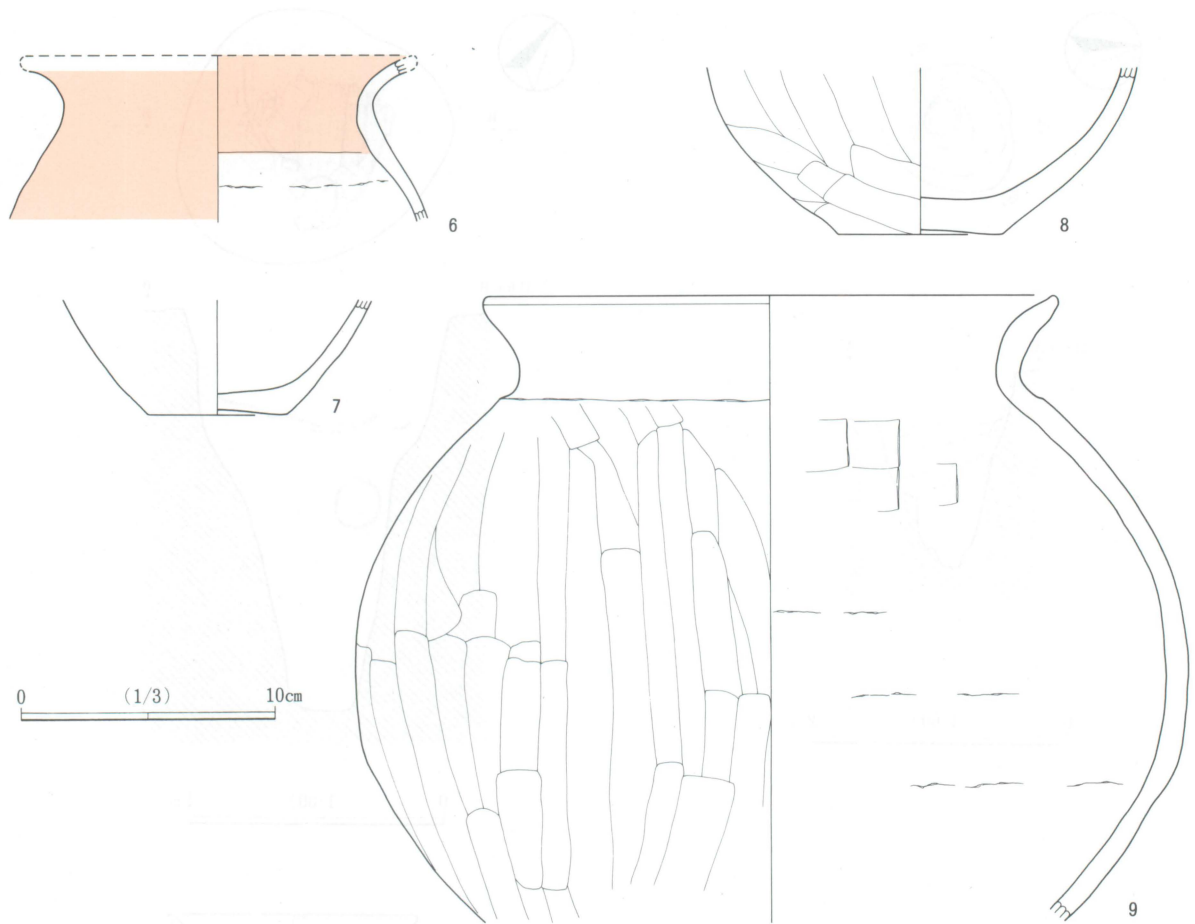
0 (1/60) 2 m

0 (1/30) 1 m



0 (1/3) 10cm

第28図 SE-11と出土遺物



第29図 SE-11出土遺物

色調は灰白色，8の胎土は白色粒，石英粒を含み，色調は灰色～暗灰色である。

9は，口径22.2cm，胴部最大径32.6cm，底部を失っているが，球状の胴部を持つ大型甕である。胴部内面は横方向のヘラナデ，胴部外面は縦方向のヘラ削り調整となっている。胎土は黄褐色粒子，石英粒を含み，色調は明赤褐色～黒色である。

SE-16

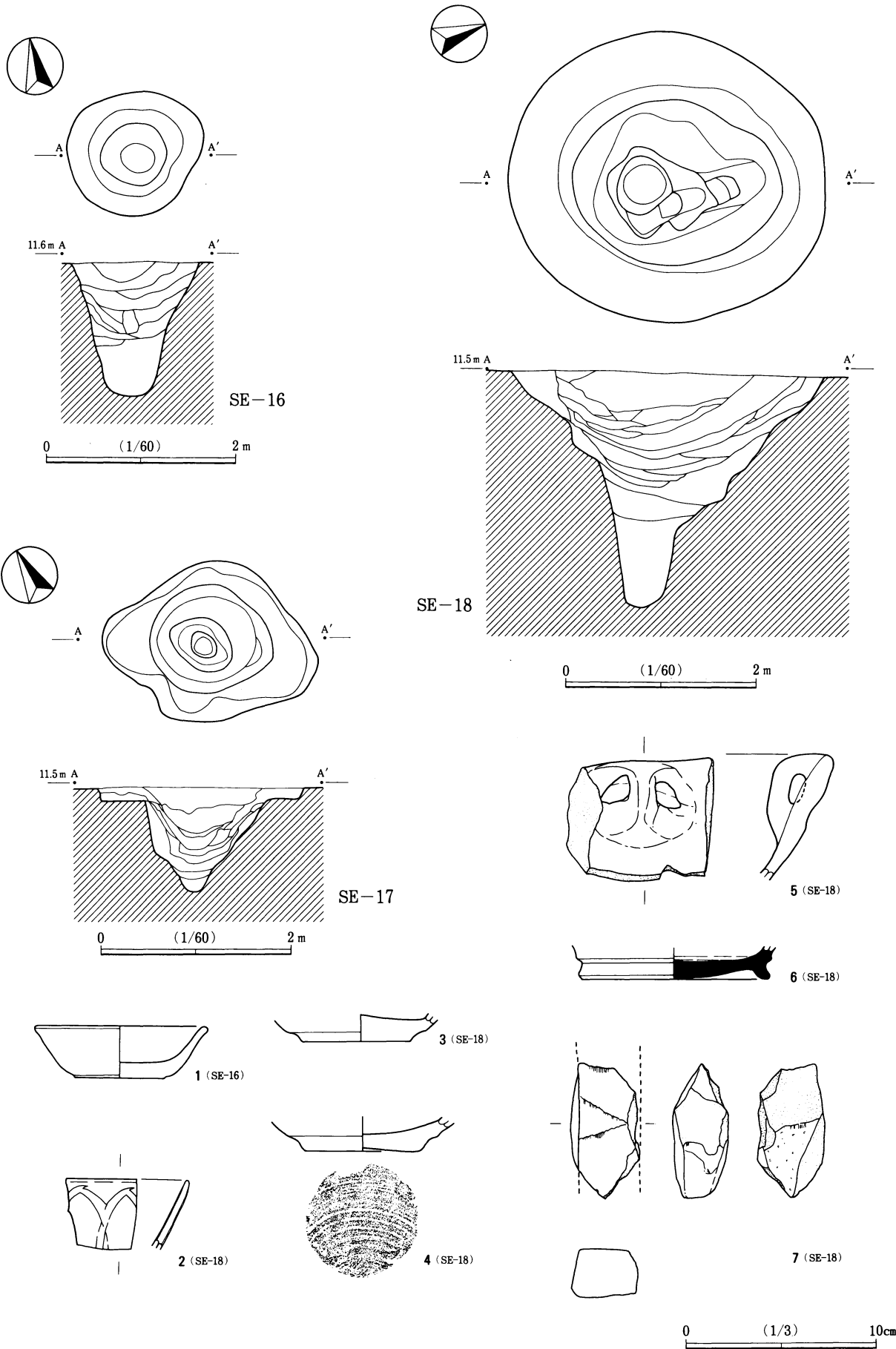
遺構（第30図，図版10）

調査区中央部の西寄り，X-5からY-5グリッドにかけて位置する。SD-45・SD-67と重複しており，切り合い関係ではSD-45より新しく，SD-67より古い。平面形態は，長径1.44m，短径1.3mの楕円形で，底面は長径36cm前後の楕円形である。確認面からの深さは1.42m，断面形は逆円錐形を呈する。

覆土の堆積状況は自然堆積で，焼土粒や炭化粒を含む灰褐色土の上層，黄褐色粘土粒を含む灰褐色土の中層，粘性の強い黒褐色土層の下層に分けることができる。

遺物（第30図）

出土遺物には，中世の土師質土器1点がある。1は土師質土器の小皿で，口径9cm，器高2.7cm，底径4.8cmである。胎土は雲母粒と砂粒を含み，色調は暗褐色である。



第30図 SE-16・17・18と出土遺物

SE-17

遺構（第30図，図版10）

調査区中央部，A-4グリッドに位置する。平面形態は，長径2.3m，短径1.7mの楕円形であり，底面は径20cmほどの円形である。確認面からの深さは1.1m，断面形は，崩れてはいるが漏斗状である。覆土の堆積状況は自然堆積で，焼土粒や黄白色粘土粒を含む黒灰褐色土の上層，黄白色粘土粒や炭化粒を含む黒褐色～灰褐色土の中層，粘性が強く焼土粒や黄白色粘土粒を含む黒灰色～黒褐色土の下層に分けることができる。

遺物

出土遺物は土師器の細片など数点のみであり，図示できるものはない。

SE-18

遺構（第30図，図版10）

調査区北部の西端，W-4からW-5グリッドにかけて位置する。SD-85・SD-88と重複しており，SE-18が最も古い。平面形態は長径3.3m，短径3mの楕円形，底面は径40cm前後の円形である。確認面からの深さは2.5mで，断面形は漏斗状である。

覆土の堆積状況は自然堆積で，焼土粒や黄白色粘土粒を含む暗褐色土の上層，焼土粒や灰白色粘土粒を含む明灰褐色土を主体とした中層，植物遺存体を多く含む暗灰褐色土の下層に分けることができ，さらに最下層にはグライ化した灰色の砂を含む青灰色土が堆積している。

遺物

出土遺物は中世のもので，上～中層から出土している。2は龍泉窯系の青磁碗で，太宰府分類のI-5b類である。釉の色調は明褐色，胎土の色調は灰白色である。3・4は，土師質土器小皿の底部片で，底径5.6cm～6cmである。ともにロクロ成形で，底部切り離しは，4は静止糸切り，3は磨滅が著しく断定できないが，回転糸切りのようである。胎土は，3が雲母粒を含み，色調は褐色，4は赤色スコリア粒を含み，明赤褐色である。5は，土師質の内耳鍋の口縁部片である。外面はヘラ削りの後，ナデ調整，内面は内耳部分を貼り付けた後，ナデ調整となっている。胎土は赤色スコリア粒と微細な砂粒を多量に含み，色調は，外面が黒褐色，内面が明赤褐色である。年代的には2・3までの遺物よりは降る可能性がある。

6は，奈良時代（8世紀代）の須恵器高台付杯で，混入品である。高台径9.8cmであり，胎土は白色粒子を多量に含み，色調は灰色である。

7は，凝灰岩製の砥石である。非常に使い込まれており，現存長は7cm，断面形は2.2cm×3.4cmほどの長方形となっている。色調は灰白色である。

SE-19

遺構（第31図）

調査区中央部，W-13グリッドに位置する。東側1/4程度が調査区域外にかかっている。SD-47と重複しており，切り合い関係ではSE-19が新しい。平面形態は径1.3mの円形，底面は長径30cm前後の楕円形である。確認面からの深さ1.3m，断面形は漏斗状である。

覆土は，焼土粒を含む暗灰褐色土の上層と灰白色粘土ブロックを多量に含む下層に分けることができ，

下層は、1 m近い厚さで一気に堆積していることにより、人為的な埋戻しと推定できる。

遺物

出土遺物には土師器などの細片が若干量出土しているが、図示できるものはない。

SE-20

遺構（第31図）

調査区中央部、X-7グリッドに位置する。ピット1基と重複し、切り合い関係ではSE-20が古い。平面形態は径1.3 mのほぼ円形、底面は長径1.1 mの楕円形である。また、底面の中央には径20 cmの円形で、深さ12 cmの窪みが掘られている。確認面からの深さは、底面の窪みを含めて80 cmであり、断面形は逆台形である。

覆土は、灰白色粘土粒を含む褐色土の上層、粘性が強い暗褐色土の中層、粘性の強い黒褐色土層と砂粒を含む暗褐色土で構成される下層に分けることができる。

遺物

遺物は出土していない。

SE-21

遺構（第31図）

調査区南部、C-4・C-5・D-4・D-5の各グリッドにわたって位置する。SD-84と重複しており、SE-21が新しい。平面形態は径2.1 mのほぼ円形、底面も径40 cm前後の円形である。確認面からの深さは2.1 mであり、断面形は逆円錐形である。

覆土の堆積状況は複数方向からの流れこみで、自然堆積である。覆土は、焼土・炭化物粒や黄白色粘土粒を含む暗褐色粘質土の上層、黄褐色粘土を含む灰褐色～暗褐色土の中層、しまり・粘性ともに弱い灰褐色～暗褐色土の下層に分けることができる。

遺物

遺物は中層付近から土師器細片が出土したが、図示できるものはない。

SE-22

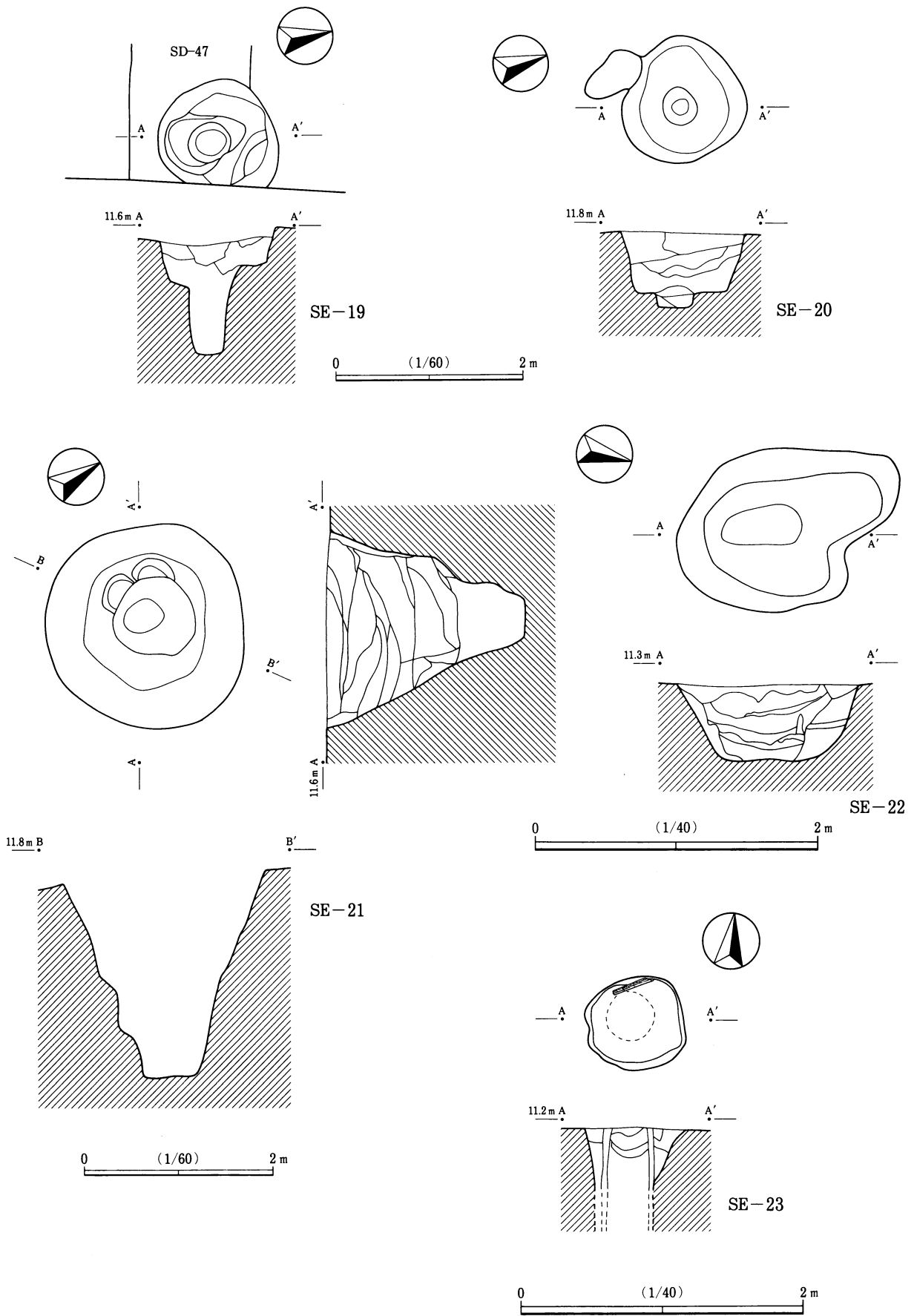
遺構（第31図）

調査区中央部、Z-10からZ-11グリッドにかけて位置する。SD-28と重複しており、SD-28より古い。平面形態は、長径1.7 m、短径1.15 mの歪んだ楕円形、底面も上端の平面形態と相似形で、長径55 cmの楕円形である。確認面からの深さは55 cm、断面形は逆台形である。

覆土の堆積状況は自然堆積で、上層が灰白色土、中層が灰色～暗灰色のグライ化土、下層が黒灰色～暗灰色のグライ化土である。

遺物

出土遺物には土器細片があるが、図示できるものはない。



第31图 SE-19·20·21·22·23

SE-23

遺構（第31図）

調査区中央部、Y-7グリッドに位置する。平面形態は径70cm前後の円形で、断面形は円筒形である。壁面の崩落が著しく、底面まで調査することができなかったが、確認面からの深さは75cm以上である。

覆土の堆積状況は自然堆積で、上層が粗砂を含む灰白色土、中層は灰白色ないし灰色土であるが、下層に関しては前述の理由により観察できなかった。

遺物

遺物は出土していない。

4 方形竪穴遺構

調査区北部で、東西に4基まとめて確認された遺構である。古墳時代後期の土器がまとめて出土しているが、いずれの遺構も基本土層のⅡ層上面から掘り込まれており、年代的には中世段階の遺構である可能性が高い。

SE-12

遺構（第32図、図版11）

調査区北部、T-10グリッドに位置する。SD-78と重複し、切り合い関係では、SE-12が古い。平面形態は2.2m×2.26mのほぼ正方形であり、底面も1.8m×1.8mの正方形で、平坦となっている。確認面から底面までの深さは1.1m、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土の堆積状況は自然堆積であり、覆土は焼土粒を含む黒褐色土の上層、粘性が高い黒灰褐色土の中層、黒色～黒褐色土の下層に分けることができる。

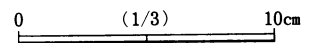
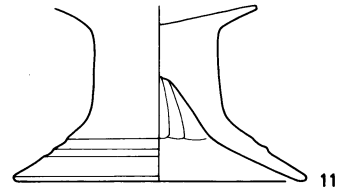
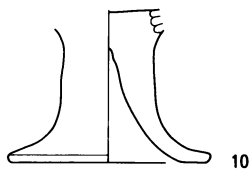
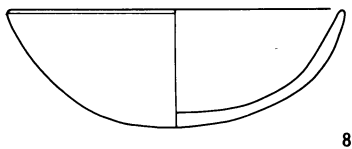
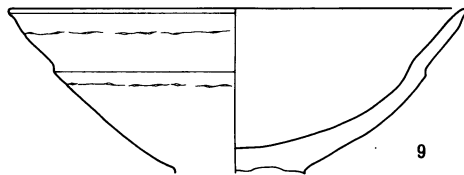
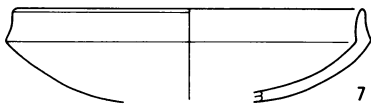
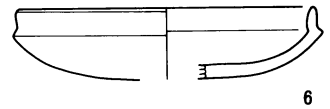
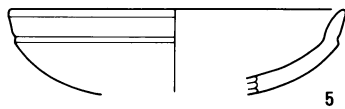
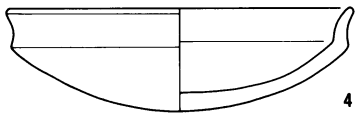
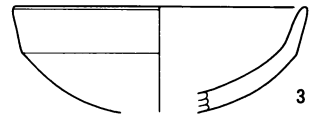
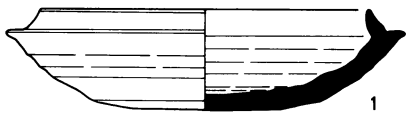
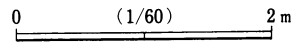
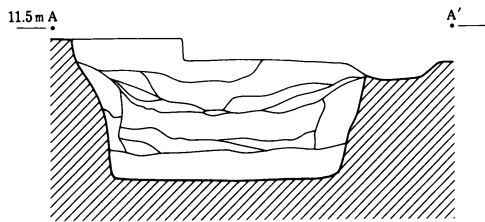
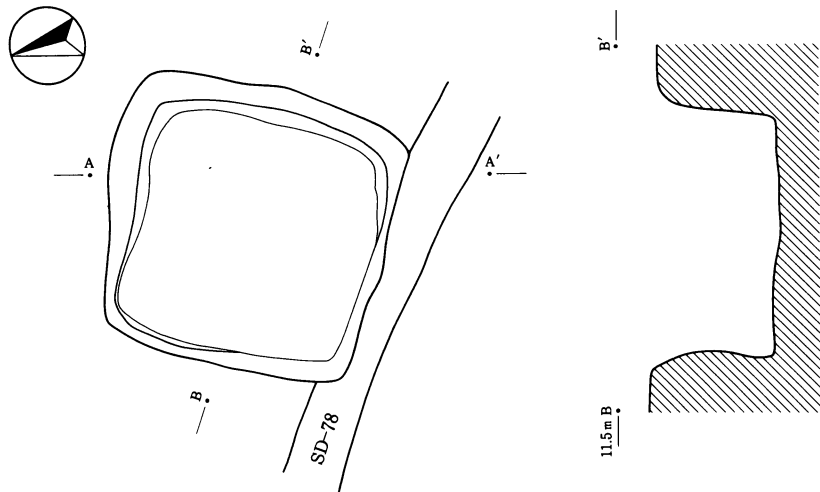
遺物（第32・33図、図版23）

下層付近から木製品がまとめて出土しており、古墳時代後期の土器や陶器が覆土の上層から下層にかけて出土しているが、古墳時代後期の土器は、隣接するSX-1からの混入遺物である。土器・陶器類では、古墳時代後期の土師器と須恵器、奈良・平安時代の灰釉陶器を図示し、木製品では原形が確認できる棒状の木製品のみを図示する。

1・2は、須恵器蓋杯の杯身である。1は、口径13cm、器高4cm、TK43型式からTK209型式の製品であろう。胎土は灰色粒子と砂粒を含み、色調は灰色である。2は、杯身の口縁部片であり、TK43型式の製品であろう。胎土は長石粒、石英粒を含み、色調は灰色である。

3～7は、須恵器蓋杯を模倣した土師器杯である。3～5は蓋の模倣杯であり、口径11.2cm～14.2cm、器高3.3cm～4.1cmである。3・5の内面はヘラ磨き調整となっている。6・7は杯身の模倣杯で、口径11.6cm～13.7cm、内面は丁寧なナデ調整となっている。胎土は、3・7が赤色スコリア粒を含み、そのほかは白色粒子と砂粒を含んでいる。色調は、黄灰色～灰白色である。8は丸底の土師器杯で、口径13.2cm、器高4.7cmである。器面の磨滅が著しく調整技法は明確にできない。胎土は白色粒子を含み、色調は灰白色である。

9～11は、土師器高杯である。9は杯部で、口径17.9cm、内面はヘラ磨き、外面はナデ調整されている。10・11は、脚部で、脚径は、10が8cm、11が11.8cmである。調整技法は、10は明確でないが、11は脚部外



第32図 SE-12と出土遺物

面をヘラ削り、内面をヘラナデとヨコナデ調整している。胎土は、11が赤色スコリア粒を含み、その他は白色粒子を含んでおり、色調は、10が赤褐色、9・11が灰白色である。

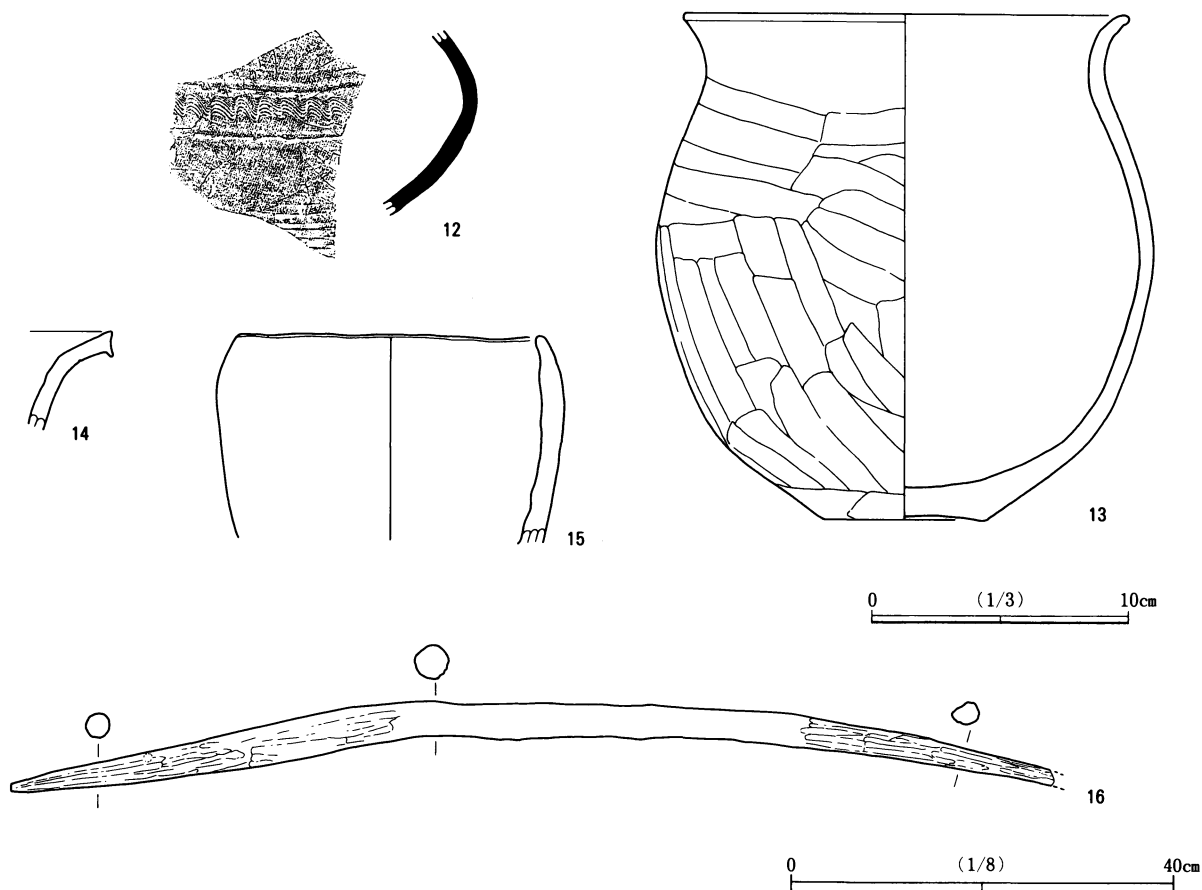
12は、須恵器甗の胴部である。中位には、丁寧な櫛描きの波状文が施されており、底部付近には平行叩き目痕が残される。胎土は白色粒子を含み、色調は暗灰白色である。TK208型式前後の製品であろう。

13は、中型の土師器甗である。口径17.2cm、器高19.8cm、底径6.4cmである。胴部は、ほぼ球形で最大径は19.3cmである。胴部外面はヘラ削り、内面は丁寧なヘラナデ調整となっている。胎土は砂粒を含み、色調は黄灰色である。

14は灰釉陶器の長頸瓶の口縁部片である。外面には暗緑色の灰釉が付着しており、胎土は長石粒を含み、色調は暗灰色である。猿投窯産と考えられ、IG10窯式からIG78窯式前後の製品であろう。

15は、筒状の土師器口縁部片で、口径11.8cm、小型の甑の可能性が考えられる。内面はナデ調整、外面はヘラ削り調整である。胎土は砂粒を含み、色調は黄灰色～黒色である。

16は、棒状の木製品である。全長109.6cm、断面形は中央部分で径3.5cmの円形である。全体は弓状に湾曲しており、細い棒状の原木の両端部を丁寧に削り尖らせている。



第33図 SE-12出土遺物

SE-13

遺構（第34図）

調査区北部、T-11からT-10グリッドにかけて位置する。SD-28・44と重複し、切り合い関係では、SE-13はSD-28よりも古く、SD-44よりも新しい。平面形態は、2.6m×2.7mのほぼ正方形であり、底面も2.3m×2.5mの正方形である。確認面から底面までの深さは1m、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦になっており、北・南・西壁沿いに各1本、東壁沿いに2本の木杭が打ち込まれている。この遺構の上屋構造に関連する可能性が考えられる。

覆土の堆積状況は自然堆積であり、焼土粒子・炭化物を含む灰褐色土の上層、粘性が強い暗灰褐色土の中層、粘性が強く青灰色土ブロックが混入する黒灰色土の下層に分けることができる。また、上層と中層の間には厚さ4cm程度で、炭化物がレンズ状に集中して堆積する層が確認できる。

遺物（第34図、図版23）

覆土中からは、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器・須恵器が多数出土しているが、隣接するSX-1などからの混入品であり、SE-13に直接伴う遺物ではない。

1は須恵器蓋杯の杯身の口縁部片である。TK43型式の製品であろう。胎土は白色粒子、長石粒を含み、色調は緑灰色である。

2～4は土師器杯である。2は丸底の杯で、口径11.0cm、器高4.2cmである。外面はヘラ削り調整、内面には放射状の暗文が施される。3・4は須恵器蓋杯の模倣杯である。ともに蓋の模倣杯であり、口径13.5cm～15cm、器高4cm～4.7cmである。3は内面をナデ調整しており、4は内面をヘラ磨き調整している。また、4は内外面に赤彩を施している。

5・6は、須恵器甕の口縁部片である。口縁部外面を沈線で区画し、二段の櫛描波状文を施している。胎土は長石粒を含み、色調は灰色である。6は、口縁部の中位に凸帯が巡るタイプであり、口縁部の内面には自然釉が確認できる。胎土は、黒色粒子、長石粒を含み、色調は灰白色である。器形・胎土の特徴から、湖西窯産の可能性が考えられる。

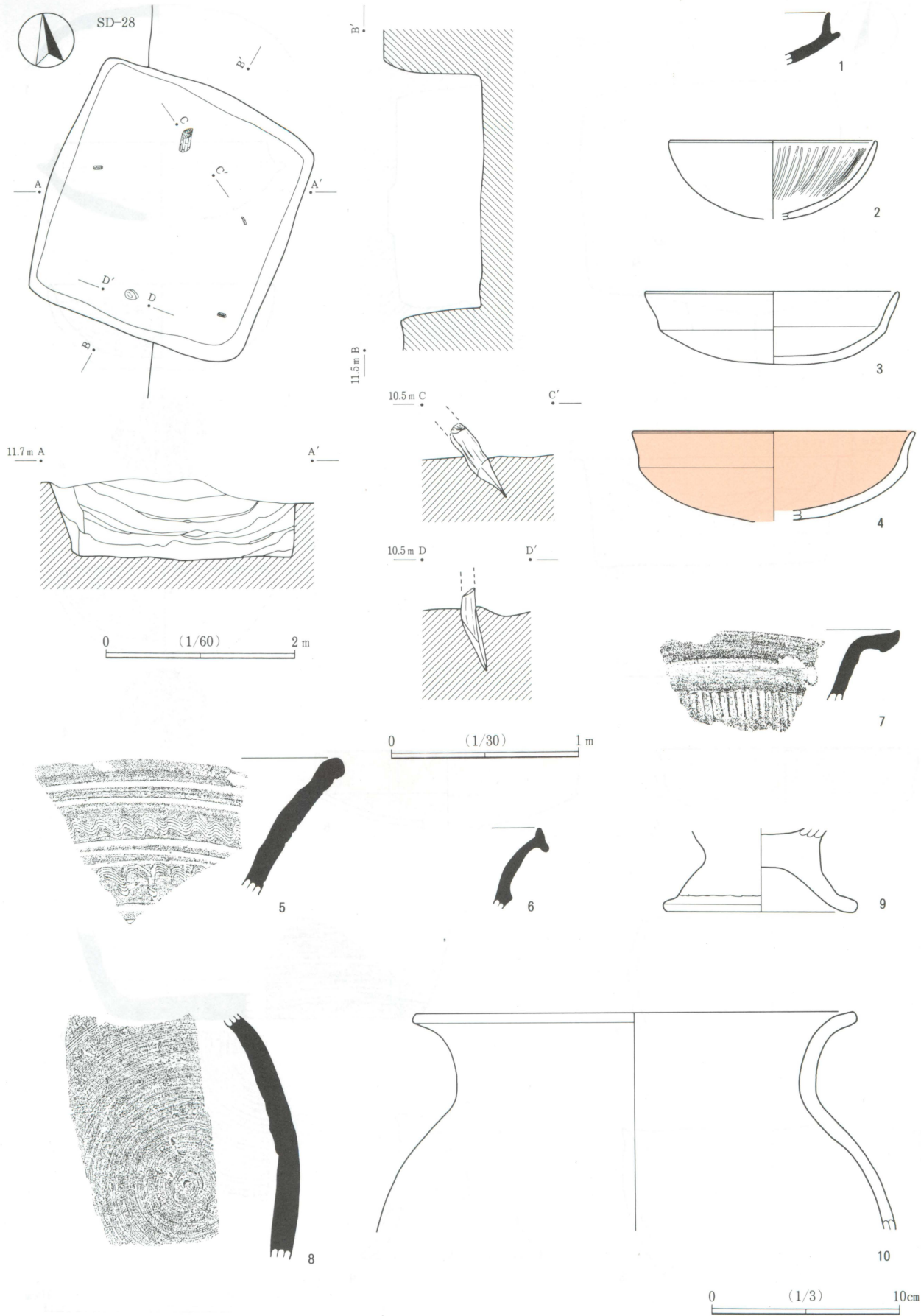
7は、8世紀後半代から9世紀代の須恵器で、甕か平底甕の口縁部片である。胴部外面には平行叩き目痕が残されている。胎土は白色粒子、小石を含み、色調は黒褐色であり、下総産の須恵器である。8は、須恵器提瓶の胴部片であり、外面には回転カキ目調整が施される。胎土は、白色粒子、長石粒を含み、色調は灰色である。

9は、土師器台付甕の脚台部で、脚台部径は10cmである。胎土は小石を多量に含み、全体に火を受けており色調は赤褐色である。10は口径23.4cm、土師器大型甕の口縁部片である。胴部内面はナデ調整、外面はヘラ削り調整である。胎土は白色粒子を含み、色調は橙色～黒色である。

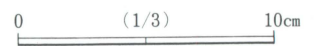
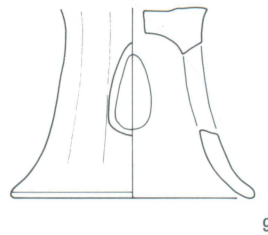
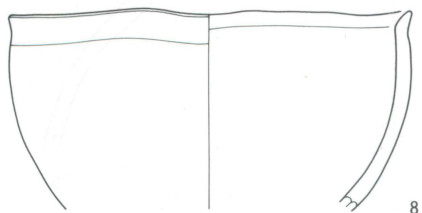
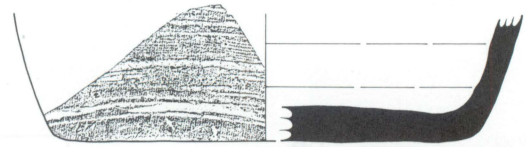
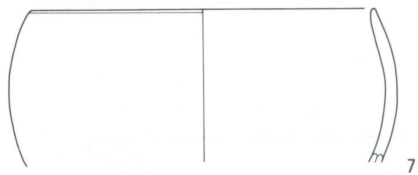
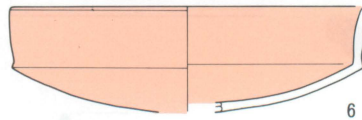
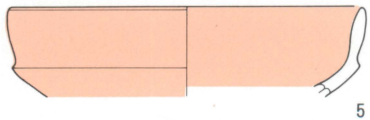
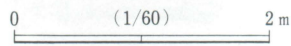
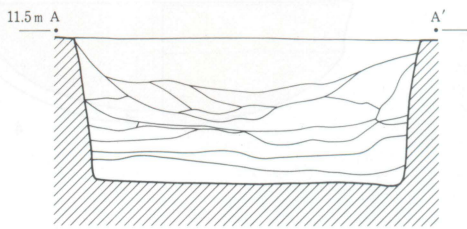
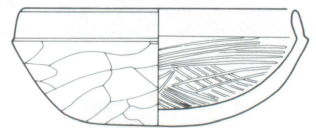
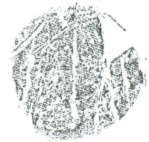
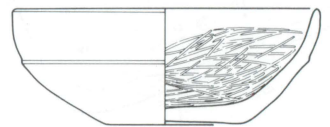
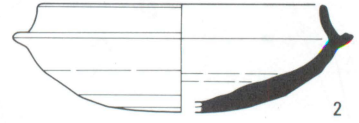
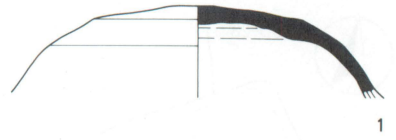
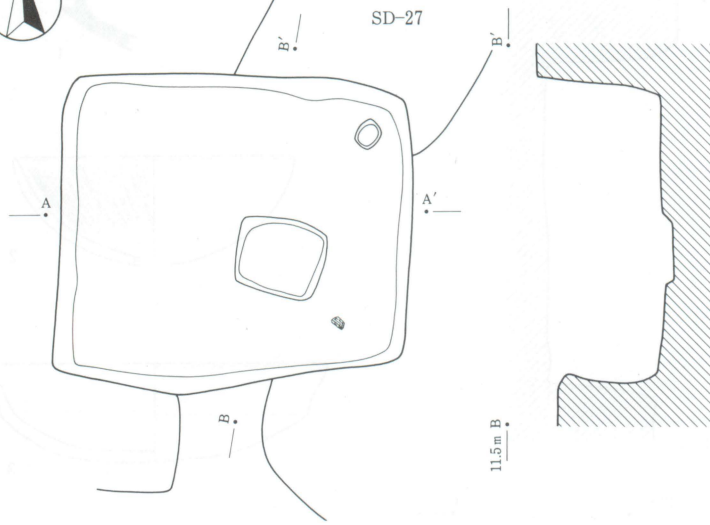
SE-14

遺構（第35図）

調査区北部、T-10からT-11グリッドにかけて位置する。SD-27・39と重複し、切り合い関係ではSE-14が新しい。平面形態は2.5m×2.7mの長方形であり、底面は2.2m×2.5mの長方形である。確認面から底面までの深さは1.14mである。底面は平坦で、底面の中央やや東寄りの部分に60cm×70cmの方形で深さ10cm前後の掘込みがあり、また、南東コーナー部分の底面にも径20cmの円形で深さ5cmほどの浅い



第34図 SE-13と出土遺物



第35図 SE-14と出土遺物

掘込みが存在する。

覆土は、焼土粒を含む暗褐色土の上層、粘性が強く、灰白色土ブロックや焼土・炭化物を含む灰黄褐色～暗灰褐色土の中層、粘性が強く、炭化物や青灰色土ブロックを含む黒褐色～暗灰褐色土の下層に分けることができる。

遺物（第35図，図版23）

古墳時代後期の土器がまとまって出土しているが、SE-13と同様、隣接するSX-1などからの混入品であり、直接SE-14に伴う遺物ではない。

1・2は須恵器蓋杯である。1は蓋の頂部付近の破片で、頂部には回転ヘラ削り調整が行われている。胎土は白色粒子、長石粒を含み、色調は灰色である。2は杯身で、口径11cm、器高4.2cmである。底部に回転ヘラ削り調整が行われている。

3～6は、須恵器蓋杯を模倣した土師器杯である。3・4は蓋と杯身の模倣であるが、底部をヘラ削りで丸く仕上げずに平底とし、木葉痕を残すタイプである。口径10.8cm～11.8cm、器高4.5cm、底径4.5cm～5.1cmである。調整技法では、ともに内面をヘラ磨きしており共通する。胎土は、3は砂粒を含み、4は白色粒子、白色針状物質を含む。色調はともに灰黄色～黒色である。5・6は蓋の模倣杯であり、口径14cmで、内外面は赤彩される。胎土は、砂粒、赤色スコリア粒を含み、色調は灰白色～黄橙色である。

7・8は土師器碗である。7は口縁部が内彎しており、口径13.6cmである。8は口縁部が外側に屈曲するタイプで、口径15.8cmである。ともに、器面の磨滅が著しく、調整技法は明確にできない。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は黄橙色～黒色である。

9は土師器高杯の脚部で、脚部径9.4cmである。脚部には四方に三角形の透孔が開けられている。脚部外面はヘラ削り調整、端部はヨコナデ調整となっている。胎土は砂粒を含み、色調は黄灰色である。

10は、須恵器横瓶の胴部片であり、外面は回転カキ目調整されている。胎土は白色粒と長石粒を含み、色調は暗青灰色である。

SE-15

遺構（第36図）

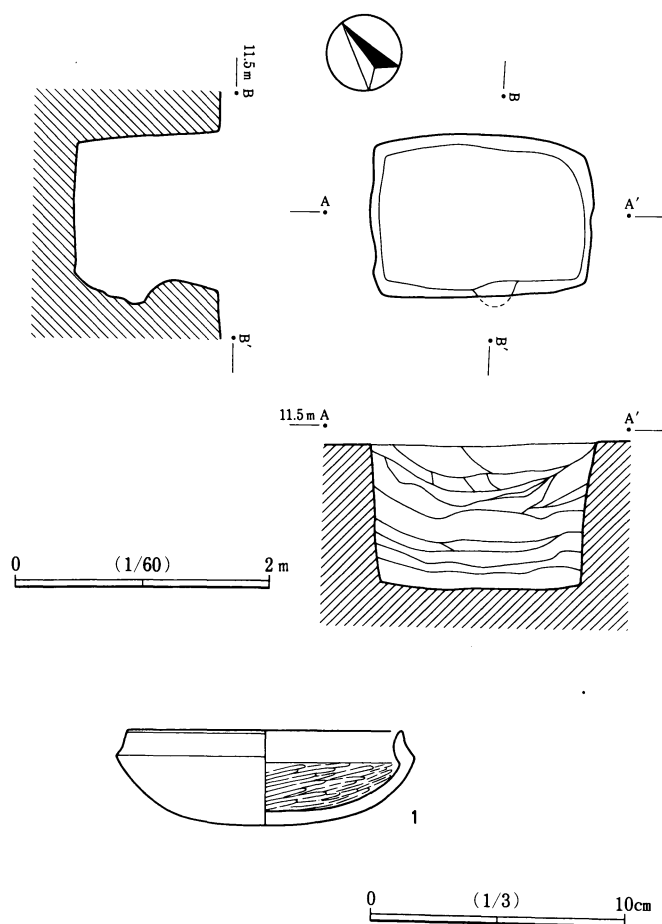
調査区北部、T-13グリッドに位置する。平面形態は、1.25m×1.7mの長方形で、底面は1.1m×1.6mの長方形である。確認面から底面までの深さは1.1mで、壁はほぼ垂直に立ち上がっており、南壁の下部には部分的な掘込みが作られている。

覆土は、焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土を主体とする上層、粘性が強く灰白色土ブロックを含む明灰褐色の中層、粘性が強く炭化物粒を含む黒灰褐色土の下層に分けることができる。

遺物（第36図，図版23）

古墳時代後期の土師器が出土しているが、隣接するSX-1からの混入品であり、SE-15に伴う遺物ではない。

1は、須恵器蓋杯を模倣した土師器杯である。杯身の模倣杯で、口径11cm、器高3.6cmである。内面はヘラ磨き調整となっている。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は黄橙色である。



第36図 SE-15と出土遺物

5 土坑

SK-1

遺構（第37図）

調査区南部，I-4グリッドに位置する。平面形態は，1.5m×1.2mの長方形であり，確認面から底面までの深さは36cm，底面は平坦である。覆土はレンズ状に堆積した自然堆積で，焼土粒や土器片を含む黒灰色土の上層，壁際に堆積した暗灰色土の下層に分けることができる。

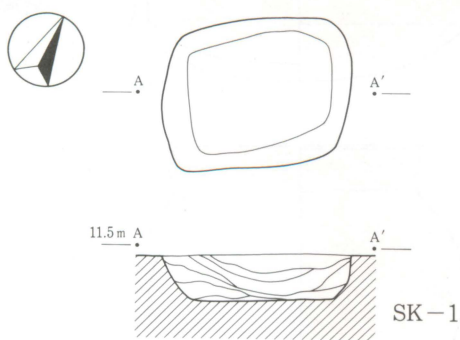
遺物（第37図，図版23）

上層を中心に古墳時代後期の土器が出土している。1は，須恵器蓋杯を模倣した土師器杯である。口径12.1cm，器高4.9cmである。内面はヘラ磨き調整されており，内外面には赤彩が施される。胎土は赤色スコリア粒を含み，色調は黄橙色である。2は土師器甕で，口径21.4cmである。内面は斜め方向のヘラナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒を含み，色調は灰黄褐色である。

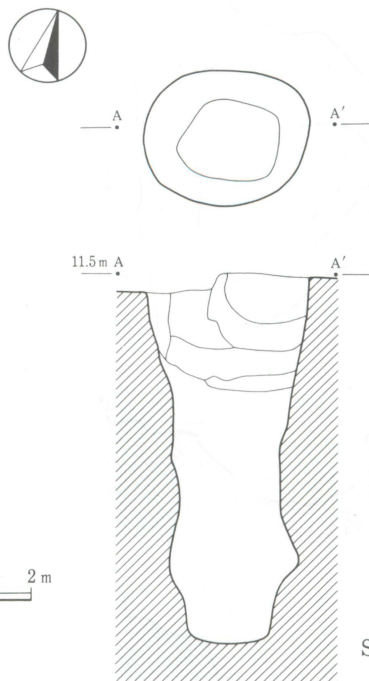
SK-3

遺構（第38図）

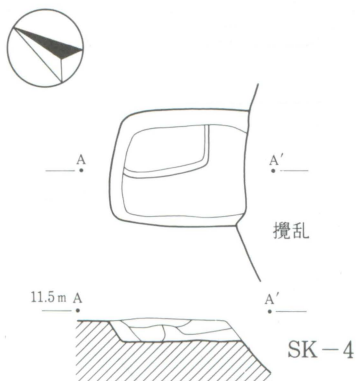
調査区南部，E-10グリッドに位置する。SD-4と重複し，切り合い関係ではSK-3が古い。平面



SK-1

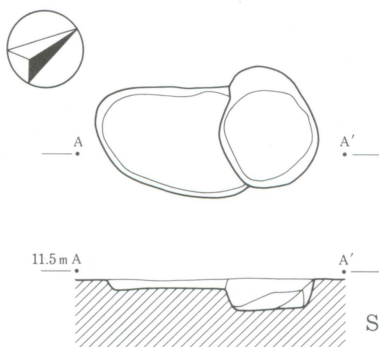


SK-5

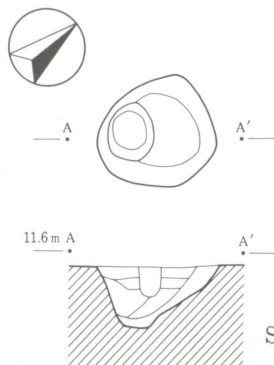


SK-4

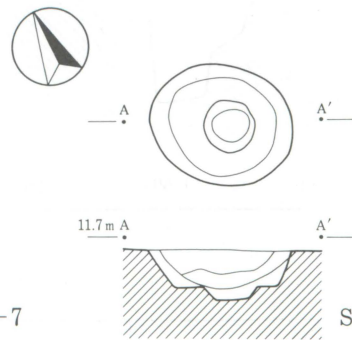
0 (1/60) 2 m



SK-6

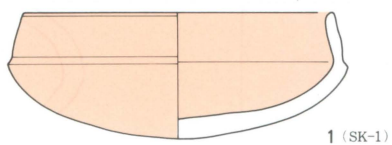


SK-7



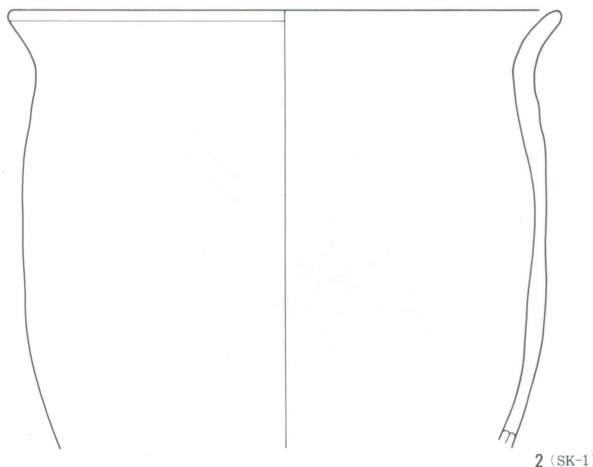
SK-8

0 (1/60) 2 m



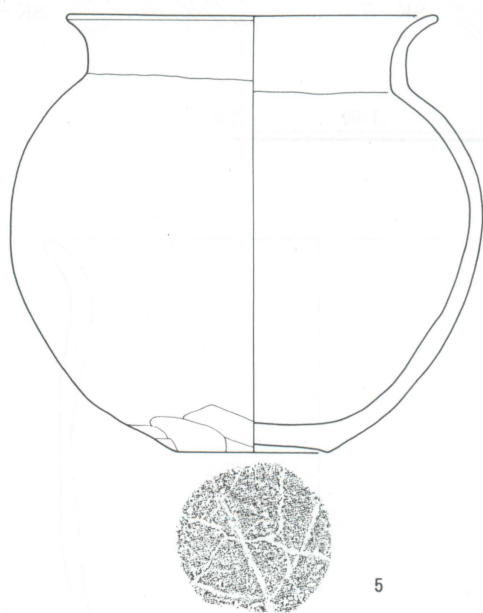
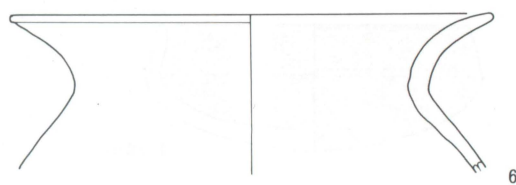
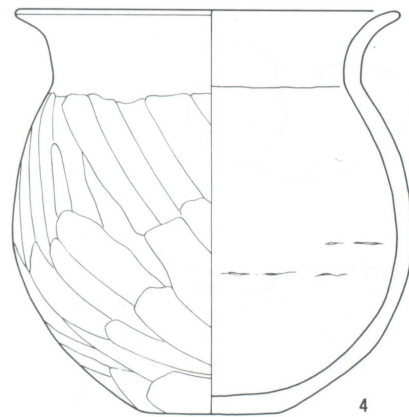
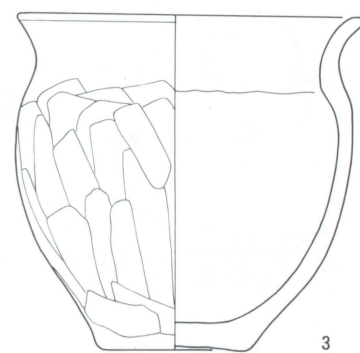
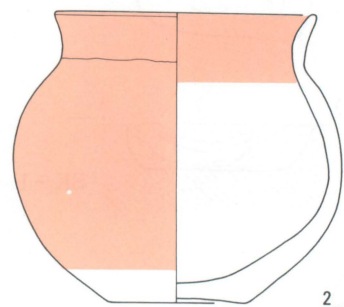
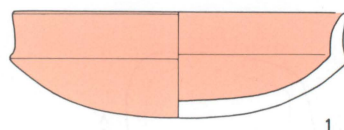
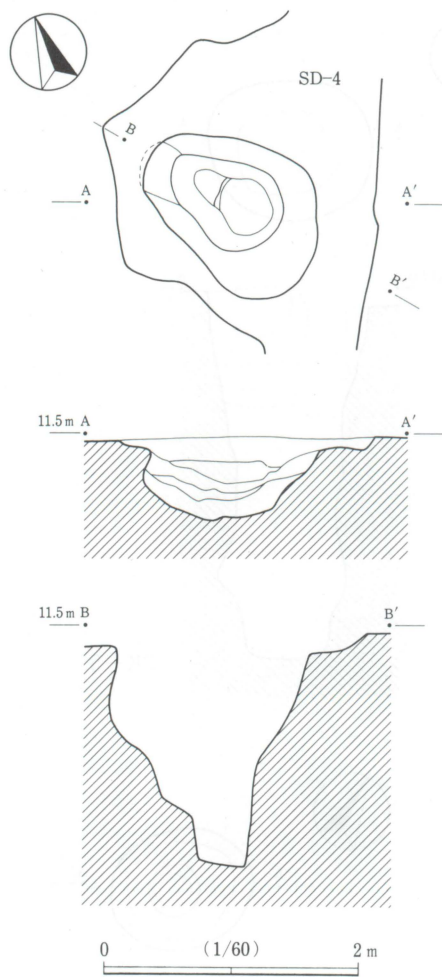
1 (SK-1)

0 (1/3) 10cm

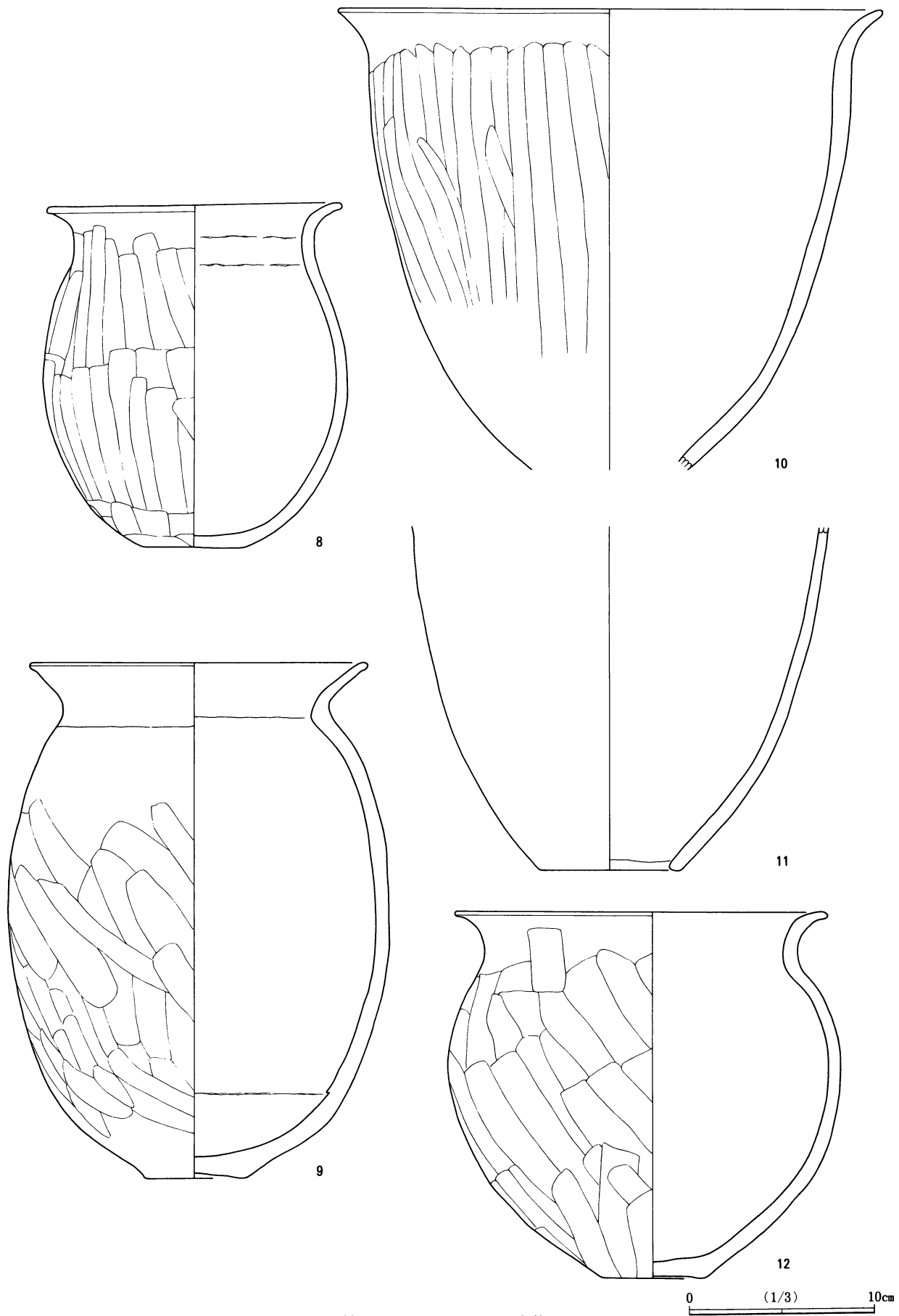


2 (SK-1)

第37図 SK-1・4・5・6・7・8と出土遺物



第38図 SK-3と出土遺物



第39图 SK-3出土遺物

形態は、長径1.5m、短径1mの歪んだ楕円形であり、底面は径40cmの円形である。確認面から底面までの深さは1.8mで、断面形は漏斗状である。

覆土の堆積状況は、レンズ状の自然堆積であり、炭化物粒と土器片を含む暗褐色土の上層、グライ化した青灰色砂質土の下層に分けることができる。

なお、この遺構は土坑として調査しているが、遺構の形態や覆土の状況により、井戸である可能性も考えられる。

遺物（第38・39図、図版23・24）

上層を中心に古墳時代後期の土器が多数出土しており、特に土師器甕が多い点に特徴がある。

1は土師器杯で、須恵器蓋杯の模倣杯である。口径13cm、器高4.1cmであり、内外面は赤彩される。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は黄灰褐色である。

2は土師器の小型壺である。口径10cm、器高11.2cm、底径5.2cm、胴部内面はヘラナデ調整、外面はヘラ磨き調整で、口縁部から胴部の外面と口縁部の内面には赤彩が施される。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は明褐灰色である。

3～9は土師器甕である。3～5は小型甕で、口径は13.5cm～15cm、器高13.1cm～17.2cm、底径5.6cm～6cmである。調整技法は、3・4は胴部内面がヘラナデ、外面がヘラ削りであり、5は胴部内外面がヘラナデとなっている。また、5の底部には木葉痕が残されている。胎土は3・4が共通し、赤色スコリア粒を含み、色調は灰白色～黄橙色である。5は小石を多く含み、色調は黄灰色～黒色である。

6・7は、甕の口縁部片で、口径18.8cm～23cmである。8は中型の甕であり、口径15.8cm、器高18.4cm、底径5.4cmである。調整技法は小型甕と共通で、胎土は砂粒を含み、色調は黄灰色～黒色である。9は長胴甕で、口径18.3cm、器高27.8cm、底径5.2cmである。調整技法は小型甕と類似するが、外面の胴部下端を、ヘラ削りの後にヘラナデ調整している。胎土は小石や砂粒を含み、色調は橙色～黒色である。12は広口の甕で、口径19.8cm、器高20cm、底径5.4cmである。調整技法は小型甕と共通する。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は灰褐色～黒色である。内面には内容物のものと思われる付着物が部分的に認められる。

10・11は土師器甕である。10は底部付近を欠損するが、口径29.4cm、現存器高24.8cmである。胴部内面はヘラ磨き、外面はヘラ削り調整である。11は、口縁部付近を欠損し、現存器高18.5cm、底部円孔径6.4cmである。胴部外面をヘラ削り調整している。胎土は10・11ともに赤色スコリア粒を含み、色調は10が黄灰色、11が灰白色～黒色である。

SK-4

遺構（第37図）

調査区南部、G-3からH-3グリッドにかけて位置し、南側が攪乱により失われている。平面形態は、90cm×1m以上の長方形で、確認面から底面までの深さは15cmである。底面の南東コーナー部分には深さ4cm前後の落込みがある。

覆土は、炭化物と土器細片を含む暗褐色土の上層と黄白色土の下層に分けることができる。

遺物

土器細片が、わずかに出土しているものの、実測可能な遺物はない。

SK-5

遺構（第37図，図版11）

調査区南部，H-6グリッドに位置する。SK-10と重複し，切り合い関係ではSK-5が古い。平面形態は，長径1.3m，短径1.1mの楕円形で，底面は60cm×80cmの歪んだ方形である。確認面から底面までの深さは2.9mである。

覆土は，土器細片と炭化物粒を含む暗褐色土の上層と黄白色粘土ブロックを含む黒褐色土の下層に分けることができる。なお，この遺構は土坑として調査しているが，遺構の形態や覆土の状況により，井戸である可能性も考えられる。

遺物

土器細片が出土しているが，実測できる個体は存在しない。

SK-6

遺構（第37図）

調査区南部，H-4グリッドに位置する。平面形態は，径92cmの円形土坑の南西側に長径1mほどの楕円形土坑が接合した形であり，円形土坑部分は深さ20cm，楕円形土坑部分は深さ8cmほどである。

覆土は，炭化物と土器細片を含む暗褐色土が主体である。

遺物

土器細片が出土しているが，実測できる個体は存在しない。

SK-7

遺構（第37図）

H-4グリッド，SK-6の北東に隣接して位置する。平面形態は，長径1m，短径90cmの楕円形である。南壁際の底面には径40cmの円形の掘込みがあり，確認面から掘込み底面までの深さは50cmである。

覆土は，炭化物粒を含んだ褐色土が主体である。

遺物

土器細片が出土しているが，実測できる個体は存在しない。

SK-8

遺構（第37図）

調査区南部，G-5グリッドに位置する。平面形態は，長径1.1m，短径94cmの楕円形で，確認面から底面までの深さは40cmである。底面中央には径40cmの円形で，深さ10cmの掘込みが存在する。

覆土はレンズ状に堆積する自然堆積で，炭化物粒と土器細片を含む暗褐色土が主体である。

遺物

土器細片が出土しているが，実測できる個体は存在しない。

SK-9

遺構（第40図，図版11）

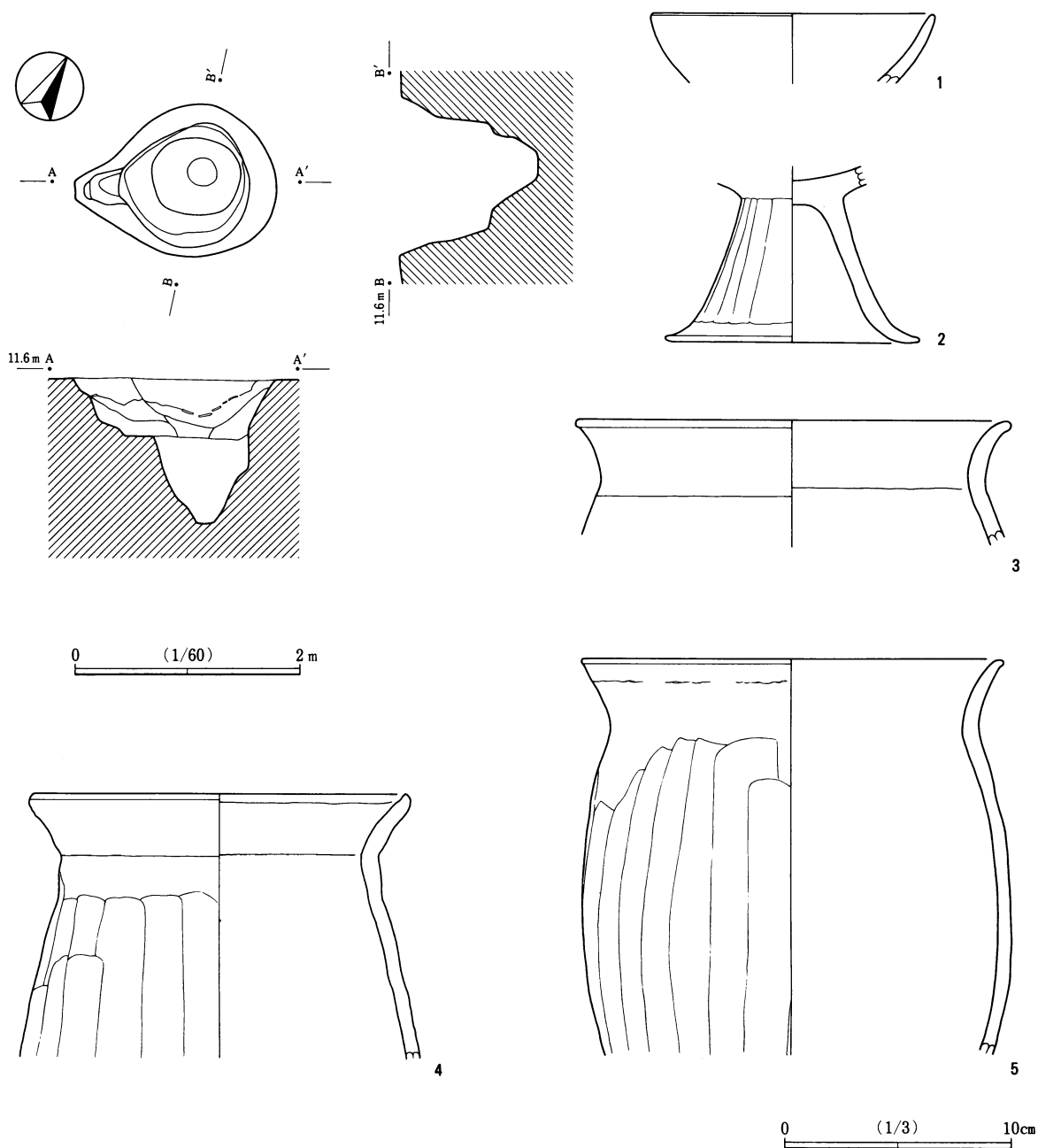
調査区中央部、Z-9グリッドに位置する。平面形態は1.4mの円形で、南西部分に幅40cm、長さ40cm程度の張出し部が作られている。底面は径25cmの円形で、確認面から底面までの深さは1.3mである。断面形は漏斗状を呈する。

覆土の堆積状況はレンズ状堆積で、自然堆積である。焼土と炭化物が含まれる黒褐色土の上層、粘性が強い黒灰色土の下層に分けることができる。

遺物（第40図）

古墳時代後期の土器が、上層からまとまって出土している。

1は、口径12.5cm、丸底の土師器杯である。器面の磨滅が著しく、調整技法は不明である。胎土は赤色



第40図 SK-9と出土遺物

スコリア粒を含み、色調は黄褐色～暗褐色である。

2は土師器高杯である。杯部の一部と脚部であり、現存高7.7cm、脚部径11cmである。杯部内面はヘラ磨き調整、脚部外面はヘラ削り調整となっている。胎土は赤色スコリア粒と砂粒を含み、色調は灰白色である。

3～5は、土師器長胴甕で、口径は16.6cm～19.2cmである。調整技法は、いずれも胴部内面をヘラナデ、外面をヘラ削りとしている。3の胎土は砂粒を含み、色調は赤褐色、4は赤色スコリア粒と砂粒を多量に含み、色調は橙色～黒褐色である。5の胎土は小石を含み、色調は黄橙色～灰白色である。

SK-10

遺構（第41図）

調査区南部、G-6からH-6グリッドにかけて位置する。SK-5と重複し、SK-10が新しい。平面形態は、1.1m×1.6mの長方形である。底面は南側半分が深く掘り込まれており、北半分はテラス状になっている。確認面からの深さは、南側で70cm、北側で35cmである。

覆土の堆積状況は、北側テラス部分が最初に堆積し、粘性が強く炭化物粒を含む灰色土が主体となっており、南側部分の覆土は青灰色砂質土が主体となっている。

遺物

土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-11

遺構（第41図）

調査区南部、J-6グリッドに位置する。平面形態は50cm×90cmの長方形で、確認面から底面までの深さは20cmである。覆土は、炭化物と土器細片を含む暗褐色土が主体となっている。

遺物

土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-12

遺構（第41図）

調査区南部、G-7グリッドに位置する。遺構の北側は攪乱により失われるが、確認している範囲の平面形態は、径1.3m以上の円形か楕円形である。確認面からの深さは44cmである。覆土は、炭化物と土器細片を含む暗褐色土である。

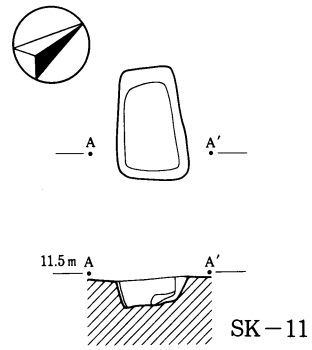
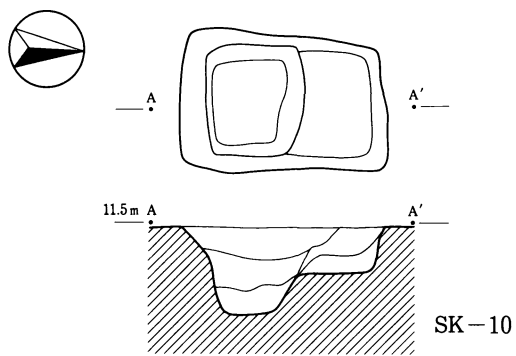
遺物

土器細片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

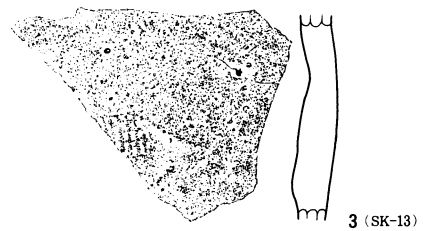
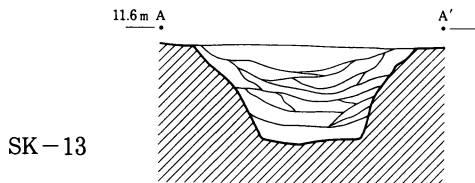
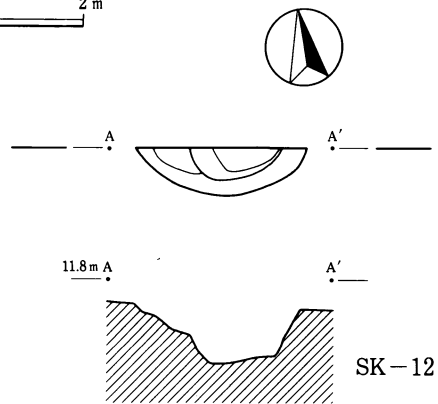
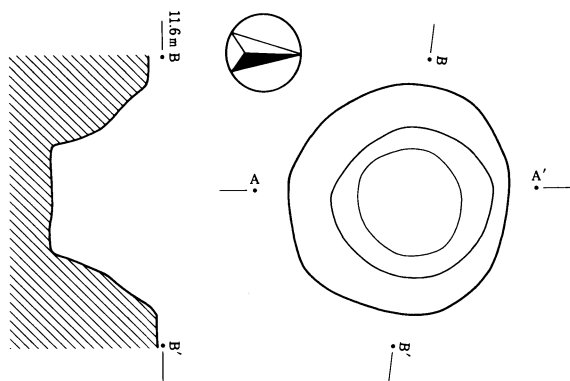
SK-13

遺構（第41図）

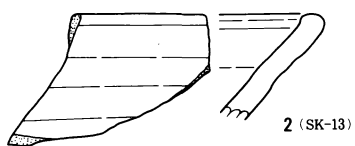
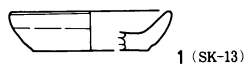
調査区北部、U-10からV-11グリッドにかけて位置する。SD-55と重複しており、切り合い関係ではSK-13が新しい。平面形は径1.8mの比較的整った円形であり、底面は径80cmの円形、断面形は逆台



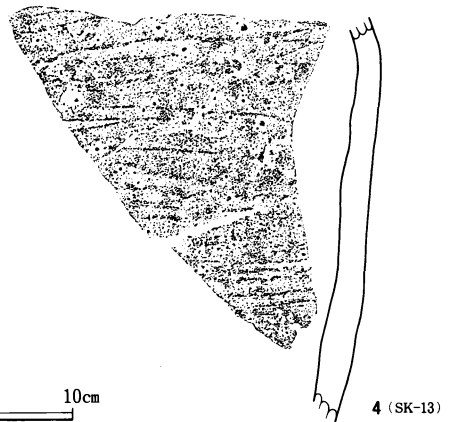
0 (1/60) 2 m



0 (1/60) 2 m



0 (1/3) 10 cm



第41図 SK-10・11・12・13と出土遺物

形を呈する。確認面から底面までの深さは80cmである。

覆土の堆積状況は自然堆積で、上層が灰褐色～暗褐色土、中層が灰色～暗灰褐色土、下層が焼土粒や黄褐色粘土粒を含む黄灰色～黒灰色土である。

遺物（第41図）

中世の遺物が出土している。1は、ロクロ成形の土師質土器小皿である。口径6.2cm、器高1.5cm、底径4.6cmである。胎土は赤色スコリア粒と砂粒を含み、色調は明黄橙色である。

2～4は常滑窯の製品である。2は捏鉢の口縁部片であり、常滑窯編年5型式の製品である。胎土は長石粒を含み、色調は灰色である。3・4は同一個体の甕胴部片である。3は肩部付近の破片で、外面には格子状の叩き目痕が残り、自然釉が付着し、内面には粘土紐の接合痕が認められる。4は3より下部の胴部片であり、内面は丁寧にはヨコナデが施されている。胎土は大粒の長石粒を含み、色調は灰褐色である。

SK-14

遺構（第42図、図版12）

調査区中央部、X-11からY-11グリッドにかけて位置する。SD-28と重複し、切り合い関係ではSK-14が古い。平面形態は長径1.8m、短径1.8mの楕円形で、確認面から底面までの深さは60cmである。断面形は逆角錐台形を呈し、底面は長径1.7mの楕円形である。

覆土の堆積状況は自然堆積で、上層が灰白色粘土粒を含む灰褐色土、中層が焼土粒や灰白色粘土ブロックを含む灰褐色土、下層は粘性の強い暗褐色土である。

遺物（第42図）

中世遺物が出土している。4は、常滑窯産の甕底部片である。底径16cmで、外面全体に煤が厚く付着しており、火に掛けられた可能性が高い。胎土は、長石粒と小石を含み、色調は暗褐色である。

SK-15

遺構（第42図）

調査区中央部のやや東寄り、X-9から10グリッドにかけて位置する。平面形態は長径2m、短径1.3mの楕円形で、底面は船底状となっている。確認面から底面までの深さは30cmである。

覆土の堆積状況は自然堆積で、上層が灰白色粘土粒子を含む灰褐色土、下層は黒灰色～灰白色粘土粒を含む灰褐色土である。

遺物

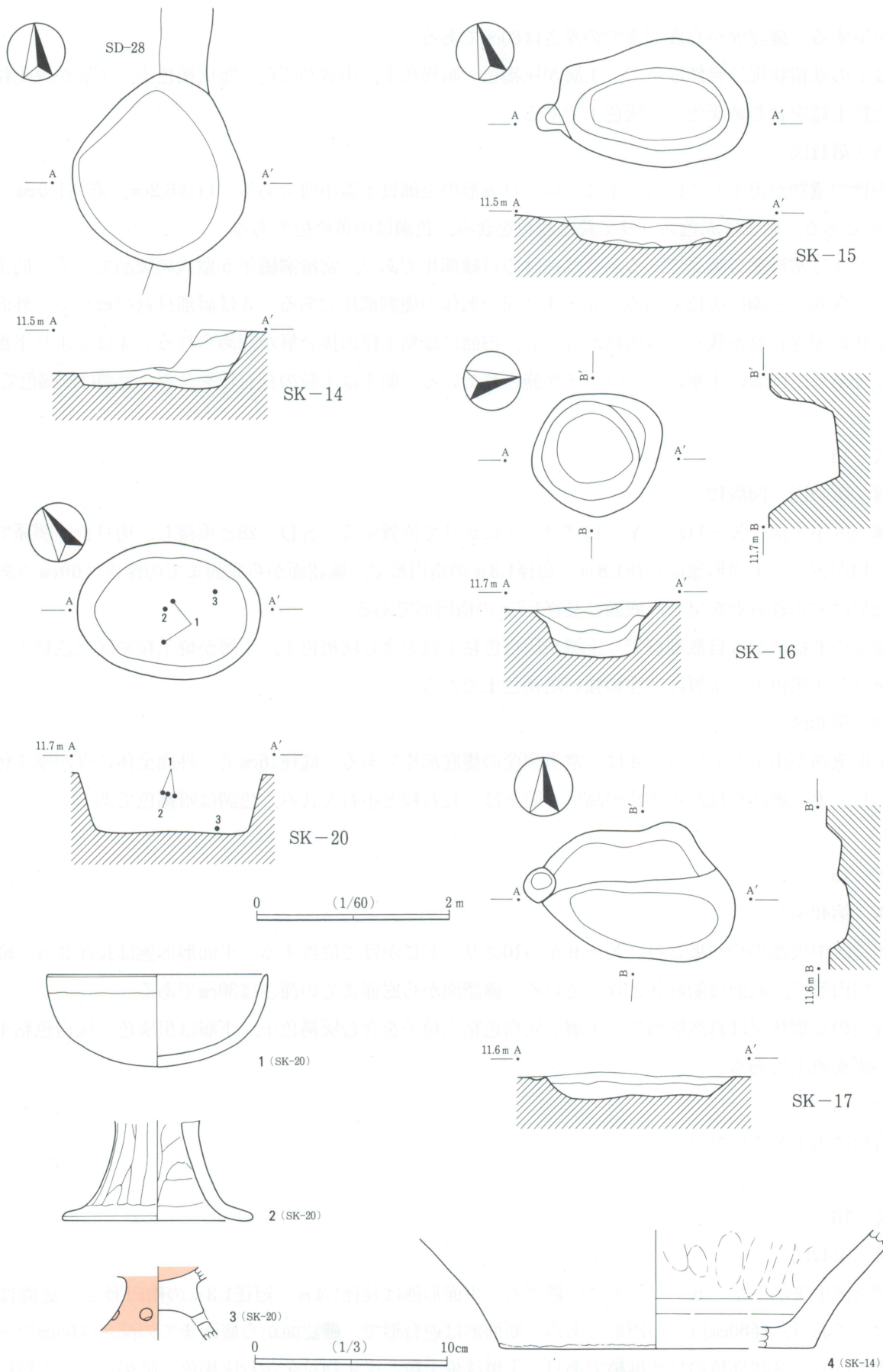
遺物は出土していない。

SK-16

遺構（第42図）

調査区中央部、Y-8グリッドに位置する。平面形態は長径1.4m、短径1.3mの楕円形で、底面は平坦となっており、径80cmほどの円形である。断面形は逆台形で、確認面から底面までの深さは65cmである。

覆土はレンズ状堆積の自然堆積であり、上層は焼土粒と炭化物粒を含む灰褐色～暗褐色土、下層は粘性が強い黒褐色～黒色土である。



第42図 SK-14・15・16・17・20と出土遺物

遺物

土器片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-17

遺構（第42図）

調査区中央部、Z-9グリッドに位置する。平面形態は長径2.0m、短径1.3mの楕円形で、底面は船底型を呈し、北側にテラス状の掘込みをもつ。確認面から底面までの深さは20cm、テラス部分の深さは15cmである。

覆土は、上層が焼土粒と炭化物粒を含む暗褐色土、下層は灰褐色土である。

遺物

土器片が、わずかに出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-20

遺構（第42図）

調査区中央部、Y-9からY-10グリッドにかけて位置する。平面形態は、長径1.9m、短径1.4mの楕円形で、底面は平坦で長径1.55mの楕円形である。断面形は逆台形で、確認面から底面までの深さは60cmである。

遺物（第42図）

上層で古墳時代後期の土器が、床面で古墳時代前期の土器が出土している。

1・2は古墳時代後期の土器である。1は丸底の土師器杯で、口径11.2cm、器高4.7cmである。器面の磨滅が著しく、調整技法は明確にできない。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は明黄褐色～明赤褐色である。2は高杯脚部で、脚部径は9.6cmである。胎土は赤色スコリア粒を含み、黄橙色～黒褐色である。

3は古墳時代前期の器台である。脚孔4孔である。器受部内面と脚部外面はヘラ磨き調整され、赤彩が施される。

SK-21

遺構（第43図）

調査区中央部、B-7グリッドに位置する。平面形態は2個の円形土坑が繋がった形であり、長軸2m、短軸1.4mである。底面は船底状となっており、確認面から底面までの深さは25cmである。

覆土は焼土粒を含む暗灰褐色土である。

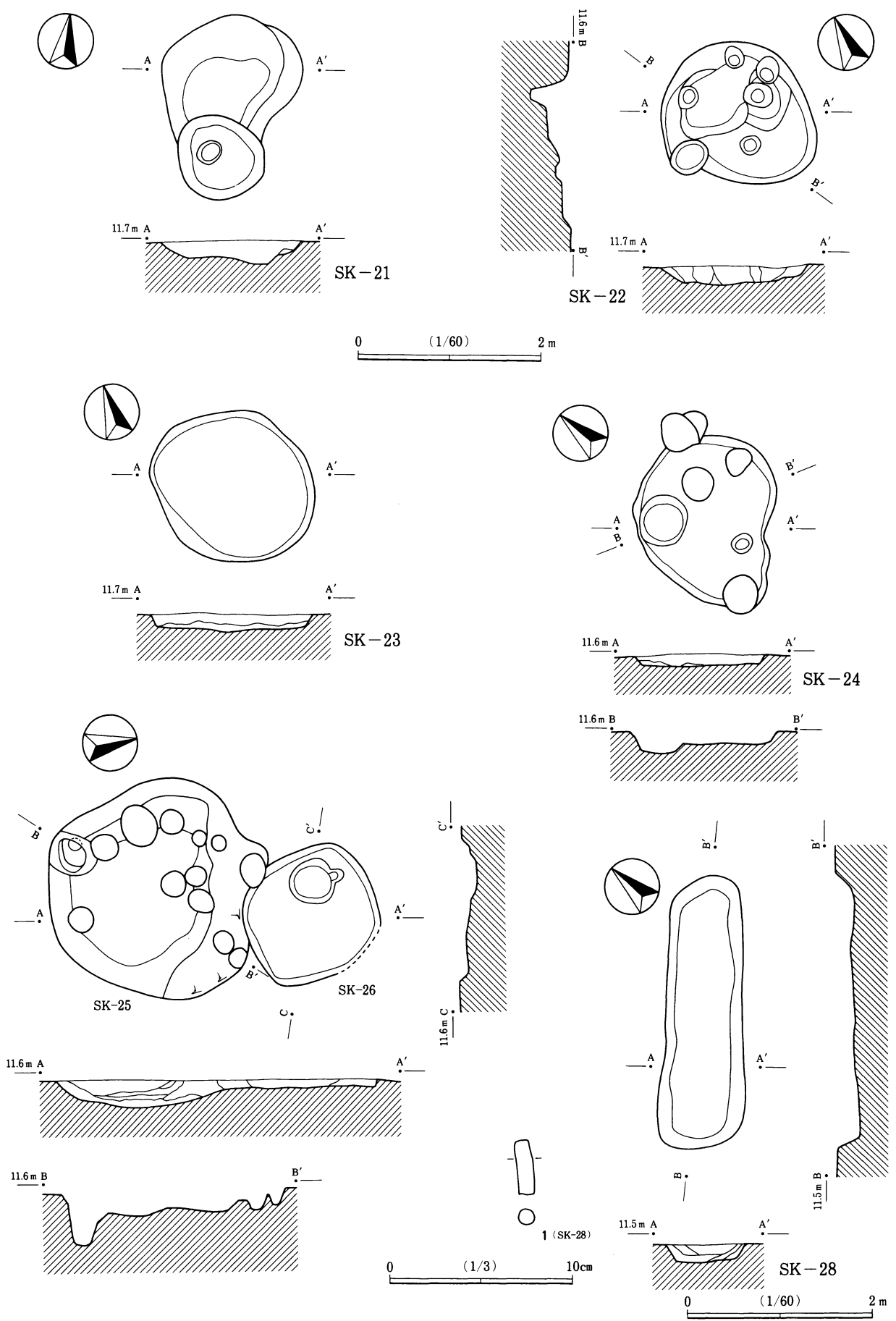
遺物

土器片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-22

遺構（第43図）

調査区中央部、V-8からV-9グリッドにかけて位置する。6個のピットと重複し、切り合い関係ではSK-22が古い。平面形態は、長径1.75m、短径1.5mの楕円形で、底面は船底状となっている。確認



第43図 SK-21・22・23・24・25・26・28と出土遺物

面から底面までの深さは20cmである。

覆土は、灰白色土粒を含む暗褐色土が主体である。

遺物

土器片は出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-23

遺構（第43図）

調査区中央部、V-7からW-8グリッドにかけて位置する。平面形態は長径1.8m、短径1.6mの楕円形で、底面は平坦であり、確認面から底面までの深さは10cmである。

覆土は、上層が暗灰褐色土、下層は灰褐色土である。

遺物

遺物は出土していない。

SK-24

遺構（第43図）

調査区中央部、W-8グリッドに位置する。4個のピットと重複し、切り合い関係ではSK-24が古い。平面形態は、長径2m、短径1.6mの歪んだ楕円形であり、底面は平坦で、確認面から底面までの深さは12cmである。また底面には、北西の壁際に径50cm、深さ12cmの円形の掘込みがあり、南西の壁際には径20cm、深さ10cm程度の円形の掘込みが存在する。

覆土は、焼土ブロックを含む暗褐色土で、北西壁際の円形の掘込み内には、白色土とともに焼土ブロック、炭化物が集中していた。

遺物

土器片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-25

遺構（第43図）

調査区中央部、V-7グリッドに位置する。12個のピット及びSK-26と重複し、切り合い関係ではSK-25が古い。平面形態は径2.3mほどの歪んだ円形であり、底面は船底状を呈する。確認面から底面までの深さは30cmである。また、南壁部分には径30cm、深さ40cmのピットが掘られている。

覆土はレンズ状の自然堆積であり、暗褐色土の上層、粘性が強い黒褐色土の中層、暗褐色土の下層に分けられ、いずれの層にも、焼土粒、炭化物粒、白色土粒を含んでいる。

遺物

土師器と須恵器片と瓦片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-26

遺構（第43図）

調査区中央部、V-7グリッドに位置する。1個のピット及びSK-25と重複し、切り合い関係ではピッ

トよりも古く、SK-25よりも新しい。平面形態は1.45m四方の隅丸方形で、確認面から底面までの深さは10cmである。

覆土は、焼土ブロック、灰白色土ブロックを含む黒灰色土と灰褐色土が主体を占める。

遺物

土器片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SK-28

遺構（第43図）

調査区南部、E-2からE-3グリッドにかけて位置する。平面形態は、2.9m×95cmの歪んだ隅丸長方形である。底面は船底状を呈しており、確認面から底面までの深さは20cmである。

覆土はレンズ状の自然堆積で、焼土粒を含む黒褐色土の上層と灰白色土ブロックを含む灰褐色土の下層に分けることができる。

遺物（第43図）

棒状の土製品が出土している。1が棒状土製品である。長さ3cm、断面形は径9mmの円形である。焼成は酸化焰焼成で、胎土は白色粒子を含み、色調は明黄褐色～黒褐色である。

6 古墳

SD-29・30

遺構（第44図、図版12）

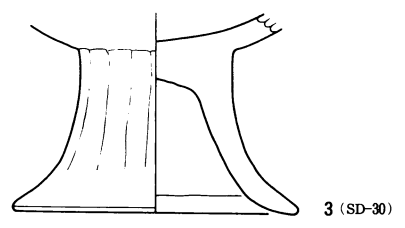
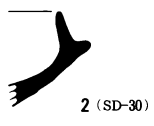
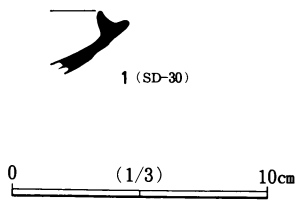
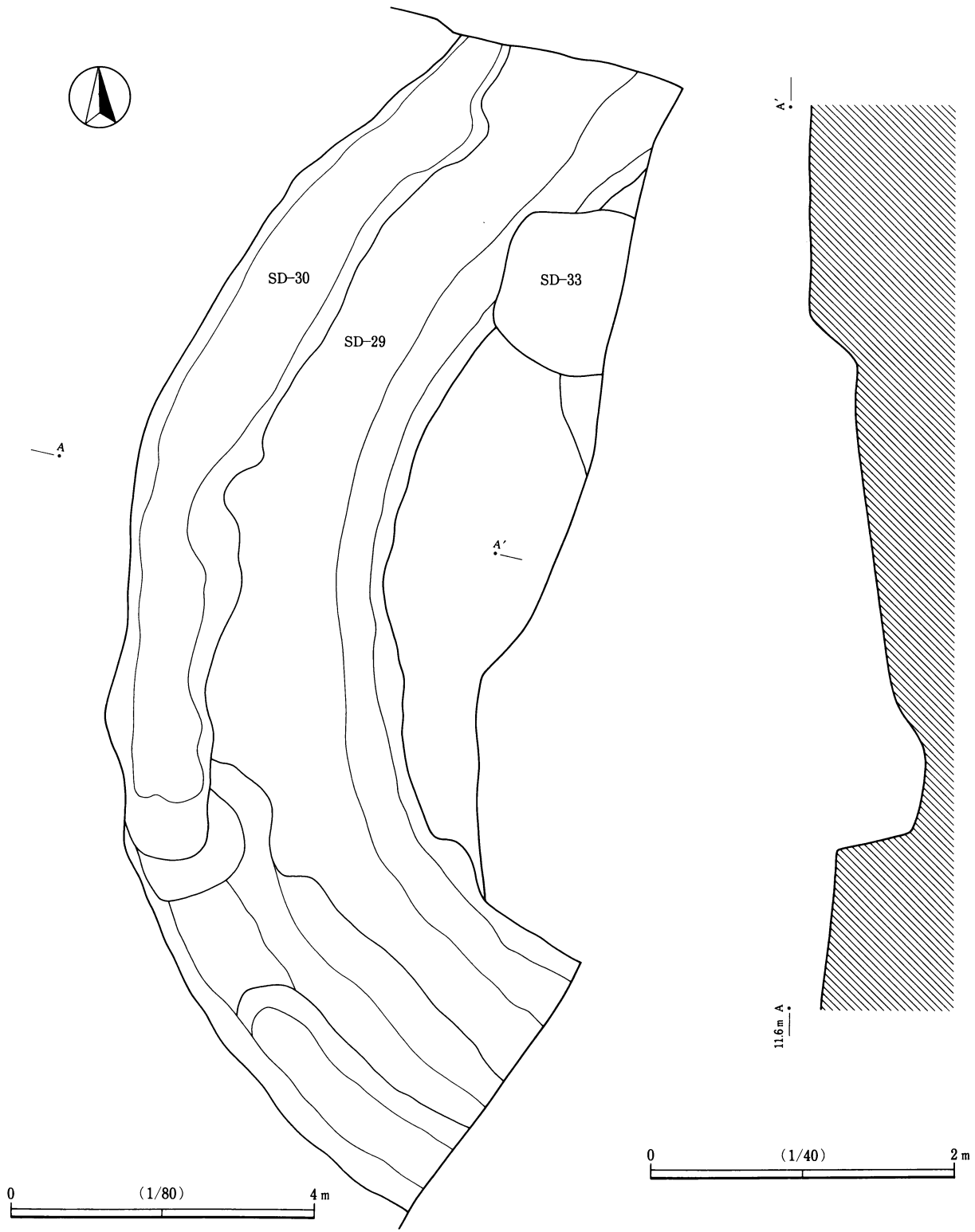
当初、2条の溝として調査したが、完掘した段階で古墳の周溝と判明した遺構である。調査区北部、Q-13からT-14グリッドにかけて位置する。SD-33と重複し、切り合い関係ではSD-29・30が古い。墳丘側にSD-29、外側にSD-30がめぐっている。2条の溝を合わせた周溝幅は、3.4m～4m、深さは墳丘側のSD-29で30cm前後、外側のSD-30で60cm前後となり、周溝内は墳丘側が浅く、外側が深い形となっている。周溝の大部分が調査区外に出ってしまうため断定はできないが、検出した範囲の周溝から、径14m前後の円墳に復元することができる。

覆土は、灰白色粘土ブロックを含む灰褐色土が主体となっている。

遺物（第44図）

SD-30内から、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。1・2は須恵器蓋杯の杯身で、口縁部の破片である。TK43型式～TK209型式の製品である。胎土は、ともに砂粒を含み、色調は1が灰色、2が灰色～オリーブ灰色である。

3は土師器高杯である。脚部径は11cmである。杯部内面はヘラ磨き調整、脚部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整となっている。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は黄橙色～橙色である。



第44図 SD-29・30と出土遺物

7 不明遺構

SX-1

遺構（第61図）

古墳時代後期の土器を中心に構成される土器集積遺構である。調査区北部、T-12からU-13グリッドにかけて位置し、古墳（SD-29・30）の南側に隣接する。土器は基本土層のⅡ層中に集積しており、集積範囲は東西8m、南北6mである。なお、土器集積に伴う掘込みなどは確認できなかった。

遺物（第45～50図、図版24～27）

古墳時代後期の土器と石製模造品、手捏土器などが出土している。特に古墳時代後期の土器は量が多く、実測可能な個体は杯類25点、高杯3点、壺・甕・鉢類25点、甌1点である。

1・2は須恵器蓋杯である。1は蓋で、口径15cm、器高5cmであり、口縁部と体部の境と口唇部の内側に稜線が存在し、頂部に回転ヘラ削りが施される。胎土は長石を含み、色調は青灰色である。2は杯身で、口径13cm、器高4.5cmである。底部付近には回転ヘラ削りが施される。胎土は白色粒子を含み、灰色～青灰色である。ともにTK10型式前後の製品であろう。

3～24は、須恵器蓋杯を模倣した土師器杯で、3～14までは蓋模倣である。口径12.8cm～15.1cm、器高3.2cm～5cmである。確認できる調整技法は、体部外面をヘラ削りし、内面は10・14がヘラ磨きする以外はナデ調整が中心となっている。また、4・5・6・12を除き赤彩が施され、胎土は赤色スコリア粒、白色粒、砂粒、黄褐色粒などを含み、色調は黄橙色のものが多い。

15～24は杯身模倣の土師器杯である。口径11.5cm～14.6cm、器高4cm～5.3cmである。確認できる調整技法は体部外面がヘラ削り、内面は18・22がヘラ磨きする以外はナデ調整が中心である。15～17・23を除き赤彩され、胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は灰白色～赤褐色、橙色、褐色のものが多い。

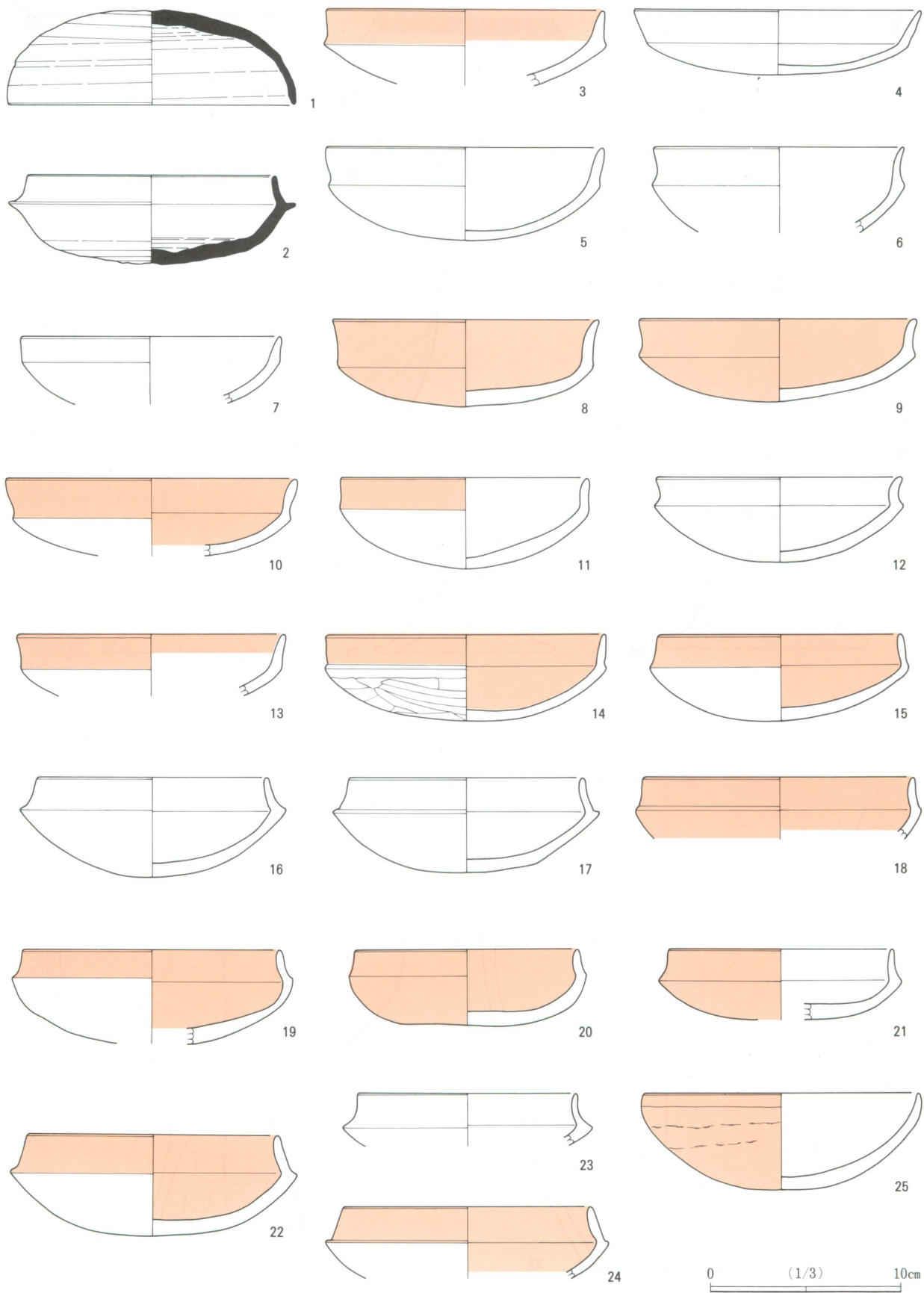
25は、丸底の土師器杯で、口径14.4cm、器高5.1cmである。内面は丁寧なナデ調整となっている。胎土は赤色スコリア粒、白色針状物質を含み、色調は褐色～暗褐色である。外面は赤彩されている。

26・27は土師器壺である。26は小型の丸底壺で、口径12.4cm、器高14.7cmである。器面の磨減が著しく、調整技法は明確にできない。胎土は赤色スコリア粒、小石を含み、色調は明黄色である。27は平底の小型壺で、口縁部を欠損し、現存器高8.7cm、底径5.8cmである。胴部外面はヘラ磨き調整、内面は丁寧なナデ調整となっており、胴部外面と口縁部の内外面を赤彩する。胎土は石英粒を多く含み、色調は赤褐色～橙色である。

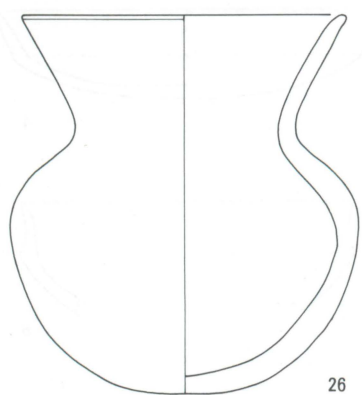
28・29は土師器鉢である。28は口径12.8cmの小型鉢であり、胴部外面をヘラ削り、内面をヘラナデしている。29は口径20.4cmの大型鉢で、調整技法は28と同様である。胎土は、ともに赤色スコリア粒、白色粒を含み、色調は28が明黄色、29が橙色～黒色である。

30～32は土師器高杯である。30は口径15.4cm、器高11.7cm、脚部径10.4cmである。杯部は内面をヘラ磨き、外面はヘラ削り調整しており、脚部は内外面をヘラ削り調整している。また、杯部・脚部ともに口唇部・端部はヨコナデ調整が行われている。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は赤色～明黄褐色である。31・32は脚部片で、脚部径8.2cm～9.5cmである。調整技法は、31は30と共通、32は外面をヘラ磨きしている。胎土は、31が赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は橙色、32は赤色スコリア粒を含み、色調は灰白色～橙色である。

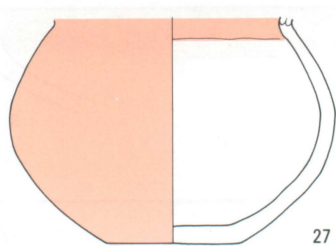
33は土師器甌である。口径22.7cm、器高25.6cm、底部円孔径7.6cmであり、調整技法は胴部内面をヘラ磨



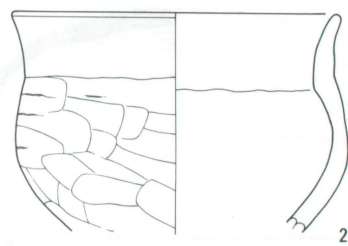
第45図 SX-1出土遺物(1)



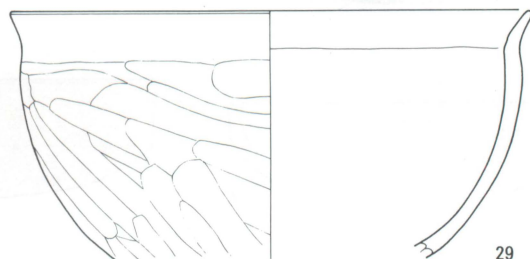
26



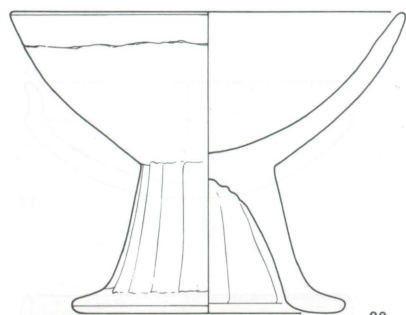
27



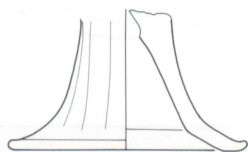
28



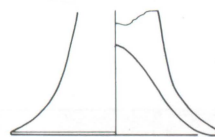
29



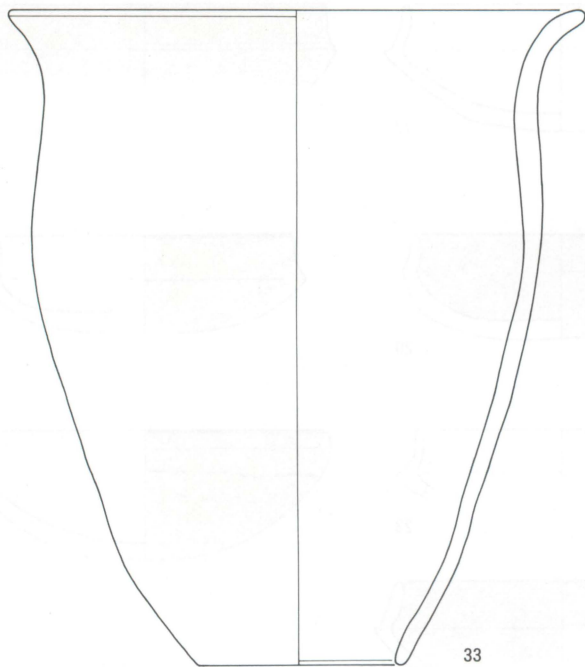
30



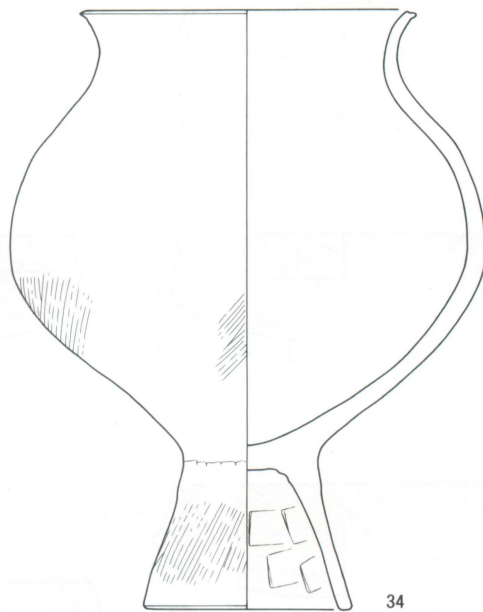
31



32



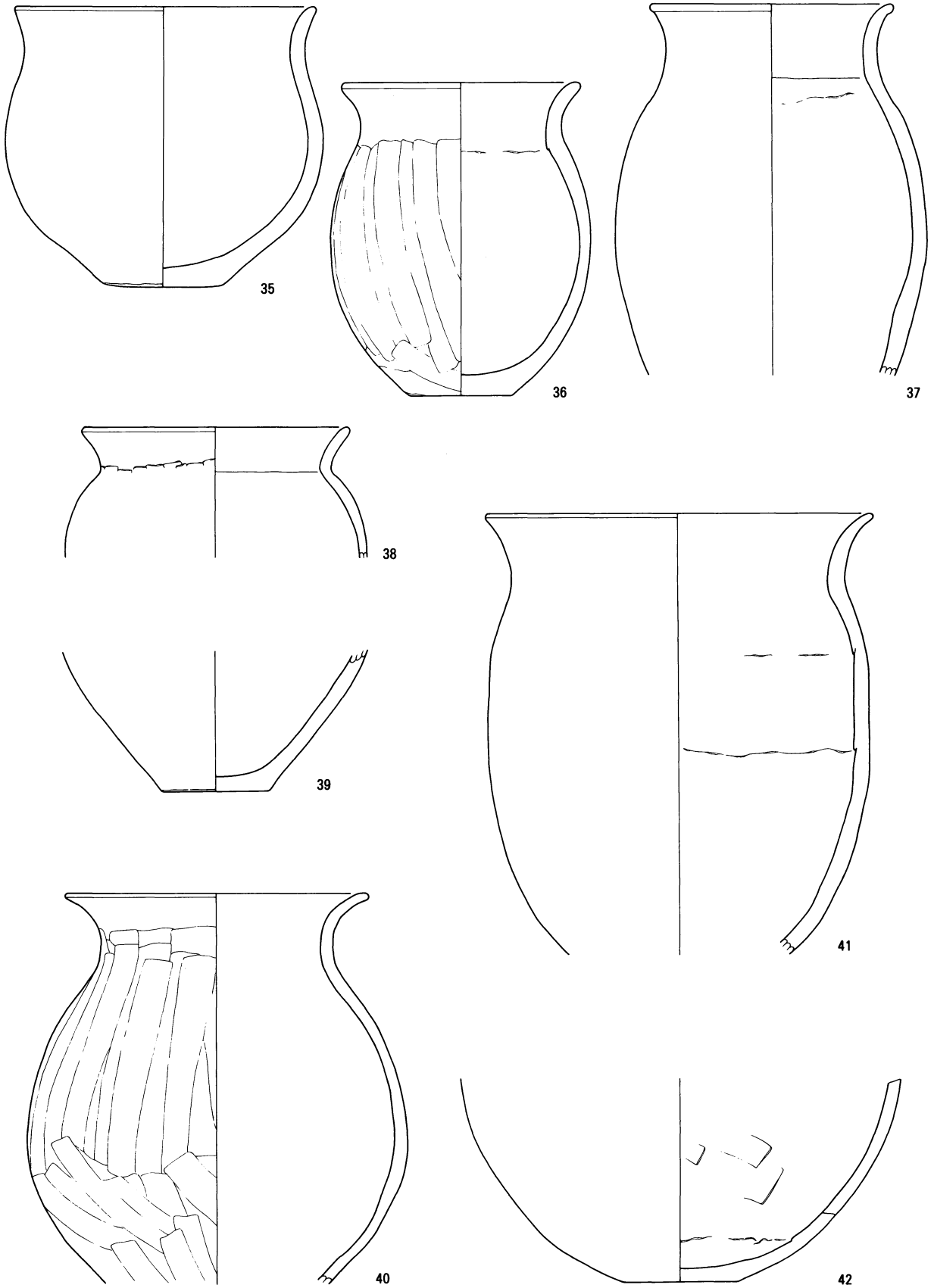
33



34

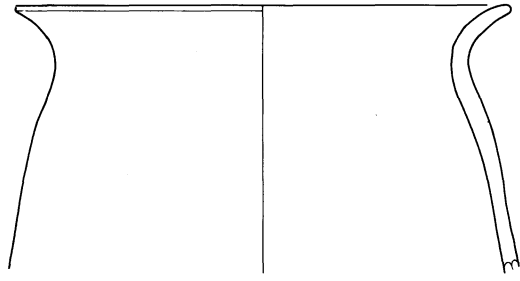
0 (1/3) 10cm

第46图 SX-1出土遺物(2)

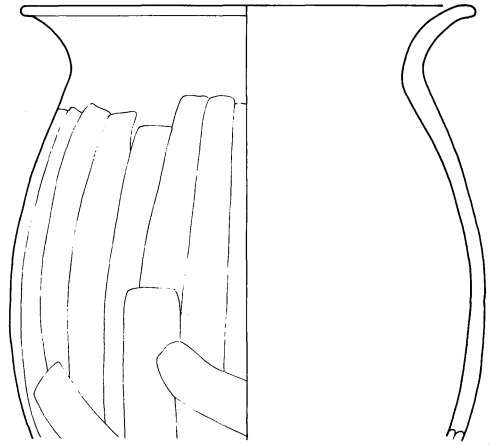


0 (1/3) 10cm

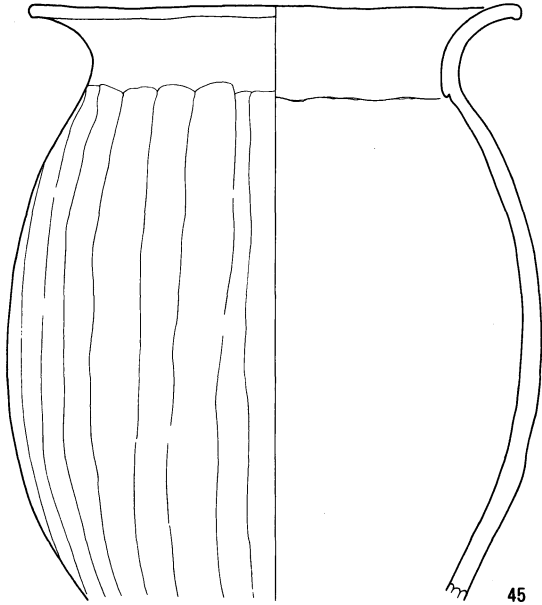
第47図 SX-1出土遺物(3)



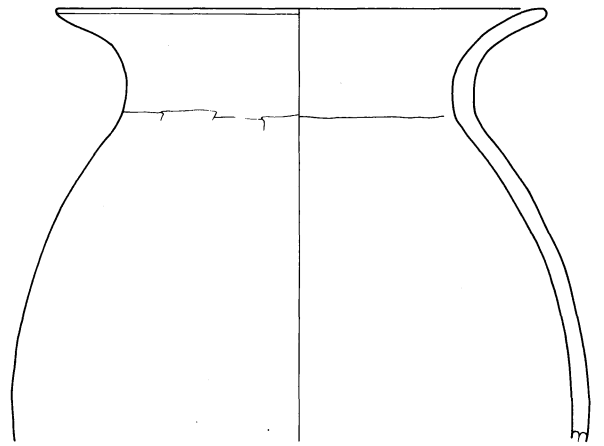
43



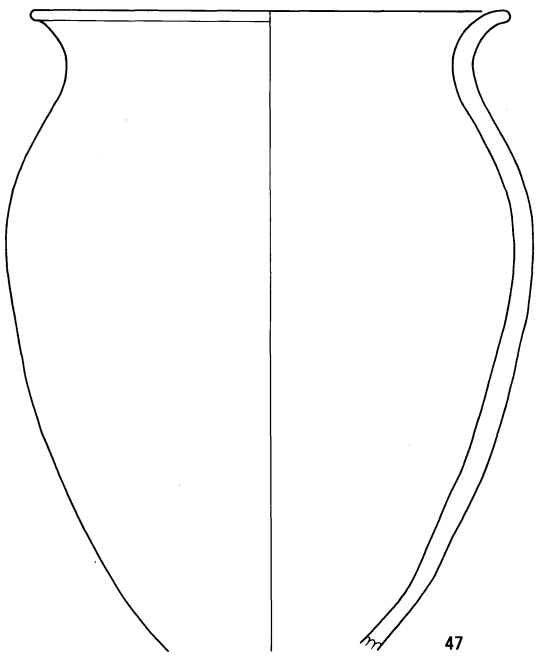
44



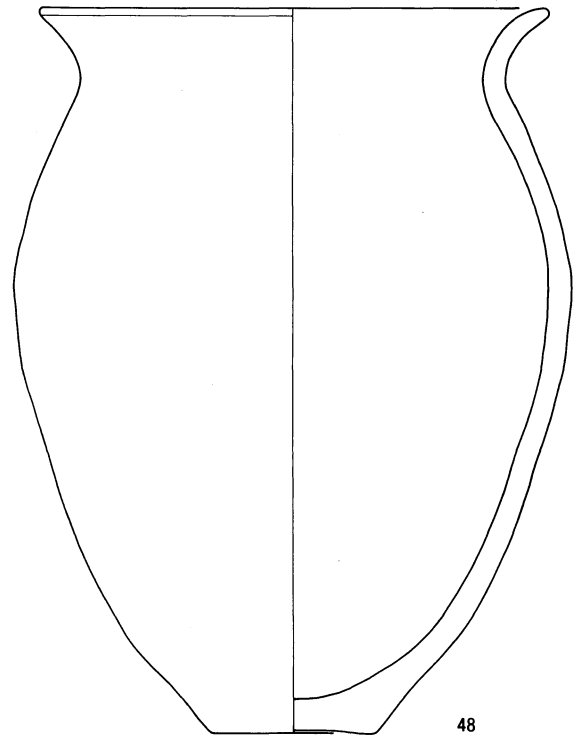
45



46



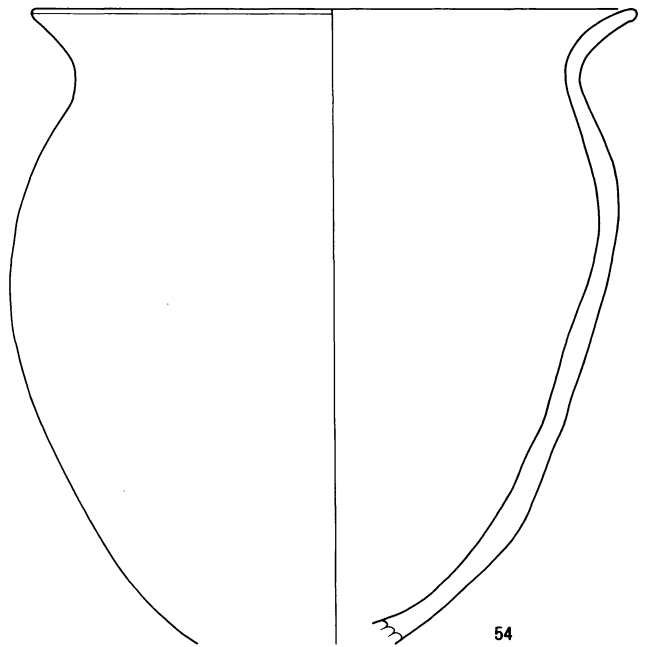
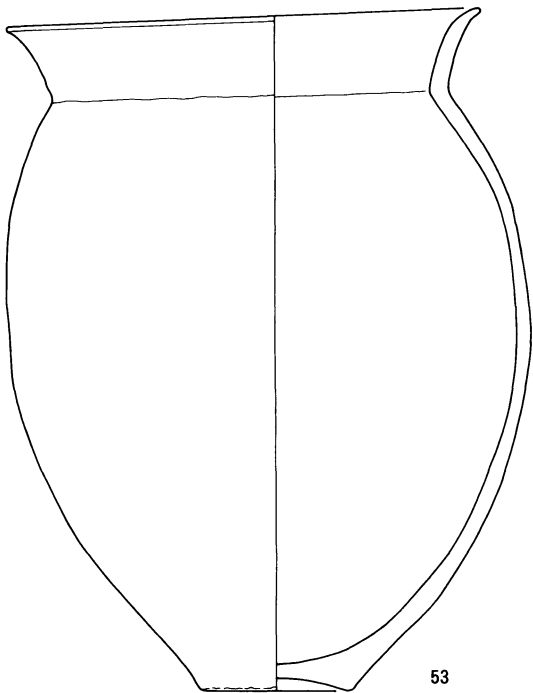
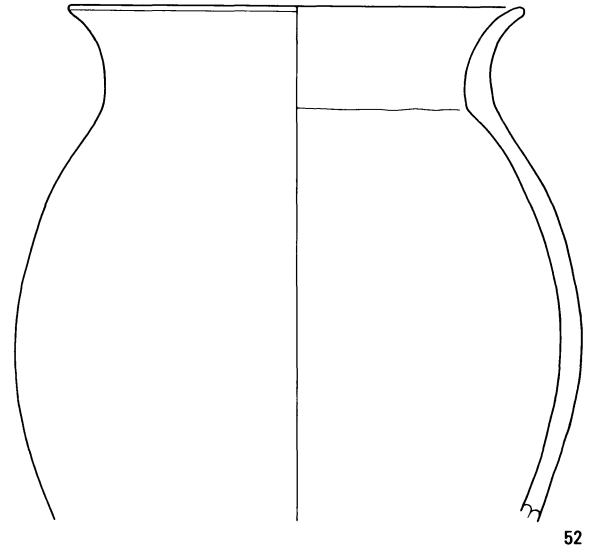
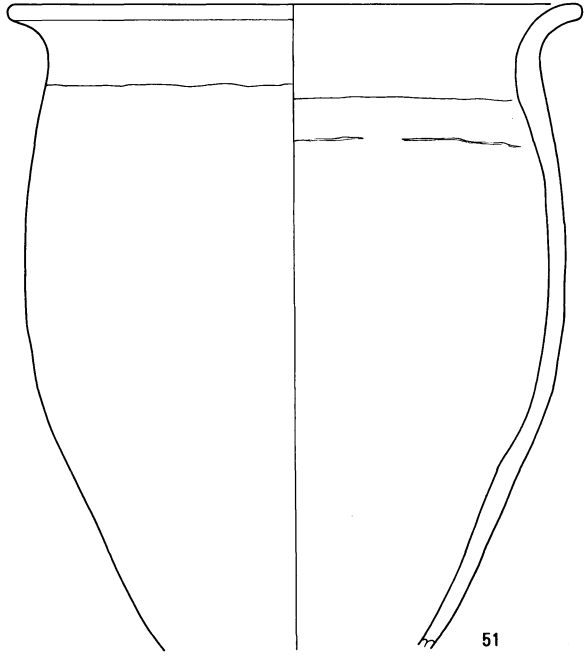
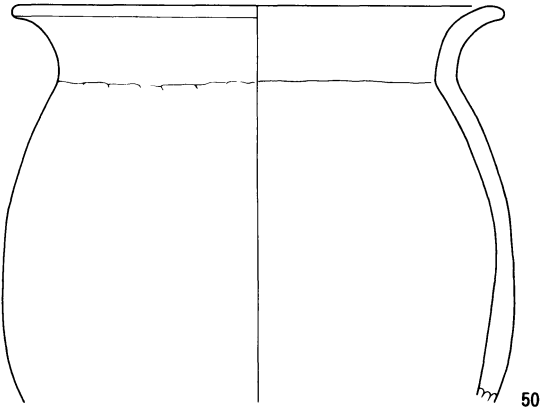
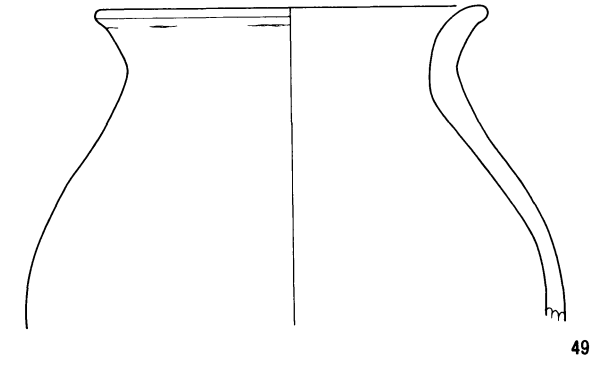
47



48

0 (1/3) 10cm

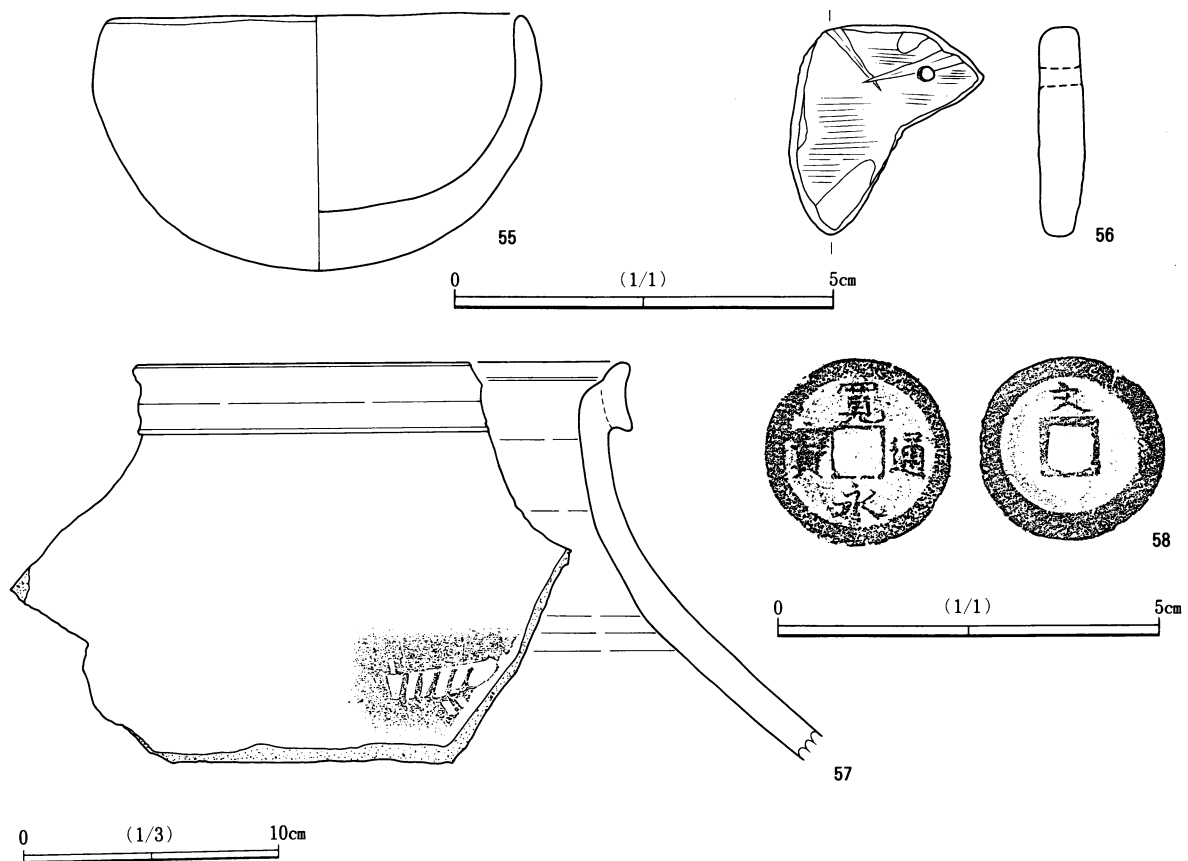
第48图 SX-1出土遺物(4)



53

第49图 SX-1出土遺物(5)

0 (1/3) 10cm



第50図 SX-1出土遺物(6)

き、外面をヘラ削り調整する。胎土は赤色スコリア粒、白色粒を多量に含み、色調は褐色～黒色である。

34は、混入品と考えられる古墳時代前期の台付甕である。口径13cm、器高23.3cm、台部径8.2cmであり、胴部最大径は18.8cmである。胴部から脚台部外面にかけてハケ目調整を施し、胴部内面は丁寧なナデ調整、台部内面はヘラナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒、小石を含み、色調は赤褐色～黒褐色である。

35～54は土師器甕である。35・36は小型甕で、35は口径15.7cm、器高14.2cm、底径6.2cmである。胴部外面の調整技法は、器面の磨滅が著しく不明であるが、内面はヘラナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒、白色針状物質を含み、色調は淡黄色～橙色である。36は、口径12.2cm、器高16cm、底径5.3cmで、胴部外面から底部にかけてヘラ削り調整、胴部内面はヘラナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒を含み、黄褐色～黒色である。

37・38は中型の甕である。口径12.5cm～13.7cmで、調整技法は36の小型甕と共通する。胎土は、37が赤色スコリア粒、石英粒、砂粒を含み、色調は橙色、38が石英粒、黒色粒を含み、色調は灰白色～黄灰色である。

39～54は大型甕であり、球形の胴部の42以外は長胴甕である。口径は15.6cm～15.8cmのグループと17.7cm～23.7cmのグループに分けることができる。底部・器高については、判明する範囲で器高26.4cm～28.6cm、底径5.8cm～6.4cmである。調整技法は、胴部内面がヘラナデ、外面がヘラ削りで、小型甕と共通する。胎土は、赤色スコリア粒、白色針状物質、石英粒、砂粒などを含み、色調は灰白色、赤褐色、黒褐色、橙色などを呈する。

55は手捏土器で、口径5.5cm、器高3.3cmである。手捏成形の後、内外面をナデ調整している。胎土は赤

色スコリア粒，白色針状物質を含み，色調は黄灰色である。

56は，滑石製の勾玉模造品である。全長2.93cm，最大幅1.62cm，厚さ5.5mmであり，重量は5.26gを測る。片側穿孔で，穿孔径は開始側で2.6mm，貫通側で2mmである。表裏面ともに，細かな擦痕が残されている。色調は暗緑灰色である。

57・58は混入品である。57は常滑窯産の大甕片で，常滑窯編年6型式の製品で，外面肩部に綾杉状のスタンプ文が残される。胎土は長石粒を多く含み，色調は褐色～黒褐色である。58は寛永通寶で，新寛永の「文銭」である。外縁径2.49cm，内縁径1.98cm～1.99cm，外縁厚1.2mm～1.3mm，文字面厚1.2mmであり，重量は3.55gを測る。

SX-2

遺構（第51図，図版12）

調査区中央部，X-12グリッドに位置する。楕円形の浅い遺構で，竪穴住居跡の可能性も考えられるが，カマドや炉の痕跡は確認できない。6個のピットと重複し，切り合い関係ではSX-2が古い。平面形態は，長径3.5m，短径3mの楕円形で，確認面から底面までの深さは10cmである。底面は平坦で，東壁寄りの部分に，径20cm～60cmの円形で，深さ10cm～30cm前後の掘込みが存在する。

覆土は，炭化物粒を含む暗黄灰褐色の砂質土である。

遺物（第51図，図版27）

古墳時代後期の土師器と弥生土器が出土している。1は土師器長胴甕である。口縁部を欠損しており，現存器高22.2cm，底径6.2cmである。外面はヘラ削り調整，内面はヘラナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒，石英粒を含み，色調は暗褐色～黒色である。

2～5は，弥生時代後期の甕であり，5を除き，外面に粘土紐の輪積み痕が残される。3の口径が24.4cm，5は口径20.9cm，器高20cm，底径6.4cmである。胎土は，いずれも石英粒を多量に含み，色調は，2・3が橙色，4・5が明赤褐色～黒色である。

SX-5

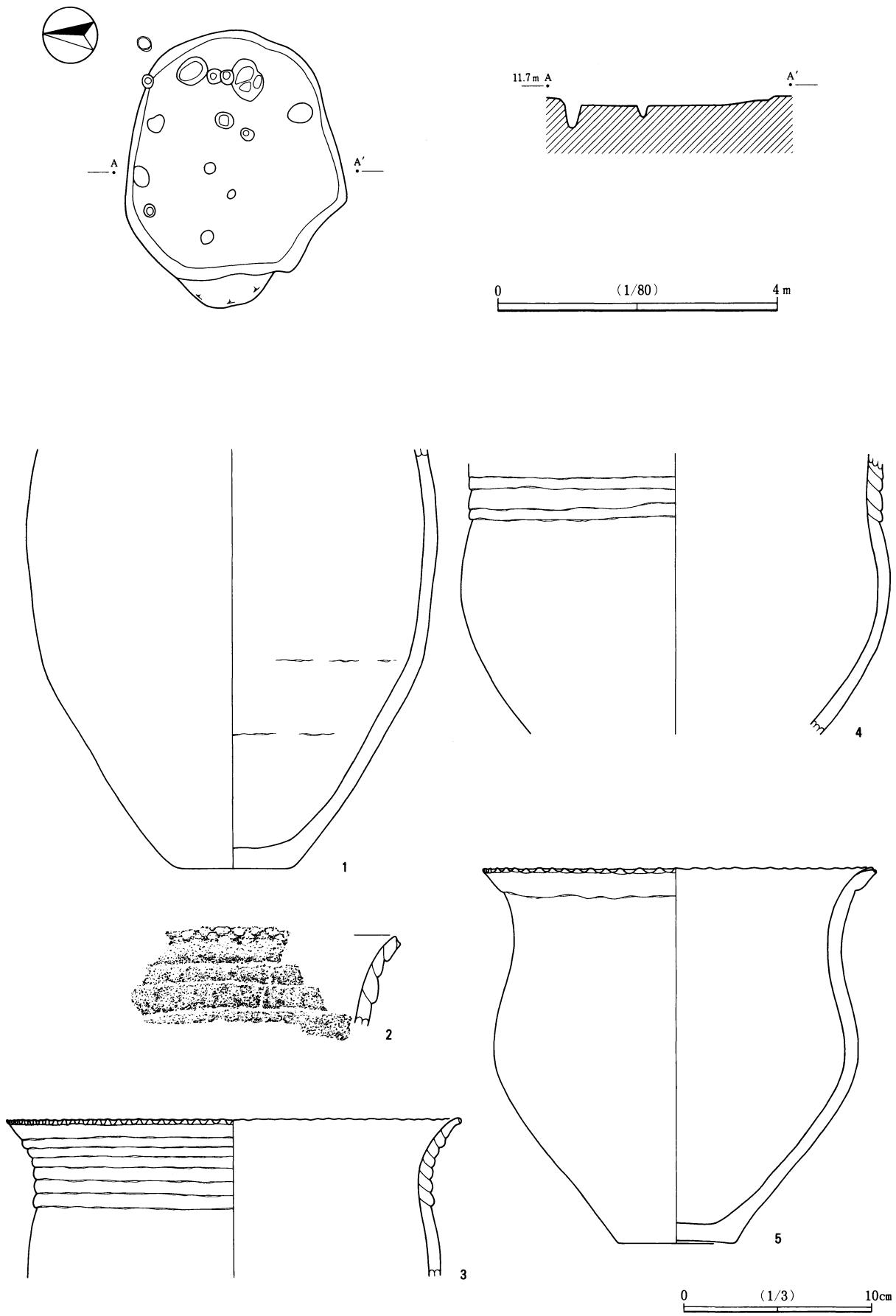
遺構（第52図）

調査区中央部，Y-6グリッドに位置する。SD-65と重複するが，新旧関係は明確にできなかった。平面形態は，径40cm前後の円形で，確認面から底面までの深さは10cm，底面は船底状を呈する。

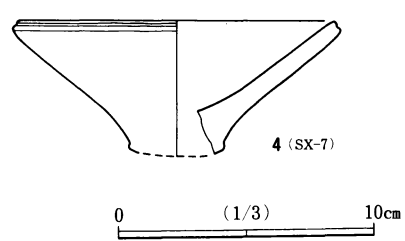
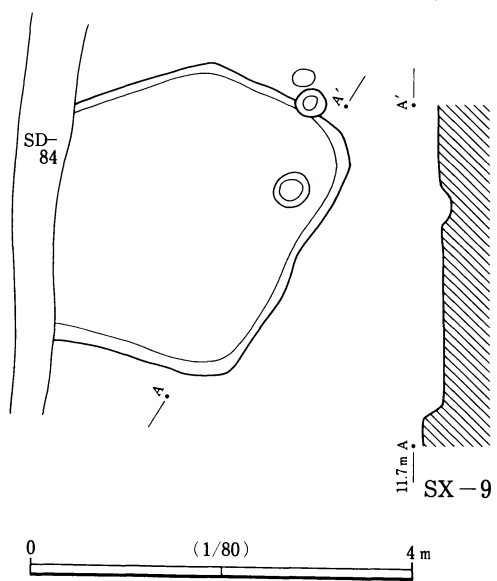
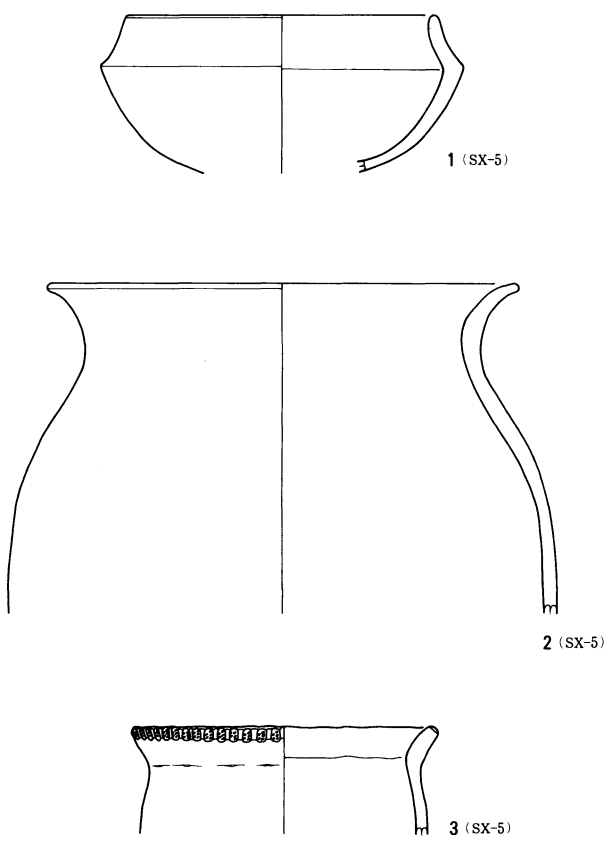
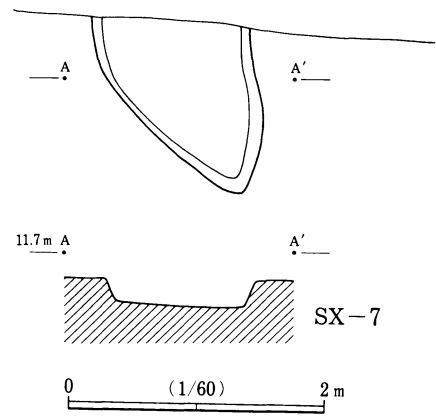
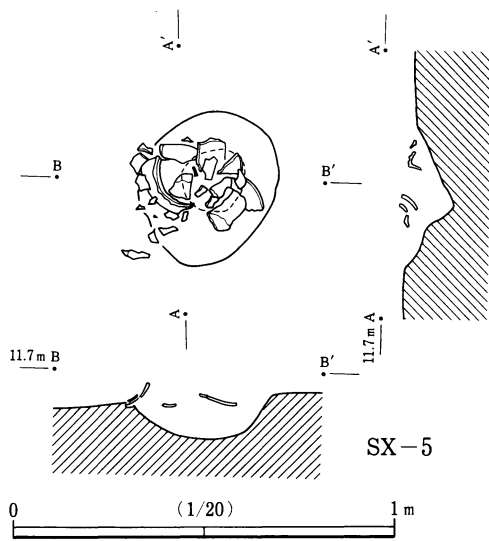
遺物（第52図）

覆土中から，古墳時代後期の土師器と弥生土器が出土している。1・2は古墳時代後期の土師器である。1は，須恵器蓋杯を模倣した土師器杯で，口径12cmである。内外面ともに器面の磨滅が著しく，調整技法は明確にできない。胎土は，赤色スコリア粒，白色粒を含み，色調は黄橙色～黒色である。2は，土師器甕で，口径は18.3cmである。胴部外面をヘラ削り，内面をナデ調整している。胎土は，赤色スコリア粒，黄褐色粒子，石英粒を多く，色調は橙色～黒褐色である。

3は，弥生時代後期の小型甕であり，混入品である。口径は12cm，口唇部に縄文原体による押捺が施される。器面の調整は，内外面ともにナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒，白色針状物質，石英粒を含み，色調は橙色～灰褐色である。



第51図 SX-2と出土遺物



第52図 SX-5・7・9と出土遺物

SX-7

遺構（第52図）

調査区南部，G-8グリッドに位置する。幅1.2m，長さ1.5m以上の掘込みで，底面は平坦となっている。確認面から底面までの深さは20cmである。北側が攪乱により失われており，土坑状の遺構か溝状の遺構かは断定できない。

遺物（第52図）

古墳時代前期～後期にかけてのものと思われる土師器が出土している。4は土師器の鉢もしくは、蓋と思われる製品である。口径12.4cm，器高5.4cmほどで，内外面はヘラ磨きされている。

SX-9

遺構（第52図）

調査区南部，E-4からE-5グリッドに位置する。SD-84と重複し，切り合い関係ではSX-9が古い。平面形態は，2.5m×3mほどの歪んだ方形で，確認面から底面までの深さは20cmほどである。底面は平坦であり，東壁際には径40cmの円形で，深さ10cmの掘込みが存在する。

遺物

遺物は出土していない。

Pit430

遺構（第53図）

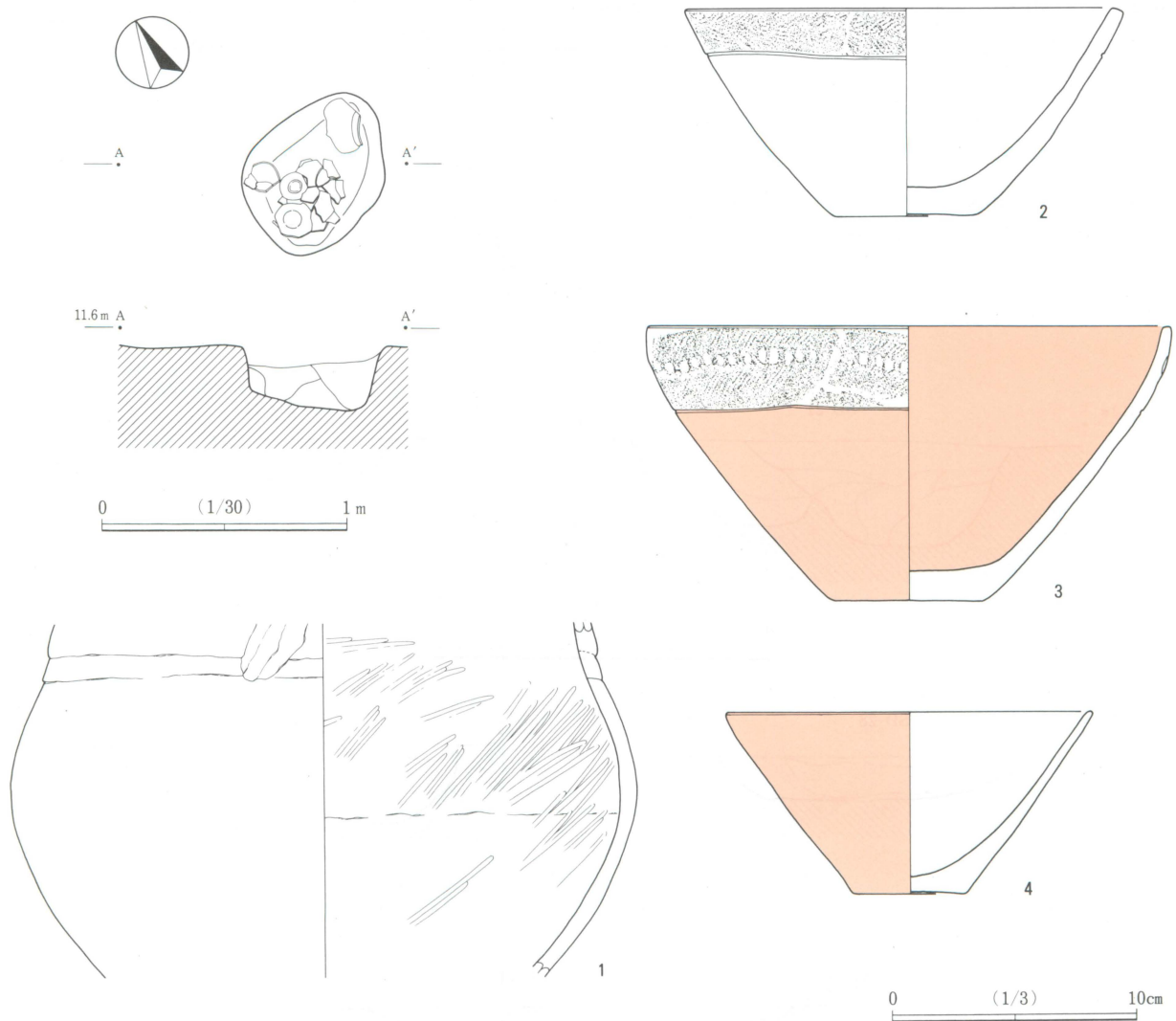
調査区中央部，X-8グリッドに位置する。当初，柱穴として調査していたが，弥生時代後期の土器がまとまって出土しており，柱穴とは考え難いため不明遺構として報告する。確認面は基本土層のⅢ層上面であり，平面形態は長径70cm，短径57cmの楕円形で，確認面から底面までの深さは20cm～25cmである。

覆土は炭化物粒を含む暗褐色土と黒褐色土である。

遺物（第53図，図版27）

覆土内から4個体分の弥生時代後期の土器が出土している。1は甕の胴部片で，胴部最大径が25cm程度に復元できる。口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残され，その一部をナデ調整により消している。内面はヘラ磨き調整が加えられている。胎土は石英粒を多量に含み，色調は灰褐色～黒褐色である。

2～4は鉢である。2は口径17.8cm，器高8.7cm，底径5.8cmであり，口縁部外面にはLR・RL縄文の羽状縄文が施され，下端部を沈線で区画する。口唇部の縄文の有無は，磨滅により確認することができない。内面は粗いヘラ磨き調整，外面はナデ調整である。また，内面には付着物の痕跡が部分的に認められる。3は，口径21.4cm，器高11.2cm，底径6cmであり，口縁部外面には，LR縄文を2段に施し，その間に縄文原体による押捺が加えられている。また，縄文施文部の下端は沈線で区画される。施文範囲以外はヘラ磨き調整の後，赤彩される。胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は明黄褐色～黄褐色である。4は口径15cm，器高7.4cm，底径4.4cmで，外面はヘラ磨きの後，赤彩されるが，内面の調整技法は磨滅のため明確にできない。胎土は赤色スコリア粒を含み，色調は赤褐色～暗褐色である。



第53図 Pit430と出土遺物

8 溝状遺構

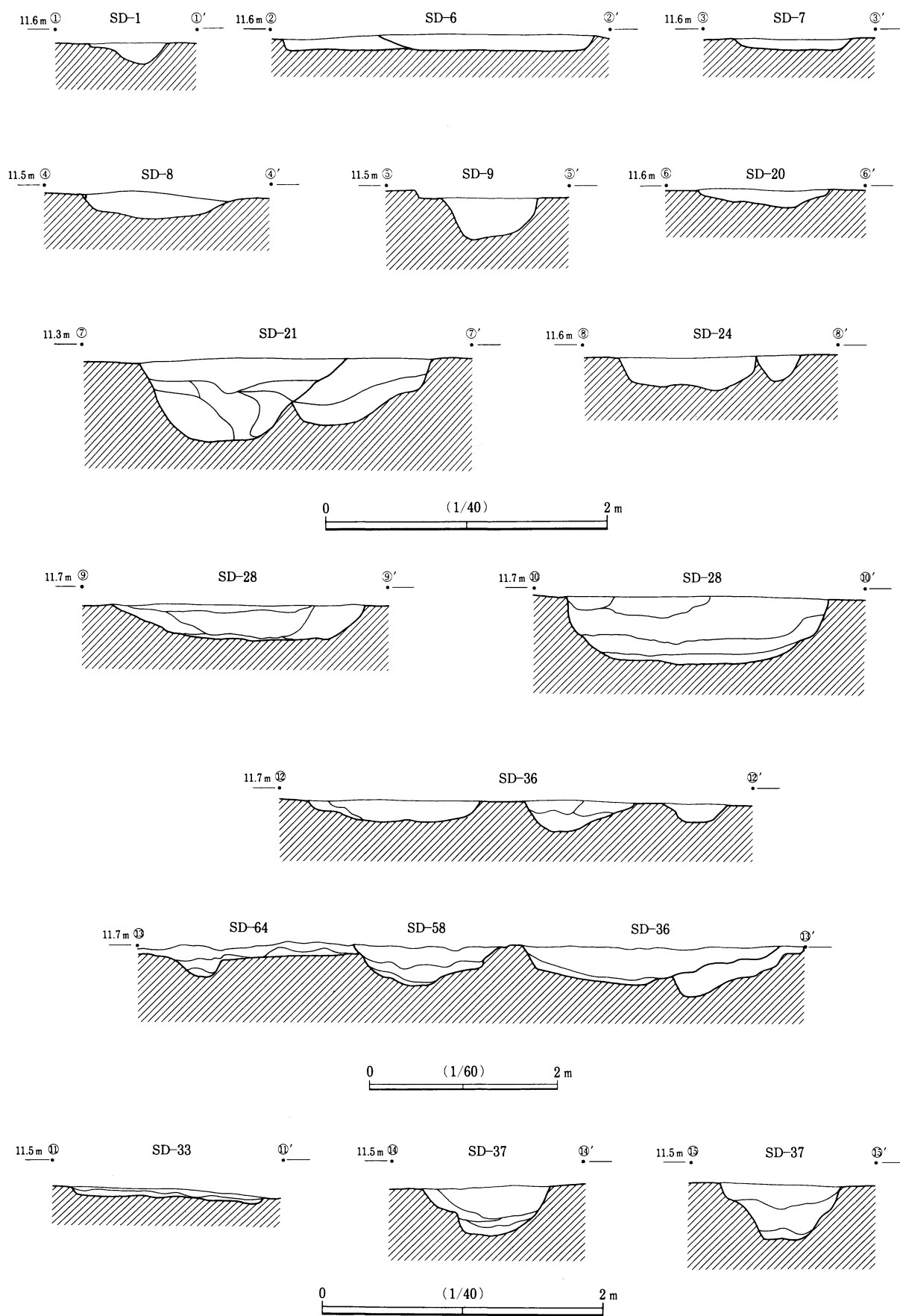
Ⅲ層上面では、80条の溝状遺構を検出しているが、ここでは遺物が伴うか、遺跡内の区画などで明確な機能が推定できる遺構を中心に報告する。

SD-1・18・84

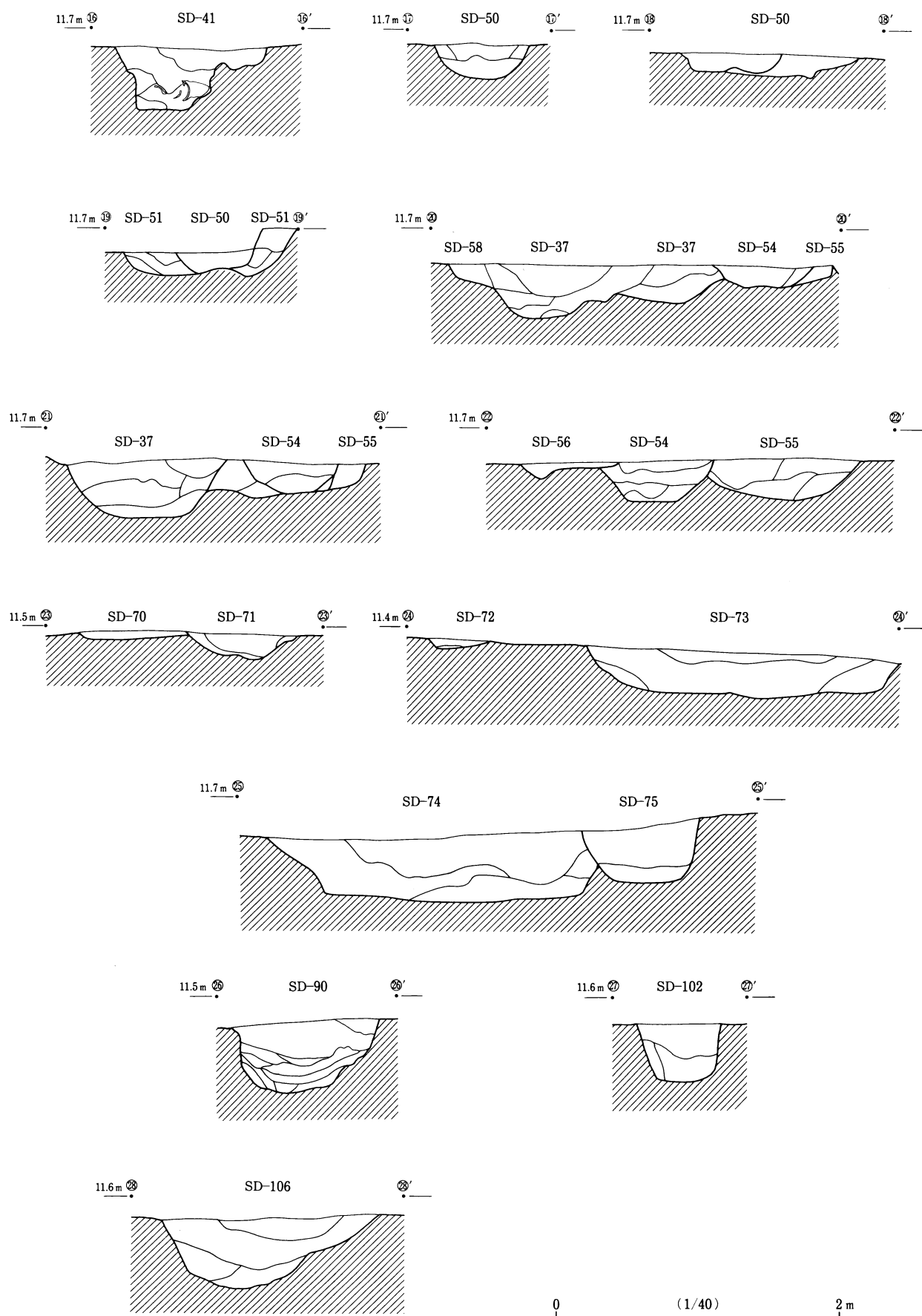
遺構（第54・64・65図）

調査区南部で、東西50m、南北45m以上の範囲を方形に区画する溝である。SD-1はD-10からH-9グリッドに、SD-84はC-4からG-4グリッドにかけて位置し、ほぼ直線的に南北に走っている。SD-18は、G-4・5グリッドを東西方向に走っている。溝方位はSD-1がN-10°-E、SD-84がN-11°-E前後である。SD-84はSE-21、SX-9と重複し、切り合い関係は、SE-21より古く、SX-9よりも新しい。確認面での上端幅は50cm前後、深さ15cm前後であり、覆土は暗灰色砂質土である。

遺物



第54图 III層上面溝状遺構土層断面图(1)



第55图 III層上面溝状遺構土層断面图(2)

SD-84から土器片が出土しているが、実測可能な個体は存在しない。

SD-6・7・8・9・20・23・24・25

遺構（第54・65図）

調査区南部、G-7からH-10グリッド付近に位置する溝である。各溝の方向性には明確な規則性は認められない。SD-6とSD-7が重複し、切り合い関係ではSD-7が古い。

確認面での上端幅は80m～2m、深さ10cm～30cm前後である。覆土は、SD-6・7・20は炭化物を含む黄色砂質土、SD-8は炭化物を含む黄色粘質土、SD-9は炭化物を含む黄褐色土である。

なお、これらの遺構の検出面はⅢ層上面と同レベルであるが、調査区南部はⅢ層の堆積が全体に薄くⅢ層上面とⅣ層上面の遺構を明瞭に分別できない部分もあり、出土遺物が弥生時代後期の土器が中心となる。SD-7・8・9・20・24についてはⅣ層上面の遺構である可能性が考えられる。

遺物（第56図）

SD-7・8・9・20・24から弥生時代後期の土器が出土している。

1は、SD-7出土の小型甕である。口径9.8cmで、口唇部には押捺を施し、口縁部外面には2段の粘土紐輪積み痕が残される。調整技法は、内外面ともにナデ調整である。胎土は石英粒を多く含み、色調は黄褐色～黒褐色である。

2はSD-9出土の甕で、口径20cmである。口唇部に押捺を施し、内外面をヘラナデ調整している。胎土は小石や白色粒子を含み、暗緑灰色～黒褐色である。

3はSD-8出土の壺底部で、底部径は8.7cmである。胎土は砂粒を含み、色調は橙色～灰白色である。

4は、SD-20出土の鉢で、口径21.2cm、器高10.6cm、底径6cmである。口縁部外面には、上からRL・LR・RL・LRの順で羽状縄文を施し、下端を沈線で区画している。また口唇部にはLR縄文を施している。外面の施文部以外と内面全面は、ヘラ磨きの後、赤彩される。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は黄橙色～明赤褐色である。

6～9はSD-24の出土土器である。6は、口径16cmの鉢である。口縁部外面にRL縄文を3段にわたって施し、下端を沈線で区画している。口唇部と施文部を除く内外面は、ヘラ磨きの後、赤彩されている。

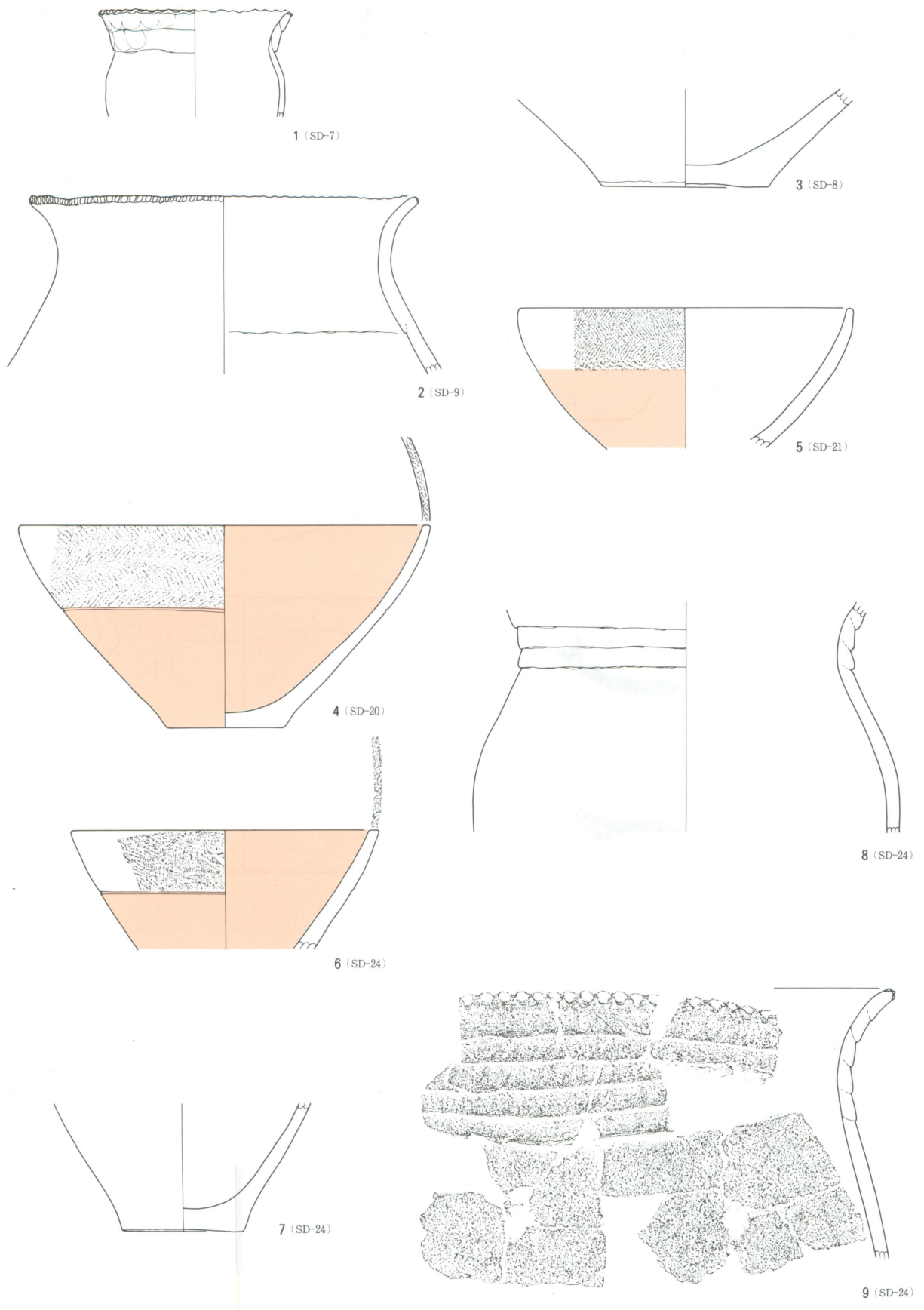
7～9は甕である。7は底部片で、底径6.4cm、内外面はナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒石英粒を含み、色調は黄橙色～黄灰色である。8・9は、口縁部に粘土紐輪積み痕を残す甕である。9は口唇部に押捺を施している。胎土は、8が黄褐色粒子、小石を含み、色調は灰白色～黄橙色、9が砂粒を多量に含み、黄橙色～赤色である。

SD-21

遺構（第54・65図）

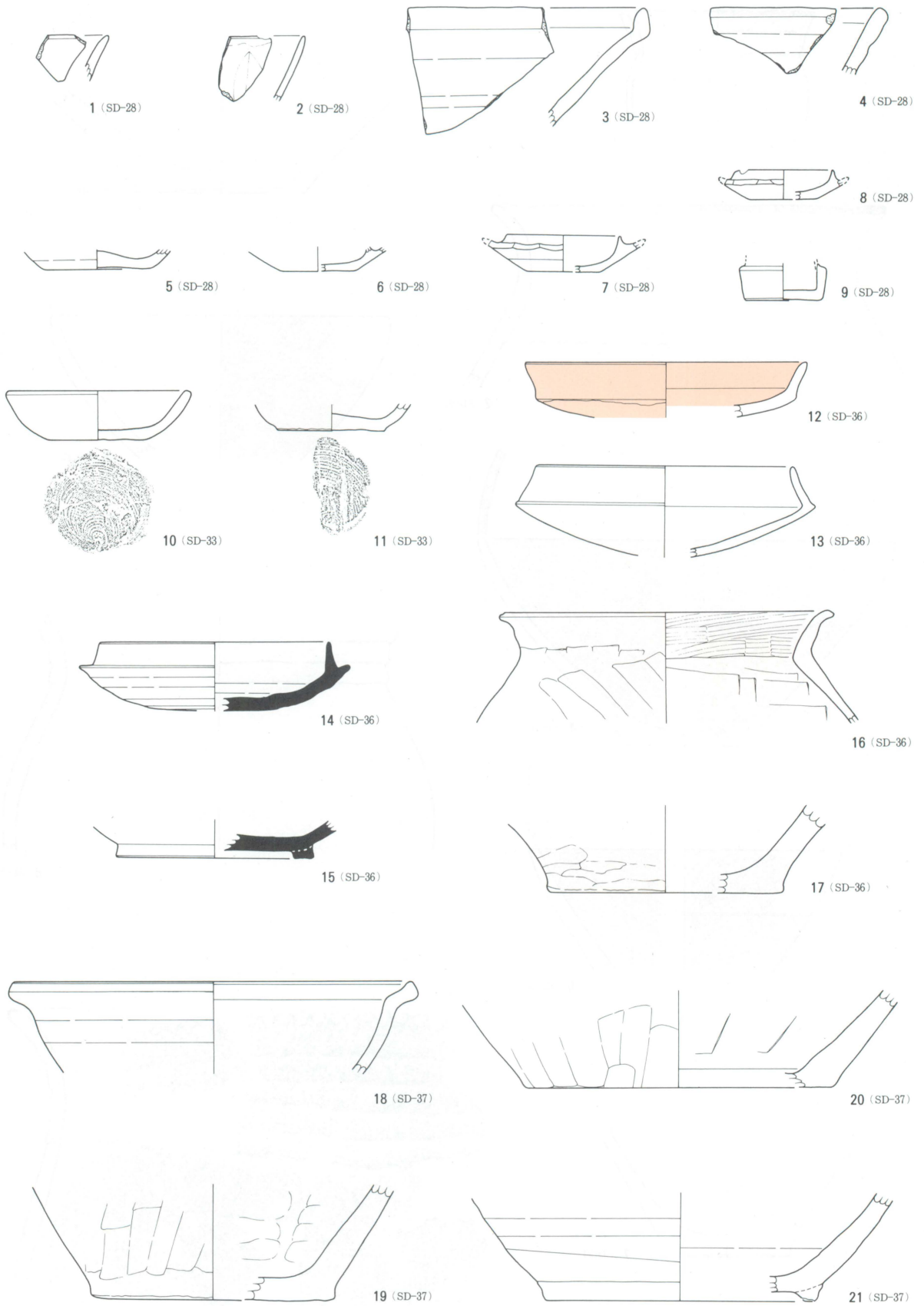
調査区南部、K-9グリッドに位置し、北東から南西にかけて走る溝である。土坑状の遺構と重複し、切り合い関係ではSD-21が古い。確認面上端幅は1.2m～1.5m前後であり、深さは60cm前後、断面形は逆台形を呈する。覆土は、炭化物や土器片を含む褐色砂質土が主体である。

出土遺物は弥生時代後期の土器であり、SD-7・8・9・20・24と同様、Ⅳ層上面の遺構である可能性も考えられる。



0 (1/3) 10cm

第56図 SD-7・8・9・20・21・24出土遺物



第57図 SD-28・33・36・37出土遺物

遺物（第56図）

弥生時代後期の土器が出土している。5は鉢の口縁部片で、口縁部外面に、上からLR・RL・LR縄文を施し、下端部を2段のS字状結節文で区画している。器面の磨滅が著しく明確ではないが、縄文部分を除きヘラ磨き調整されているようである。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は灰白色～灰褐色である。

SD-28

遺構（第54・61・63図）

調査区の北部から中央部、Q-12からA-10グリッドにかけて南北に直線的に走る溝である。SE-5・13・14・22、SD-33・36・37・41・106などと重複し、切り合い関係ではSD-28がいずれの遺構よりも新しい。溝方位はN-10°-Eである。確認面上端幅は2.5m～3mで、深さは35cm～70cm前後である。

覆土は、粘性の強い灰褐色土が主体である。

遺物（第57図）

中世から近世にかけての遺物が出土している。1～5は中世遺物である。1・2は龍泉窯系の青磁碗で、1は、太宰府分類I-1類、2はI-5b類である。1の釉はオリーブ黄色、2は透明感のある明青緑色である。胎土はともに緻密で、色調は灰白色である。3は屈曲する口縁部を持つ、東播系須恵器の捏鉢である。胎土は白色粒子や小石を多量に含み、色調は灰色である。また、口縁部外面のみが黒色を呈しており、重ね焼きの結果と考えられ、特徴的である。13世紀代の製品である。4は常滑窯産の捏鉢である。胎土は長石粒を少量含み、色調は灰白色である。6型式前後の製品である。5は土師質土器小皿の底部片で、底径5.4cmである。ロクロ成形で、底部は回転系切り離しの後、指ナデが加えられている。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を少量含み、色調は灰白色である。

6～8は信楽窯産の可能性のある燈火皿で、口縁部はいずれも欠損しており、底径は3.2cm～3.8cmである。外面は露胎とし、内面全面に明緑色の灰釉を施している。胎土は緻密で、色調は灰白色である。18世紀後半代の製品であろう。9は肥前系の白磁合子の身部分である。口唇部は欠損しており、底径は4cmである。外面底部と口唇部は露胎としている。胎土は緻密で、色調は灰白色である。18世紀以降の製品であろう。

SD-33

遺構（第54・61図）

調査区北部、Q-10からR-14グリッドにかけて、SD-28と直交する形で東西に走る溝である。溝方位はN-80°-Wである。SB-4、SD-28・29・30・39と重複し、切り合い関係ではSD-28よりも古く、SB-4、SD-29・30よりも新しい。確認面での上端幅は1m～1.9m、深さ5cm～15cmで、東端部分は35cmと深くなっている。

覆土は、黄褐色土粒子を含む茶褐色土が主体である。

遺物（第56図）

中世の土師質土器が出土している。10・11は土師質土器の小皿である。10は口径9.4cm、器高2.5cm、底径5cmで、11は底径5.4cmである。ともにロクロ成形、底部は回転系切り離し無調整である。胎土は、10が石英粒を含み、色調は橙色、11が白色粒を含み、明黄褐色である。

SD-36

遺構（第54・61図）

調査区北部，U-12からV-13グリッドにかけて，南東から北西にかけて走る溝である。溝方位はN-60°-Wである。SD-28・37・44・58と重複するが，切り合い関係は明確にできなかった。確認面での上端幅は1.6m～2.5m，深さ40cm前後，断面形は船底形である。覆土は，明褐色土が主体である。

遺物（第57図）

古墳時代～奈良・平安時代の土器，中世陶器が出土している。12～14は，古墳時代後期の土器である。12・13は須恵器蓋杯を模倣した土師器杯である。12は蓋模倣で，口径14.4cm，内外面を赤彩する。胎土は赤色スコリア粒，白色粒子を含み，明黄褐色～黒色である。13は杯身部分で，口径13.2cm，内外面の器面が磨滅しており，調整技法は明確にできない。胎土は赤色スコリア粒を含み，色調は明褐色である。14は，須恵器蓋杯の杯身で，口径11.8cm，器高3.5cmである。底部外面に回転ヘラ削り調整が施される。胎土は砂粒を含み，色調は灰色である。TK43型式の製品である。15は，須恵器長頸瓶の底部片である。高台部分は貼付けで，高台径は10cm，底部内面には自然釉の付着が認められる。胎土は微細な白色粒を多量に含み，色調は明灰色である。

16は，古墳時代前期の土師器甕の口縁部片である。口径16.8cmであり，胴部内外面をヘラナデ調整し，口縁部内面はハケ目調整している。胎土は白色粒子を少量含み，色調は黄灰色である。

17は，常滑窯産の捏鉢の底部片で，底径12cmである。内面は丁寧に使込まれており，平滑になっている。胎土は長石粒を多量に含み，色調は暗灰褐色である。型式は特定できない。

SD-37

遺構（第54・55・60・61図）

調査区北部，T-9からV-13グリッドにかけて，南東から北西にかけて，緩やかに湾曲して走る溝である。溝方位はN-55°～70°-Wである。SD-28・36・44・50・54・58などと重複し，切り合い関係ではSD-28・54よりも古く，SD-58よりも新しい。確認面での上端幅は1.1m～1.9m，深さは40cm～60cmであり，断面形は逆台形を呈する。

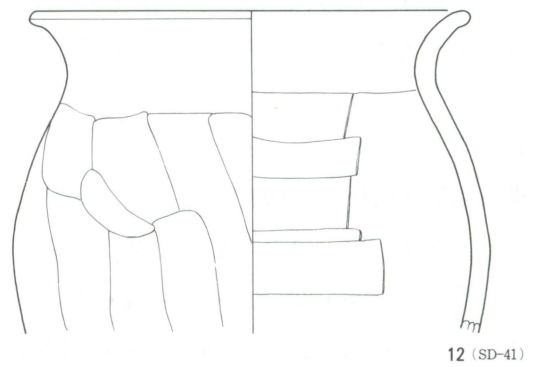
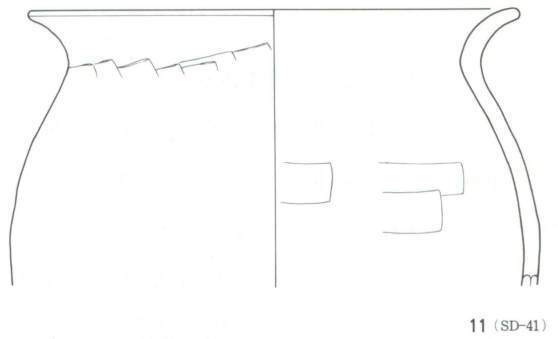
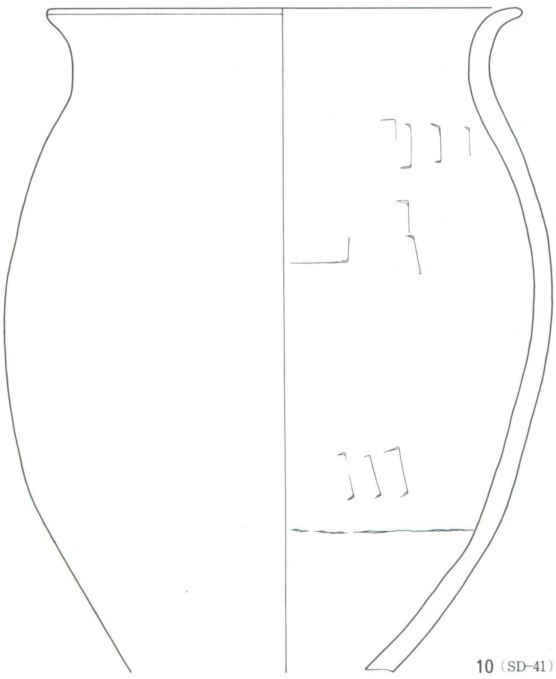
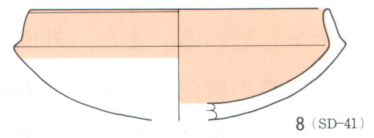
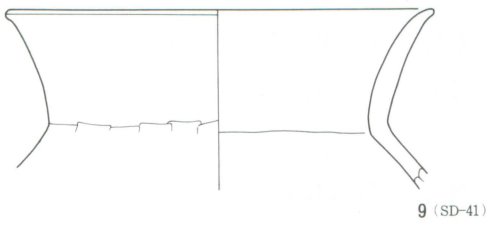
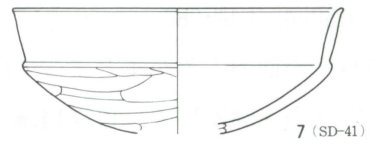
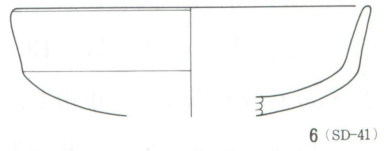
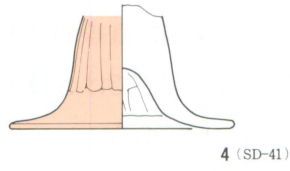
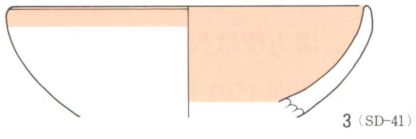
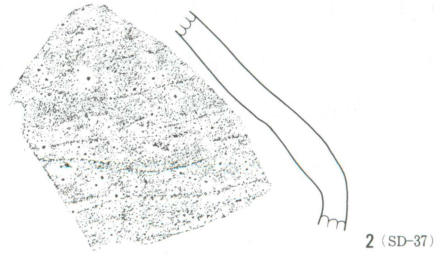
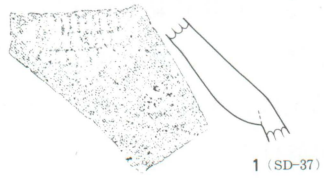
覆土は灰白色土ブロックを含む暗褐色土と，粘性が強い黒褐色土が交互に堆積しており，覆土の堆積状況により，新旧が確認でき，一回の掘り直しが行われている。

SD-37の北側では，南側に見られたような掘立柱建物跡や柱穴（ピット）の集中は確認できず，居住域の北側を画する機能を持っていた可能性が考えられる。

遺物（第57・58図）

主に中世陶器が出土している。18は，瀬戸窯産の折縁深皿で，口径20.6cmである。内外面には刷毛塗りにより灰釉が施されており，灰釉の色調は透明感のある明緑色である。胎土は微細な白色粒を含み，色調は灰白色である。古瀬戸中期様式前半の製品である。

19～21は常滑窯産の捏鉢である。19・20は無台の捏鉢の底部片で，底径12.4cm～15.8cmである。ともに内面は使込まれ平滑になっている。胎土は19は微細な長石粒を多く含み，色調は灰色，20は長石粒を多量に含み，暗赤褐色～暗灰色である。型式は特定できない。21は，高台付きの捏鉢であり，高台端部は欠損するが，高台径は13.8cm前後である。内面は丁寧に使込まれ平滑になっており，自然釉が付着してい



0 (1/3) 10cm

第58図 SD-37・41出土遺物

る。胎土は長石粒、小石を多量に含み、色調は灰白色である。常滑窯編年6a型式の製品である。

第58図1・2は常滑窯産の甕肩部片で、1は外面に格子状の叩き目痕が残され、1・2ともに内面はナデ調整され、外面には黄緑色の自然釉が付着している。胎土はいずれも石英粒、長石粒を含み、色調は茶褐色～灰白色で共通しており、1・2は同一個体である可能性が高い。

SD-41

遺構（第54・60・61図，図版13）

調査区中央部，U-5からW-13にかけて東西に直線的に走る溝である。溝方位はN-78°-Wである。SD-28・50・74・75などと重複し、切り合い関係ではSD-41が古い。確認面での上端幅は70cm～1.1m、深さは45cm～50cmであり、断面形は逆台形である。

覆土は、焼土と黄白色土ブロックを含む灰褐色土の上層と黒灰色土の下層に分けることができる。

遺物（第58図，図版28）

古墳時代後期の土器がまとめて出土している。

3は丸底の土師器杯で、口径14cmである。調整技法は内面がヘラ磨き、外面がヘラ削りであり、内面全面と口縁部外面には赤彩が施される。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は明赤褐色である。

4は土師器高杯の脚部で、脚部径9cmである。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整で、脚裾部の内外面はヨコナデしている。また、外面は赤彩される。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は灰白色である。

5は須恵器甕の肩部片である。外面は平行叩きの後カキ目調整、内面には同心円当て具痕が残される。胎土は長石粒、石英粒を含み、色調は灰白色である。

6～8は、須恵器蓋杯を模倣した土師器杯である。6は蓋で、口径14cm、器高4.4cmである。調整技法は器面の磨滅のため明確にできない。胎土は白色粒、石英粒を含み、色調は明黄褐色～黄橙色である。7も蓋で、口径12.8cm、器高4.9cmである。内面から口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はヘラ削り調整である。胎土は赤色スコリア粒、白色粒を含み、色調は橙色～黒色である。8は杯身で、口径11.6cm、器高4.3cmである。調整技法は7と同様で、内面から口縁部外面までは赤彩が確認できる。胎土は、白色粒を含み、色調は灰褐色～赤色である。

9～12は土師器甕である。9は大型の口縁部を持つ甕で口径16.8cmである。口縁部の内外面はヨコナデ、胴部内面はナデ、外面はヘラ削り調整である。胎土は赤色スコリア粒を多量に含み、色調は黄橙色～赤褐色である。10～12は長胴甕で、口径17cm～19.2cmである。胴部内面はヘラナデ、外面はヘラ削り調整である。胎土は赤色スコリア粒、白色針状物質、黄褐色粒子、石英粒などを含み、色調は黄灰色～黒色である。

SD-44

遺構（第54・61図，図版13）

調査区北部，T-11からV-13グリッドにかけて、蛇行しながら南東から北西に走る溝である。SE-13，SD-27・28・36・37・58・64・106などと重複し、切り合い関係では、いずれの遺構よりも古い。確認面での上端幅は40cm～70cm、深さは12cm～32cmである。

遺物（第59図，図版28）

古墳時代後期の土器が出土している。1・2は須恵器蓋杯の土師器模倣杯である。1は蓋で、口径15.4

cm, 器高4.2cm, 体部内面をナデ調整, 外面はヘラ削りの後ナデ調整, 口縁部内外面はヨコナデ調整している。口縁部外面に赤彩が残されている。胎土は白色粒子を含み, 色調は黄橙色～黒色である。2は杯身で, 口径9.8cm, 器高4.4cmである。調整技法は1と共通する。口縁部内外面から体部外面にかけて赤彩される。胎土は砂粒を含み, 色調は明黄色である。

3は小型の土師器高杯である。杯部口径7.4cm, 器高8.7cm, 脚部径5.8cmである。杯部内面はナデ調整, 外面はヘラ削りの後ナデ調整されており, 脚部は外面をヘラ削り, 内面をヘラナデしており, 脚裾部はヨコナデ調整となっている。杯部内外面と脚部外面は赤彩される。胎土は砂粒を含み, 色調は明黄色～暗赤褐色である。

SD-50

遺構(第55・61・63図)

調査区北部, R-10からY-9グリッドにかけて直線的に南北に走る溝で, 溝方位はN-10°-Eである。SD-37・41・51・54・55などと重複関係にあり, SD-41・51よりは新しく, SD-37・54・55よりも古い。確認面での上端幅は, 40cm～80cm, 深さは10cm～13cmほどである。覆土は炭化物粒を含む黒褐色土である。

遺物(第59図)

古墳時代後期の土器が出土している。4は丸底の土師器杯で, 口径12.8cmである。内面には放射状の暗文のように粗いヘラ磨きが施され, 外面はナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒を含み, 色調は灰黄褐色～明黄褐色である。5は須恵器蓋杯の土師器模倣杯で, 口径15cm, 器高4.4cmである。内外面ともに器面の磨滅が著しく, 調整技法は明確でない。胎土は赤色スコリア粒, 白色粒子を含み, 色調は明褐色である。

6は土師器高杯で, 杯部を欠損する。脚部の現存器高6.8cm, 脚部径8.4cmである。調整技法は外面をヘラ削り, 内面をヘラナデし, 脚裾部はヨコナデ調整である。

SD-52・54・55・56・57・58

遺構(第55・60・61図)

調査区北部, T-8からU-13グリッドにかけて, 東西に走る溝である。近接して互いに掘り直されており, 溝方位は, SD-56を除き, N-80°-W前後で共通し規則性が認められる。

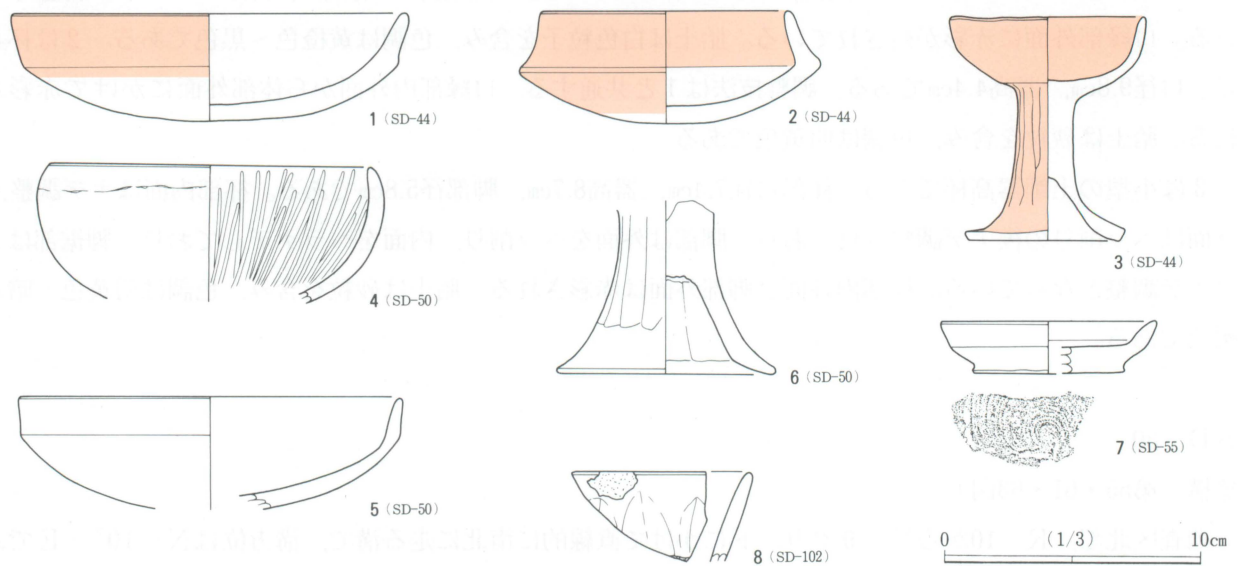
土層断面で確認できる溝の切り合い関係は, 古い順からSD-55→SD-54→SD-56となり, SD-54は, 掘り直される以前のSD-37(旧)よりも新しい。また, SD-58は, SD-37(新)よりも古く, SD-54・55は, SE-4よりも古い。確認面での上端幅は60cm～1mで, 深さは15cm～40cmである。

覆土は, 黒褐色土と暗褐色土であり, 部分的に焼土粒と炭化物粒が含まれている。

これらの溝は, SD-56を除きSD-41とほぼ並行し, 一部でSD-37と重複する溝群であり, SD-37・41とともに調査区中央部の居住域を区画する機能を持っていた可能性が考えられる。

遺物(第59図)

SD-54からは馬の顎骨が, SD-55からは土師質土器が出土している。SD-54から出土した馬の顎骨は, 調査段階ではほぼ原形を留めており, 長さ32cmである。



第59図 SD-44・50・55・102出土遺物

7は土師質土器小皿で、口径8.4cm、器高2cm、底径5.8cmである。ロクロ成形で、底部外面には回転系切り痕が残される。胎土は砂粒を含み、色調は橙色である。

SD-70・71・72・73・74・75

遺構(第55・60・62図)

SD-74は、調査区北部から中央部、S-7からZ-5グリッドにかけて、南北に直線的に走る溝であり、SD-75はW-6からZ-5グリッドにかけてSD-74に重複する形で掘られた溝である。また、SD-70~73は、SD-74・75の南側に接続する溝である。ほぼ直線的に走るSD-74の溝方位はN-12°-Eである。

SD-74は、SD-41・54・55・75・88・90などと重複し、切り合い関係ではSD-75よりも古く、その他の遺構よりは新しい。また、SD-70・71は重複し、SD-70が古い。

最も規模の大きなSD-74は、確認面での上端幅が、北端部では5.8mと広いが、ほとんどの部分が幅3mである。深さは45cm前後である。覆土は灰褐色土が主体である。SD-74は、溝の形状、覆土の特徴がSD-28と類似しており、SD-28・74は同時代の遺構である可能性が高い。

SD-70~72・75は、上端幅80cm~1.5m、深さ5cm~20cm前後であり、SD-73は上端幅が3m~3.5m、深さ30cm前後である。覆土はSD-74と同様、灰褐色土が主体である。

遺物

遺物は出土していない。

SD-90

遺構(第55・60図)

調査区中央部、T-5からV-7グリッドにかけて東西に走る溝である。SD-41と並行しており、溝方位もほぼ一致する。SD-90はSD-74と重複し、切り合い関係ではSD-90が古い。確認面での上端

幅は50cm～1 m, 深さは50cm前後である。

覆土は、粘性の強い灰褐色土が主体であり、上層は明灰褐色土が一気に堆積しており、埋め戻された可能性も考えられる。

SD-90は隣接するSD-89とともに、SD-41・54・55と方向性や規模・形態が類似しており、SD-41・54・55と年代的にも機能的にも類似する遺構であると考えられる。

遺物

遺物は出土していない。

SD-102

遺構（第55・62図）

調査区南部、D-5グリッドに位置する。確認面での長さ1.8m, 幅40cm, 深さ40cmの短い溝で、溝よりも土坑に近い機能を推定できる。覆土は暗褐色土の上層と茶褐色粘質土の下層に分けることができる。

遺物（第59図）

青磁碗が出土している。8は龍泉窯系の青磁碗で、太宰府分類I-5b類の製品である。釉の色調は、くすんだ青緑色で、胎土の色調は灰白色である。

SD-106

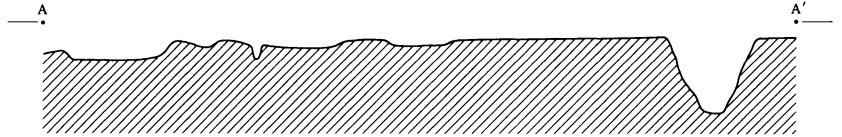
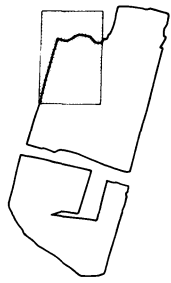
遺構（第55・61図）

調査区中央部、V-11からV-13グリッドにかけて、ほぼ東西方向に走る溝である。SD-28・44と重複し、切り合い関係ではSD-28よりも古く、SD-44よりも新しい。確認面での上端幅は1.4m～1.8m, 深さは50cmで、断面形は船底形を呈する。

覆土は、SD-90と同様の灰褐色土が主体であり、規模・形態も類似しSD-90と近い性格を推定できよう。

遺物

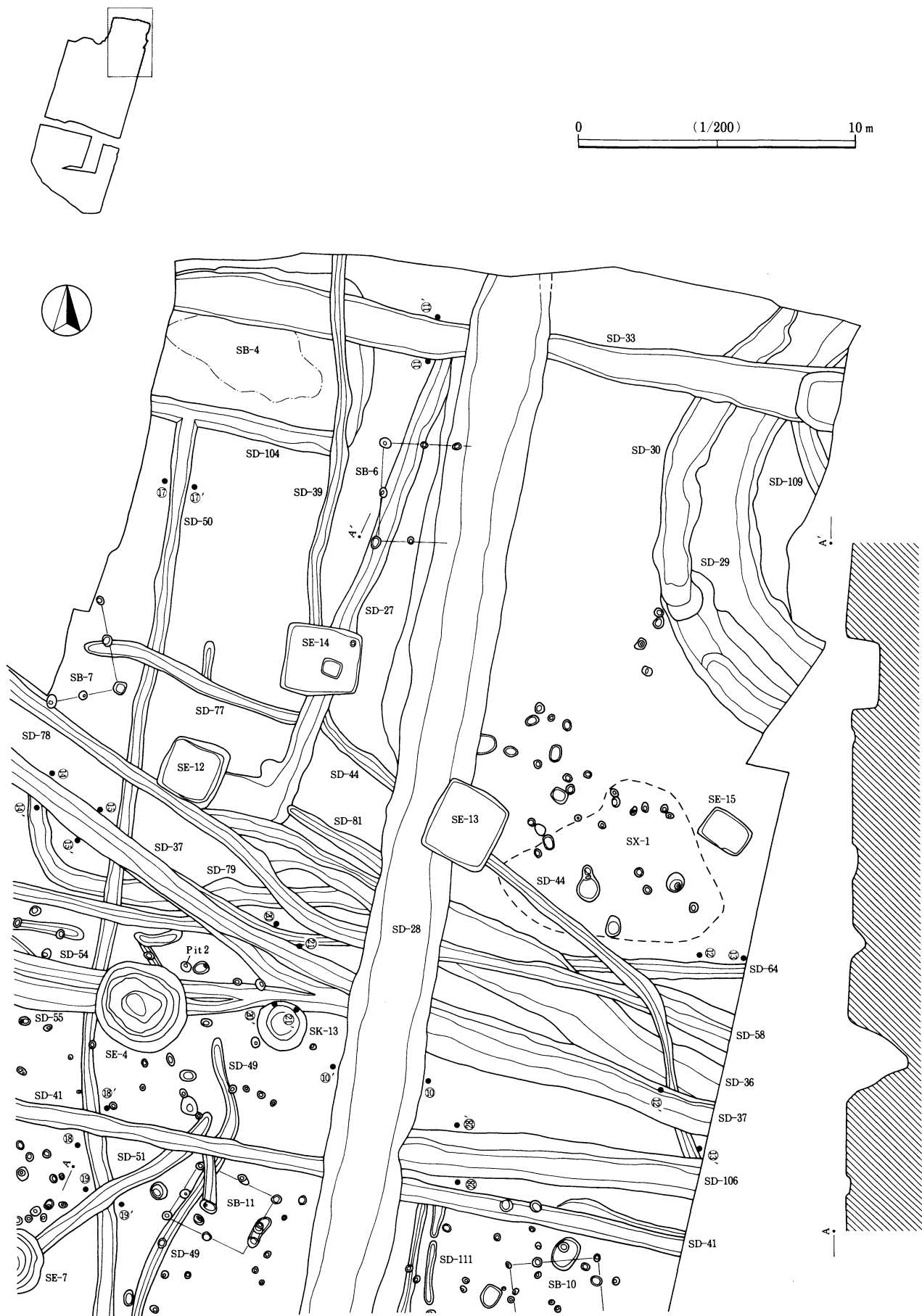
遺物は出土していない。



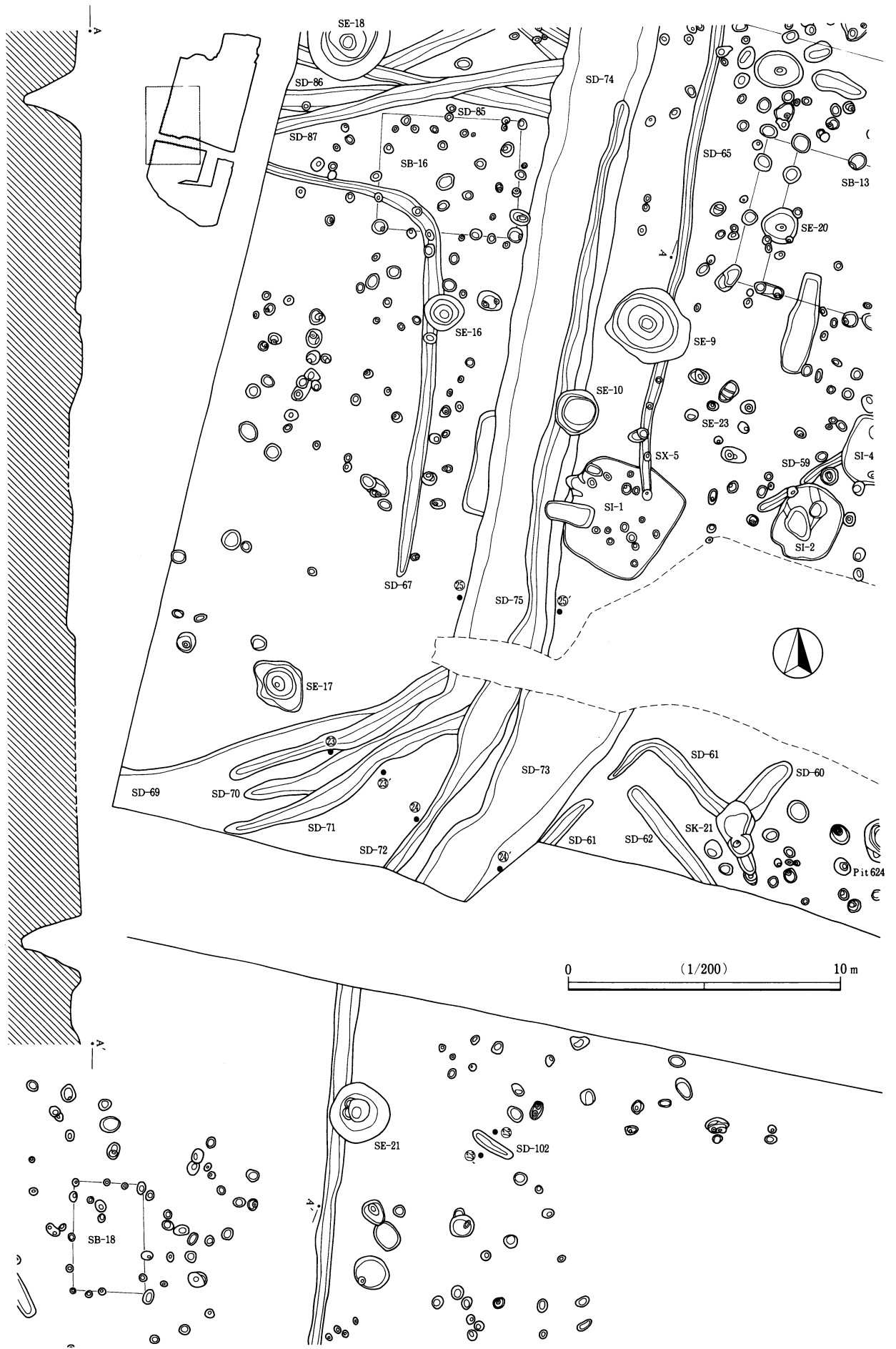
0 (1/200) 10 m



第60図 III層上面遺構全体図(1)



第61図 Ⅲ層上面遺構全体図(2)



第62図 III層上面遺構全体図(3)



第63図 III層上面遺構全体図(4)



第64図 III層上面遺構全体図(5)



第65図 Ⅲ層上面遺構全体図(6)

第2節 IV層上面の遺構と遺物

基本土層のIV層上面で明確に検出できた遺構は水田面1面、土坑3基、溝状遺構2条であり、出土遺物により推定できる年代は弥生時代後期を中心としている。

なお、調査区南部、C-3グリッドからK-9グリッドにかけての範囲では、第1章第3節で述べたように、基本土層Ⅲ層の堆積が全体に薄く、発掘調査の段階で、層位的にⅢ層上面とIV層上面の遺構を分別することが困難であった。このため、調査区南部の遺構の中で、遺構の形状や出土遺物から明確に弥生時代後期と断定できる竪穴住居跡2軒、円形周溝遺構5基と不明遺構(SX)6基、土坑1基についてはこの節で扱い、その他の溝状遺構(SD)と年代が判断できない不明遺構については第1節で扱っている。

また、Ⅲ層の堆積中に掘削されている溝状遺構(SD-45)については、厳密にはⅢ層上面遺構にもIV層上面遺構にも含まれず、出土遺物の年代は古墳時代前期に属する遺構であるが、便宜的にこの節で扱うこととした。

1 竪穴住居跡

SB-2

遺構(第67図)

調査区南部、I-4からI-5グリッドにかけて位置する。いくつかのピットと重複し、切り合い関係ではSB-2が古い。南西部分の約1/4が調査区外に位置しており、全容は確認できないが、平面形態は長径5m前後、短径4m前後の楕円形に復元することができる。確認面から床面までの掘込みの深さは1cm以下で非常に浅い。長径方向で炉の中心を通る、住居の主軸方位はN-26°-Wである。

柱穴は、北壁際で2か所、南壁際で1か所の計3か所で検出しており、調査区外にもう1か所の存在が予想でき、主柱穴は4か所であったと考えられる。柱穴は、径30cm~50cm、床面からの深さは30cm~45cmであり、北壁際の柱穴では、ほぼ同一場所で掘り直しが行われている。

炉は北壁際の柱穴間のほぼ中央に位置し、長さ1.15m、幅40cmの範囲で被熱面が確認でき、中央部に径27cm、深さ15cmの円形の掘込みが存在する。

なお硬化面や周溝及び壁柱穴、貯蔵穴などの付帯施設は検出されなかった。また、住居形態から弥生時代後期の年代を推定できよう。

遺物

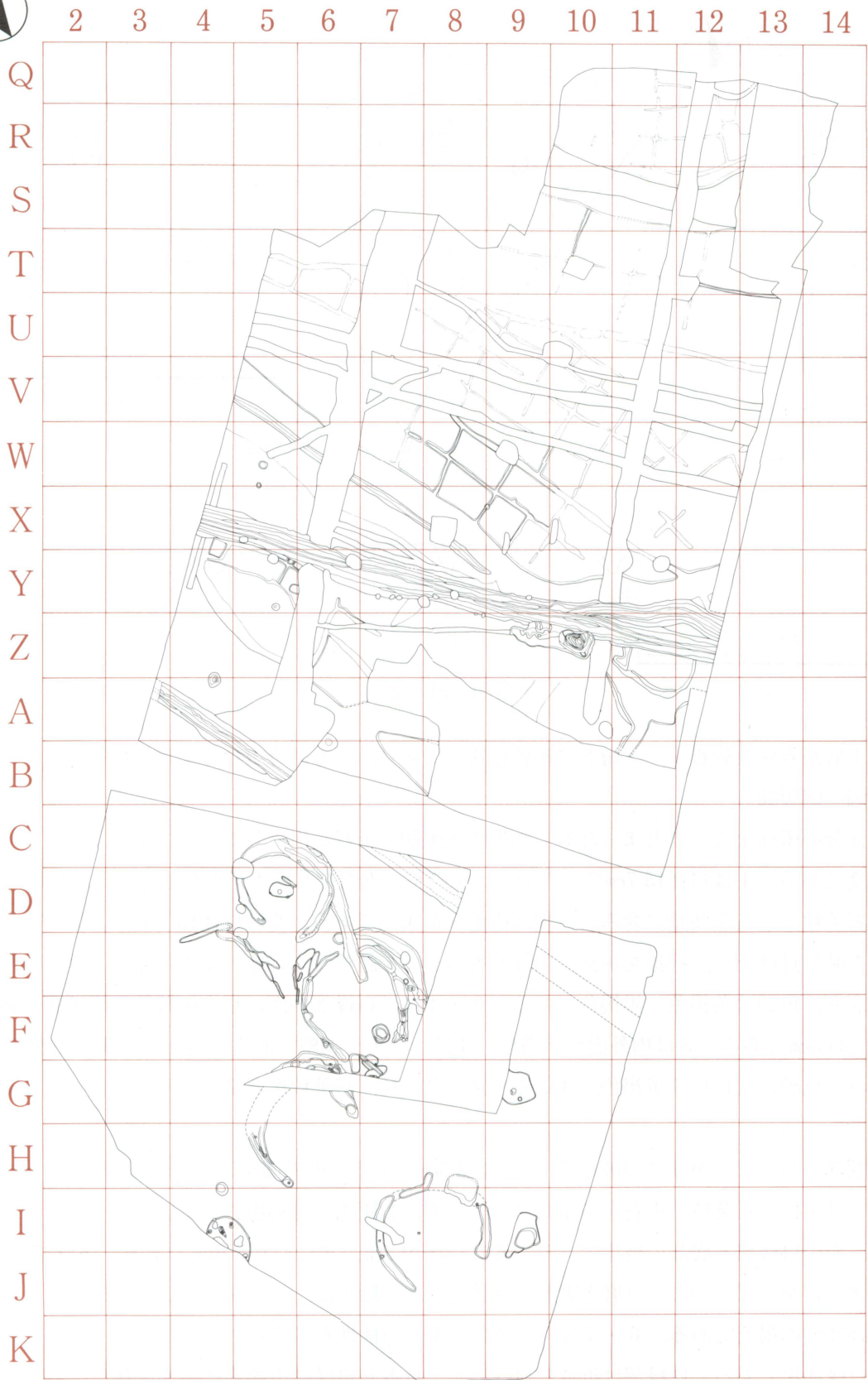
遺物は出土していない。

SB-3

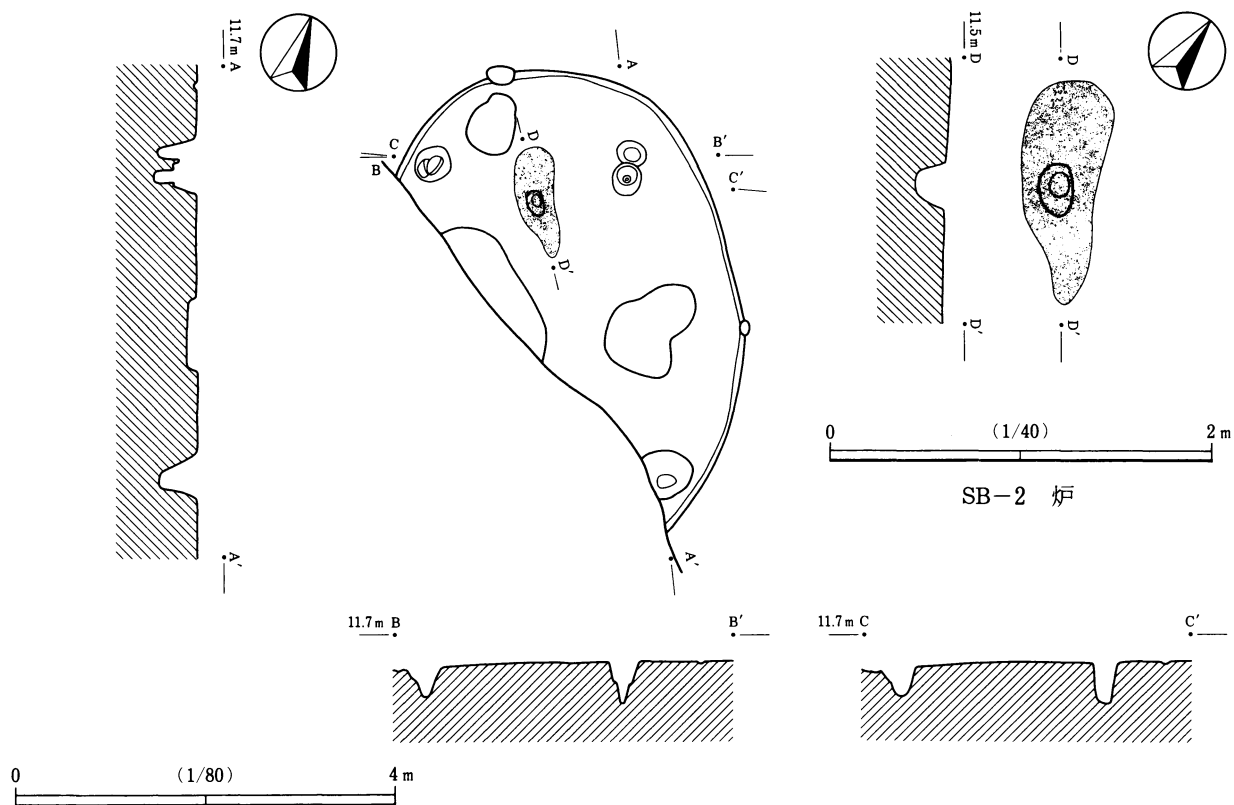
遺構(第68図)

調査区南部、G-9グリッドに位置し、西側部分を攪乱で失っている。平面形態は、現状では3m四方のやや歪んだ隅丸方形であるが、長径3.5m前後の楕円形に復元することも可能である。床面はほぼ平坦で、確認面から床面までの深さは10cmである。

柱穴は確認されていないが、南壁際で径40cm、深さ18cmの掘込みがある。炉は、床面中央から南西寄りの部分に作られている。長さ70cm、幅50cmの範囲が被熱しており、床面から炉床面までの深さは10cmである。



第66図 IV層上面遺構



第67図 SB-2

覆土は、上層が青灰色砂質土、下層が暗褐色粘質土であり、ともに焼土粒と炭化物粒を含む。

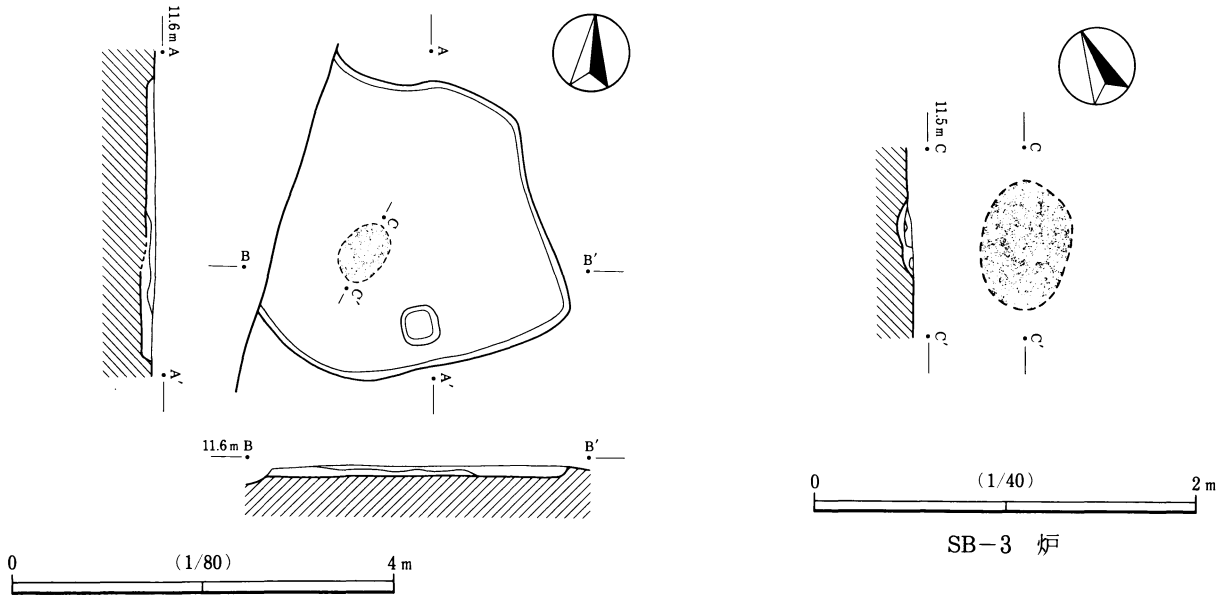
遺物（第68図、図版28）

住居南東部分の床面上で、まとまった形で弥生時代後期の土器が出土している。1～4は、口縁部に押捺を加えた甕である。1は口径15.7cmで、外面をナデ調整、内面をヘラナデ調整している。胎土は赤色スコリア粒、石英粒、小石を多量に含み、色調は橙色～黄灰色である。2は口径18.2cmの小型甕である。口縁部に凸帯を貼り付けた後、押捺を加え、内外面をヘラナデ調整している。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を多量に含み、色調は黄褐色～黒褐色である。3・4は、口縁部外面に粘土紐輪積み痕を残す甕で、口径は24.6cm～25.3cmである。3は内外面ナデ調整、4はヘラナデ調整である。胎土は、3は石英粒、砂粒を多量に含み、色調は灰白色～黄褐色、4は赤色スコリア粒、石英粒を多量に含み、橙色～暗青灰色を呈する。

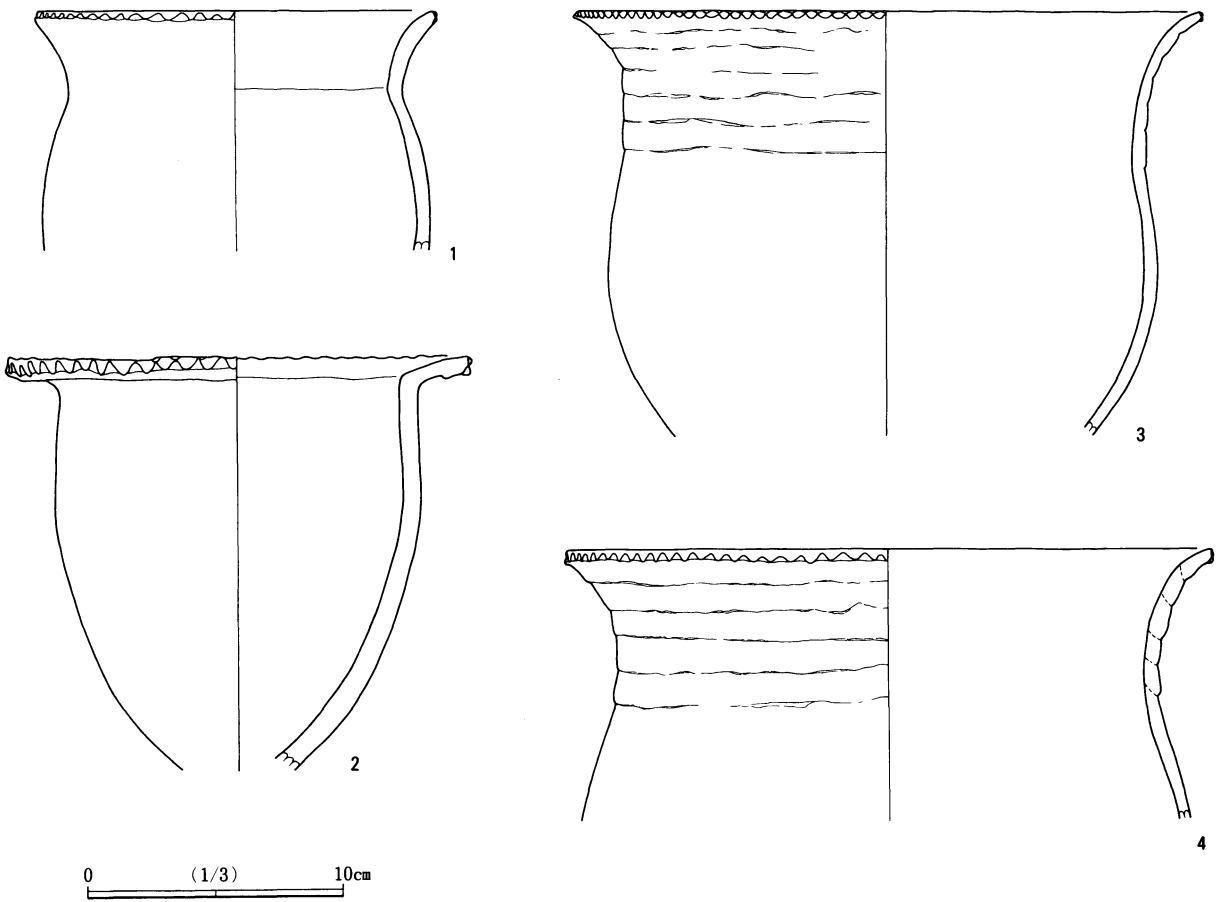
5は甕の胴部から底部にかけての破片で、底径は5.5cmである。内外面を丁寧にナデ調整しており、胎土は赤色スコリア粒、石英粒、小石を多量に含み、色調は黄灰色～暗褐色である。

6・7は、壺の口縁部と底部の破片である。6は口径10.5cm、7は底径6.6cmである。6・7ともに器面の磨滅が著しいが、部分的にヘラ磨き調整が確認できる。胎土は、赤色スコリア粒、砂粒を多量に含んでおり、色調は暗赤褐色である。6・7は同一個体である可能性が考えられる。

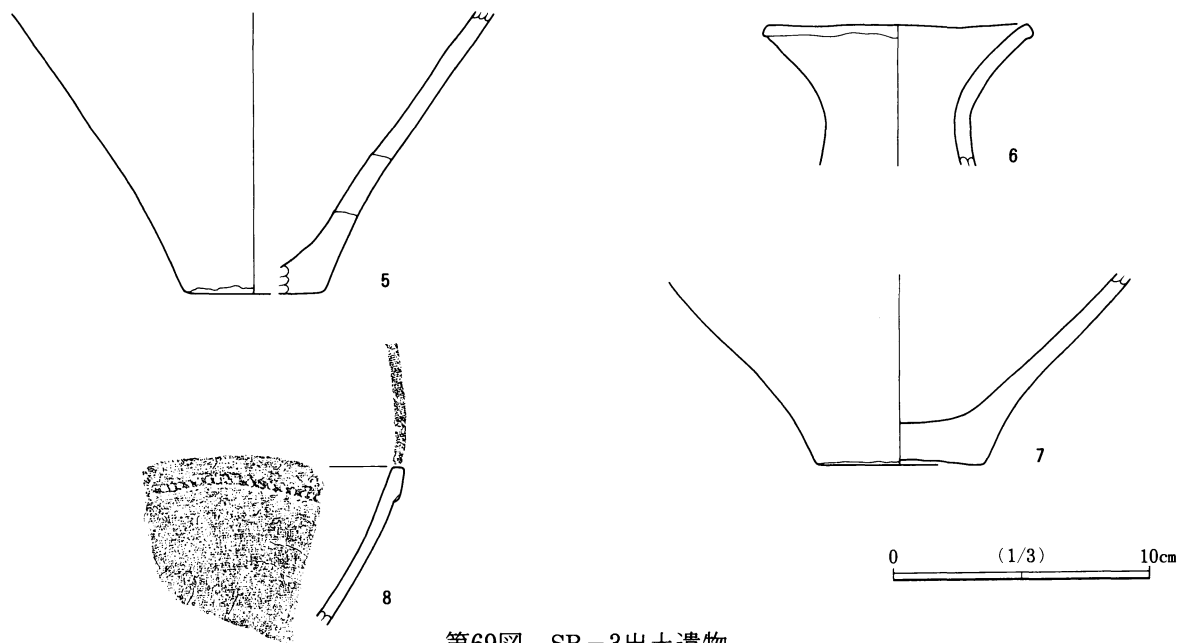
8は鉢の口縁部片である。口縁部は折返し口縁とし、折返し口縁の下端部に縄文原体による押捺を加えている。また、口唇部にはLR縄文を施している。器面の磨耗が著しく調整技法は明確にできないが、内外面とも部分的に赤彩の痕跡が認められる。胎土は、赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は褐色である。



SB-3 炉



第68図 SB-3と出土遺物



第69図 SB-3出土遺物

2 円形周溝遺構

調査の段階では複数の溝状遺構として調査を行ったが、これらの複数の溝は、円形や馬蹄形にまとまった一つの遺構として把握することが可能であり、この遺構を円形周溝遺構として報告する。

1号周溝遺構

遺構（第70図，図版15）

調査区南部，E-6からF-7グリッドにかけて位置する。SD-95・98・99が相当する内側周溝とSD-96が相当する外側周溝との二重周溝で構成され，内側から外側に拡張された可能性も考えられる。また，SD-94Aと重複し，切り合い関係ではSD-94Aが新しい。

内側周溝は東西10m，南北11mほどの範囲を馬蹄形状に区画しており，南東部分に幅4.3mの開口部が存在する。内側周溝に当たるSD-95・98の，確認面での上端幅は50cm～1.2m，深さは20cm～60cm，断面形は船底形か逆台形である。

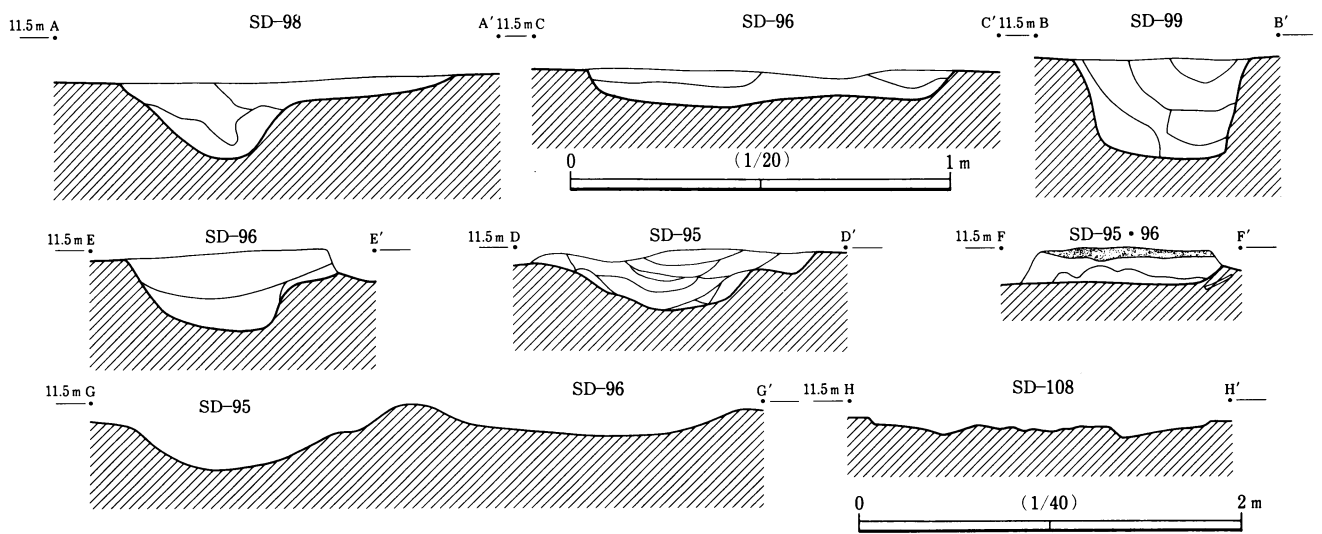
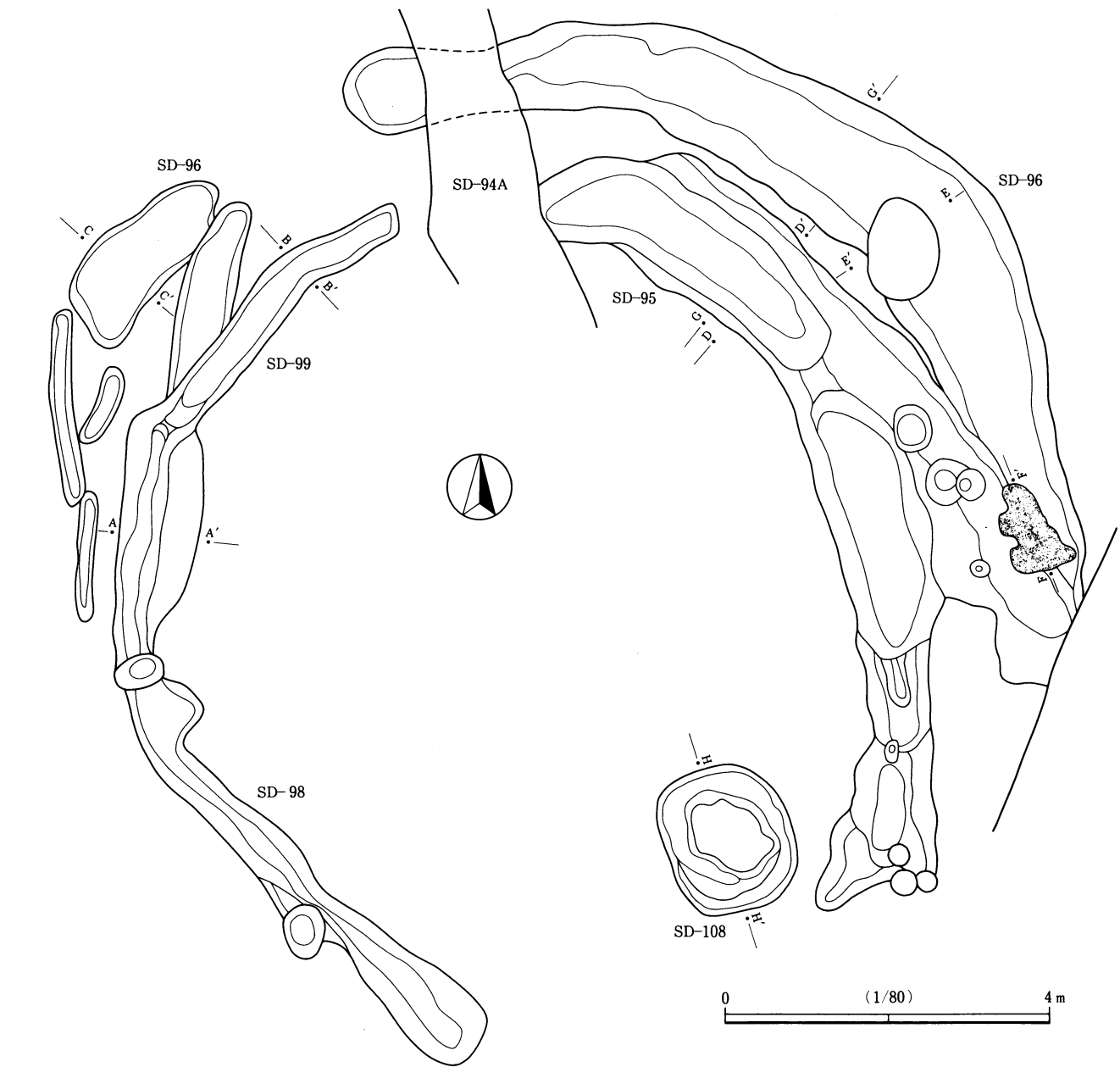
外側周溝であるSD-96は，内側周溝の外側1mの位置に掘られており，西側部分は失われているが，径14m前後の範囲を区画し，内側周溝と同様，南東部分に開口部が存在した可能性が考えられる。確認面での幅は1.6m，深さは15cm～20cm前後と浅く，断面形は船底形である。

覆土の堆積状況は，内側と外側周溝ともに基本的には自然堆積であり，上層は焼土粒や炭化粒，黄灰色粘土ブロック，灰色砂粒を含む灰褐色土，下層は焼土粒や炭化粒を含む黄灰色～暗灰褐色土である。また，外側周溝（SD-96）の南端部分で，覆土上層に堆積した形の焼土集積個所（第70図スクリーン部分）が認められた。

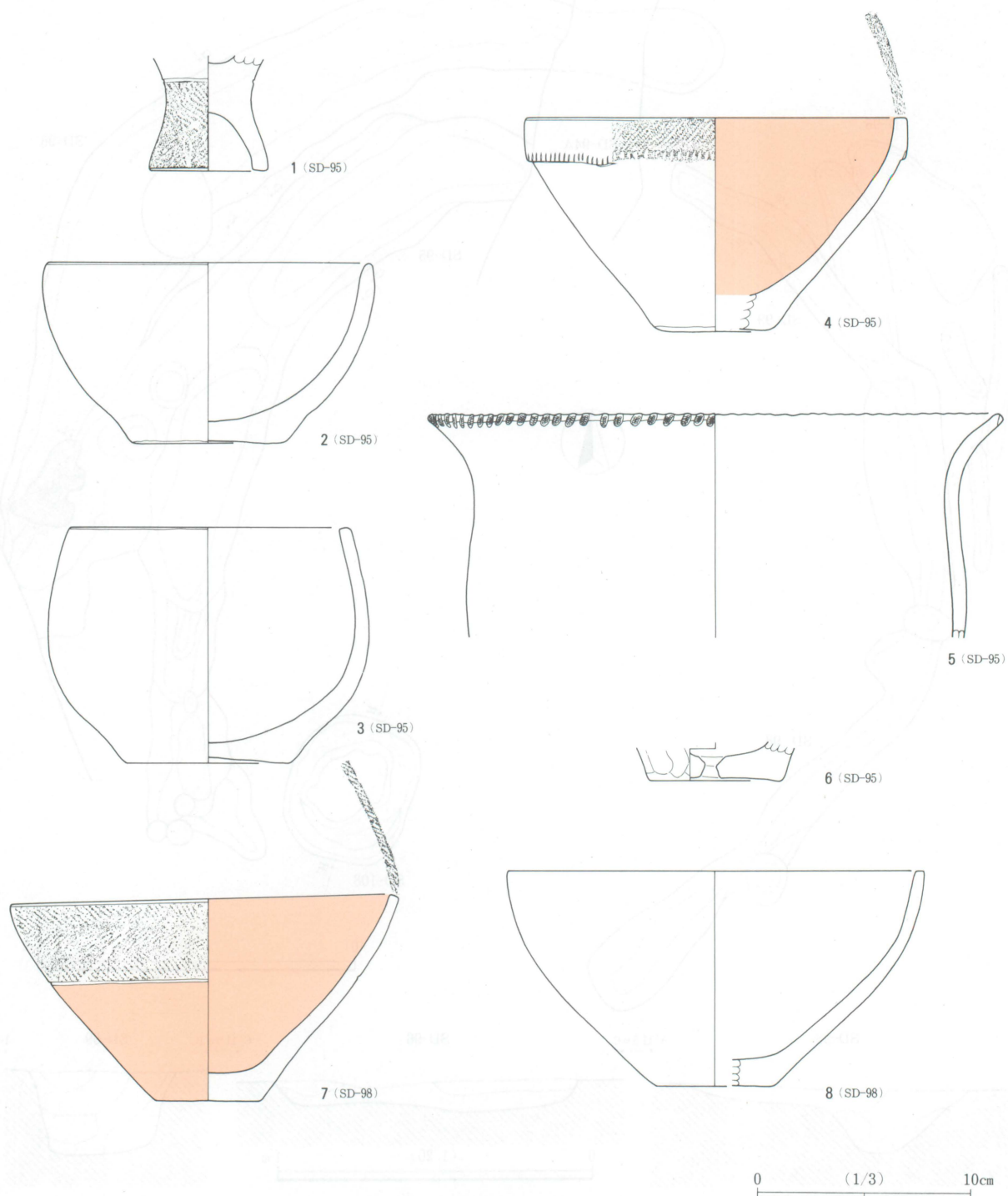
遺物（第71図，図版29）

出土遺物は弥生時代後期の土器で，いずれも内側周溝に当たるSD-95・98から出土している。

1～6は，SD-95からの出土である。1は小型台付鉢の台部と考えられ，脚台部径は5.5cmである。



第70図 1号周溝遺構及びSD-108



第71図 1号周溝遺構出土遺物

外面にはRL・LR縄文による羽状縄文が施されており、上端部を沈線で区画している。体部内面と脚台部内面はナデ調整されている。胎土は赤色スコリア粒、小石を含み、色調は灰白色～黒褐色である。

2・3は、口縁部が内彎するタイプの鉢で、口径13.4cm～15.4cm、器高8.4cm～11cm、底径7.4cm～7.8cmである。調整技法は、内外面をヘラ磨きしており共通する。胎土は、2が赤色スコリア粒、白色粒子を含み、色調は明黄色～黒色であり、3が石英粒、白色粒子を含み、明黄色～黒褐色である。

4は、口縁部を折返し口縁にする鉢で、口径18cm、器高10cm、底径5.8cmである。折返し口縁部分には

LR縄文を施し、下端部に刻みを加えており、口唇部にもLR縄文を施している。内外面はヘラ磨き調整され、内面には赤彩が施される。胎土は赤色スコリア粒、白色粒子を含み、色調は淡褐色～暗褐色である。

5は、口縁部に縄文原体を押捺して波状口縁とした甕で、口径27cmである。調整は内外面ともにナデ調整である。胎土は石英粒、小石を多量に含み、色調は明黄色～橙色である。6は甕の底部片で、底径6.2cmである。内面をナデ調整、外面をヘラナデ調整しており、底部中央に焼成後穿孔が行われている。胎土は砂粒、小石を含み、色調は橙色である。

7・8はSD-98から出土した鉢である。7は口径18.6cm、器高9.4cm、底径5.2cmである。口縁部外面にはRL・RL・LR縄文による羽状縄文を施し、下端部を沈線で区画する。また、口唇部にはLR縄文が施されている。また、施文部を除いた外面と内面は、ヘラ磨きの後、赤彩されている。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は明黄色～オリーブ黒色である。8は口径19.8cm、器高10cm、底径5.8cmである。内外面をヘラ磨きした後に赤彩されている。胎土は赤色スコリア粒、白色針状物質を含み、色調は明黄褐色～黄灰色である。

SD-108

遺構（第70図）

1号方形周溝遺構の開口部、F-7グリッドに位置する。南北1.8m、東西1.6mの範囲を隅丸方形に区画する溝で、1号周溝遺構に付属する遺構であろう。確認面での上端幅は40cm～50cm、深さは10cmである。覆土は焼土と炭化粒を含む褐色系の粘土層である。

遺物

遺物は出土していない。

2号周溝遺構

遺構（第72図、図版15）

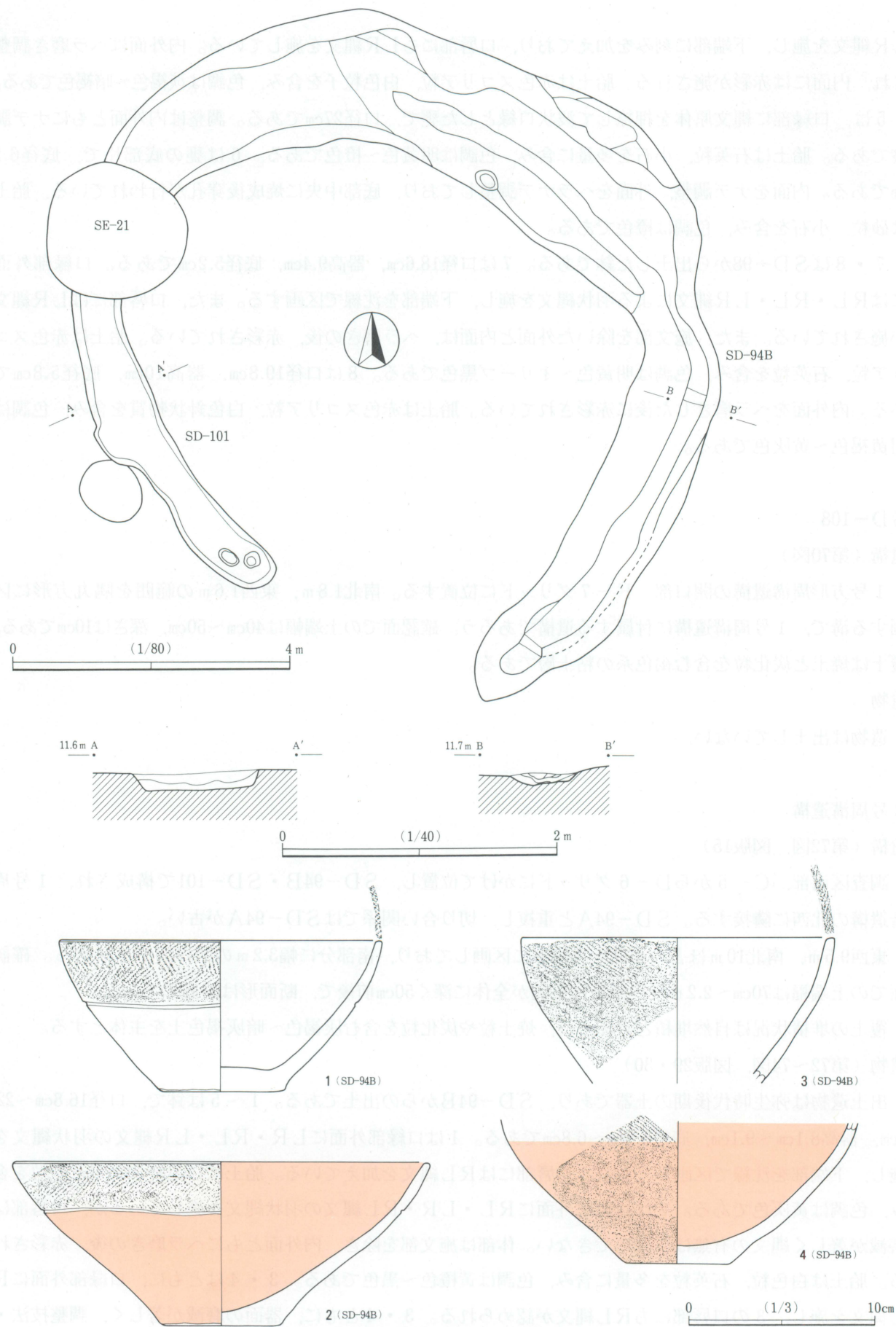
調査区南部、C-5からD-6グリッドにかけて位置し、SD-94B・SD-101で構成され、1号周溝遺構の北西に隣接する。SD-94Aと重複し、切り合い関係ではSD-94Aが古い。

東西9.5m、南北10mほどの範囲を馬蹄形に区画しており、南部分に幅3.2mの開口部が存在する。確認面での上端幅は70cm～2.2mで、深さは東側が全体に深く50cm前後で、断面形は船底形である。

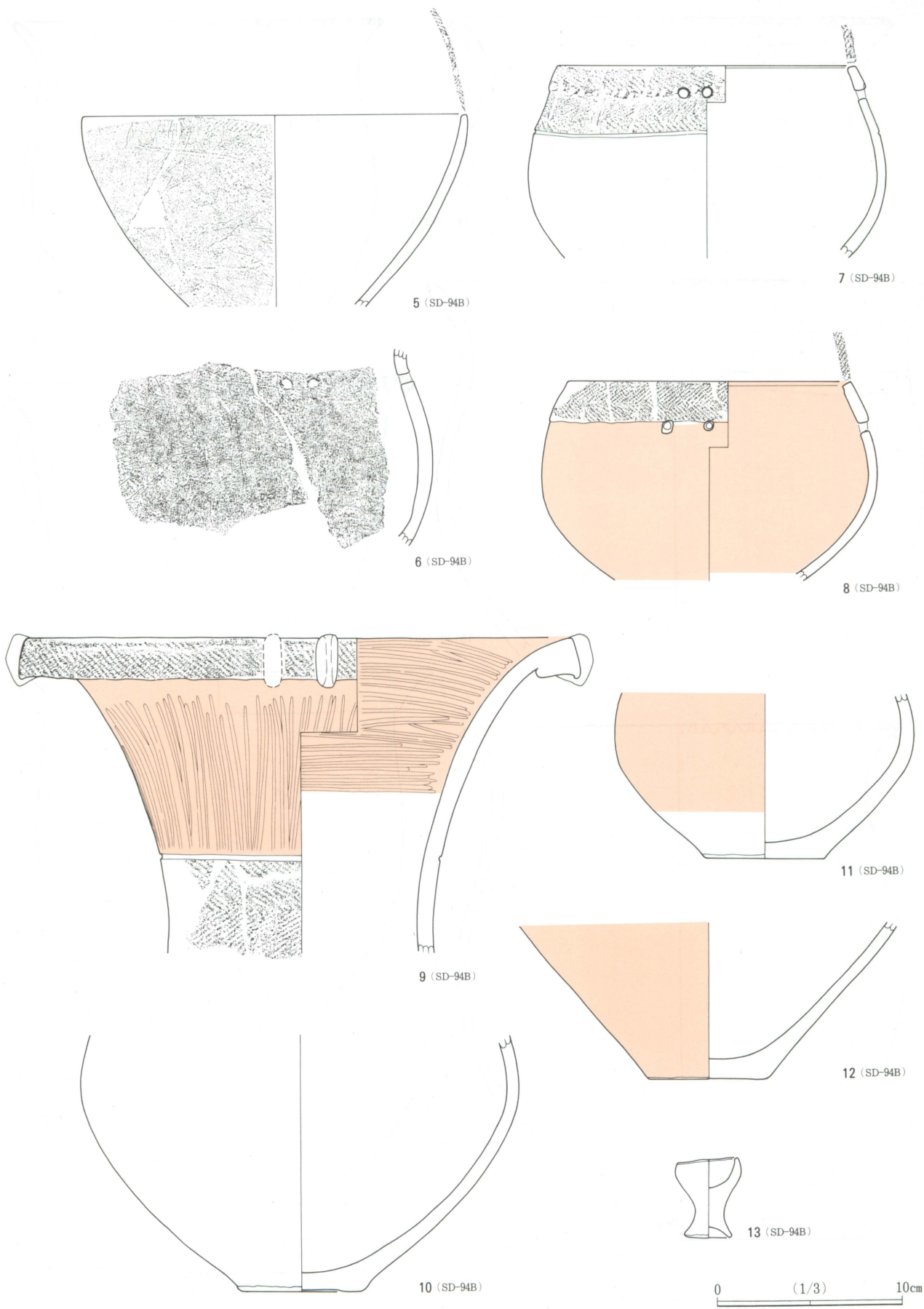
覆土の堆積状況は自然堆積と考えられ、焼土粒や炭化粒を含む灰褐色～暗灰褐色土を主体とする。

遺物（第72～74図、図版29・30）

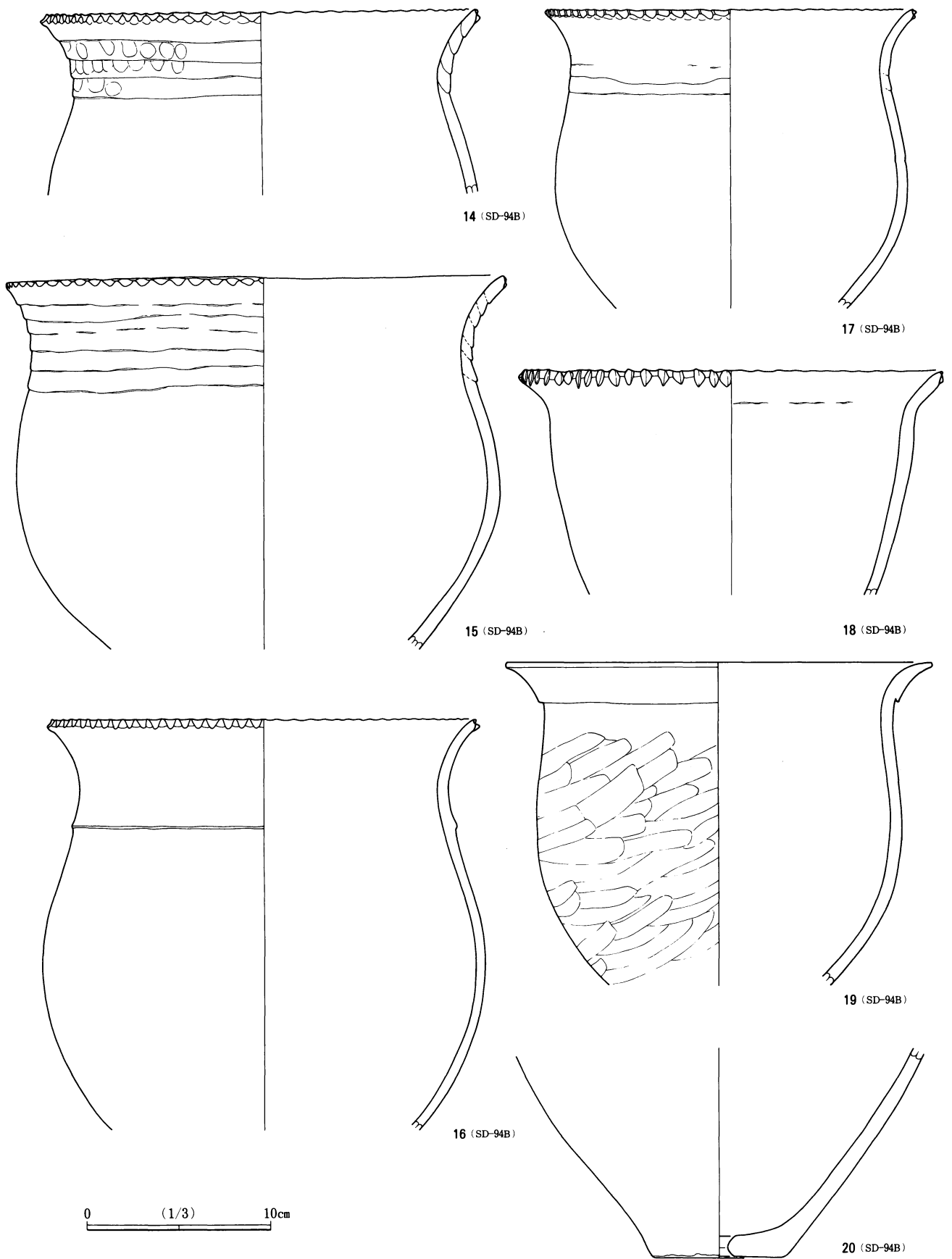
出土遺物は弥生時代後期の土器であり、SD-94Bからの出土である。1～5は鉢で、口径16.8cm～22.8cm、器高8.1cm～9.1cm、底径5.8cm～6.8cmである。1は口縁部外面にLR・RL・LR縄文の羽状縄文を施し、下端部を沈線で区画しており、口唇部にはRL縄文を加えている。胎土は白色針状物質と砂粒を含み、色調は黄灰色である。2は口縁部外面にRL・LR・RL縄文の羽状縄文を施しているが、口唇部は磨滅が著しく縄文の有無は明確にできない。体部は施文部を除き、内外面ともにヘラ磨きの後、赤彩される。胎土は白色粒、石英粒を多量に含み、色調は黄橙色～黒色である。3・4はともに、口縁部外面にRL縄文を施し、3の口唇部にもRL縄文が認められる。3・4ともに、器面の磨滅が著しく、調整技法・赤彩については明確にできない。5の口縁部外面には、部分的にLR・RL縄文が施され、下端部を沈線



第72図 2号周溝遺構と出土遺物(1)



第73図 2号周溝遺構と出土遺物(2)



第74図 2号周溝遺構と出土遺物(3)

で区画し、口唇部にはLR縄文とRL縄文を交互に施文している。施文部を除きヘラ磨き調整されている。胎土は石英粒、白色針状物質を含み、色調は灰黄色～黒色である。

6は甕の胴部片の可能性が考えられ、内外面共ヘラ磨き調整され、頸部付近に2個一組の焼成前の穿孔が行われている。胎土は白色針状物質、石英粒を含み、色調は暗橙色である。

7・8は無頸壺で、口径は15.4cm～16cmである。ともに口縁部は折返し口縁となっており、折返し部直下に焼成前の2個一組の穿孔が行われている。7は、折返し部の下端に刻みを施し、折返し部から胴部上半部にかけて、RL・LR・RL縄文の羽状縄文を施文している。そして、その下端部を沈線で区画し、口唇部にはRL縄文が施されている。施文部以外の器面はヘラ磨き調整されている。胎土は、白色針状物質、石英粒を含み、色調は暗黄橙色である。8は折返し口縁部分にLR・RL縄文の羽状縄文を施し、口唇部にはRL縄文が加えられる。施文部以外の器面は、ヘラ磨き調整の後、赤彩される。胎土は灰白色粒を多く含み、色調は橙色である。

9～12は壺である。9は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、口径29.6cmである。口縁部は折返し口縁であり、折返し部にはRL縄文を施し、2本一組の棒状浮文を四方向に貼り付けている。頸部にはRL・LR縄文の羽状縄文を施し、上端部を沈線で区画する。施文部以外の器面はヘラ磨き調整され、口縁部の内外面は赤彩される。胎土は白色粒、石英粒を含み、色調は暗橙色である。10～12は、壺の胴部から底部にかけての破片で、底径6.2cm～6.4cmである。いずれも外面はヘラ磨き調整されているが、内面は器面の剥落が著しく調整技法を明確にできない。胎土は白色粒、石英粒、赤色スコリア粒などを含み、色調は黄橙色～黄灰色である。

13は手捏成形による台付のミニチュア土器で、口径3.2cm、器高4.3cm、台部径2.4cmである。器面の調整はナデ調整である。胎土には石英粒を含み、色調は黄橙色である。

14～17は甕で、いずれも口縁部に押捺を加えるものである。14～16は口径23.4cm～27.4cmの大型の甕であり、14・15の口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残される。調整技法は、いずれもヘラナデかナデ調整である。胎土には白色粒、石英粒、小石などを多く含み、色調は黄褐色・橙色～黒色である。17は、口径20cmの甕である。調整技法は15と共通する。胎土は赤色スコリア粒、白色針状物質、石英粒を含み、暗橙色～黒色である。

18は、口唇部に刻みを加えた甕で、口径22.8cmである。内外面をナデ調整しており、胎土は白色粒、石英粒を多量に含み、色調は灰褐色～黒色である。

19は、折返し口縁の甕で、口径は23.2cmである。胴部外面は、粗いヘラナデ調整、内面はヘラナデ調整の後、ヘラ磨き調整が施される。胎土は黒色粒、石英粒を含み、色調は暗黄灰色～黒色である。

20は甕の胴部から底部にかけての破片で、底径7.4cmである。調整は、内外面ともにナデ調整で、底部中央に焼成後の穿孔が行われている。胎土は石英粒を多量に含み、色調は暗赤褐色～黒色である。

3号周溝遺構

遺構（第75図）

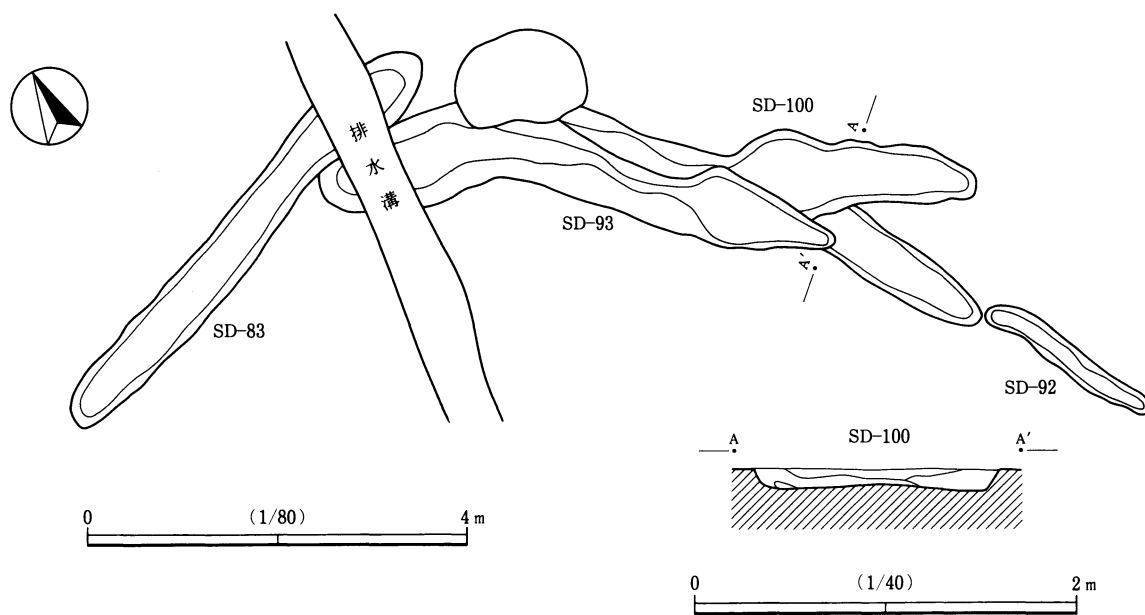
調査区南部、D-4からE-5グリッドにかけて位置する。SD-83・SD-92・SD-93・SD-100により構成される。隣接する1・2号周溝遺構のように馬蹄形の区画溝としては確認できず、厳密に円形周溝か否かは断定できないが、1・2号周溝遺構と覆土の状況が類似しているため、周溝遺構として報告

する。この遺構が1・2号周溝遺構と類似したものと仮定した場合、検出した溝は、馬蹄形区画の北東部分に当たり、南側部分は大きく失われた形となっている。検出した範囲の周溝幅は、確認面で50cm～90cm、深さは15cm～20cm程度である。

覆土の堆積状況は自然堆積と考えられ、SD-93部分が黄灰色砂粒を含む灰褐色砂質土、SD-100部分が灰褐色粘質土ブロックを含む暗灰褐色土を主体としている。

遺物

遺物は出土していない。



第75図 3号周溝遺構

4号周溝遺構

遺構（第76図）

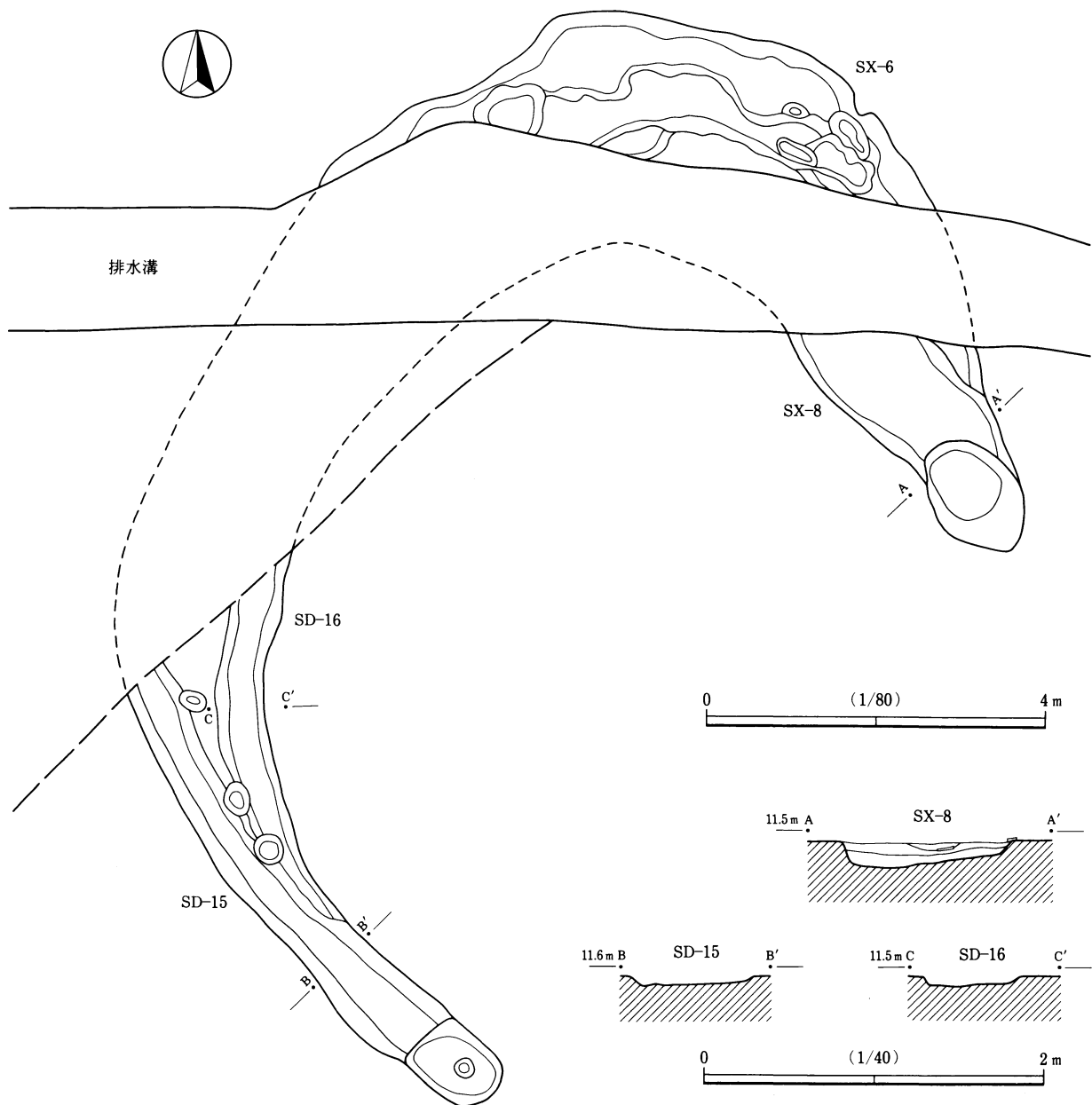
調査区南部、F-5からH-5、G-6グリッドにかけて位置する。SX-6・SX-8、SD-15・SD-16により構成され、1号周溝遺構の南側に隣接する。SX部分とSD部分で調査年度が異なり、別々の遺構として扱われていたが、覆土、遺物、形状が共通するため同一の円形周溝遺構と判断した。

部分的に攪乱を受けているが、南北11m、東西9mの範囲を「コ」の字状に区画する平面形態に復元でき、南東方向に幅8mの開口部が存在する。確認面での周溝幅は、北側のSX-6・SX-8部分で3m前後、南側のSD-16部分で90cm～1.4mであり、深さは北側のSX-8部分で20cm前後、南側のSD-15部分で5cm前後となっている。断面形は船底形である。

覆土の堆積状況は自然堆積と考えられ、焼土粒・炭化粒、灰黄色粘土ブロックを含む暗褐色土を主体とする。

遺物（第77図、図版30）

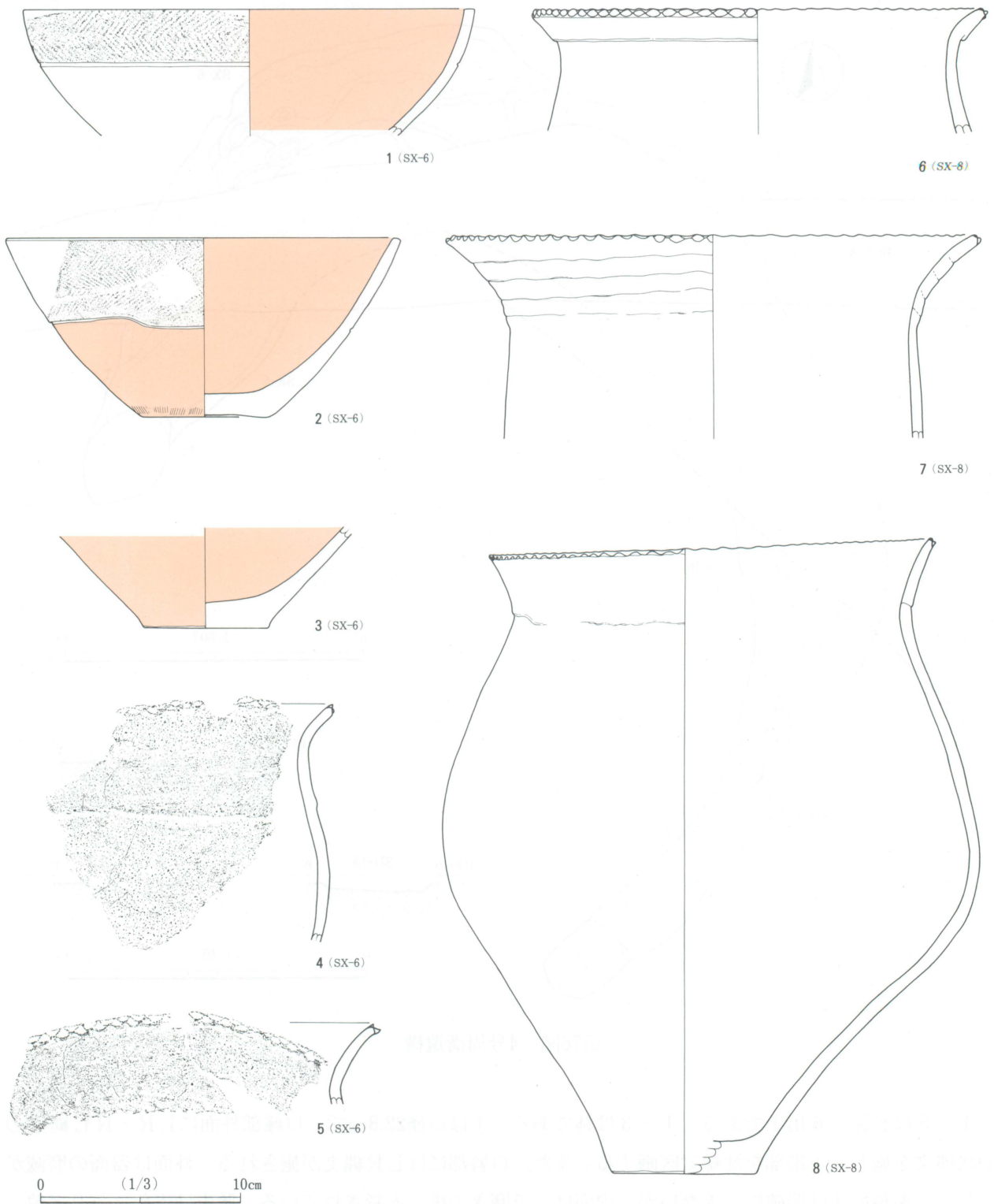
出土遺物は弥生時代後期の土器であり、周溝北側部分に当たるSX-6・SX-8からまとめて出土している。



第76図 4号周溝遺構

1～5はSX-6出土である。1～3は鉢である。1は口径22.8cmで、口縁部外面にLR・RL縄文の羽状縄文を施し、下端部を沈線で区画する。また、口唇部にはLR縄文が施される。外面は器面の磨滅が著しく、調整技法は明確にできないが、内面はヘラ磨きの後、赤彩されている。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は灰白色～明黄褐色である。2は口径19.8cm、器高8.8cm、底径6.3cmであり、口縁部外面にはRL・LR・RL・LR縄文の羽状縄文を施し、下端部を沈線で区画する。施文部以外の部分はヘラ磨きの後、赤彩される。胎土は赤色スコリア粒、白色粒を含み、色調は明黄褐色～黒色である。3は、鉢の底部片で、底径6.2cmである。内外面ともにヘラ磨き調整の後、赤彩される。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は淡黄色～黒色である。

4・5は、甕の口縁部片で、口縁部に上下方向から押捺を加えている。4の肩部付近には胴部との接合



第77图 4号周溝遺構出土遺物

痕が残されており、4・5ともに調整技法はナデ調整である。胎土は、4が石英粒、砂粒を含み、色調はオリーブ褐色～黒色、5が白色粒を含み、色調は黄橙色～橙色である。

6～8はSX-8出土の甕で、いずれも口縁部に押捺を加えるものである。6は口径22.8cmで、口縁部を折返し口縁としており、内外面はナデ調整されている。胎土は石英粒を多量に含み、色調は黄橙色～暗青灰色である。7は、口径26.8cm、口縁部に粘土紐の輪積み痕が残される。外面はナデ調整、内面は横方向のヘラ磨きが施されている。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を多量に含み、色調は灰白色～黄灰色である。8は口径22.4cm、器高31cm、底径7.4cmである。口縁部の一部に粘土紐の輪積み痕が残され、内外面はヘラナデ調整される。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を多量に含み、色調は明黄褐色～オリーブ黒色である。

5号周溝遺構

遺構（第78図）

調査区南部、H-7からJ-7、I-9グリッドにかけて位置し、SD-10B・SD-12・SD-19・SX-4で構成される。4号周溝遺構の南東に位置する。SD-12とSD-10B、SX-4とSD-20とが重複し、切り合い関係ではSD-10Bが新しく、SX-4とSD-20については明確にできなかった。

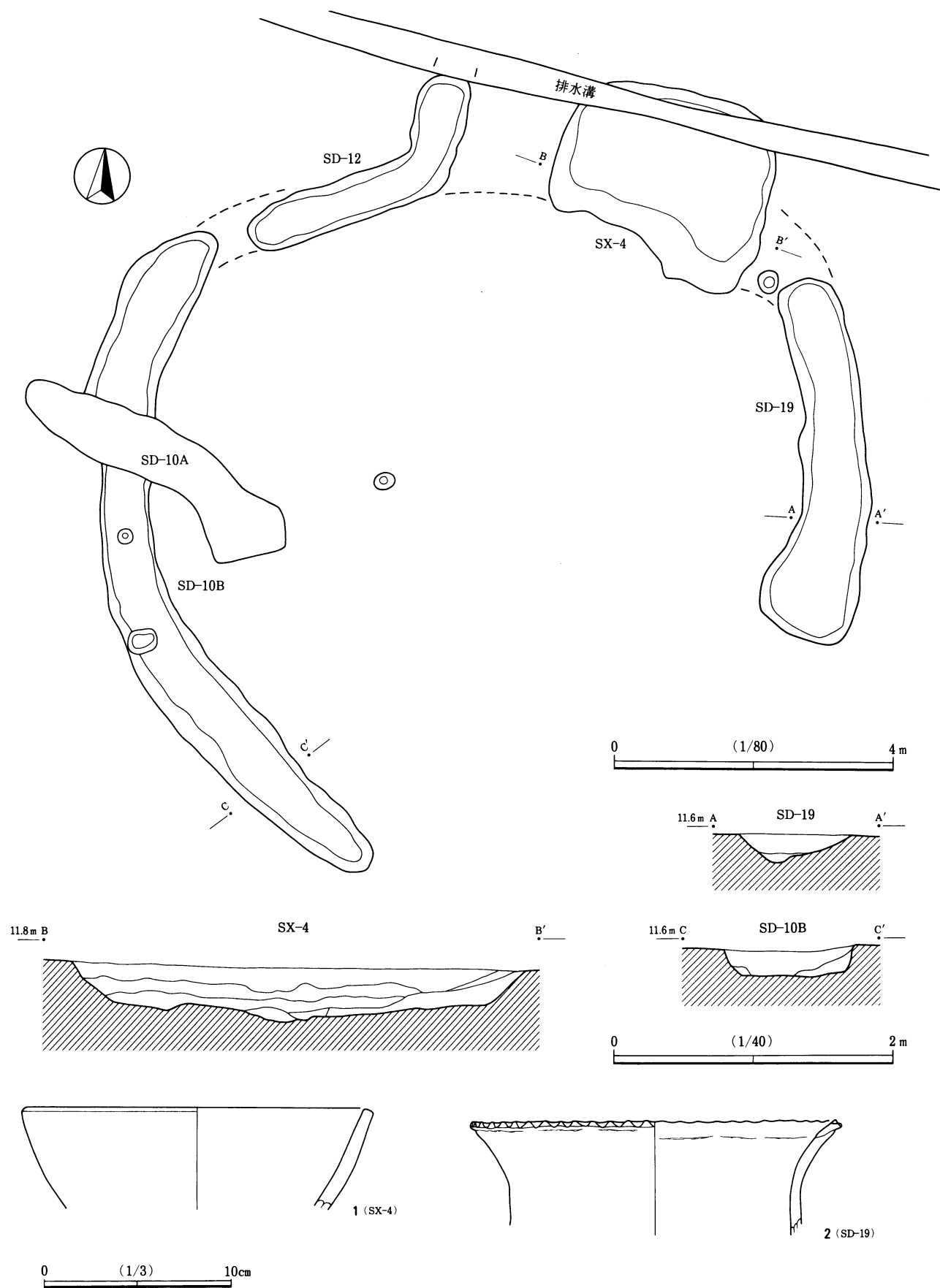
南北9.5m、東西11.5mの範囲を馬蹄形に区画し、南側に幅6.5mの開口部が存在する。確認面での周溝幅は、SX-4部分で2.5m、その他の部分で70cm～1.4mである。深さは、SX-4部分で70cm、その他の部分で30cm～40cm程度である。断面形は、船底形もしくは逆台形である。

覆土の堆積状況は自然堆積と考えられ、覆土は、焼土粒や灰黄色粘土ブロックを含む暗灰色土を主体とし、部分的に灰色粘土ブロックを含む赤褐色土が下層に堆積している。

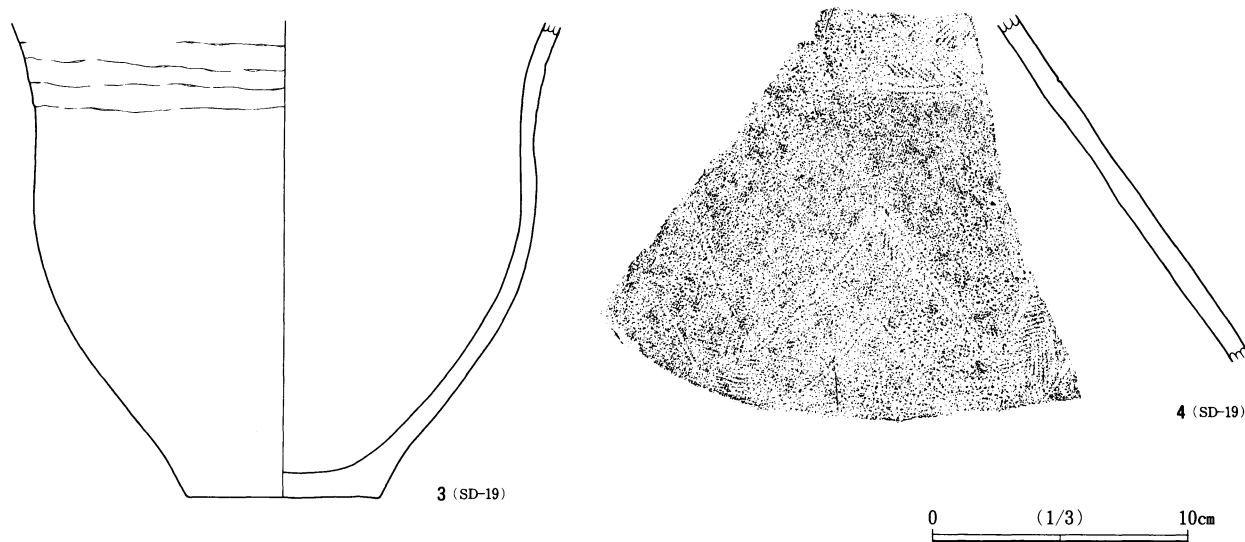
遺物（第78・79図）

SD-19・SX-4から弥生時代後期の土器が出土している。1は、SX-4出土の鉢である。口径19cmで、内外面をヘラ磨き調整している。胎土は赤色スコリア粒、白色粒、白色針状物質を含み、色調は黄灰色～黒色である。

2～4はSD-19からの出土である。2は口径20cmの甕である。口縁部に押捺を加えているが、調整技法は器面の磨滅が著しく明確にできない。胎土は石英粒、黒色粒を多量に含み、色調は橙色である。3は、口縁部を欠損する甕で、残存器高18.4cm、底径7.4cmである。口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残され、内外面はナデ調整される。胎土は石英粒、小石を多量に含み、色調は暗赤褐色～黒褐色である。4は大型壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部付近にはLR・RL縄文による羽状縄文を施し、下端部を沈線で区画しており、肩部にはRL・LR縄文による羽状縄文を施した後に、上下を沈線により山形に区画している。外面の沈線区画の外側は、ヘラ磨き調整、内面はヘラナデ調整されている。胎土は、石英粒、黒色粒、小石を多量に含み、色調は黄橙色～橙色である。



第78図 5号周溝遺構と出土遺物



第79図 5号周溝遺構出土遺物

3 不明遺構

SX-3

遺構（第80図）

調査区南部，I-9グリッドに位置する。5号周溝遺構の東側に隣接する。西壁部分は失われており，全体の状況は不明であるが，平面形態は東西1.7m～3m，南北3.5mの台形状であり，確認面からの深さは10cm程度である。南壁際に長径2.4m，短径1.8mの楕円形の掘込みがあり，確認面から底面までの深さは20cmほどである。断面形は船底形である。

覆土はレンズ状の自然堆積で，炭化物，土器細片を含む褐色土が主体となっている。

遺物（第80図）

南壁際の掘込み部分に集中して，弥生時代後期の土器が出土している。1は甕で，口径20cmである。口縁部に押捺を加えるもので，内外面はナデ調整である。胎土は石英粒，小石を多量に含み，色調は黄橙色～黒色である。2は鉢で，口径15.4cmである。外面は器面の磨滅が著しく調整技法は明確にできないが，内面はヘラ磨き調整である。胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は明黄褐色～灰褐色である。

SX-10

遺構（第80図）

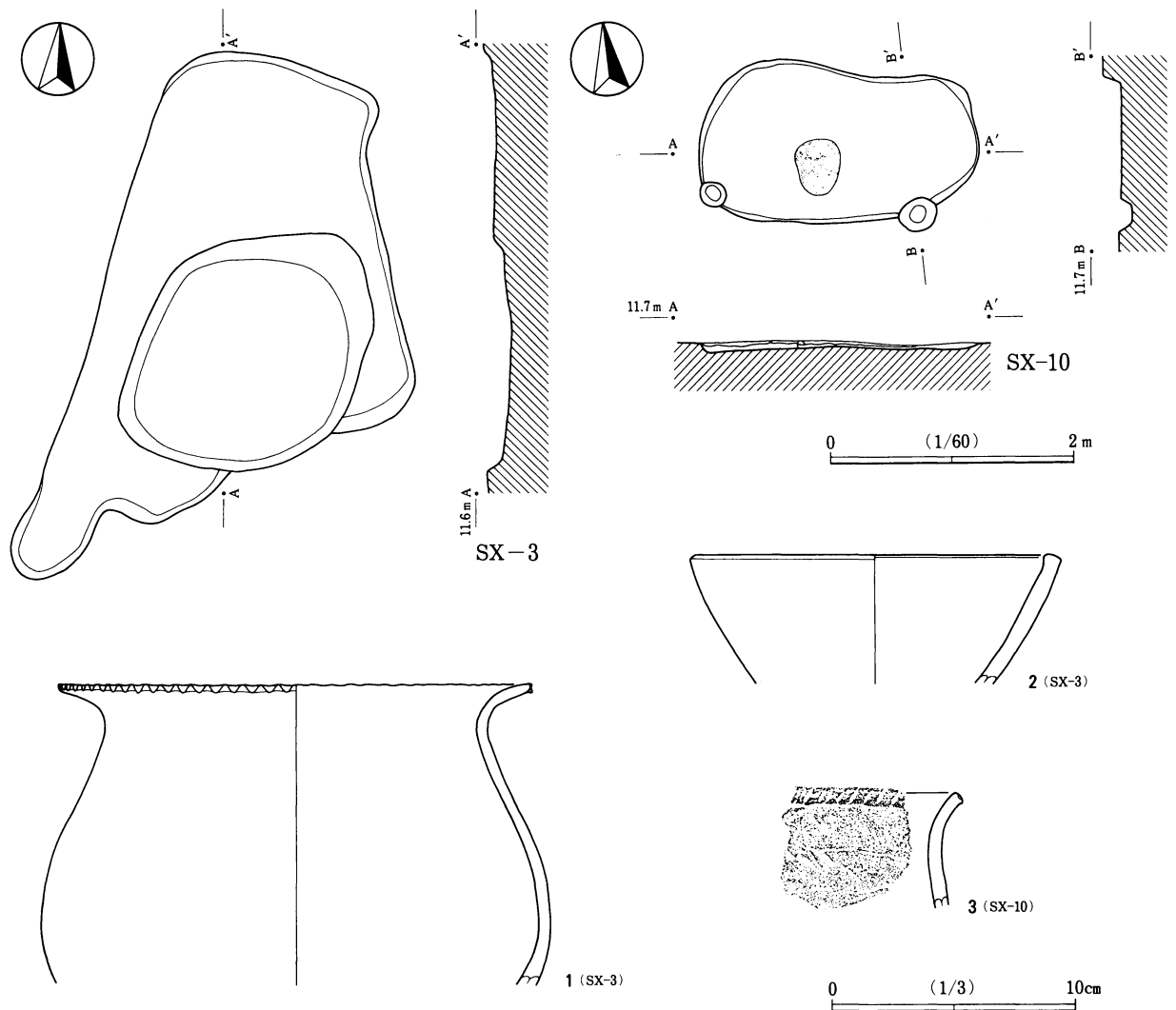
調査区南部，D-5グリッドに位置する。2号周溝遺構の区画内のほぼ中央に位置しており，2号周溝遺構と同時期に存在した可能性が考えられる。平面形態は，東西2.3m，南北1.35mの隅丸の長方形であり，確認面から床面までの深さは6cmである。床面は平坦で，中央部分に径45cmほどの円形の被熱面が存在する。また，南壁に重なる形で径20cm～30cm，深さ10cm程度のピットが存在する。

覆土は，レンズ状の自然堆積であり，部分的に焼土ブロック，焼土粒，炭化物，黄灰色砂質土を含む暗褐色土である。

2号周溝遺構と関連する住居跡の可能性も考えられるが断定できない。

遺物（第80図）

3は甕の口縁部片である。口縁部にはヘラ状工具による刻みが加えられている。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は灰黄褐色～黄褐色である。



第80図 SX-3・10と出土遺物

SX-11・12・13, SD-103

遺構（第81図）

調査区南部，F-6からG-7グリッドに位置する。SX-11～13は，1号周溝遺構の開口部に位置する土坑状の遺構であり，機能的に1号周溝遺構と関連する可能性が考えられる。SD-103はSX-11・13と重複し，SD-103が古い。

SX-11は，1.4 m × 1.4 mの隅丸方形の平面形態で，確認面から底面までの深さは7 cmほどである。覆土は，炭化物，焼土粒，灰白色土を含む灰褐色土が主体である。

SX-11の南側で重複するSX-13は，南端部を攪乱で失うが，平面形態は長径2.3 m程度，短径1.1 mの楕円形であり，確認面からの深さは7 cm～10 cmである。SX-11との切り合い関係は明確にできなかった。

た。覆土は、黄白色土と炭化物を含む灰褐色土が主体である。

SX-12の平面形態は南北2 m、東西1 mの隅丸長方形で、確認面から底面までの深さは20cmである。覆土は灰黄褐色土が主体である。

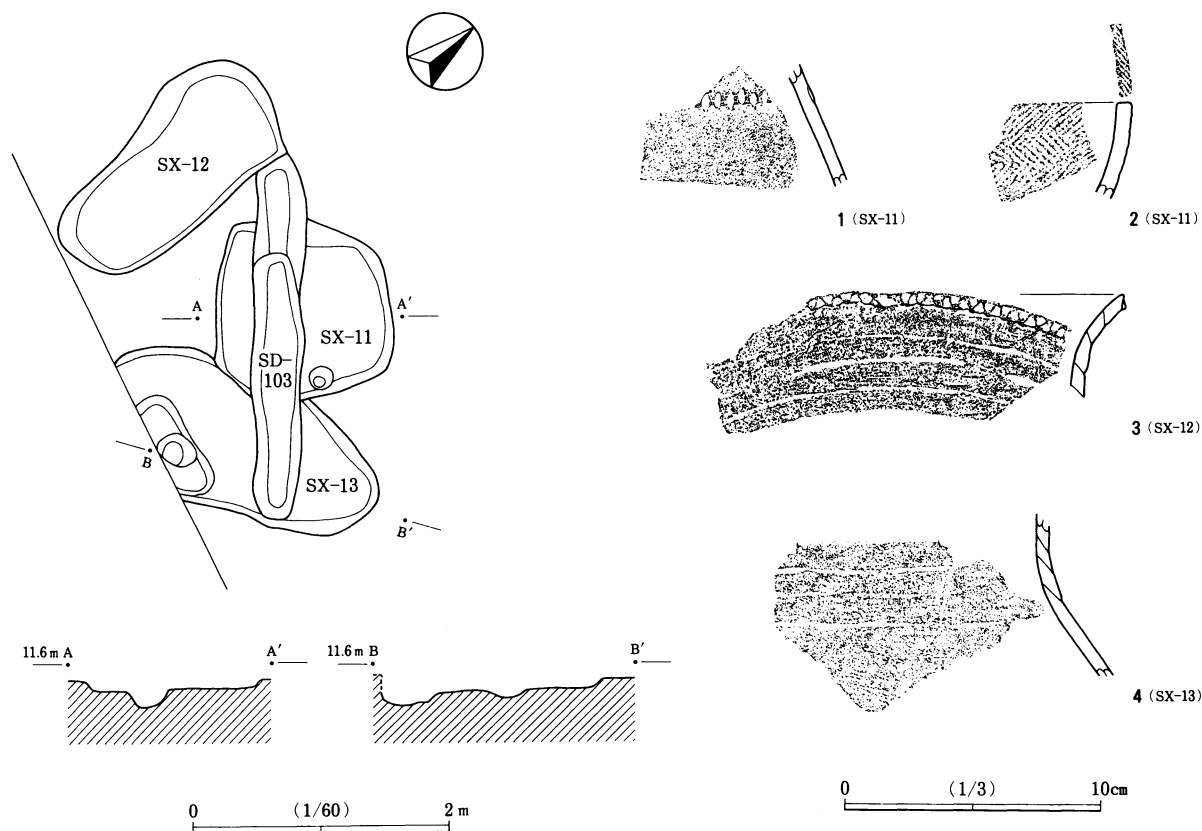
SD-103は、SX-11・13の下層に位置する。長さ2.8 m、幅40cmの小規模な溝で、SX-11底面からの深さは15cm前後である。覆土は灰褐色土の単一層である。

遺物（第81図）

SX-11・12・13の各遺構から弥生時代後期の土器が出土している。1・2は、SX-11から出土したものである。1は、甕の胴部片であり、接合部分にヘラ状工具による刺突が加えられる。胎土は石英粒、白色針状物質、砂粒を多く含み、色調は明黄褐色～黒色である。2は鉢の口縁部片である。外面にはLR・RL・LR縄文の羽状縄文が施され、口唇部にもLR縄文が加えられる。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は灰白色～黄橙色である。

3はSX-12出土の甕口縁部片である。口縁部には上下方向から押捺を加えられ、口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残される。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は灰黄褐色～黄褐色である。

4はSX-13出土の甕片で、口縁部は欠損する。外面にはわずかに粘土紐輪積み痕が残る。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は灰黄褐色～黄褐色である。



第81図 SX-11・12・13と出土遺物

4 土坑

SK-2

遺構（第82図）

調査区南部，H-4グリッドに位置する。平面形態は径1.2mの円形で，底面は70cm×80cmの方形である。確認面から底面までの深さは60cmである。断面形は逆台形であるが，東壁には部分的に幅15cm程度のテラス状の掘込みがある。

覆土は，上層が炭化粒や灰白色粘土粒を含む暗青灰色土，中層が灰白色粘土ブロックや炭化粒を含む黄褐色土，下層が黄白色粘質シルトブロックを含む青灰色～黄褐色土であり，人為的な埋戻しの可能性も考えられる。

遺物（第82図）

弥生時代後期の土器が出土している。1はSK-2から出土した甕で，口径20.2cmである。口縁部は折り返した後に押捺を加えており，内外面はナデ調整されている。胎土は石英粒，砂粒を多量に含み，色調は黄橙色～オリーブ黒色である。

SK-29（大畦畔内土坑1）

遺構（第82図）

調査区中央部，A-6からB-6グリッドにかけて位置する。水田面の南限付近に作られた土坑である。平面形態は長径1.7m以上，短径1.6mの楕円形で，確認面から底面までの深さは40cm，断面形は船底形である。

覆土はレンズ状の自然堆積で，水田面の覆土と共通する灰白色粘質土を主体とし，中間に黒色粘質土が堆積している。

遺物

遺物は出土していない。

SK-30（大畦畔内土坑2）

遺構（第82図）

調査区中央部，Z-4からA-4グリッドにかけて位置する。SK-29同様，水田面の南限付近に作られた土坑である。平面形態は長径1.5m，短径1.15mの楕円形で，確認面から底面までの深さは80cm，断面形は逆円錐形である。

覆土はレンズ状の自然堆積で，灰白色粘質土の上層，褐色～黒色粘質土の下層に分けることができる。

遺物（第82図）

弥生時代後期の土器が出土している。2は口径30cmの大型甕である。口縁部には押捺が加えられ，外面には粘土紐輪積み痕が残される。調整技法は内外面ともにナデ調整である。胎土は砂粒，小石を多量に含み，色調は明黄橙色～橙色である。

SK-31 (土器配列遺構内土坑)

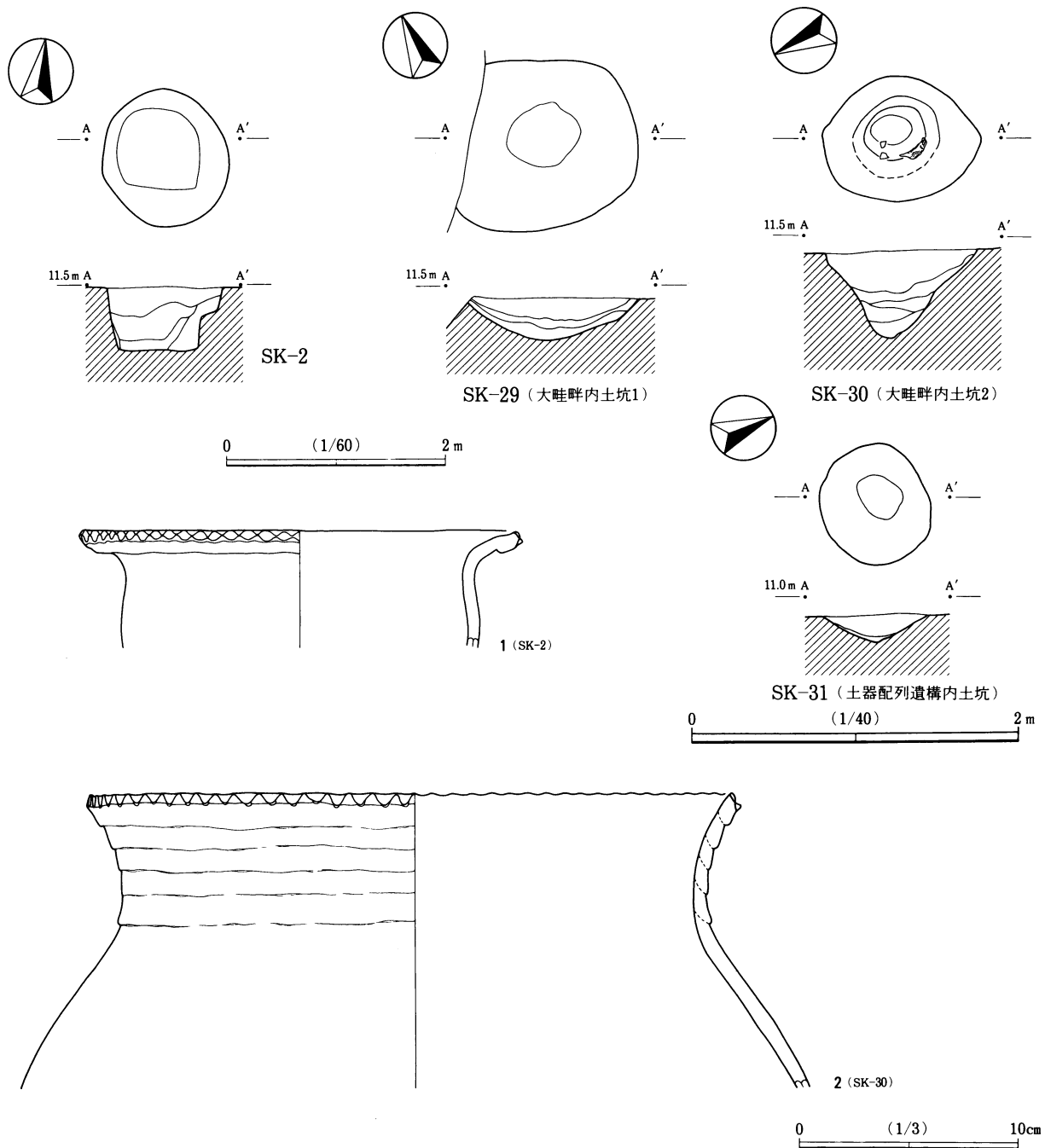
遺構 (第82図)

調査区南部, Y-5 グリッドに位置する。水田面内に作られた土坑である。平面形態は長径74cm, 短径65cmの楕円形で, 確認面から底面までの深さは17cm, 断面形は船底形である。

覆土は灰白色粘質土が主体であり, 底面付近に黑色粘質土が薄く堆積している。

遺物

遺物は出土していない。



第82図 SK-2・29・30・31と出土遺物

5 溝状遺構

SD-45

遺構（第83・84・98・99図，図版16・17）

調査区中央部，X-4からZ-12グリッドにかけて東西にほぼ直線的に走る溝である。溝の方位はN-75°-Wである。

確認面は，Ⅳ層上面の水田面上にⅢ層（灰白色砂質土）が40cm～50cmほど堆積した面であり，確認面における幅は2.5m～3.3m，底面までの深さは90cm～1.1m，断面形は「V」字形である。覆土は，上層が暗褐色土，中・下層が部分的に焼土粒を含む灰色～灰褐色の粗砂となっており，中・下層は流水による堆積，上層部分は滞水状況による堆積であったと推定できる。

また，Y-10からZ-12グリッドにかけて，SD-45が北側に大きく蛇行し，SD-45Bを形成している。確認面での幅は2.2m～2.4m，深さ80cm～1m前後，断面形は「V」字形を呈する。SD-45Bの覆土は，灰色～灰褐色の粗砂が主体となっており，流水による堆積が中心となっている。

SD-45BはSD-45の掘り直し部分と考えられ，セクション面では明確に確認できなかったが，SD-45のほうがSD-45Bよりも底面が深いといった検出状況，また，SD-45の上層を中心に滞水状況が確認できることなどから推測すると，蛇行するSD-45Bが先行し，これを直線的に深く掘り直してSD-45が成立し，滞水状況を経て埋没したと推定することも可能であろう。

さらに，SD-45南岸の東端部分，Z-9・10グリッドには，溝を拡張して掘られた拡張部「溜井状遺構」が作られている。平面形態は長径3.5m，短径2.4mほどの楕円形，確認面から底面までの深さは1.9mで，断面形は逆円錐形となっている。SD-45との境界部分には8本の木杭が，東西に打ち込まれており，SD-45の流路と拡張部（溜井）を仕切る機能を果たしていたと考えられる。また，堆積土層を観察すると，SD-45が埋没した後も，拡張部は窪地として残っており，SD-45の中では最も最後に埋没した部分であったと考えられる。覆土は，灰色～灰褐色の粗砂と明灰色～暗褐色の粘質土が交互に堆積している。遺物（第85～91図，図版30・31・36）

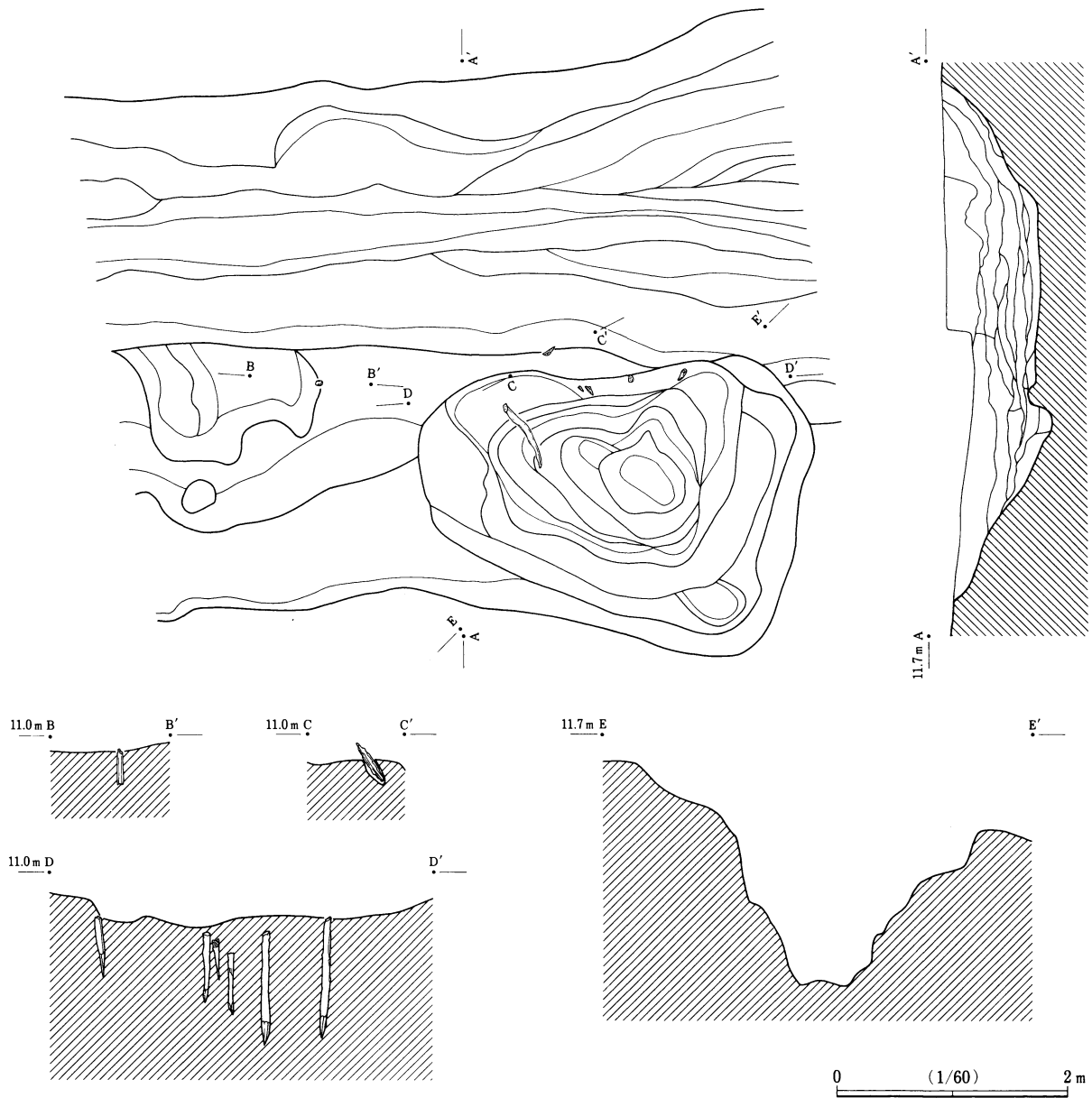
SD-45及び拡張部（溜井）の覆土上層からは，古墳時代前期を中心とした多量の土器が出土しており，拡張部からは水漬けされた形で木製品が出土している。

1～3は小型埴である。口径9.8cm～13.2cm，器高8.2cmである。1は内外面ナデ調整，2は内外面ヘラ磨きの後，赤彩，3はハケ目調整の後ナデ調整されている。胎土は，赤色スコリア粒，白色粒，石英粒を含み，色調は灰白色～暗黄褐色である。

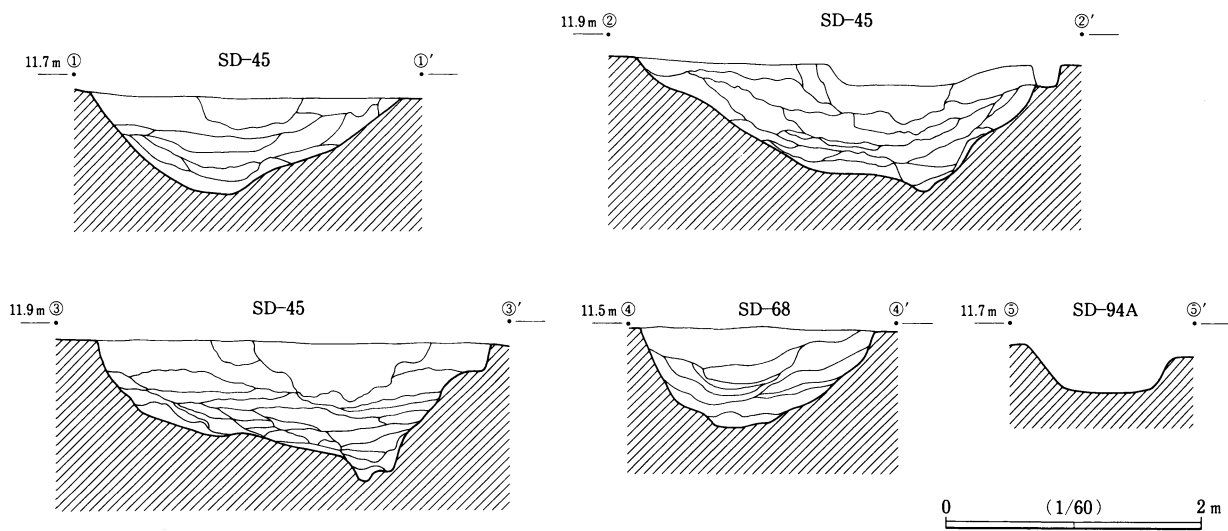
4～7は埴及び小型壺である。口径9.8cm～12cm，器高12.9cm～20.2cm，底径3.8cm～6.4cmである。4は，外面をハケ目調整の後にヘラ磨き調整，内面をナデ調整しており，外面と口縁部内面を赤彩する。6は内外面をヘラナデの後に，外面をヘラ磨き調整している。5・7は，外面と口縁部内面を刷毛目調整の後ナデ調整，胴部内面をナデ調整している。胎土は，赤色スコリア粒，黄褐色粒子，石英粒を含み，色調は明黄褐色～暗褐色である。

8～10は小型壺の口縁部片である。口径9.2cm～14.4cm，いずれもハケ目調整の後，ナデ調整を加えている。胎土は赤色スコリア粒，白色粒を含み，色調は明黄色，赤褐色～黒色である。

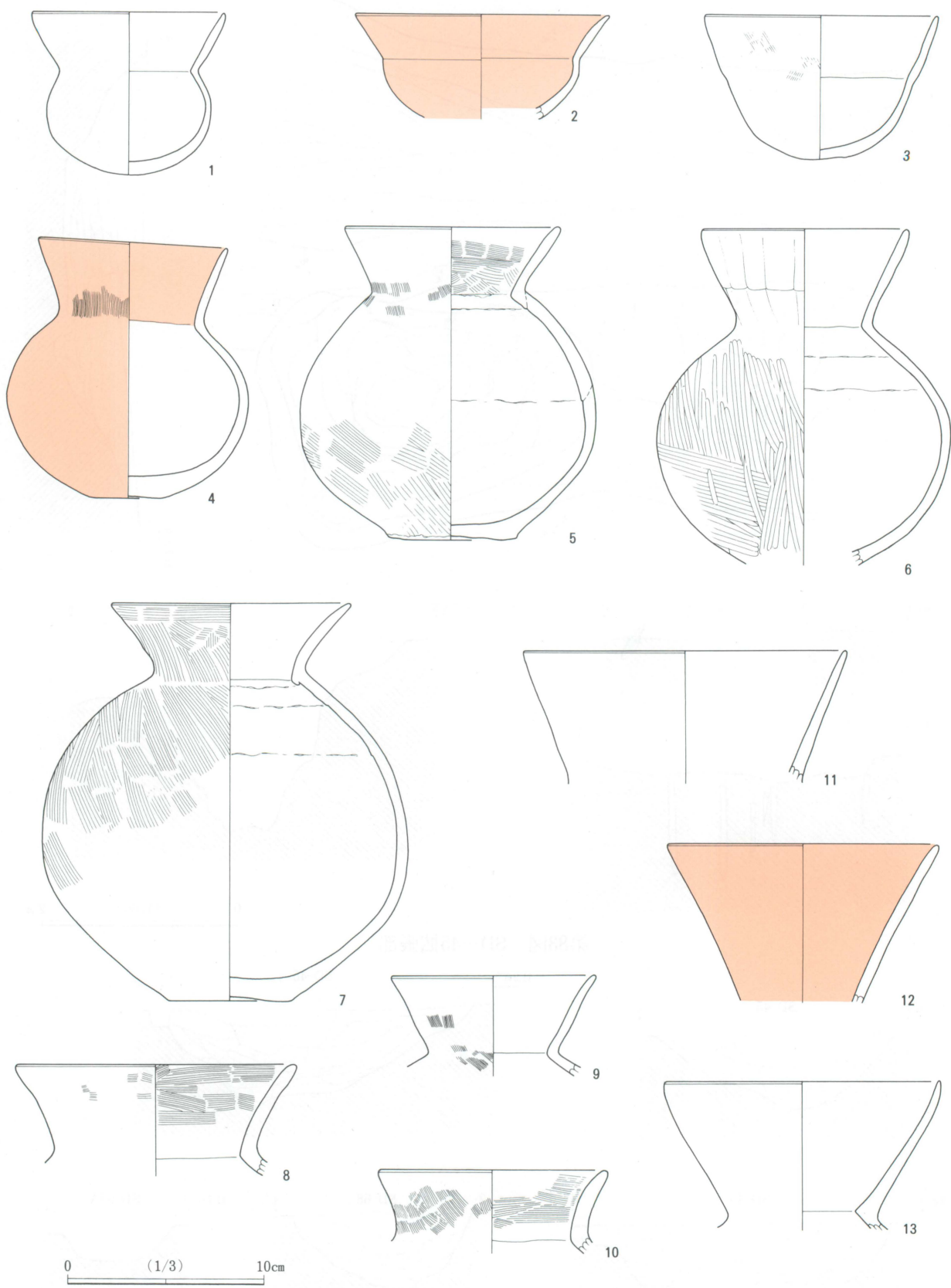
11～13は埴の口縁部片で，口径13.8cm～16.2cmである。器面の磨滅が著しく，調整技法は明確ではないが，12は内外面ヘラ磨きの後，赤彩されている。胎土は，11が赤色スコリア粒を，12が砂粒を含み，13が



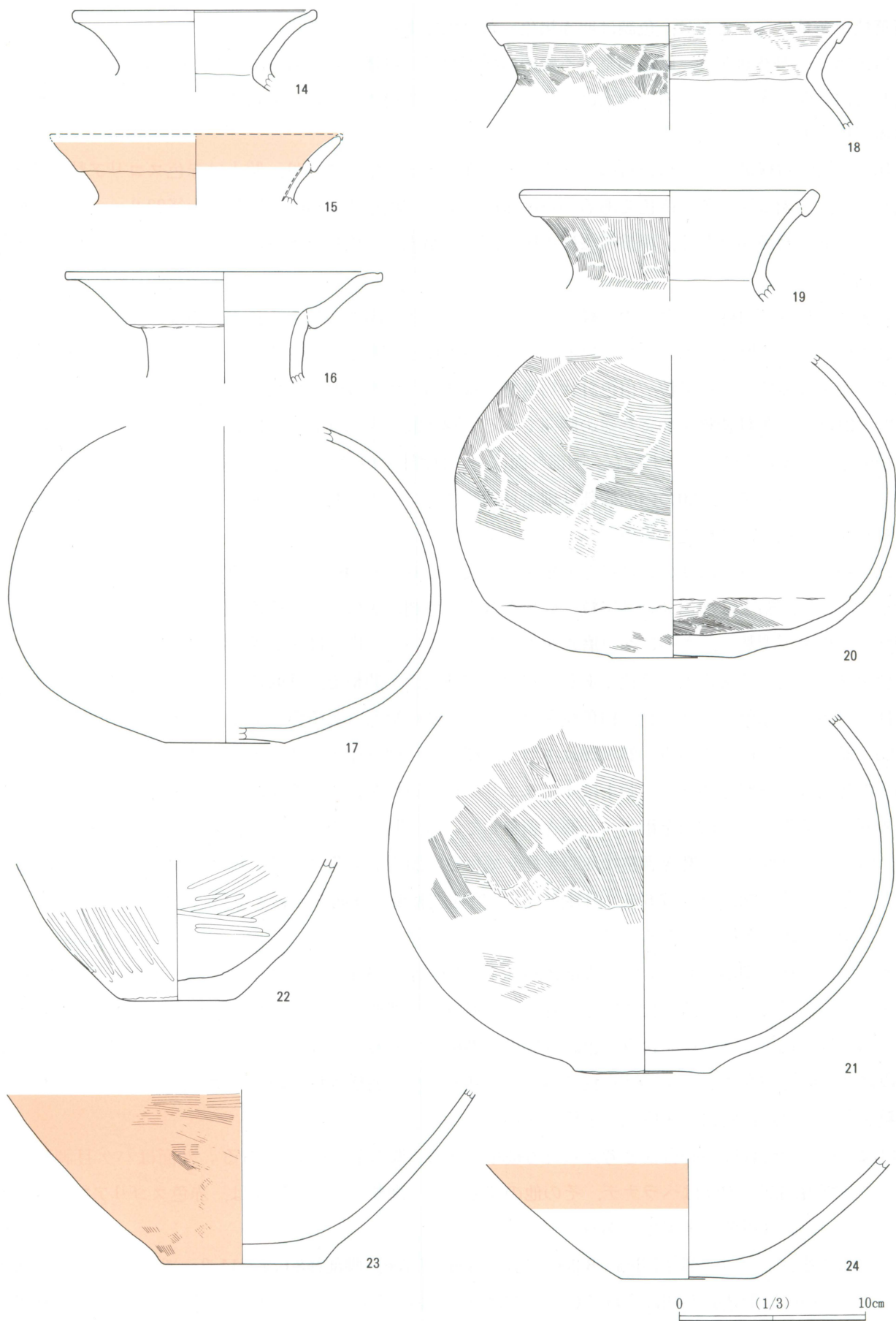
第83图 SD-45擴張部



第84图 IV層上面溝状遺構土層断面图



第85図 SD-45出土遺物(1)



第86図 SD-45出土遺物(2)

石英粒を多量に含んでおり、色調は明赤褐色～黄橙色である。

14・15は、内外面をヘラ磨き調整する壺の口縁部片で、口径は13.1cm～15.8cmである。15は折返し口縁とし、内外面を赤彩している。胎土は赤色スコリア粒、黄褐色粒、白色針状物質を含み、色調は灰白色～暗赤褐色である。

16は、有段口縁の壺で、口径17cmである。内外面をナデ調整しており、胎土は赤色スコリア粒、黄褐色粒を含み、色調は灰白色～橙色である。17は壺の胴部で、現存器高17cm、胴部最大径23.2cm、底径6cmである。器面の磨滅が著しく、調整技法は不明である。胎土は白色粒を多量に含み、色調は明黄橙色～緑灰色である。

18・19は折返し口縁の甕と壺の口縁部片で、ともにハケ目調整が加えられる。18は口径19.6cmで、ハケ目調整の後にヘラ磨きを加えられている。胎土は白色粒子を少量含み、色調は赤褐色である。19は口径16cmで、胎土は赤色スコリア粒、白色針状物質を少量含み、色調は明黄橙色である。

20・21は、ハケ目調整を加えた壺の胴部である。胴部最大径23.5cm～27.2cm、現存器高16.1cm～19.4cm、底径6.2cm～7.2cmである。いずれも、胴部外面はハケ目調整の後ナデ調整が加えられており、内面はヘラナデ調整である。また、20の内面底部は刷毛目調整されている。胎土は、赤色スコリア粒、黄褐色粒、石英粒を含み、色調は黄褐色～黒色である。

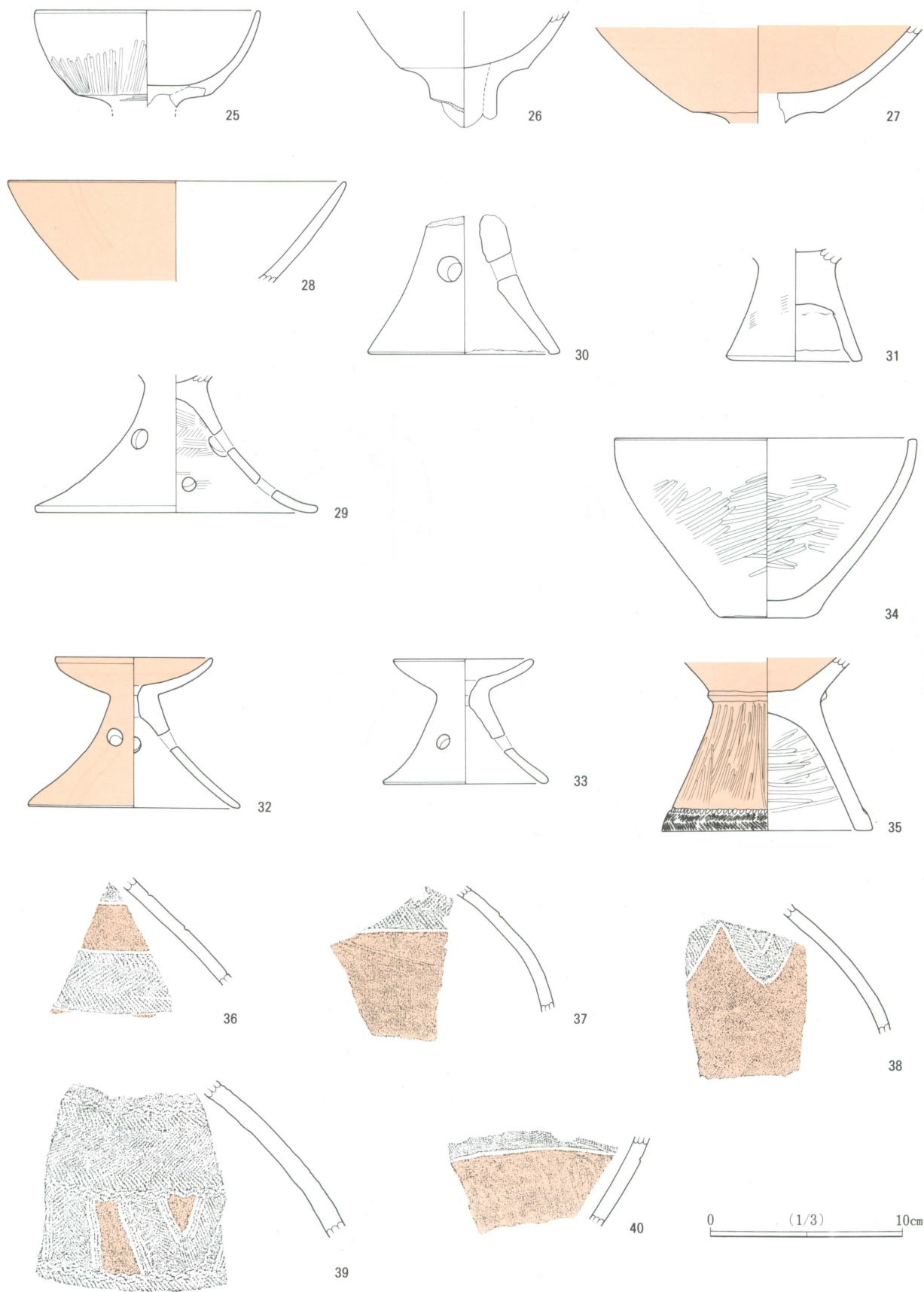
22～24は、壺もしくは甕の底部付近の破片で、底径は6cm～8.6cmである。22は内外面を粗くヘラ磨き調整しており、胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は灰白色～黄橙色である。23は、外面をハケ目調整した後ナデ調整し、さらにヘラ磨きを加え赤彩している。内面はナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は灰白色～橙色である。24は、内外面ナデ調整で、外面には部分的に赤彩の痕跡が認められる。胎土は赤色スコリア粒、白色粒を含み、色調は灰褐色～黄橙色である。

25～28は高杯の杯部である。25・26は小型の高杯で、杯部全体が確認できる25の口径は11.7cmである。25の内外面はヘラ磨き調整で、胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含む、色調は灰白色～黄橙色である。26は内外面ナデ調整の後、内面を粗くヘラ磨き調整している。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は橙色である。27は、内外面をヘラ磨き調整後赤彩を施している。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は赤色～黒色である。28は口径17.6cm、内外面をヘラ磨き調整後、外面を赤彩する。胎土は白色粒子を少量含み、色調灰白色～黄橙色である。

29・30は高杯の脚部である。29は脚部径14.6cm、現存器高7.1cmで、脚部中段には、上下二段に4方向、計8か所の円形透孔が開けられている。外面は丁寧なナデ調整、内面はハケ目調整の後ナデ調整されている。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は橙色～黒褐色である。30は脚部径10cm、現存器高7.1cm、脚部中段に3方向の円孔透かしが開けられており、内外面はナデ調整されている。胎土は赤色スコリア粒、石英粒を含み、色調は灰白色・橙色～黒色である。

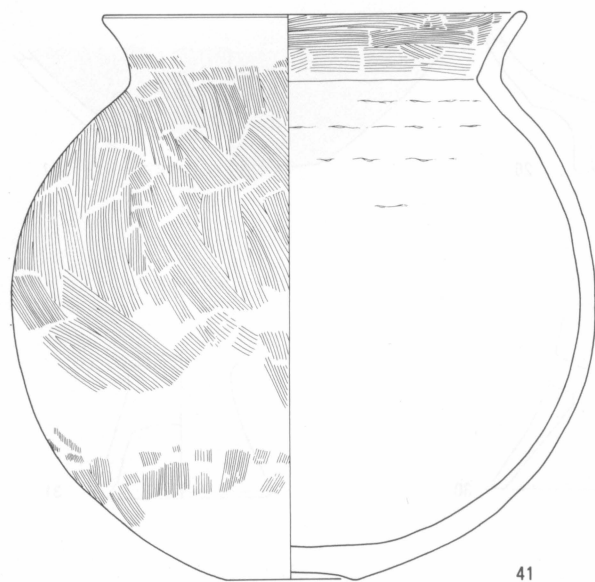
31は、小型の台付甕の脚台部と考えられる破片である。脚台部径6.8cmである。外面はハケ目調整後ナデ調整、脚台端部の内面はヘラナデ、その他の部分はナデ調整である。胎土は、赤色スコリア粒、黄褐色粒を含み、色調は橙色～黒褐色である。

32・33は器台で、器受部径7.3cm～8.2cm、器高6.4cm～7.7cm、脚部径8.6cm～11.2cmである。ともに脚部中段に3方向の円形透孔が開けられている。32は外面と器受部内面をヘラ磨き調整した後赤彩し、脚部内面はナデ調整している。胎土は黄褐色粒子、砂粒を含み、色調は赤褐色である。33は内外面を丁寧にナデ



0 (1/3) 10cm

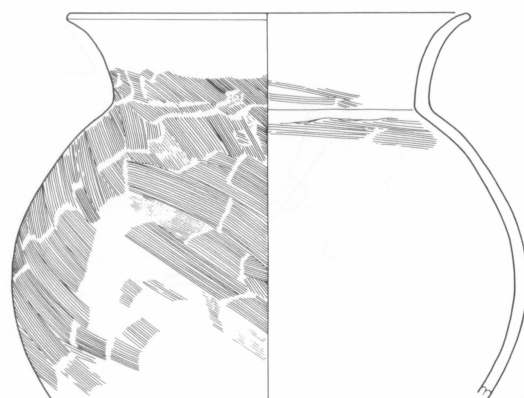
第87图 SD-45出土遺物(3)



41



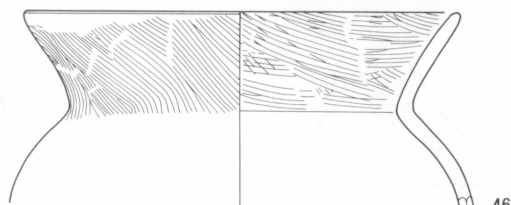
44



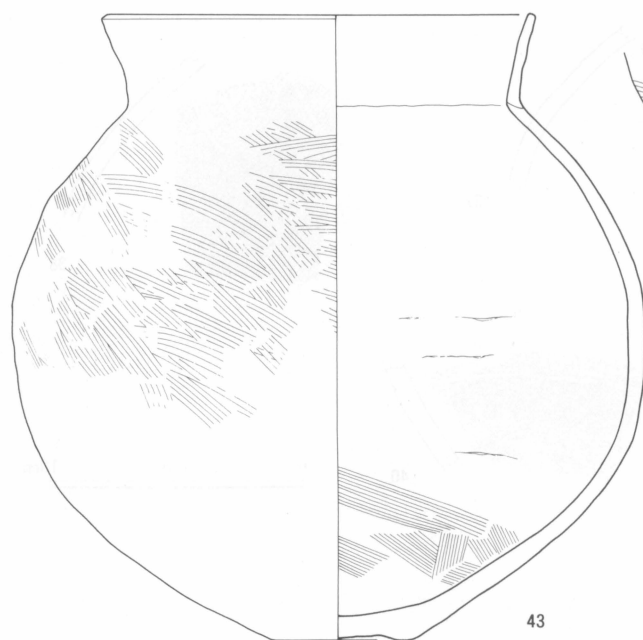
45



42



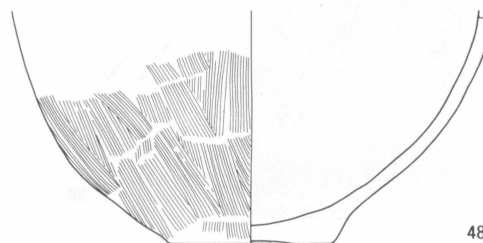
46



43



47



48

0 (1/3) 10cm

第88图 SD-45出土遺物(4)

面はナデ調整している。胎土は黄褐色粒子，砂粒を含み，色調は赤褐色である。33は内外面を丁寧にナデ調整しており，胎土は赤色スコリア粒，白色粒子を含み，色調は橙色～灰褐色である。

34は鉢である。口径15.5cm，器高9.3cm，底径5cmで，内外面をヘラ磨きしている。胎土は赤色スコリア粒，黒色粒を含み，色調は暗黄褐色～黒色である。

35は，台付鉢の台部で，台部径は10.8cm，現存器高9cmである。鉢部と台部の接合部には凸帯を貼り付け，台部の端部は折り返している。折返し部分の外面にはLR・RL縄文の羽状縄文を施し，上端部に刻み目を加えている。施文部以外の外面と鉢部内面はヘラ磨き調整の後赤彩，台部内面はヘラ磨き調整を加えている。胎土は石英粒を多量に含み，色調は明赤褐色～黒色である。

36～39は壺の胴部片であり，外面には縄文と沈線区画が施されている。36は，LR縄文を山形に施し，上下を沈線で区画している。37は，LR・RL縄文の羽状縄文を施し，下端部を沈線で区画している。38はRL縄文を施し，下端部を沈線区画し，さらにその下部にRL・LR・RL縄文の羽状縄文を施し，上下を沈線区画する。39は，2条のS字状結節文で上下を区画する羽状縄文帯を2段作り，その間に3条の沈線で区画した縄文の山形文と縦方向の羽状縄文を施している。2段の羽状縄文帯はRL・LR・LR・RL縄文で構成され，山形文はLR縄文を山形に施している。施文部以外の外面はヘラ磨き調整の後，赤彩されている。40は鉢で，細かなRL縄文が確認でき，下端部を沈線区画している。胎土は，36～38が赤色スコリア粒，石英粒，黒色粒を含み，色調は灰白色～黒色，40は砂粒を含み，色調は灰褐色，39は白色粒，石英粒を多量に含み，色調は灰白色～黒色である。

41～48は，ハケ目調整を加えた甕である。口径15.8cm～17cm，器高19.8cm～24.8cm，胴部最大径18.3cm～25.2cm，底径5cm～6.8cmである。調整技法は，胴部外面と口縁部内外面をハケ目調整した後，内外面をナデもしくはヘラナデ調整している。43・47は底部内面に，44・45は胴部内面の一部にもハケ目調整が及んでいる。また，41・43・47・48の底部には，成形段階における輪台技法の痕跡が明瞭に確認できる。胎土は赤色スコリア粒，黄褐色粒子，白色粒，石英粒，砂粒などを含み，色調は赤褐色・黄褐色・灰褐色～黒褐色である。なお，41の胴部中位以上にはススの付着が認められる。

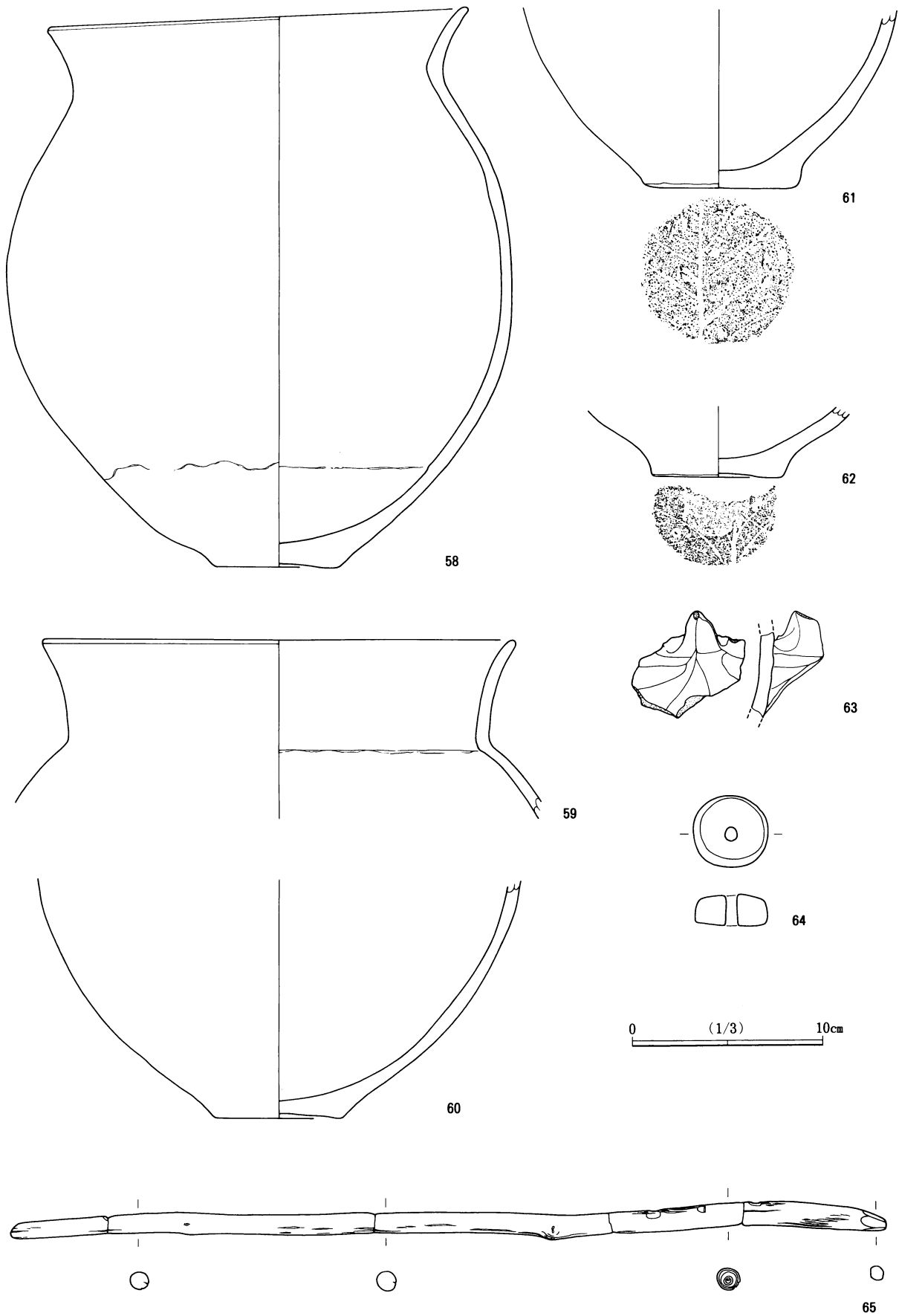
49・50は，S字状口縁台付甕である。49は胴部中位と脚台端部を欠損するが，ほぼ全容を知ることができ，口径17.5cm，胴部最大径24.7cmで，器高は30.5cm前後，脚台部径は10.4cm前後に復元できる。口縁端部は肥厚し，体部は長胴化しているが，器壁は薄い。胴部外面はナメ方向のハケ目調整を行った後，肩部にヨコ方向のハケ目調整を加えており，内面はヘラナデされている。口縁部はヨコナデされる。頸部内面は，ヘラ状工具で面取りされる。胎土には石英・長石をはじめ，黒色粒状の角閃石を多量に含み，わずかではあるが，白色針状の海綿骨針も含む。色調は灰白色，黄橙色～黒色である。また，肩部から上位にススの付着が認められる。50は口縁部片で，胎土は長石を少量含み，色調は黒色である。

51・52は甕で，口径は17.4cm～19cmである。51は，口縁部の上方と側面から押捺を加えており，外面はハケ目調整の後ナデ調整，内面はナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒を含み，色調は黄橙色～黒色である。52は，口縁部の側面から押捺を加えており，口縁部の内外面はナデ調整，胴部外面はハケ目調整の後ナデ調整，胴部内面はヘラナデ調整となっている。胎土は砂粒を含み，色調は灰白色，橙色～黒褐色である。

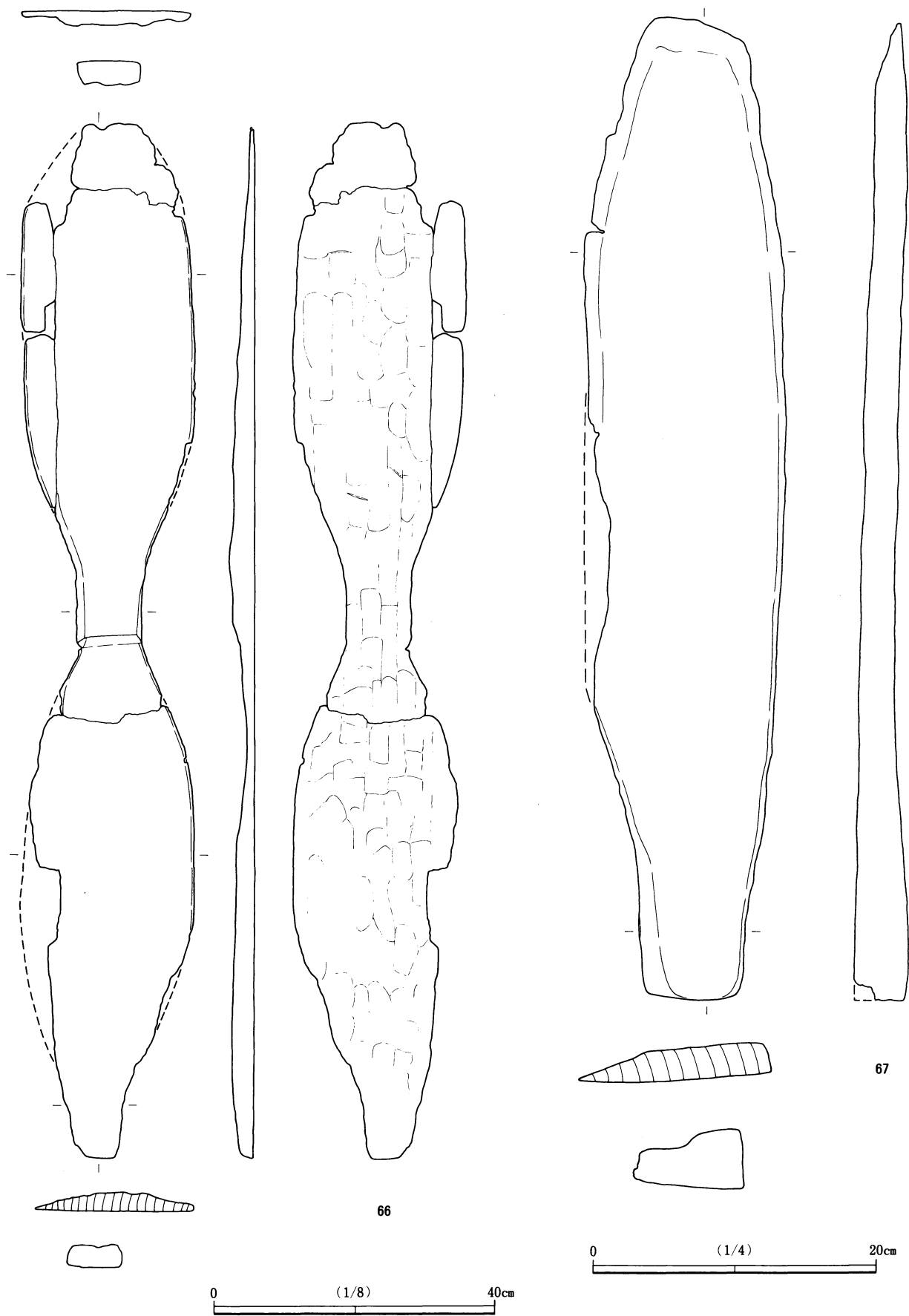
53～57は甕の底部付近の破片である。53～55は，外面をハケ目調整の後ヘラナデ，内面をヘラナデ調整しており，底径は5.4cm～6.6cmである。胎土は黄褐色粒，白色粒，石英粒を含み，色調は赤褐色～黒色で



第89图 SD-45出土遺物(5)



第90图 SD-45出土遺物(6)



第91図 SD-45出土遺物(7)

ある。56・57は内外面をヘラナデ調整しており、底径は5.4cm～6.4cmである。56の胎土は、赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は黄橙色～黒褐色である。57は底部付近をヘラ削り調整しており、胎土は石英粒、白色粒を少量含み、色調は橙色・灰褐色～黒色である。

58～62は、ヘラナデもしくはナデ調整される甕である。58は口径22.2cm、胴部最大径26.7cm、器高29cm、底径6.5cmである。口縁部の内外面はナデ調整、胴部外面はヘラ削りの後ナデ調整で、底部と胴部の境には内外面に接合痕を残しており、底部には輪台技法の痕跡が認められる。胎土は赤色スコリア粒、黄褐色粒、白色粒を含み、色調は赤褐色～黒色である。59は口径25cm、内外面をナデ調整しており、胎土は小石、石英粒を多量に含み、色調は黄橙色である。60は底径6.4cm、内外面をヘラナデ調整し、胎土は赤色スコリア粒、白色粒を含み、色調は暗黄褐色である。61・62は底部に木葉痕を残す甕で、底径7cm～7.9cmである。61は外面をヘラ削り調整、内面をナデ調整しており、胎土は赤色スコリア粒、白色粒、石英粒を多量に含み、色調は灰白色～明赤橙色である。62は外面をヘラナデ、内面をナデ調整し、胎土は黄褐色粒、白色粒、石英粒を含み、色調は灰褐色～黒色である。

63は、甑の把手部と考えられる破片で、成形は手捏で器面をナデ調整している。胎土は白色粒、石英粒を含み、色調は橙色である。

64は土製紡錘車である。径4cm、厚さ1.7cm、中心孔は径6mmであり、表面の調整技法は磨滅のため明確にできない。胎土は白色粒、黒色粒を含み、色調は暗橙色である。重量は28.2gである。

65は杭状の木製品で、径2.3cmほどの自然木の一端を削っているもので、現存の長さ92.5cmである。

66・67はクワの未製品で、いずれも溜井状の拡張部内からの出土である。66は長さ144.3cm、幅24.6cm、厚さ3.5cmであり、67は長さ72cm、幅14.9cm、厚さ4cmである。

SD-68

遺構（第84・98・99・101図）

調査区中央部から南部、Z-3からE-11グリッドにかけて位置する溝で、南東から北西にかけて直線的に走る溝である。溝の方位はN-55°-Wである。基本土層のⅣ層の上面から掘り込まれた溝であり、確認面での幅は1.8m、底面までの深さは75cmで、断面形は船底形である。

覆土の堆積状況はレンズ状の自然堆積で、下層は灰褐色の粗砂層を主体とし、上層から中層にかけては、白色粘土ブロックを含む灰褐色土と灰褐色粗砂層が交互に堆積している。

調査区南部の竪穴住居跡や周溝遺構で構成される居住域と、調査区中部～北部の水田域とを区画する機能を持っていたと推定でき、明確な遺物は出土していないが、Ⅳ層上面から掘り込まれていることにより、弥生時代後期以前の年代を推定できる。

遺物

遺物は出土していない。

SD-94A

遺構（第84・98・100・101図）

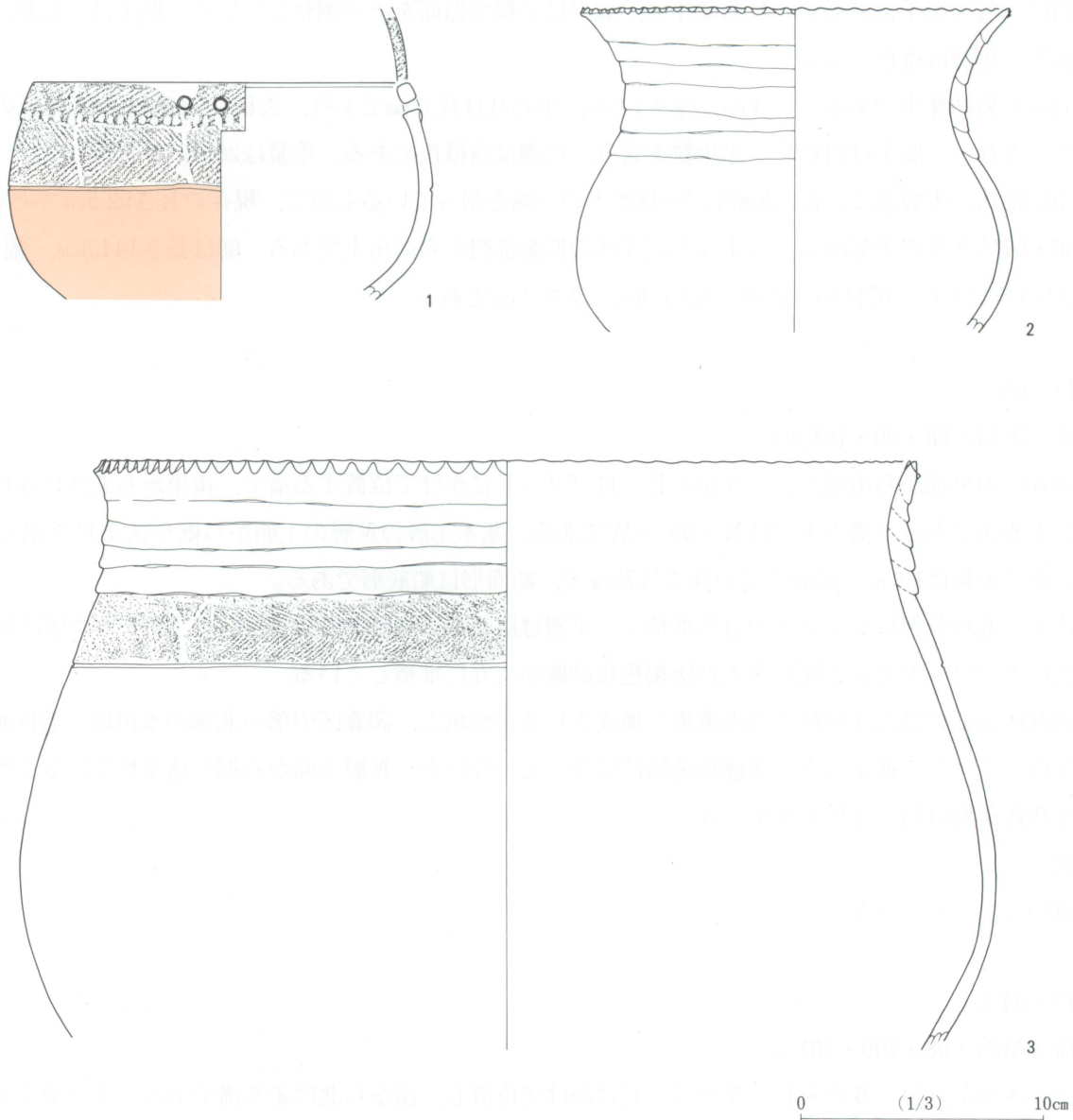
調査区南部、D-6からE-7グリッドにかけて位置し、南から北に走る溝である。2号周溝遺構のSD-94Bと重複し、切り合い関係ではSD-94Aが古い。確認面での幅は1.1m～1.5mであり、底面まで

の深さは25cm～35cm程度であり、断面形は逆台形である。

遺物（第92図）

弥生時代後期の土器が出土している。1は無頸壺で、口径15.8cmである。口縁部は折返し口縁となっており、折返し部には、焼成前の2個一組の穿孔が行われている。折返し部の下端には刻みを施し、折返し部から胴部上半にかけて、LR・RL・LR縄文の羽状縄文を施し、下端部を沈線で区画しており、口唇部にはRL縄文が加えられる。施文部以外は、内外面ともにヘラ磨き調整である。胎土は石英粒、白色針状物質を少量含み、色調は黄橙色～橙色である。

2・3は甕である。2は口径17.8cmで、口縁部に押捺を加えており、口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残される。胴部外面と内面はヘラナデ調整である。胎土は黒色粒、石英粒を含み、色調は灰褐色～橙色である。3は口径34.4cm、胴部最大径40.8cmの大型甕である。口縁部は2と同様であるが、口縁部外面の粘土紐輪積み痕の直下にはRL・LR縄文の羽状縄文を施し、下端部を沈線で区画している。胴部外面と内面はヘラナデ調整である。胎土は白色粒、石英粒、白色針状物質を含み、色調は灰黄褐色～橙色である。



第92図 SD-94A出土遺物

6 水田跡（第93～99図，図版18・19・31・32）

遺構

水田跡は，調査区中央部から北部，T-5・Q-10からA-11グリッドにかけての範囲で検出されている。この範囲は，小櫃川の洪水堆積層と推定できる，基本土層のⅢ層が30cm～50cm程度の厚さで堆積しており，基盤層であるⅣ層のレベルが高くⅢ層の堆積が薄い調査区南部とは対照的に，Ⅳ層上面は古墳時代後期以降の遺構による影響は少なく，水田面は良好な状況で検出することができた。

検出した遺構は，畦畔に区画された水田区画，水路状の溝，土器配列遺構である。以下，（1）畦畔・水路，（2）水田区画，（3）土器配列遺構の順に記述する。

（1）畦畔・水路

検出した畦畔は，幅により大・中・小の3種類に分類できる。後世の遺構によって大きく攪乱されているため不明な部分も多いが，Ⅲ層によって被覆されており，畦畔そのものの高まりを残す部分も存在する。

大畦畔

東西方向に南北2条の大畦畔が検出されている。いずれも「く」の字状に東側に屈曲するか分岐しており，これは微地形に影響された結果と考えられる。いずれも地山（Ⅳ-3層及びⅤ層）を削り残して作られており，部分的に盛土も行われている。

北側の1号大畦畔はR-9グリッドからS-12グリッドにかけて位置し，更に東西の調査区域外に伸びる。畦畔方位はS-11グリッド付近で屈曲し，それより西側がN-78°～80°-W，それより東側がN-78°～80°-Eである。畦畔幅は4m～5m，畦畔の高まりは最大で40cmである。

2号大畦畔は，1号大畦畔の南約35mの地点で検出され，V-5からA-11グリッドにかけて位置している。SD-45と重複し，一部が原形を失っている。畦畔方位はN-55°～60°-Wである。東端部分は調査区域外のため全容は確認できないが，検出した範囲では南北方向に分岐するようである。Y-9グリッド付近で北東方向に分岐し，分岐した畦畔の方位はN-65°～70°-Eである。幅は，分岐点より西側は5.5m～6m，分岐点より東部分は2.5m～4m前後である。畦畔の高まりは最大で20cmである。

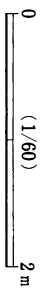
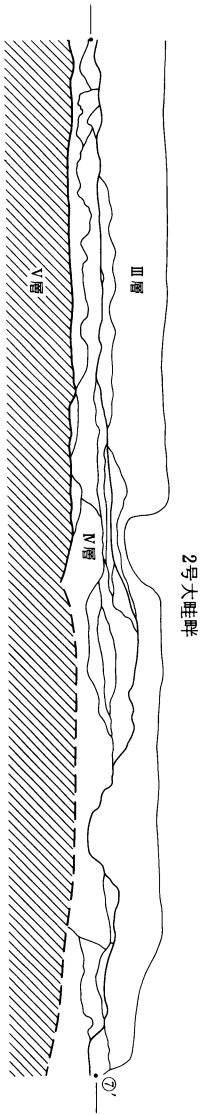
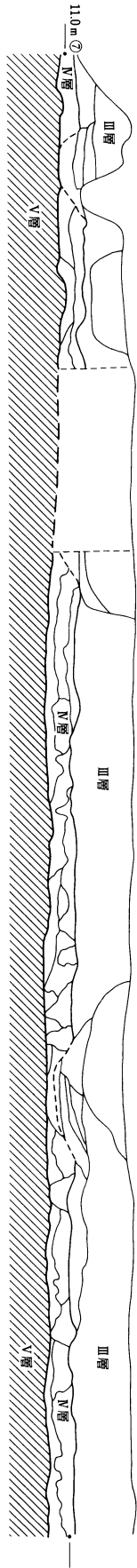
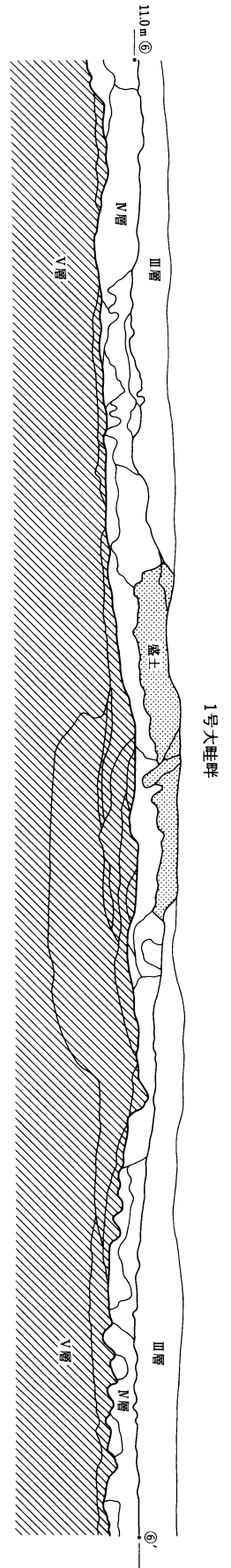
また，Y-9グリッドから西側の部分では，畦畔中央に水路状の溝（SD-107）が検出されている。これは，Ⅲ層上面で確認しているSD-107と位置・方向が一致しており，Ⅲ層の堆積が薄い部分で，Ⅲ層上面の遺構と混同して調査した可能性が高い。水路跡は幅70cm～80cm，深さは20cm～30cmであり，東から西方向へ流れている。

中畦畔

中畦畔は，幅80cm前後で，東西方向に南北2条を検出している。北側の1号中畦畔はT-5グリッドからU-13グリッドにかけて位置し，さらに東西調査区域外に伸びる。畦畔方位はN-75°～80°-Wで，1号大畦畔とほぼ平行している。畦畔の高まりは検出されず，幅は60cm～1m前後である。U-10グリッド付近に水口と考えられる幅30cm～50cmの開口部を2か所で確認している。

2号東西中畦畔はV-8グリッドからY-12グリッドにかけて位置する。西側は調査区域外に伸びるものと考えられるが，Ⅲ層上面遺構の影響を受けており明確にできないが，東側は2号大畦畔に合流している。畦畔方位はN-55°～60°-Wで，2号大畦畔と平行している。西半部で畦畔の高まりが検出されている。幅は下端で1m，上端が60cm前後であり，高さは最大8cmである。

小畦畔



第93图 水田面土层断面图

東西方向13条、南北方向は約10条程度あり、合計で23条検出された。幅20cm～60cm程度で、高まりは、ほとんど確認できないが、南側の2号大畦畔付近、V-7からX-9グリッドにかけての範囲が比較的保存状態が良好であり、最大7cm前後の高まりが認められる。

また、小畦畔の方位は1号中畦畔の南側と北側で大きく異なり、北側は1号大畦畔に、南側は2号大畦畔により、その方位が規制されている。

(2) 水田区画

水田面は、南東方向から北西方向へと緩やかに傾斜する斜面部に立地しており、水田面の中央部を東西に走る1号中畦畔により大きく2ブロックに分けることができ、さらに、その北側を2ブロック、南側を3ブロックの合計5ブロックに分けることができる。以下、水田区画についてブロックごとに報告する。

第1水田ブロック

調査区北端部、1号大畦畔の北側部分がこれにあたる。西側部分の保存状態が悪く、区画は明瞭ではないが、9区画以上の水田区画が確認できる。区画面積は11㎡～20㎡程度、区画の方位は1号大畦畔の規制を受けており、1号大畦畔に規制された小規模な方形区画が中心となっている。Q-11グリッドからR-11グリッドにかけての範囲で4か所、幅20cm～50cmの畦畔断絶部分が存在し、水口の可能性が考えられる。

第2水田ブロック

調査区北部、北側を1号大畦畔、南側を1号中畦畔により区画される範囲である。西側での畦畔の保存状態が悪いが、水田区画は8区画が確認できる。全容が確認できる区画面積は28㎡～36㎡であるが、東端部分には52㎡以上の大規模な水田区画も存在している。第1水田ブロックと比較して、規模の大きな方形区画となっている。区画の方位は1号中畦畔の規制を受けている。T-9からU-11グリッドにかけての範囲で、水口と考えられる小畦畔の断絶が3か所で確認できるが、畦畔の遺存状態が悪く、水口と断定はできない。

第3水田ブロック

調査区中央部、北側を1号中畦畔、南側を2号中畦畔で区画された範囲で、28区画の水田区画が確認できる。水田区画は方形が中心であり、区画方位は2号中畦畔の規制を受けているため、1号中畦畔との接点部分では、三角形の区画も存在する。方形区画の面積は、全容が確認できるもので、6㎡前後、10㎡～12㎡、20㎡～25㎡の3タイプが存在しており、小規模な第1水田ブロックの区画に近い様相が認められる。一方、三角形の水田区画は、その面積が1.25㎡と65㎡以上でばらつきがあり、第1中畦畔と不整合な形で連続する変則的な区画と考えるほうが妥当であろう。U-7、V-9、W-10・11グリッドで、畦畔の断絶が認められ、水口の可能性が考えられるが、Ⅲ層上面遺構の影響を受け、畦畔の遺存状況が悪い部分もあり、全てが水口とは断定できない。

第4水田ブロック

調査区中央部、北側を2号中畦畔、南側を2号大畦畔に区画された範囲で、10区画以上の水田区画が確認できる。西側部分では畦畔の遺存状況が悪く明確ではないが、遺存状況の良い中央部では水田区画は方形で、区画方位は2号中畦畔に規制されている。全容が確認できる区画面積は10㎡～16㎡前後であり、小規模な方形区画を中心としている。W-7、X-8・9グリッドにおいて、4か所で幅30cm～50cmの畦畔の断絶が確認でき、水口の可能性が考えられる。

第5水田ブロック

調査区中央部、北側を2号大畦畔で区画された範囲で、水田域の南端部分である。8区画前後の水田区画が想定できるが、他のブロックに見られたような規則性は見られない。このブロック付近は、基本土層Ⅲ層の堆積が全体に薄く、Ⅲ層中から掘り込まれたSD-45やⅢ層上面遺構の影響を強く受け、畦畔の遺存状態は極めて悪い。したがって、このブロックで確認できる水田区画の規模・形態が本来の状況を残していない可能性も考えられよう。

(3) 土器配列遺構

遺構

調査区中央部以北の水田域と調査区南部の微高地域との境界付近、Y-4・Z-4・Z-5の各グリッドにかけて位置している。第5水田ブロックの水田面に面して、緩斜面上に7個体の弥生土器が置かれた状態で出土し、これを土器配列遺構として報告する。土器は、いずれも掘込みなどを伴わず、水田面と共通したⅣ層上面に置かれており、基本土層のⅢ層により埋没していることにより、水田と同時期の遺構と判断できる。土器は傾斜面に沿って、北西から南東に並べられており、器種は北西から壺(3)、壺(1)、甕(6)、台付甕(7)、鉢(4)、壺・甕(2・5)であり、土器の間隔は北西から1.5m、1.5m、1m、2.5m、2.5mとなっている。また、南東端部の壺・甕の約90cm南東の場所に軽石(9)が置かれており、北側の水田面内には小型甕(8)が、斜面部から落ち込んだ形で出土している。これらの土器のうち、1の壺は北側に横倒しの状態で、6の甕は立った状態で出土している。

遺物

遺物はすべて弥生時代後期の土器である。

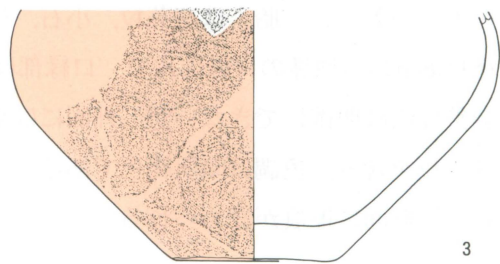
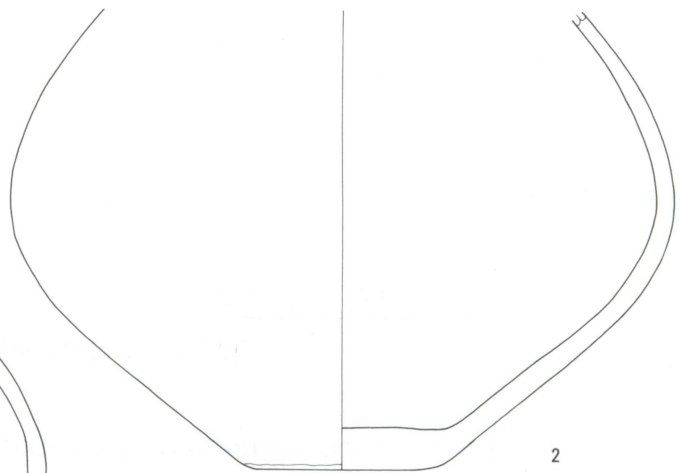
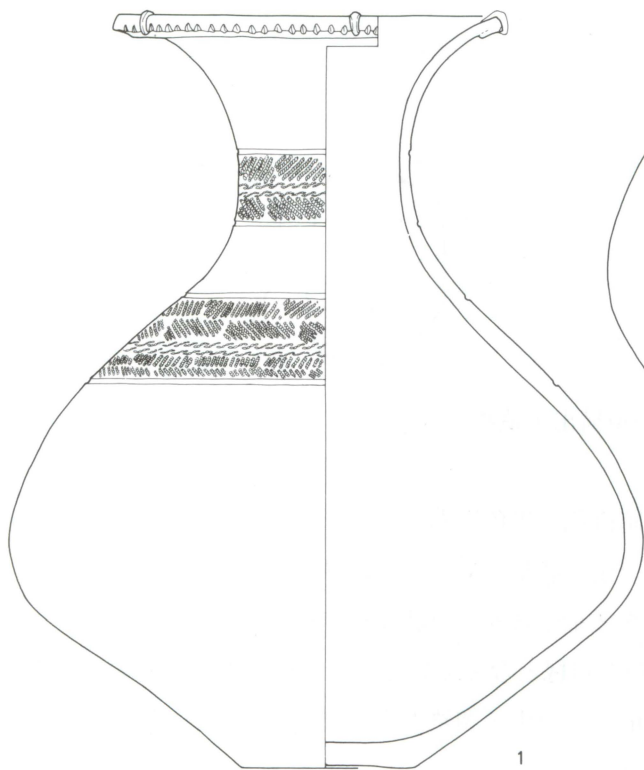
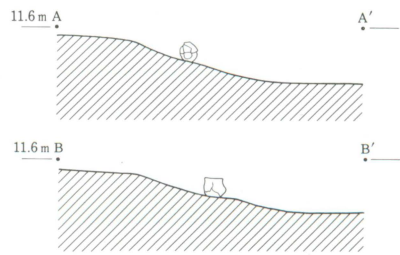
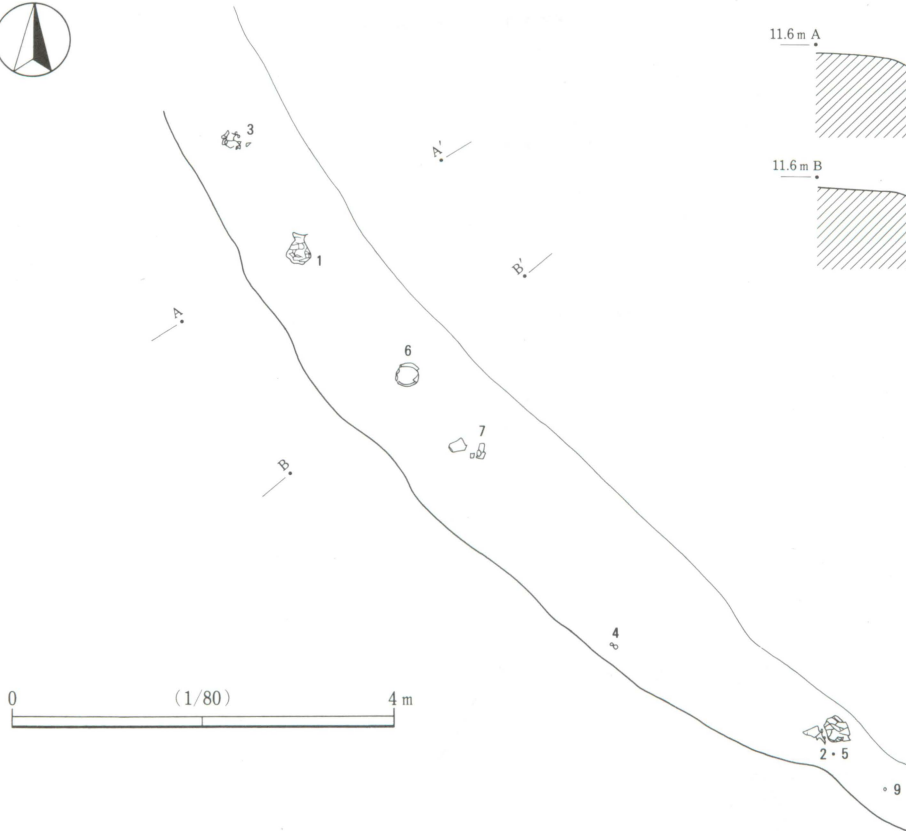
1～3は壺である。1は、口径15.3cm、器高29.3cm、胴部最大径25cm、底径6.7cmである。口縁部は折返し口縁となっており、5cm～6cm間隔で4単位の棒状浮文が貼り付けられ、下端部にはヘラ状工具による刻みを加えられている。口縁部外面には縄文が施されているようであるが、器面の磨滅のため明確にはできない。頸部と肩部には羽状縄文による文様帯が認められる。頸部は、LR・RL縄文を施し、その中間に2段のS字状結節文を加えており、上下を沈線で区画している。肩部は、LR・RL縄文の羽状縄文を2段施し、その中間に2段のS字状結節文を加えており、上下を沈線で区画する。施文部以外の外面と口縁部内面は、ヘラ磨き調整され赤彩の痕跡が認められる。胎土は砂粒を含み、色調は暗黄橙色である。

2は頸部以上を欠損しており、胴部最大径26cm、底径7.2cm、現存器高18cmである。内外面の器面は磨滅が著しく、調整技法は明確にできない。胎土は白色粒、砂粒を多量に含み、色調は橙色～黄橙色である。

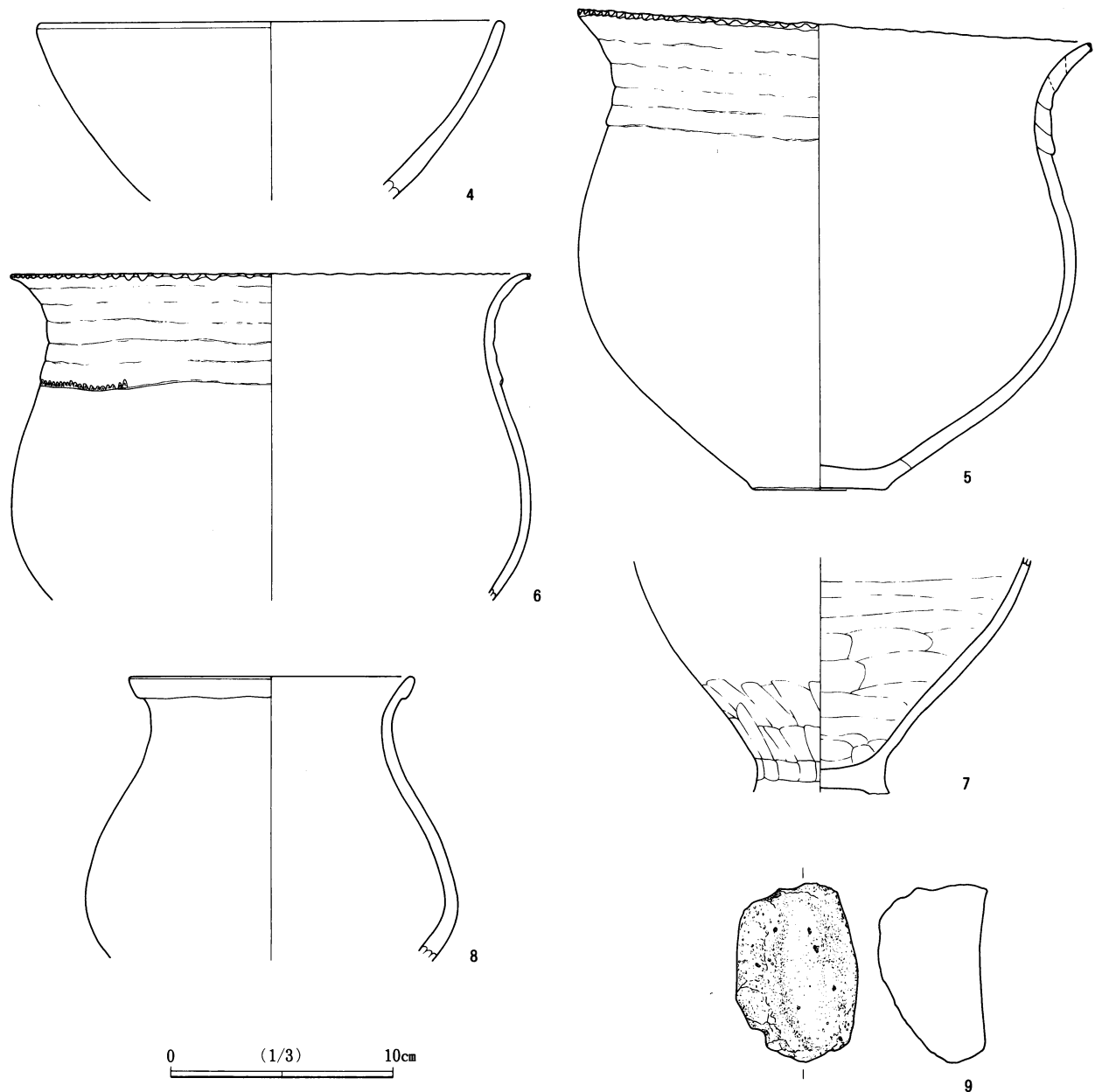
3は胴部中位以上を欠損しており、胴部最大径18.8cm、底径6.4cm、現存器高9.7cmである。胴部中位に、縄文を施文した後に沈線で山形に区画した文様帯の一部が確認できる。施文部以外の外面はヘラ磨き調整の後、赤彩される。胎土は白色粒、赤色スコリア粒を含み、色調は明褐色～赤褐色である。

4は鉢で、口径21cmである。内外面ともに器面の磨滅が著しく、口縁部外面の文様帯の存在は明確にできないが、内外面の一部に赤彩の痕跡が認められる。胎土は白色粒、石英粒、赤色スコリア粒を含み、色調は橙色～明黄色である。

5・6は甕で、口縁部に押捺を加えるもので、口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残される。5は口径22.9cm、器高20.8cm、底径6cmであり、内外面をナデ調整している。胎土は赤色スコリア粒、砂粒、白色粒を含み、色調は暗橙色～暗灰色である。6は口径23.4cmで、胴部下半を欠損する。粘土紐輪積み痕の下端部にヘラ状工具による刺突が加えられており、胴部外面はヘラナデ調整、その他はナデ調整されている。



第94図 土器配列遺構と出土遺物



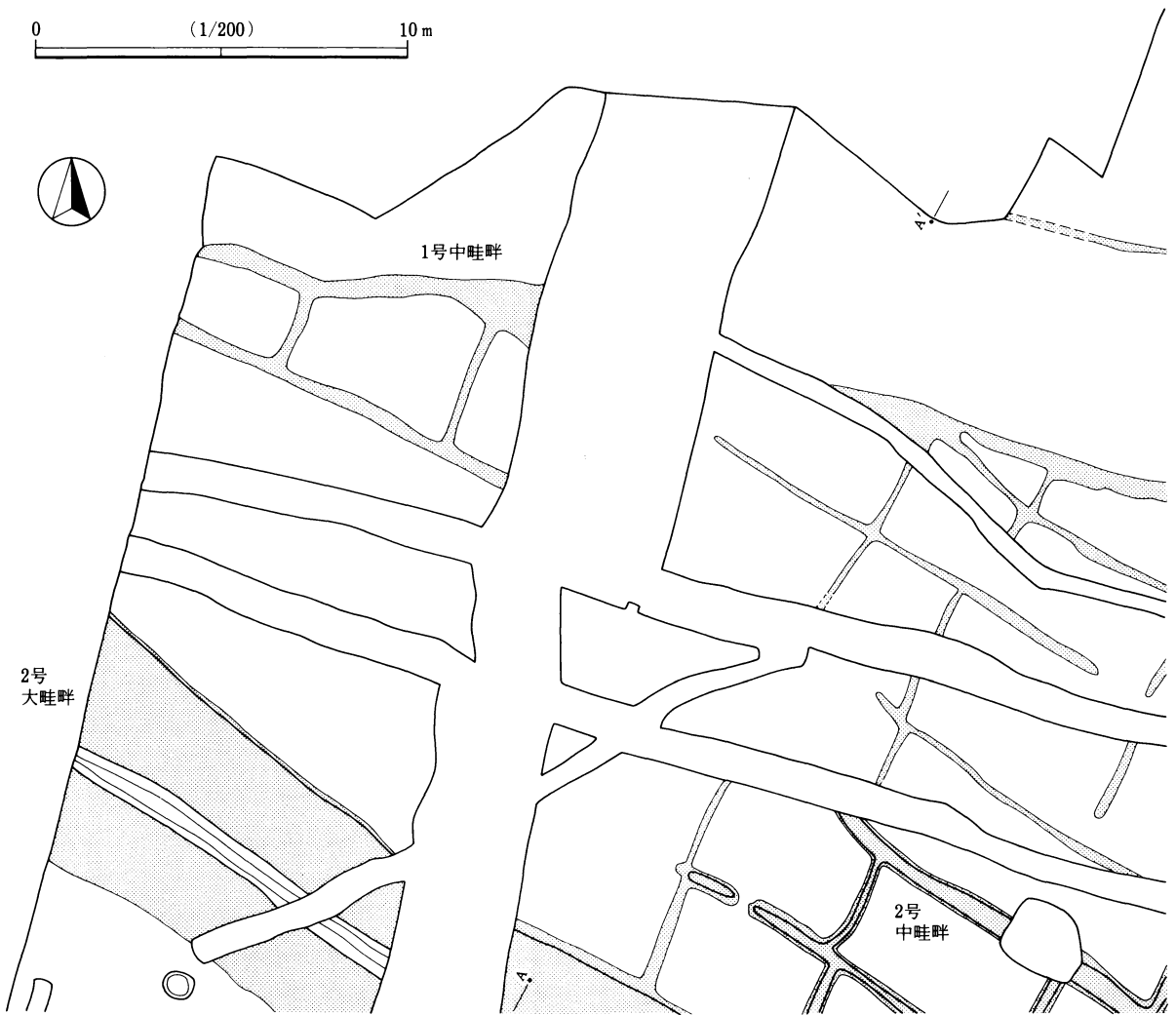
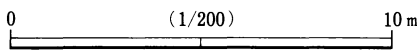
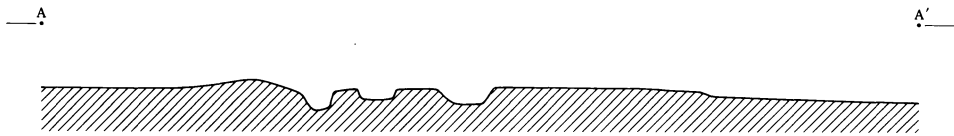
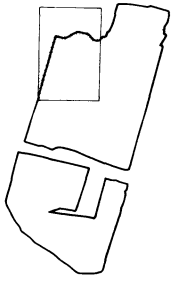
第95図 土器配列遺構出土遺物

胎土は石英粒，赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は暗橙色～黒色である。

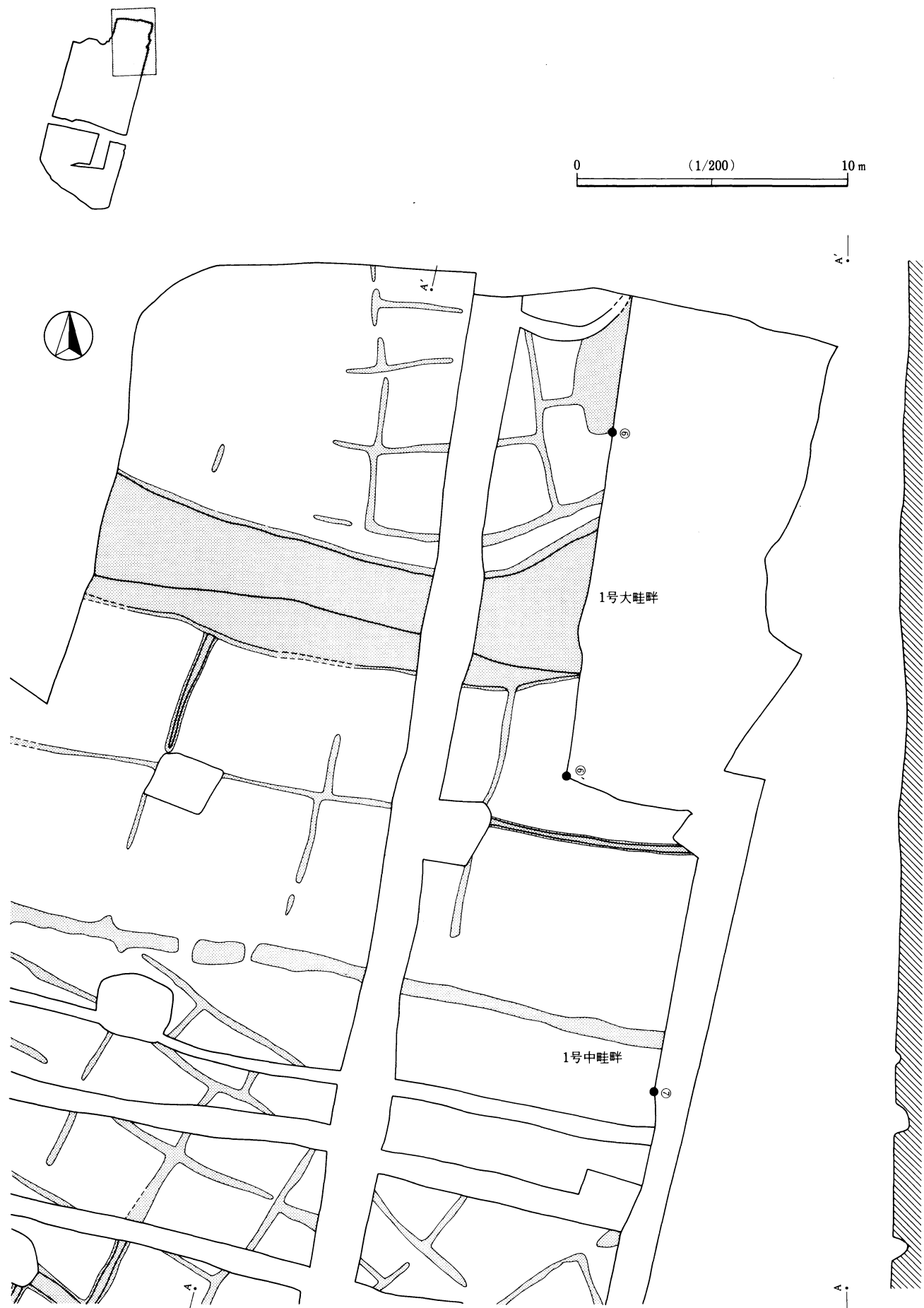
7は台付甕の胴部片で，内面はナデ調整，外面はヘラ削り調整している。被熱している可能性があり，外面器面の剥落が著しい。胎土は石英粒，小石，砂粒を多量に含み，色調は暗赤褐色～黒褐色である。

8は口径11.8cmの小型甕の口縁部片で，口縁部は折返し口縁となっている。内外面ともに器面の磨滅が著しく，調整技法は明確にできないが，外面には部分的にヘラナデ調整の痕跡が認められる。胎土は砂粒，赤色スコリア粒を含み，色調は暗灰褐色である。

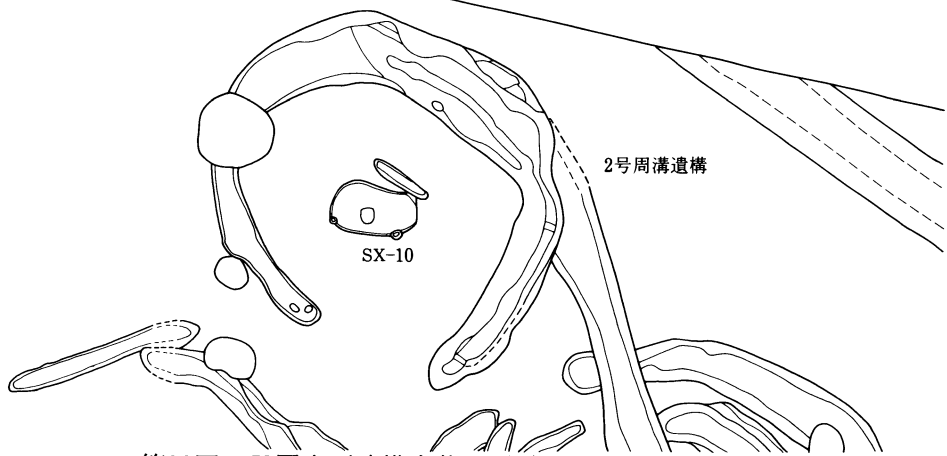
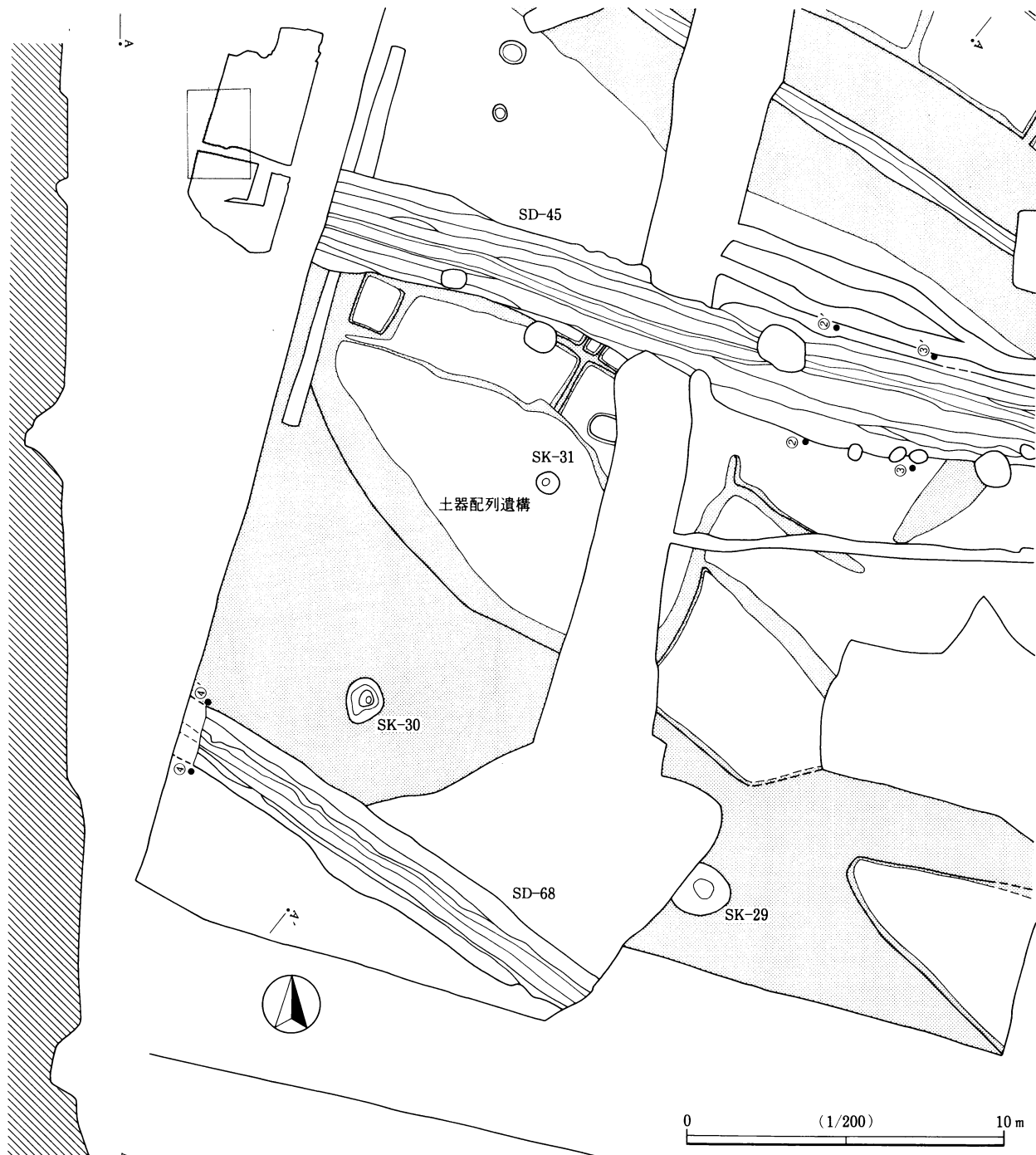
9は軽石で，側面に擦痕が認められる。



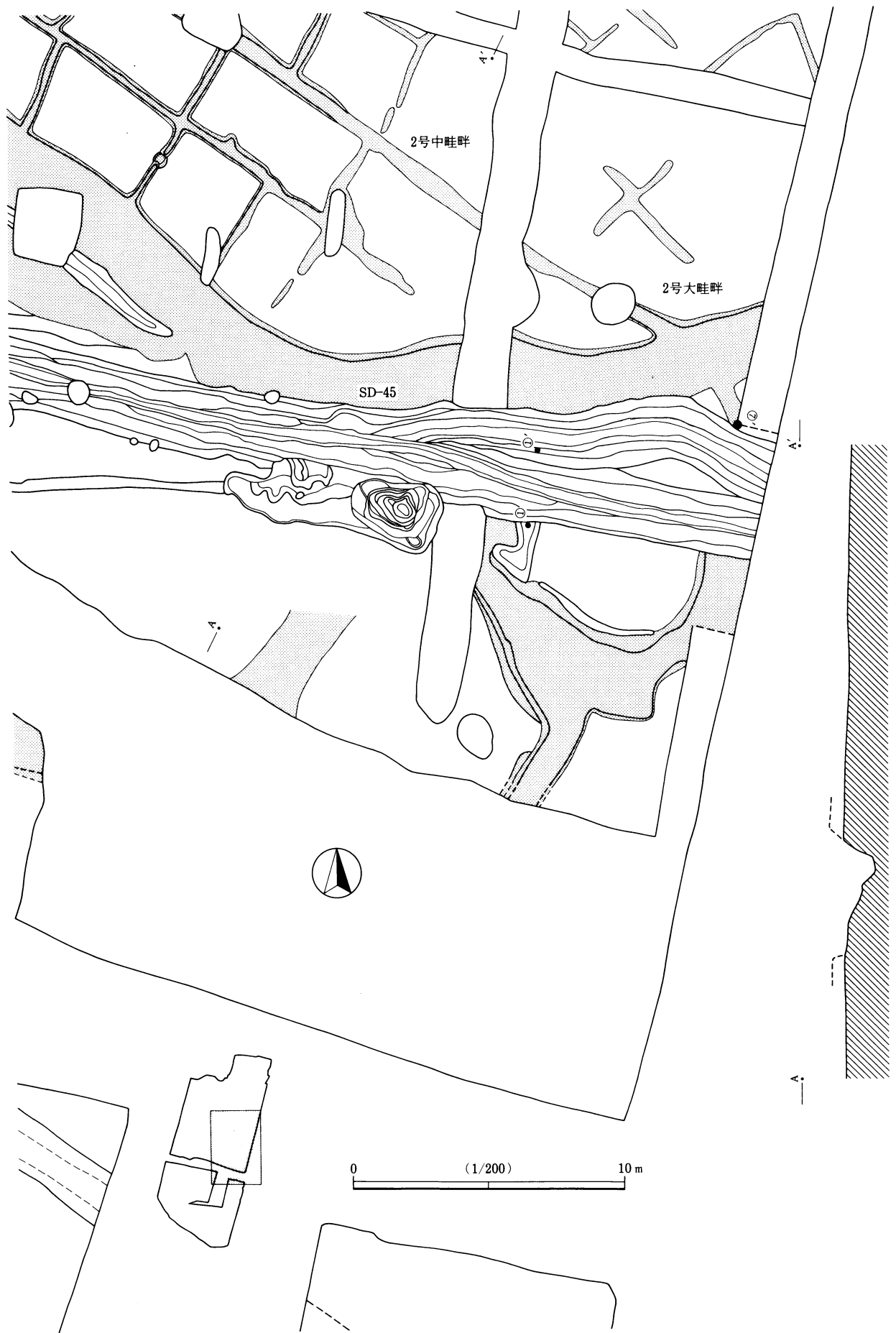
第96图 IV層上面遺構全体图(1)



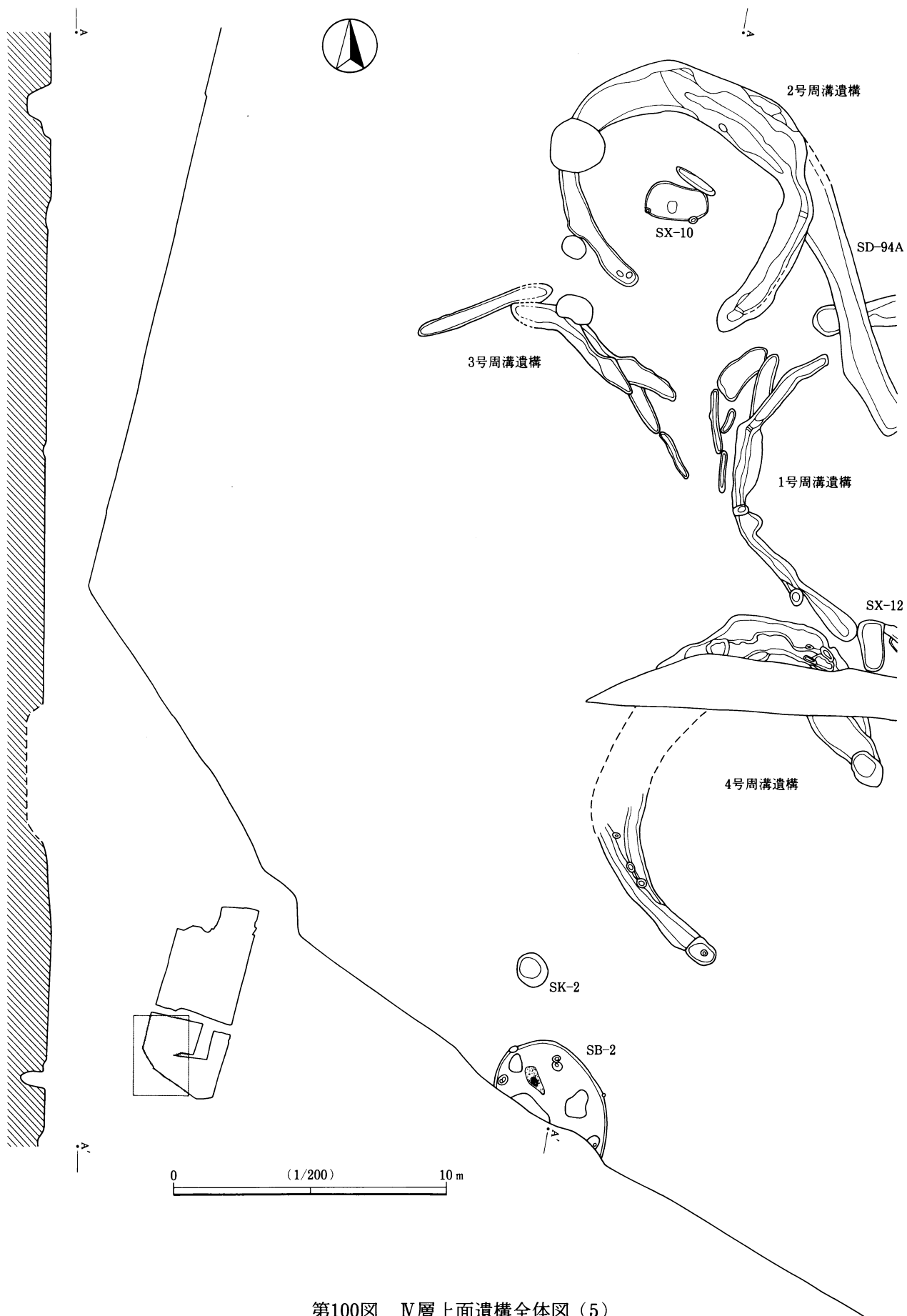
第97图 IV層上面遺構全体図(2)



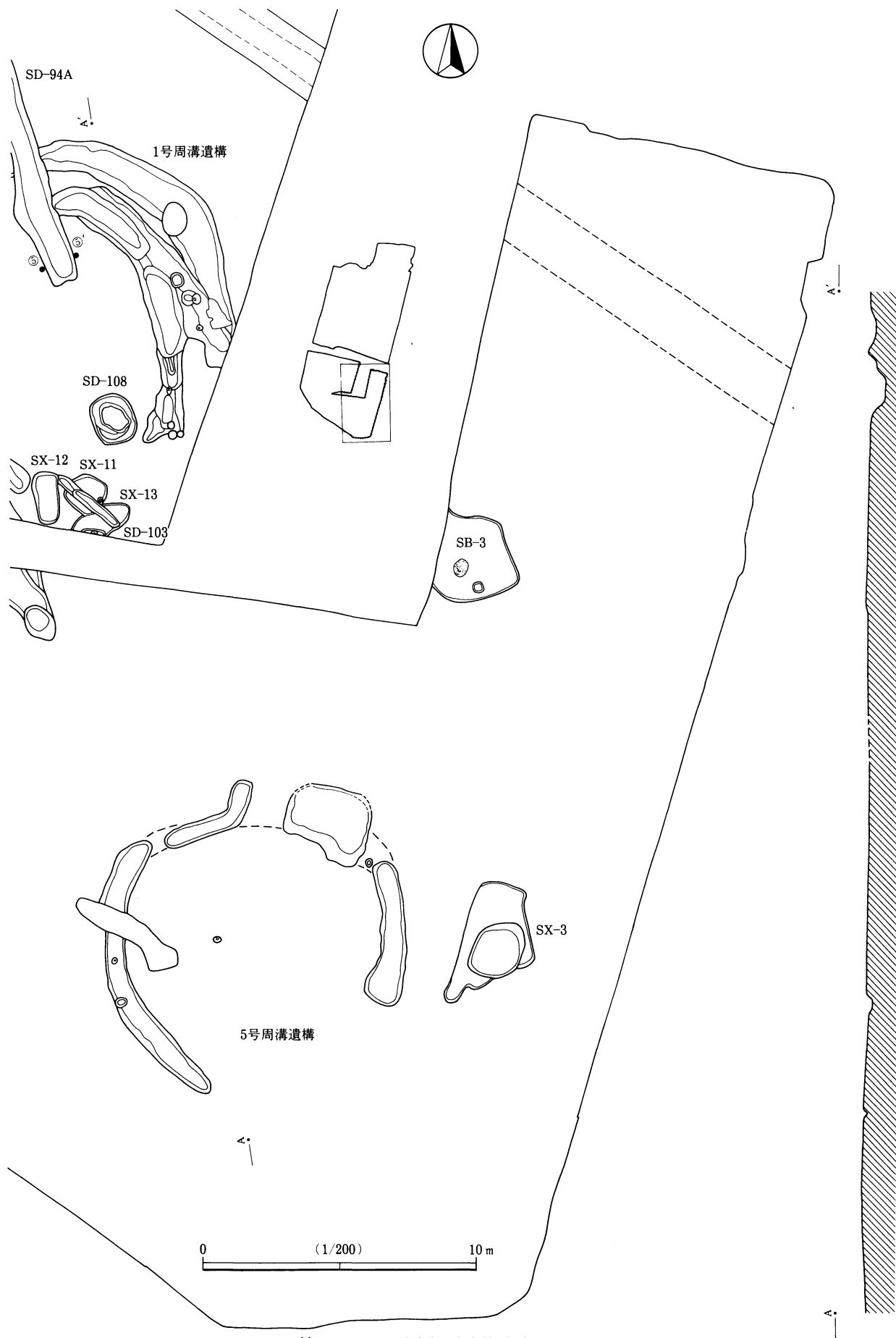
第98図 IV層上面遺構全体図(3)



第99図 IV層上面遺構全体図(4)



第100図 IV層上面遺構全体図(5)



第101図 IV層上面遺構全体図(6)

第3節 遺構外出土遺物

遺構に伴わない出土遺物については、基本土層Ⅲ層上面のものと、Ⅳ層上面のものとが厳密に分別できないため、まず、土器を年代別にグリッド単位で報告し、次に土製品等、最後に表採遺物について報告する。

1 弥生時代後期～古墳時代前期の土器（第102～104図，図版32・33）

1～5はC-6グリッドの出土である。1～4は鉢で、口径15.8cm～21.8cm，器高7.9cm～10cm，底径5.4cm～6.8cmである。内外面ともにヘラ磨き調整されている。胎土は、白色粒，赤色スコリア粒，石英粒などを含み，色調は黄灰色～黒褐色である。5は，口縁部に押捺が加えられる甕で，口径28.2cmである。口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残され，内外面ともにナデ調整が施される。胎土は，小石，石英粒を多量に含み，色調は赤褐色～黒色である。

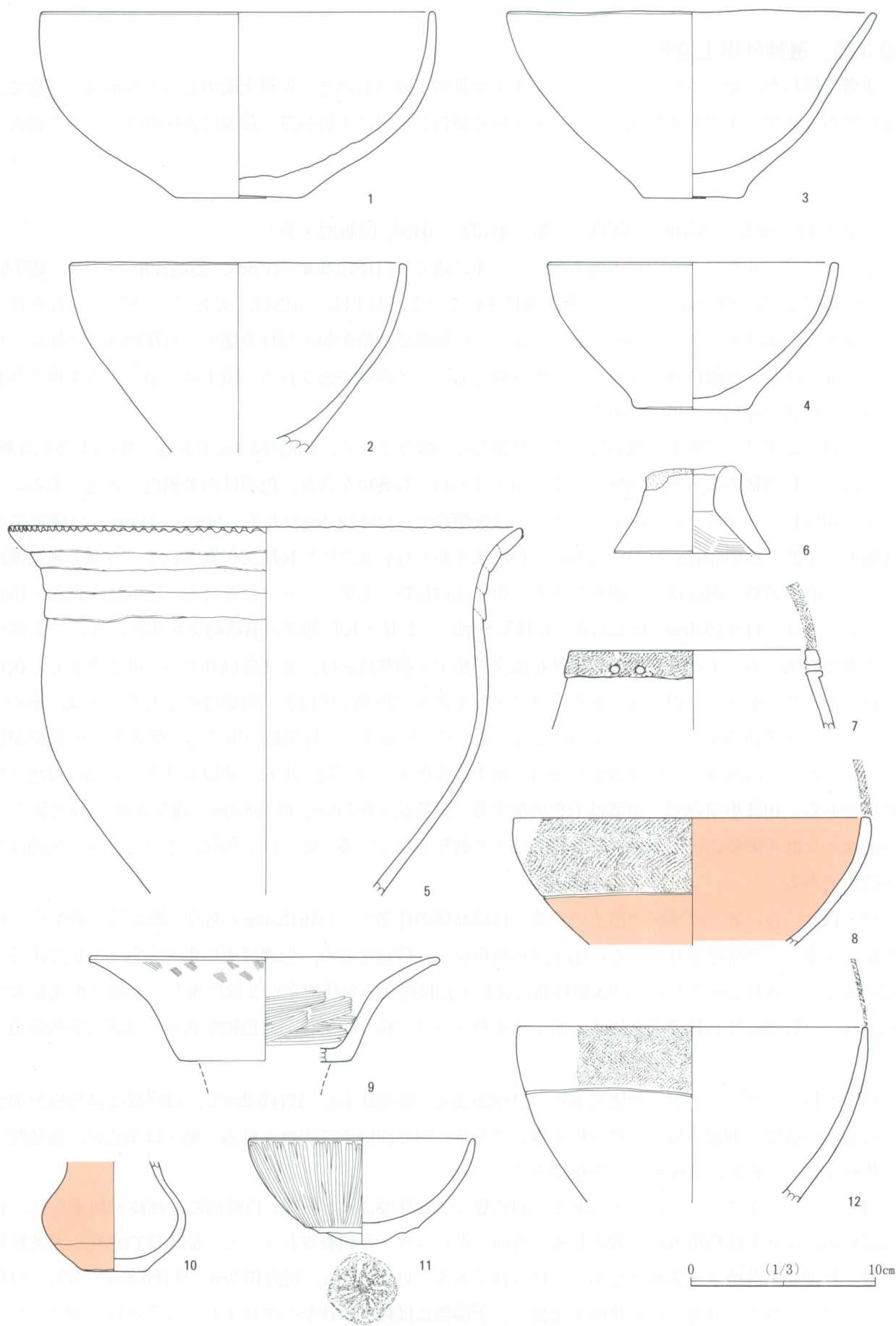
6はD-5グリッド出土の器台である。脚部のみの破片であり，脚部径8.4cmである。外面はナデ調整，内面はハケ目調整の後，ナデ調整である。胎土は小石，石英粒を含み，色調は明黄褐色～黒色である。

7～10はD-6グリッドの出土である。7は無頸壺で，口径13.4cmである。折返し口縁で，口縁部には焼成前の2個一組の穿孔が行われており，口縁部外面と口唇部にはLR縄文が施される。外面の施文部以外はヘラ磨き調整，内面はナデ調整である。胎土は白色粒，赤色スコリア粒を含み，色調は灰白色～橙色である。8は，口径19.4cmの鉢である。口縁部外面に，LR・RL縄文の羽状縄文を2段に施し，下端部を沈線で区画する。また，口唇部にはRL縄文を施す。調整技法は，施文部以外をヘラ磨き調整した後に赤彩している。胎土は，白色粒，赤色スコリア粒を含み，色調は灰白色～明黄橙色である。9は，壺の口縁部片で，口径19.2cmである。有段口縁となっており，外面はハケ目調整の後にヘラ磨きとナデ調整が加えられており，内面はヘラ磨き調整である。胎土は赤色スコリア粒，小石，砂粒を含み，色調は橙色～黒褐色である。10は小型壺で，頸部以上を欠損する。胴部最大径7.8cm，底径3.4cm，現存器高6.1cmである。外面はヘラ磨き調整の後に赤彩され，内面はナデ調整されている。胎土は石英粒，小石を含み，色調は明黄橙色である。

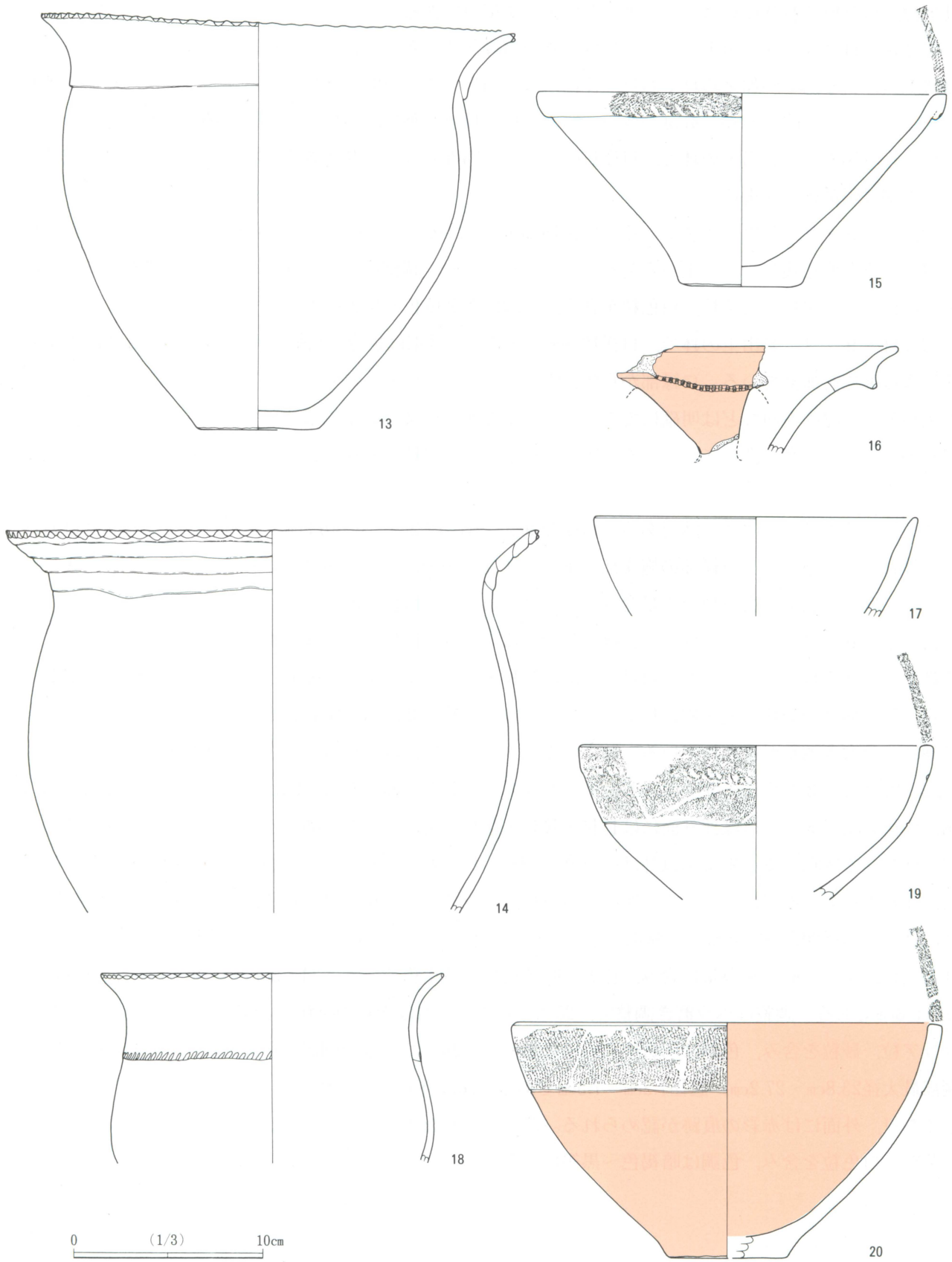
11・12は，D-8グリッドの出土である。11は高杯の杯部で，口径12.4cmであり，脚部は欠損する。内外面は丁寧にヘラ磨きされている。胎土は黄褐色粒子，砂粒を含み，色調は灰白色～赤色・黒色である。12は鉢で，口径19.2cmである。口縁部外面にRL・LR縄文の羽状縄文を2段に施し，下端部を沈線で区画する。口唇部にはLR縄文を施す。胎土は赤色スコリア粒，石英粒，白色粒を含み，色調は暗黄橙色である。

13は，D-7グリッド出土の甕である。口径25.2cm，器高21.4cm，底径6.2cmで，口縁部には押捺が加えられる。口縁部と胴部の境には接合痕を残しており，内外面はナデ調整される。胎土は黒色粒，白色粒，石英粒を含み，色調は黄灰褐色～黒色である。

14・15はE-7グリッドの出土である。14は甕で，口径28.4cmである。口縁部には押捺が加えられ，口縁部外面には粘土紐輪積み痕が残される。外面ともにヘラナデ調整されている。胎土は白色粒，石英粒を含み，色調は暗黄橙色～黒褐色である。15は鉢である。口径21.5cm，器高10.2cm，底径5.8cmである。口縁部は折返し口縁で，外面にはLR縄文を施し，下端部には縄文原体かヘラ状工具による押捺が加えられている。また，口唇部にはRL縄文が施される。施文部以外はヘラ磨き調整されている。胎土は，赤色スコ



第102図 遺構外出土遺物(1)



第103図 遺構外出土遺物(2)

リア粒，白色粒，石英粒を含み，色調は黄橙色～灰褐色である。

16はE-11グリッドの出土である。特殊器台の口縁部片と考えられる。口縁部は有段で，下端部にハケ目状工具による刻みが加えられており，体部には三角形の透孔が開けられている。内外面はヘラ磨き調整されており，部分的に赤彩の痕跡が残る。胎土は白色粒，石英粒，砂粒を含み，色調は暗赤褐色である。

17はF-10グリッド出土の鉢で，口径17cmである。内外面はヘラ磨き調整されている。胎土は砂粒を含み，色調は明黄色～灰褐色である。

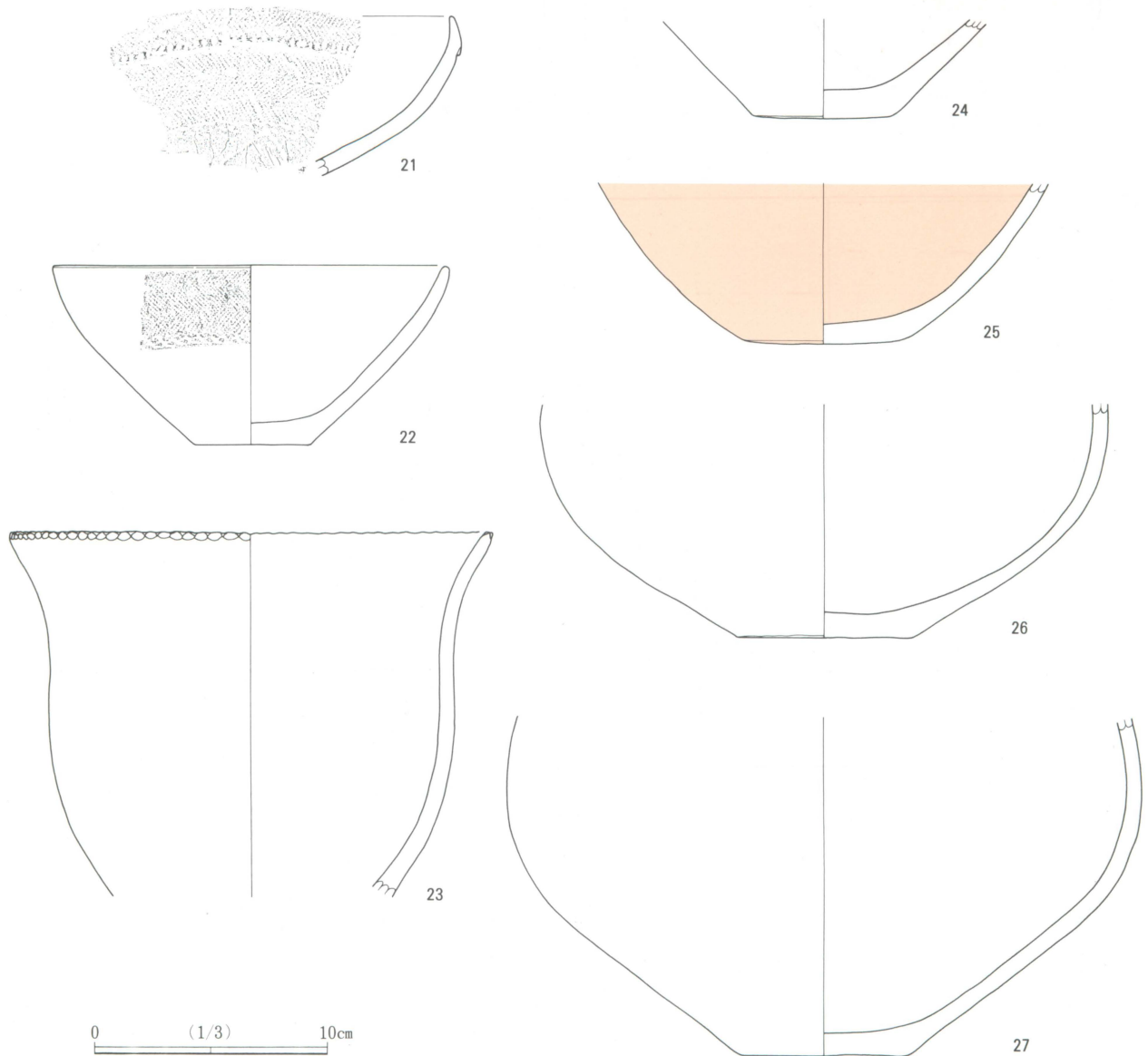
18はH-6グリッド出土の甕である。口径18.2cmで，口縁部には押捺が加えられている。口縁部と胴部の境には接合痕を残し，その上から刻みが加えられている。調整技法は内外面ともにナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒，石英粒，白色粒を含み，色調は明黄橙色～橙色である。

19はH-9グリッド出土の鉢で，口径18.8cmである。口縁部は折返し口縁としており，下端部に縄文原体による押捺を加えている。口縁部から体部中位にかけての部分と口唇部に縄文を施しているが，器面の磨滅が著しく縄の方向などは明確にできない。体部外面の施文部の下端は沈線で区画されており，施文部以外の器面はヘラ磨き調整されている。胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は暗黄褐色～黒褐色である。

20はH-7グリッド出土の鉢である。口径22.9cm，器高12.2cm，底径6.3cmである。口縁部外面と口唇部にはRL縄文が施され，口縁部の施文部の下端は沈線で区画される。施文部以外はヘラ磨き調整の後に赤彩されている。胎土は白色粒を少量含み，色調は灰白色～黄橙色である。

21はI-6グリッド出土の鉢で，口縁部片である。口縁部は折返し口縁であり，下端部に縄文原体による押捺が加えられている。また，口縁部外面にLR・RL縄文による羽状縄文が，体部の中位以上にRL・LR・RL縄文の羽状縄文が施されており，施文部の下端を2段のS字状結節文で区画している。施文部以外はヘラ磨き調整が行われている。胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は明黄褐色～橙色である。

22～27はG-3からK-9グリッド付近にかけて出土した土器である。22は鉢で，口径17cm，器高7.7cm，底径5cmである。口縁部外面にはLR・RL・LR縄文による羽状縄文が施され，下端部を2段のS字状結節文で区画する。施文部以外はヘラ磨き調整されており，器面の磨滅が著しく明確ではないが，外面は赤彩されている可能性がある。胎土は白色粒，赤色スコリア粒を含み，色調は暗黄褐色～黒色である。23は甕で，口径20.7cmである。口縁部は丁寧な押捺が加えられ，内外面はヘラナデ調整されている。胎土は石英粒，小石，砂粒を多量に含み，色調は暗黄褐色～暗褐色である。24・25は鉢の底部片で，底径は6cm～6.8cmである。調整はヘラ磨き調整で，25は赤彩され，24は赤彩の痕跡が認められる。胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は明黄褐色～灰色である。26・27は壺の胴部から底部にかけての破片である。胴部最大径23.8cm～27.2cm，底径7.2cm～7.5cmである。26は外面をヘラ磨き，内面を丁寧にヘラナデ調整しており，外面には赤彩の痕跡が認められる。27は内外面をナデ調整している。胎土は赤色スコリア粒，石英粒，白色粒を含み，色調は暗褐色～黒褐色である。



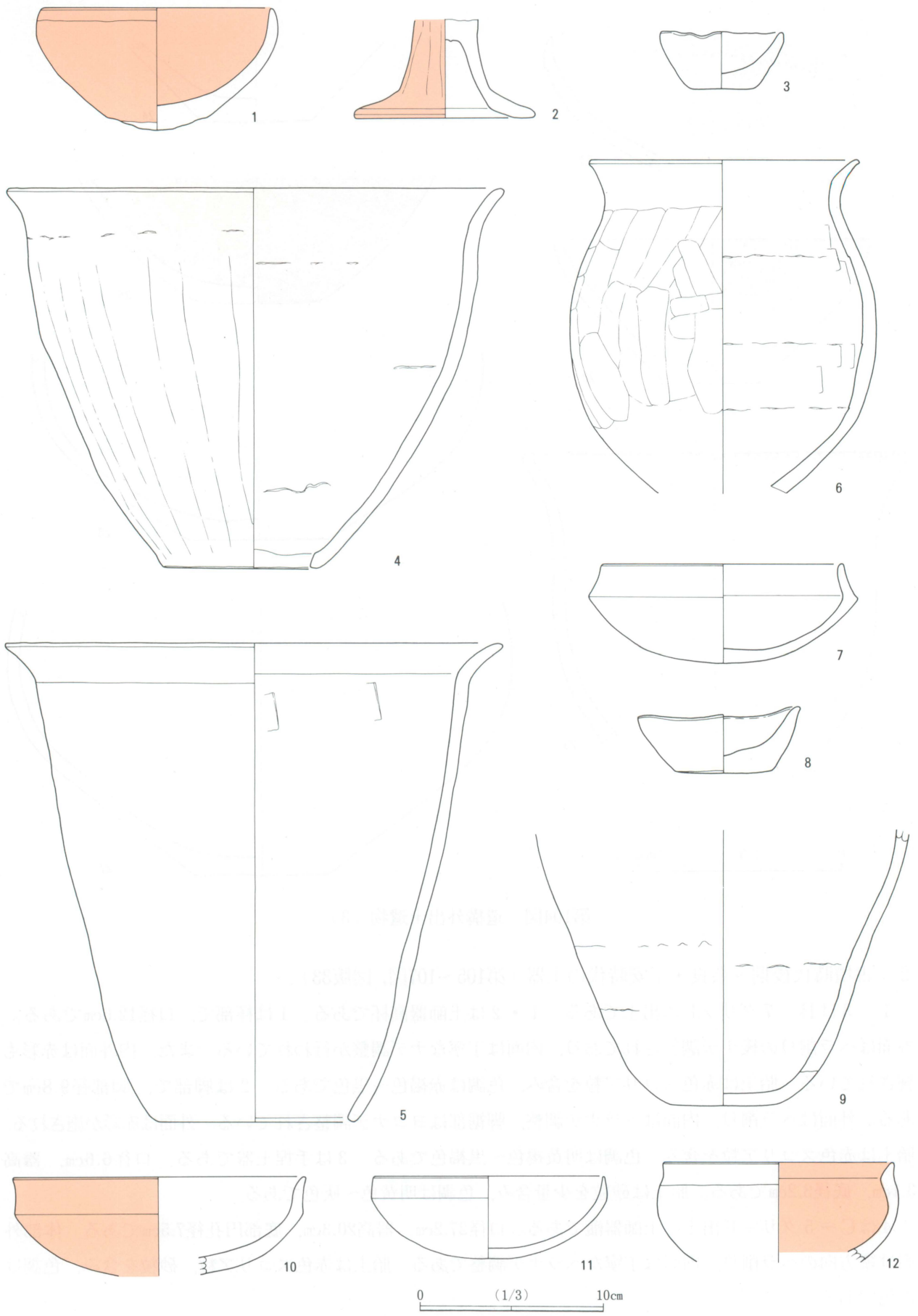
第104図 遺構外出土遺物(3)

2 古墳時代後期～奈良・平安時代の土器(第105～107図, 図版33)

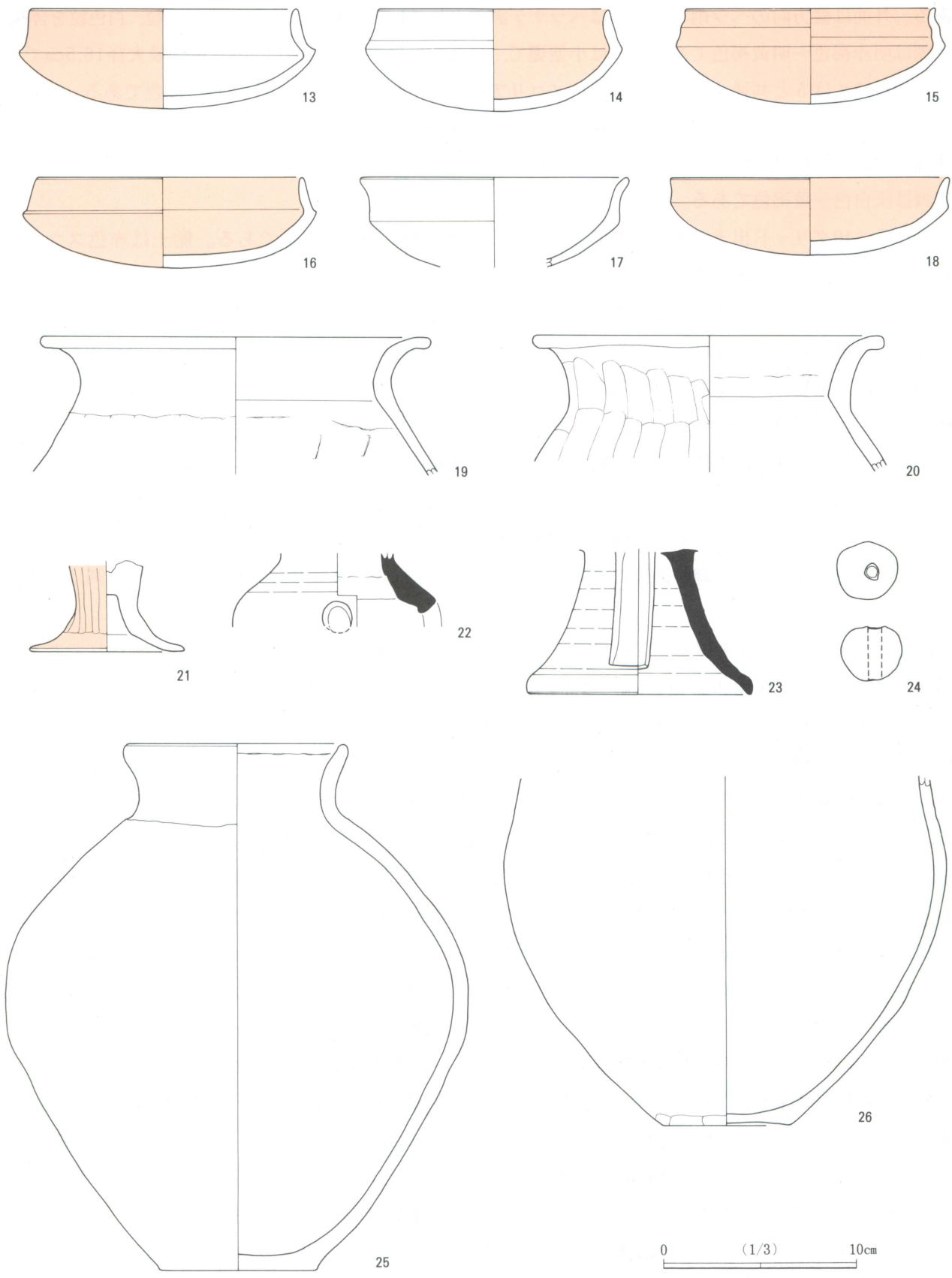
1～3はB-7グリッドの出土である。1・2は土師器高杯である。1は杯部で、口径12.6cmである。外面はヘラ削りの後ナデ調整されており、内面は丁寧なナデ調整が行われている。また、内外面は赤彩も施されている。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は赤褐色～黒色である。2は脚部で、脚部径9.8cmである。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整、脚裾部はヨコナデ調整されている。外面は赤彩が施される。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は明黄褐色～黒褐色である。3は手捏土器である。口径6.6cm、器高3.1cm、底径3.2cmである。胎土は砂粒を少量含み、色調は明黄色～灰色である。

4はC-5グリッド出土の土師器甌である。口径27.2cm、器高20.3cm、底部円孔径7.5cmである。体部外面は縦方向のヘラ削り、内面は丁寧なヘラナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は橙色である。

5・6はD-6グリッドの出土である。5は土師器甌で、口径27.2cm、器高25.8cm、底部円孔径10cmで



第105図 遺構外出土遺物(4)



第106図 遺構外出土遺物(5)

ある。外面は縦方向のヘラ削り、内面はヘラナデ調整されている。胎土は赤色スコリア粒、白色粒を含み、色調は明赤褐色～明黄褐色である。6は小型甕で、底部を欠損する。口径14.4cm、胴部最大径16.5cmである。調整技法は5と共通する。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は明黄色～黒色である。

7は、E-7グリッド出土の土師器杯である。蓋杯身の模倣杯であり、口径13cm、器高5.3cmである。体部外面はヘラ削り調整、口縁部内外面と内面はナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は灰白色～黄褐色である。

8はG-10グリッド出土の手捏土器で、口径8.8cm、器高3cm、底径5.2cmである。胎土は赤色スコリア粒を含み、色調は黄橙色～黒褐色である。

9はI-7グリッド出土の土師器甕である。胴部から底部にかけての破片であり、底径5.6cmである。外面はヘラ削り調整、内面はナデ調整である。胎土は白色粒を少量含み、色調は明黄色～橙色である。

10・11は、攪乱により遺構が失われていたR-6からS-9グリッドにかけての範囲で出土した土師器杯である。10は杯蓋の模倣杯で、口径15.8cmである。口縁部内外面と内面はナデ調整、外面はヘラ削り調整されており、内外面は赤彩される。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は明黄橙色～灰褐色である。11は丸底杯であり、口径12.4cm、器高4.5cmである。調整技法と胎土の特徴は10と共通する。

12はS-9グリッド出土の土師器碗で、口径12.6cmである。外面は器面の磨滅が著しく調整技法は不明であるが、内面はヘラ磨き調整の後に赤彩されている。胎土は赤色スコリア粒を少量含み、色調は明黄褐色～灰褐色である。

13～18、20～26はT-8グリッドの出土である。13～18は土師器杯で、いずれも蓋杯の模倣杯である。13～16は杯身で、口径12.2cm～14.2cm、器高4.7cm～5.4cmである。調整技法は、口縁部内外面と内面をナデ調整、体部外面をヘラ削り調整しており、赤彩が施されている。また、15は口縁部を2段にヨコナデ調整しており特徴的である。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は黄灰色・黄褐色～黒色である。17・18は杯蓋の模倣杯で、口径14cm～14.6cmである。調整技法・胎土の特徴は杯蓋と共通し、18は赤彩される。20は土師器甕の口縁部片で、口径18.4cmである。外面はヘラ削り調整、内面はヘラナデ調整されている。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は暗褐色である。21は高杯脚部で、脚部径8cmである。外面はヘラ削り調整し、脚裾部内外面はヨコナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は明黄色である。22は須恵器の腿である。胎土は黄褐色粒子、砂粒を含み、色調は灰褐色である。23は須恵器高杯の脚部片で、脚部径11.6cmである。4方向の長方形透孔が開けられており、透孔部分は丁寧なヘラ削りにより面取りされている。胎土は白色粒、砂粒を含み、色調は灰褐色～暗オリーブ色である。24は土玉で、表面はナデ調整される。25・26は土師器甕である。25は、口径11.6cm、胴部最大径24cm、器高27.6cm、底径8cmである。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面はヘラ削りの後ヘラナデ調整、内面はヘラナデ調整されている。胎土は白色粒、赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は暗黄橙色～黒色である。26は胴部から底部にかけての破片であり、底径6.5cm、胴部最大径23.2cmである。外面はヘラ削り調整、内面はヘラナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒、砂粒を含み、色調は赤褐色～黒褐色である。

19はT-7グリッド出土の土師器甕である。口径20.4cmである。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。胎土は白色粒、砂粒を含み、色調は明黄色である。

27～30はT-9グリッド出土の土師器杯である。いずれも杯蓋の模倣杯で、口径14cm～15cm、器高3.7cm～4.6cmである。29以外は内外面をナデ調整しており、29は外面をヘラ削り調整し、赤彩を施している。



第107図 遺構外出土遺物(6)

胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は黄橙色～灰褐色である。

31・32はT-10グリッド出土の土師器高杯である。31は脚部片で，脚部径9.2cmである。外面はヘラ削り，内面はヘラナデ調整し，脚裾部内外面はヨコナデ調整される。外面には赤彩を施す。胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は明黄橙色である。32は，杯部径13cm，器高8.2cm，脚部径8.4cmである。杯部内面はヘラ磨き，杯部と脚部の外面はヘラ削り調整されており，脚裾部はヨコナデされている。胎土は白色針状物質と砂粒を含み，色調は黄灰色～灰白色である。

33・34は，N-7からR-9グリッド付近に設定した確認調査のトレンチ内から出土したものである。33は，土師器鉢で，口径14.4cm，器高7.5cm，底径7cmである。器面の磨滅が著しく，調整技法は明確にできないが，底部外面には木葉痕が残される。胎土は赤色スコリア粒，白色針状物質を含み，色調は橙色である。34は，長胴甕の口縁部から胴部にかけての破片で，口径16cmである。外面はヘラ削り，内面はヘラナデ調整されている。胎土は石英粒，白色針状物質，小石を含み，色調は赤褐色～黒褐色である。

35はU-13グリッド出土の土師器甌である。口径20.8cm，器高24.6cm，底部円孔径6.4cmである。外面はヘラ削り，内面はナデ調整である。胎土は赤色スコリア粒，黄褐色粒を含み，色調は橙色～黒褐色である。

36はT-12グリッド出土の土師器上総型杯で，口径13cm，器高3.4cm，底径8.2cmである。胎土は赤色スコリア粒，砂粒を含み，色調は橙色～灰褐色である。

37はH-6グリッド出土の土師器台付甕の脚台部片で，脚台部径9.8cmである。胴部外面はヘラ削り，内面はナデ調整されており，脚台部は外面がナデ，内面がヘラナデ調整である。胎土は小石，石英粒を含み，色調は赤褐色～黒色である。

38はF-11グリッド，39はF-6グリッドの出土であり，湖西窯産の須恵器蓋と杯身である。39は，底部に回転ヘラ削りを行った後に高台を貼り付けており，高台径は7.8cmである。胎土は白色粒子を少量含み，色調は灰白色～青灰色である。

40はT-10グリッド出土の灰釉陶器で，長頸瓶の底部片である。外面には部分的に灰釉が付着している。胎土は長石を少量含み，色調は明オリーブ色～灰白色である。

41はT-12グリッド出土の灰釉陶器長頸瓶で口径12.6cmである。胎土は白色粒を含み，色調は灰褐色である。

42はG-5グリッド出土の灰釉陶器で，小型長頸瓶である。口縁部が欠損する。現存器高10cm，高台径5.2cm，胴部最大径8.7cmである。胴部下端に回転ヘラ削りを施し，高台を貼り付けている。肩部付近には暗緑褐色の灰釉が付着する。胎土は長石粒を含み，色調は灰オリーブ色～灰色である。

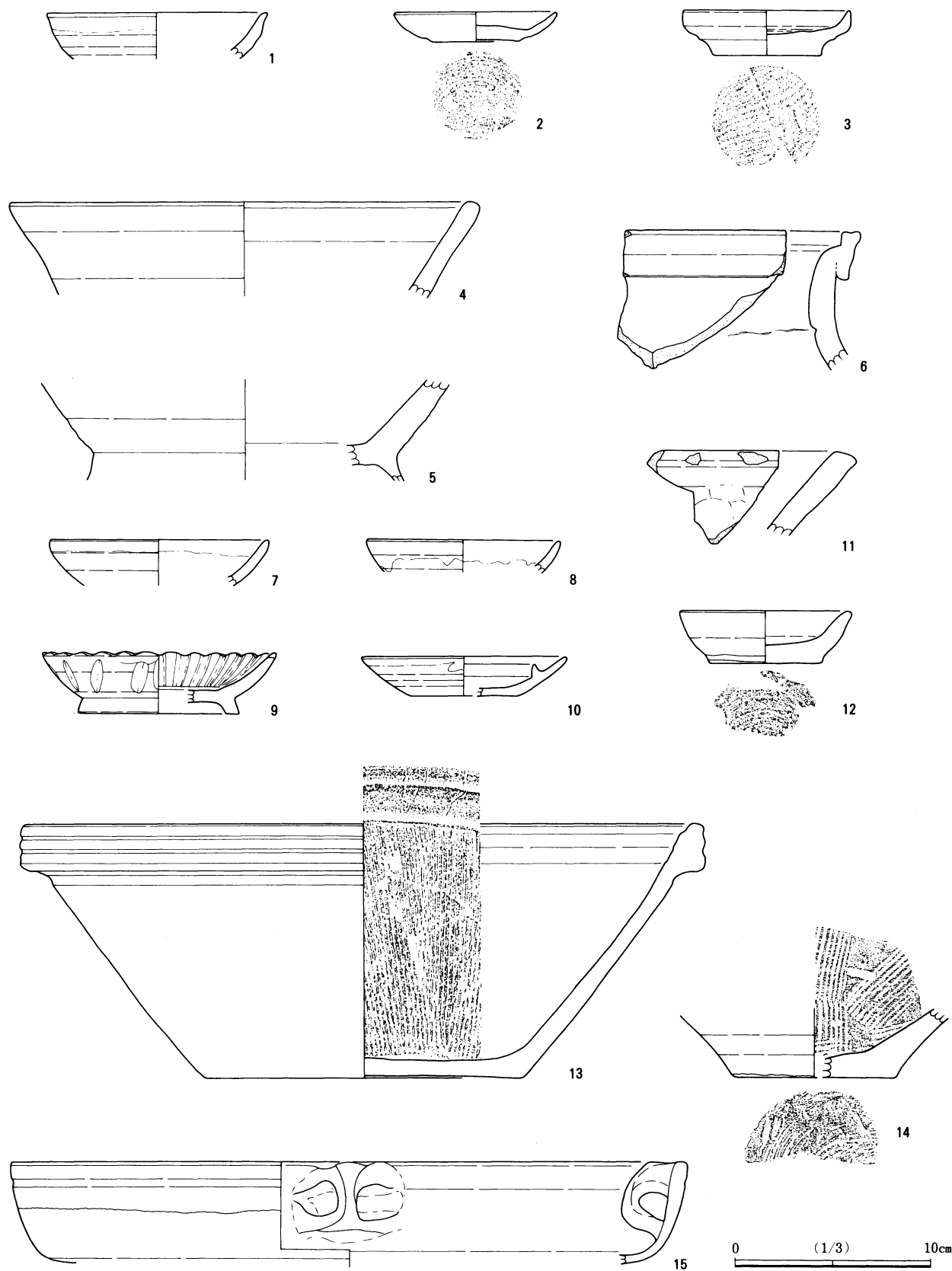
3. 中・近世の陶磁器・土器（第108図，図版34・35）

1はF-9グリッド出土の瀬戸窯縁釉小皿である。口径11.6cm，古瀬戸後期様式Ⅲ期前後の製品である。

2はT-8グリッド出土の土師質土器小皿で，口径8.6cm，器高1.5cm，底径4.4cmである。ロクロ成形で，底部は回転系切り無調整である。胎土は赤色スコリア粒，白色針状物質，砂粒を含み，色調は暗橙色である。

3はT-11グリッド出土の土師質土器小皿で，口径8.6cm，器高2.3cm，底径5.6cmである。ロクロ成形で，底部は静止系切り無調整である。胎土は砂粒を多く含み，色調は暗橙色である。

4はT-10グリッド出土の常滑窯産の捏鉢で，口径24.4cmである。胎土は長石粒を少量含み，色調は灰



第108図 遺構外出土遺物(7)

白色で、常滑窯編年の6 a 型式の製品である。

5はT-8グリッド出土、これも常滑窯産の捏鉢である。胎土の特徴は4に類似し、常滑窯編年の5型式の製品である。

6はT-10グリッド出土の常滑窯産の甕である。胎土は長石粒、石英粒などを少量含み、色調は暗緑色～オリーブ灰色である。常滑窯編年の7～8型式の製品である。

7～10はR-6～S-9グリッド付近での出土である。7・8は瀬戸窯産の縁釉小皿で、口径10cm～11.4cmで、古瀬戸後期様式Ⅲ期の製品である。9は菊皿で、口径12cm、器高3.1cm、高台径8.2cmである。ロクロ成形後に打型で菊花状に形取りをしており、畳付き部分と高台内面を除き、明緑色の灰釉を施している。瀬戸市かみた窯の製品に類品があり、17世紀後半の製品と推定できる。

10はE-10グリッド出土の燈火皿で、口径10.6cm、器高2cm、底径5.6cmである。18世紀以降の瀬戸・美濃窯産と考えられる。

11はG-3からK-9グリッド付近からの出土で、常滑窯産の捏鉢片である。胎土は長石粒を少量含み、色調は赤褐色である。常滑窯編年の8型式の製品である。

12・13は、N-6グリッド付近の確認トレンチからの出土である。12は土師質土器小皿で、口径9cm、器高2.7cm、底径5.8cmである。ロクロ成形で、底部は回転系切り無調整である。胎土は砂粒を含み、色調は明黄橙色である。13は堺産の搦鉢で、口径35.4cm、器高13cm、底径16.4cmである。19世紀代の製品である。

14は、R-10グリッド付近で出土した瀬戸・美濃窯産の搦鉢で、底径8.4cmである。錆釉が施され、底部には回転系切り痕が残される。胎土の色調は灰白色である。搦目が粗いため、17世紀代、連房期の製品であろう。

15は、P-9グリッド付近の確認トレンチで出土した焙烙で、口径35cmである。胎土は黒色粒、石英粒を含み、色調は黒褐色である。18世紀代以降の製品である。

4 土製品・木製品・銭貨（第109図、図版36）

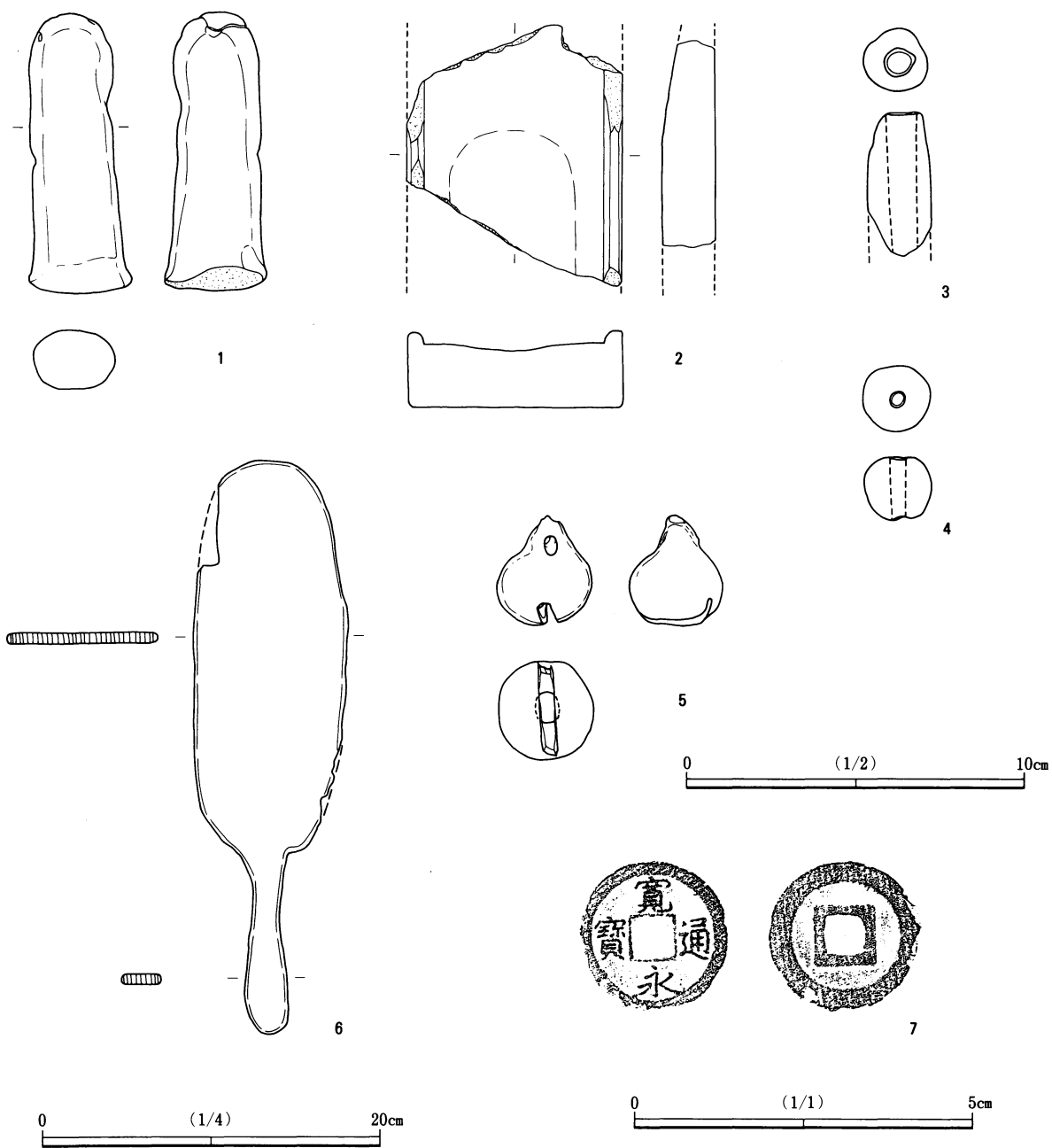
1・2はB-6グリッドの出土である。1は棒状の土製品で、表面はナデ調整されており、年代・用途は不明である。2は砂岩製の硯で、近世以降の製品であろう。

3・4はG-3からK-9グリッド付近から出土した土錘と土玉である。

5はR-7グリッド出土の土鈴で、表面はナデ調整されている。年代は不明である。

6はA-9グリッド出土の木製品である。形態は羽子板状で、長さ33.5cm、最大幅9.1cm、厚さ6.5mmである。用途・年代ともに不明である。

7はA-5グリッド出土の寛永通寶で、新寛永に含まれる。外縁径2.17cm、内縁径1.89cm、外縁厚1.13mm、文字面厚1.13mm、重量2.13gである。



第109図 遺構外出土遺物(8)

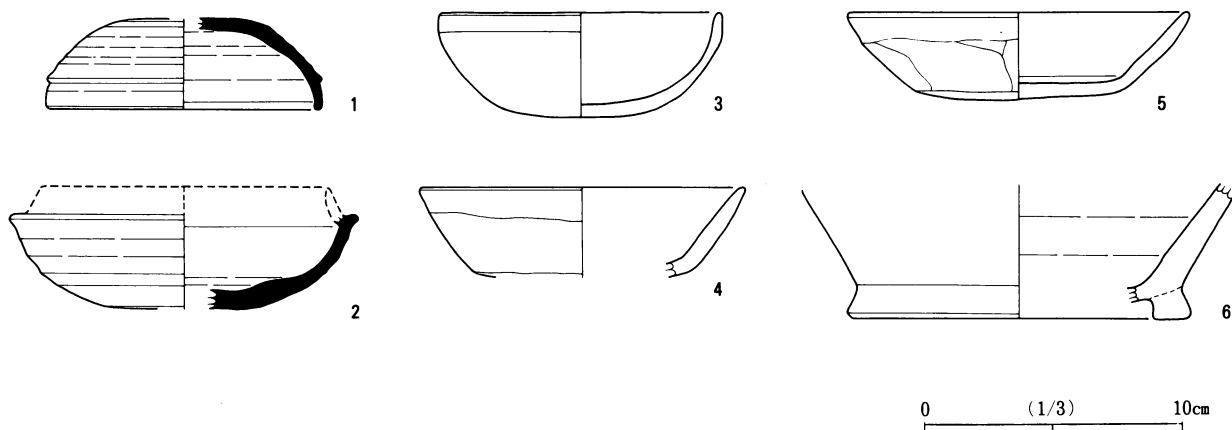
5 表採遺物（第110図）

1・2は、須恵器蓋杯である。1は口径10.8cm、器高3.5cmで、頂部付近に回転ヘラ削りを施す。TK-217号型式期の製品である。2は口縁部を欠損するもので、底部付近に回転ヘラ削りを施している。TK-209号型式前後の製品であろう。

3は丸底の土師器杯である。口径11.2cm、器高4cmで、調整は外面をヘラ削り調整、内面をヘラ磨き調整している。胎土は砂粒、赤色スコリア粒を含み、色調は黄橙色である。

4・5は上総型の土師器杯である。口径13.2cm～13.6cm、器高3.2cm～3.5cm、底径8.2cm～8.6cmである。調整技法は、外面がヘラ削り調整、内面がナデ調整である。胎土は砂粒を含み、色調は橙色～黄橙色である。

6は灰釉陶器長頸瓶の底部片で、高台径は13.2cmである。胎土は長石粒、石英粒を含み、色調は灰色である。



第110図 表採遺物

第3章 まとめ—芝野遺跡の景観変化について—

芝野遺跡で検出した遺構は、基本土層のⅢ層上面とⅣ層上面に分けることができ、Ⅲ層上面で検出した遺構の年代は、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世であり、Ⅳ層上面は弥生時代後期である。また、Ⅲ層中には古墳時代前期の溝が掘られている。そして、調査範囲内では、各時代ごとに景観は大きく変化している。以下、時代順に遺構の概要をまとめ、芝野遺跡における景観変化の概要について述べることにしたい。

第1節 弥生時代後期

遺構：基本土層のⅣ層上面で検出した遺構が全て含まれ、主な遺構には水田面、土器配列遺構、溝2条（SD-68・94A）、竪穴住居跡2軒（SB-2・3）、1～5号円形周溝遺構がある。

年代：Ⅳ層上面の出土土器はいずれも弥生時代後期に限定でき、Ⅳ層上面の遺構は弥生時代後期の年代を推定できる。出土土器は、君津都市文化財センターの弥生後期～古墳前期土器の編年案（以後、君津編年¹⁾）では、Ⅰ・Ⅱ期に含まれる甕も見られるが、Ⅲ期に含まれる土器が圧倒的に多数を占め、Ⅳ層上面の遺構は、弥生時代後期でも中頃から後半にかけての年代を中心としていたと考えられる。そして、Ⅲ層を形成した洪水により、弥生時代後期のうちに一気に埋没したと推定できる。

水田域：水田域は、自然堤防の北側斜面から後背低地にかけて位置しており、調査区中央部から北部にかけて分布する。水田域は南東から北西にかけて緩やかに傾斜し、東西方向に走る2条の大畦畔により大きく区画されている。この大畦畔の方向は、自然堤防の傾斜・方向に沿っており、さらに、その内部は小区画水田に分けられている。このような状況は、小櫃川の対岸に位置する木更津市菅生遺跡の最下層の小区画水田（第7・8水田面）と類似している²⁾。

周溝遺構：調査区南部の自然堤防上には、竪穴住居跡と周溝遺構とが集中して立地している。竪穴住居跡と共に検出された円形周溝遺構の性格については、類例が少ない現時点では断定できないが、周溝内からは壺、甕、鉢などの土器がまとまって出土し、2号周溝遺構では中央に竪穴住居状の遺構（SX-10）を伴い、さらに竪穴住居跡と近接して検出されていることなどにより、その機能は住居と密接な関係を持っていた可能性が指摘できる。

この種の円形周溝遺構の千葉県内における類例では、市原市村上遺跡の例を挙げることができる。村上遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居跡の周辺に馬蹄形の溝が掘られており、竪穴住居跡の正面が土橋状に開口し、芝野遺跡の周溝遺構と類似している³⁾。

また、県外でも、弥生時代から古墳時代前期の集落遺跡で、馬蹄形の周溝遺構が確認されており、形態的には芝野遺跡の周溝遺構と極めて類似している。これらの遺跡の周溝遺構は、竪穴住居跡や平地住居状の遺構周辺に掘られており、その機能については、住居周辺の排水溝と想定されている⁴⁾。

芝野遺跡の周溝遺構の中心部では、明確な竪穴住居跡や平地住居の痕跡は確認されていないが、前述したように、竪穴住居跡と近接して検出され、周溝遺構にはわずかながらピットも伴っており、平地住居の存在を否定することはできない。このような状況から、芝野遺跡で確認された周溝遺構についても平地住居などの周囲に掘られた排水溝としての性格を推定できるのではなかろうか。

土器配列遺構：調査区中央から北部に位置する水田域と南部の自然堤防上の居住域との境界部分には土器配列遺構が存在する。この土器配列遺構は、水田面に面した傾斜面（畦畔部分）に壺と甕が規則的に配置された状況で検出されており、類似した遺構は、鋸南町下ノ坊遺跡B地点で確認されている。下ノ坊遺跡B地点の土器配列遺構は、弥生時代中期のもので、甕・壺・高坏により構成されており、祭祀的な性格が推定されている⁵⁾。芝野遺跡の土器配列遺構は、下ノ坊遺跡のものよりもやや年代が下がる弥生時代後期のものであるが、居住域から水田域に移行する部分に位置していることが特徴的である。この種の土器配列遺構の性格は現時点では特定できないが、下ノ坊遺跡B地点同様、祭祀的な性格が想定できるとすれば、芝野遺跡の土器配列遺構は、その立地状況から、9世紀初頭の『古語拾遺』で御歳神を祭祀対象としたような、水田に面して行われた水口祭祀的な儀礼の痕跡と考えることも可能であろう⁶⁾。

景観復元：以上の状況を総合すると、Ⅳ層上面における弥生時代後期の景観は、以下のように復元できる。まず、小櫃川に面した自然堤防上には竪穴住居跡と周溝遺構で構成される居住域が立地し、その北側の自然堤防の斜面部から後背低地部分には水田域が広がっている。そして、この居住域と水田域を区画するのが、水田区画の方向と平行して走る大型溝（SD-68）である。この溝は、居住域と水田域を区画するとともに、その規模から考えて水田域の幹線用排水路としての機能が想定できよう。また、土器配列遺構は、この溝と隣接して存在しており、水口祭祀と共に居住域の北側を限る境界祭祀的な性格を想定することが可能かもしれない。

このように、Ⅳ層上面、弥生時代後期の景観は、小櫃川に沿った自然堤防上のコンパクトな居住域と、その北側に広がる水田域という景観を復元することができる。そして、この景観は、弥生時代後期後半に起こった洪水により埋没し一変することとなり、この洪水は、対岸の菅生遺跡最下層（第7・8水田面）の小区画水田を埋没させた洪水と対応するものであろう。つまり、芝野遺跡の基本土層のⅢ層と菅生遺跡のⅥ層が対応関係にあると考えられる。

景観変化の背景：芝野遺跡や菅生遺跡周辺をはじめとした小櫃川流域の微地形は、弥生時代後期の洪水により大きな変化を被っていることが判明したが、これと類似した状況は、君津市内を流れる小糸川流域の常代遺跡や泉遺跡でも確認できる。常代遺跡では、弥生時代中期には堰が作られ灌漑用水の水源として利用されていた自然流路が、弥生時代後期には洪水により完全に埋没しており⁷⁾、泉遺跡でも弥生時代後期頃の自然流路が古墳時代前期までには完全に埋没するという状況が発掘調査により確認されている⁸⁾。つまり、弥生時代中期から後期にかけて、小糸川支流の自然流路が洪水により埋没し、小糸川の流路を含めた微地形が変化し、現在の流路の原形が形成されたと考えられる。

このように、小糸川流域で確認できる、弥生時代中期から後期にかけての大きな微地形変化は、年代的な傾向が芝野遺跡・菅生遺跡など小櫃川流域の遺跡で見られる洪水による地形変化と共通しており、この時期における、広範囲での洪水の頻発を示唆している。そして、気候変動などとの関連性を想定できるのではなかろうか。また、これは、最近、西日本を中心に指摘されている、弥生時代中期ごろにおける完新世段丘Ⅰ面の形成と対応させて考えることもでき、小櫃川や小糸川流域に見られるような弥生時代中期から後期にかけての、洪水による微地形変化は、東日本における弥生時代中・後期における自然環境の変化とそれに伴う景観変化を示していると言えよう。

第2節 古墳時代前期

遺構：弥生時代後期後半の洪水で形成された基本土層のⅢ層中には、大規模な溝（SD-45）とそれに付属する溜井が掘られており、古墳時代前期に属する遺構は、この遺構のみである。

年代：SD-45からは多量の土器が出土しており、溝の形成・使用時期が推定できる。出土土器は、実測可能な個体で60以上に及び、器種は小型壺、直口壺、有段口縁壺、輪台技法の甕、S字状口縁の台付甕、高杯、器台などで構成されている。S字状口縁の台付甕は赤塚分類のS字甕C類新段階に相当し、輪台技法の甕も胴部のハケ目をヘラ削り調整するものが主体を占めている。このような様相は、君津編年のⅦ期からⅧ期にかけての土器様相に属しており、古墳時代前期でも後半の段階に相当する⁹⁾。

溝の機能と景観：SD-45は、覆土下層が流水により形成された砂質土であることから、規模の大きな用排水路として機能したと考えられる。また、付属する溜井は、溝流路との間を杭で仕切られ、中には木製クワの未製品が水漬けされた形で出土しており、溝内の水を取り込み、その水を使い作業するために作られた施設と考えられ、溝と溜井の間に打たれた木杭は、溜井内の物が溝内に流れ出さないようにする機能があったと考えられる。

このSD-45は、1回の掘り直しが行われており、比較的長期間にわたって使用されていたと考えられるが、調査範囲ではSD-45周辺に明確な居住域は形成されていない。これは、古墳時代前期後半の段階は、洪水により変化した土地条件が安定した状況には至っていなかったためと推定でき、Ⅳ層上面の居住域と水田で構成された、弥生時代後期の景観は大きく変化している。そして、この溝（SD-45）は溜井とともに、古墳時代後期までには完全に埋没している。

第3節 古墳時代後期

遺構：基本土層のⅢ層上面で検出しており、竪穴住居跡4軒（SI-1・2・4、SB-4）、井戸・土坑6基以上（SE-1・2・8・11、SK-1・3・9・20など）、溝3条以上（SD-41、44、50など）、古墳1基（SD-29・30）、不明遺構1基以上（SX-1など）が相当する。

年代：調査範囲全域で、古墳時代後期の土器類多数が出土している。須恵器はTK209型式からTK217型式、土師器は、赤彩の須恵器模倣杯から畿内系土師器（飛鳥編年Ⅲ期前後）の影響を受けた丸底杯が主体を占めており、6世紀末期から7世紀第3四半期頃までの年代が推定できる¹⁰⁾。

景観復元：弥生時代後期に形成された洪水層（Ⅲ層）により、調査区の中央部から北部の水田域が埋没する。その結果、弥生時代後期には調査区南部に限定されていた居住域が、古墳時代後期には調査区中央部にまで拡大し、調査区中央部では竪穴住居跡（SI-1・2・4）、土坑（SK-20）、竪穴住居跡の可能性のあるSX-2、井戸・土坑（SE-8、SK-9・20）などが点在している。

調査区南部では、明確な竪穴住居跡は確認されていないが、SE-1・2やSK-1・3など井戸や土坑を確認している。井戸・土坑を中心とした調査区南部の状況は、Ⅲ層の堆積が薄く、全体に後世の削平を受け、掘込みの深い井戸や土坑が主に残された結果と考えられる。調査区中央部と共通した井戸と土坑が存在することから、調査区南部はこの段階においても居住域として機能していたと考えてよいだろう。また、調査区南端付近に位置する井戸（SE-2）からは、まとまった土師器・須恵器とともに管玉や獣骨が人為的に埋め戻された形で出土しており、井戸廃絶に伴う祭祀儀礼などとの関連が推定できる。

一方、調査区北部には、竪穴住居跡（SB-4）、径13m前後の円墳（SD-29・30）、土器集積遺構

(SX-1)が存在している。SB-4は明確なカマドを伴わず、平面形態・規模は他の竪穴住居跡の倍以上の大きな長方形で、多量の土器類を伴うなど、通常の竪穴住居跡とは異なる状況が確認できる。さらに、土器集積遺構(SX-1)は、手捏土器や石製模造品を伴い、祭祀的な性格が推定できる。また、調査区北部では、古墳時代後期の明確な井戸・土坑は確認できず、調査区の中央部や南部とは性格が異なる範囲であった可能性が考えられる。具体的には、祭祀的な性格を持つSX-1や円墳の存在から、居住域の北側に隣接した祭祀・葬送的な機能を持つ範囲であったと考えることができよう。そして、調査区中央部の居住域と北部の祭祀・葬送域は、東西に走る溝(SD-41・44など)により区画されていたようである。

景観変化の背景：古墳時代後期、6世紀末期から7世紀代においては、Ⅲ層上面における土地条件の安定化に伴い、居住域が調査区中央部に拡大し、居住域の北側には区画溝を隔てて祭祀遺構や古墳の造営が行われている。耕作地である水田は、木更津市大寺周辺の発掘調査の成果から、さらにその北側に展開していたと推定できよう¹¹⁾。自然堤防上の居住域に隣接して古墳が築造され、その周辺に耕作域が展開するという景観は、君津市常代遺跡と類似しており、その年代も6世紀代から7世紀代と共通する傾向が認められる¹²⁾。

また、居住域の拡大は、6世紀末期から7世紀初頭にかけて行われているが、この時期は、小櫃川対岸の丘陵上に展開する樺古墳群や高千穂古墳群が急速に拡大する時期に当たっており¹³⁾、小櫃川流域の自然堤防上における集落域の拡大は、この種の小規模古墳群の拡大と密接に関連していたと考えることができる。そして、これは全国的に認められる推古朝における変革と連動していた可能性も考えられ¹⁴⁾、低地集落の新たな展開という、望陀郡(評)成立前夜の状況を部分的ながら示しているのではなかろうか。

第4節 奈良・平安時代

遺構：基本土層のⅢ層上面で確認した遺構の一部が相当する。出土遺物により、奈良・平安時代(8・9世紀代)の遺構として特定できる例は少ないが、調査区内のグリッド出土遺物以外でも、柱穴・井戸・溝の覆土内からは奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器が他の時代の遺物と混在して出土しており、掘立柱建物跡と井戸・溝で構成される居住域が存在したと考えられる。掘立柱建物跡としては復元できなかったが、Pit-365・624からは、上総型土師器杯と静岡県湖西窯産須恵器が出土しており、Pit-624周辺の柱穴列(B-7グリッド)や比較的大型の柱穴掘方を持つSB-1・5などが、この時代の掘立柱建物跡と考えることができる。

年代：年代を推定できる土器・陶器類には、湖西窯産須恵器、上総型土師器杯、下総系須恵器甕、ロクロ土師器杯、IG-78号窯式の灰釉陶器長頸瓶などがあり、年代的には7世紀第4四半期頃から、8世紀代～9世紀中頃までを中心としている¹⁵⁾。明らかに10・11世紀代にまで降る遺物は出土していない。ただし、土師器丸底の杯と湖西窯産の須恵器は、年代的には一部で同時存在していた可能性が高く、出土土器の様相では7世紀後半代から8世紀初頭にかけて年代的な断絶は認められない。

景観復元：8世紀代以降では明確な竪穴住居跡は確認できず、掘立柱建物跡を中心とした居住域(屋敷地)が構成されていたと考えられる。しかし、出土遺物によりこの段階の遺構として特定できるものは極めて少なく、出土遺物量も古墳時代後期(6世紀末期～7世紀代)と比較すると極端に減少しており、この段階には急速に遺構密度も低くなっていたと思われ、掘立柱建物が散在する景観を想定できる。また、SB-

1・5は梁行・桁行方位が10°前後東に振れており、ほぼ共通した方向性を示しており、例えば条里制地割のような、土地利用上における共通した方向性が成立していた可能性を指摘できる。そして、その方向性と一致する溝についても、この段階には存在し、掘立柱建物や耕作地を区画していたと考えられる。

また、9世紀後半から10世紀代には明確な遺物は確認できなくなり、8世紀代まで存在した屋敷地も、さらに遺構密度は希薄なものとなっていったと考えられ、9世紀後半代は景観変化の画期として位置づけることができる。

景観変化の背景：芝野遺跡の西側3kmには、7世紀後半に建立された郡名寺院・大寺廃寺が位置し、遺跡が所在する木更津市下望陀地区は、その地名から望陀郡衙の推定地とされており、芝野遺跡に近接した地点に望陀郡衙が存在していた可能性が考えられる。このような郡衙推定地に近接するという遺跡の立地環境は、周准郡衙に近接する君津市常代遺跡と共通している。

常代遺跡では、6・7世紀代の竪穴住居を中心とした集落景観から、多少居住範囲を南に移動させて、8世紀代から9世紀前半には掘立柱建物と井戸を中心とした集落景観へと急速に変貌している。さらに9世紀後半代には、居住域にも畑地が侵入して畑地が広範囲に展開し、遺構密度は一気に希薄となっている¹⁶⁾。

芝野遺跡の調査範囲は、常代遺跡と比較すると非常に限定されたもので、芝野遺跡周辺での調査成果が蓄積されていない現段階では断定できないが、8・9世紀代における掘立柱建物を中心とした居住域の変化には、常代遺跡とほぼ共通した傾向が認められるようであり、芝野遺跡と常代遺跡は、上総国西部における、郡衙周辺の具体的な集落景観を示していると考えられる。そして、9世紀後半から10世紀代にかけては遺構・遺物が確認できなくなる状況からは、さらに屋敷地（居住域）が分散し、それまでの屋敷地（居住域）とは対照的な継続性の低い屋敷地が耕作地の中に散在するという、古代末期的な集落景観を復元することができる。これは、それまでの集落を構成していた家族・氏族が9世紀後半から10世紀代にかけて質的な変化を遂げていたことに対応しているとも考えられよう。

第5節 中世

遺構：基本土層のⅢ層上面で検出した遺構のうち、出土遺物により中世に属すると判断できる遺構には井戸8基（SE-3・4・5・7・9・10・16・18）、溝（SD-28・37など）があり、そのほかに、遺構の重複関係や覆土の状況から、方形竪穴遺構4基（SE-12~15）、井戸1基（SE-21）、掘立柱建物跡9棟（SB-8・9・10~14・16・18）や多数の柱穴群が中世遺構と推定できる。

年代：年代が特定できる遺物には、龍泉窯系青磁、常滑・瀬戸窯製品などがある。

龍泉窯系の青磁は全体で12点と少量で、SD-28・102などの溝からの出土が中心である。太宰府分類のI-1類1点、I-5b類3点が確認できる¹⁷⁾。

瀬戸窯製品には、SE-5出土の水注、卸皿、SD-37出土の折縁皿があり、いずれも古瀬戸中期様式に属する製品である。この他に溝や遺構外からの出土であるが、後期様式の縁釉皿と思われる細片3点などが存在する¹⁸⁾。

常滑窯製品は、甕と捏鉢を中心として、主に井戸や溝から出土しており、形式的には常滑窯編年の5型式から6型式が主体となっている。また、この他に、SE-10出土の大甕などの渥美窯製品、SD-28出土の東播系須恵器鉢がある。渥美窯産の大甕は、胴部外面に平行叩きが施されるもので12世紀後半頃の年

代が推定でき、東播系須恵器鉢は、口縁部の特徴から東播系須恵器編年の第Ⅲ期第1段階に属するもので、13世紀代の年代が推定できる¹⁹⁾。

これらの遺物から推定できる年代は、13世紀代～14世紀前半までを中心としており、それ以外では、遺構外の出土遺物に古瀬戸後期様式の縁釉皿の可能性のある細片が3点など少量出土しているに過ぎず、芝野遺跡の調査範囲で検出された遺構は、12世紀後半頃には一部が成立し、13世紀代～14世紀前半を中心に営まれたと考えられる。

屋敷地の形成：この段階には、掘立柱建物と井戸で構成された屋敷地が明確に確認できるようになる。掘立柱建物と井戸は、調査区の中央部から南部で確認されているが、特に調査区中央部、T-5グリッドからA-13グリッドにかけての範囲に集中する傾向が顕著である。全体規模が確認できる掘立柱建物9棟のうち8棟、年代が確定する井戸9基のうち7基が、この範囲に営まれており、調査区中央部では、掘立柱建物や井戸の建替え・掘直しが至近距離で行われていたことが分かる。このような状況は、調査区中央部が継続的で安定した、複数世代にわたる屋敷地として機能していたことを示している。これとは対照的に掘立柱建物と井戸が散在する調査区南部は、SB-18とSE-21で構成される屋敷地、そしてSE-3と周辺の柱穴群で構成される屋敷地といった2か所の屋敷地を想定できるが、いずれも遺構の分布密度が低く、調査区南部で想定できる屋敷地は、不安定で短期間の、継続期間は単一世代以下の屋敷地であったと考えられよう。

また、全体規模を確認できる掘立柱建物9棟の建物は、建物面積が、小型の10㎡～20㎡前後と大型の30㎡～40㎡前後の2タイプに分けることができるが、大型の建物は、全て調査区中央部、V-7グリッドからY-9グリッド部分に集中して建てられており、これらの建物が調査区中央部の屋敷地の主屋的な建物として機能していたと考えられよう。

建物・溝の方向性：さらに、掘立柱建物跡の桁・梁方位は、東に10°～20°前後東に振れる場合が多く、古代の建物と共通しており、古代の土地利用の方向性は、中世においても維持され、建物の方向性を規制していたと考えてよいだろう。そして、この方向性に整合するように、調査区中央部と北部の境界付近には、東西に走るSD-37などの溝が多数重複して掘られている。このような状況は、芝野遺跡の東側に隣接する畔蒜庄横田郷で見られた、坪地名や方格地割と同様、条里制の方向性が中世まで、さらに近世以降まで存続していたことを示していると言えよう²⁰⁾。

また、溝(SD-37)付近を境として、溝の北側には、南側に存在する掘立柱建物跡や集中して掘られた柱穴は確認できなくなっており、この溝は、調査区中央部の屋敷地の北側を画する区画溝としての機能を持っていたと言えよう。

方形竪穴遺構：そして、この溝の北側には、方形竪穴遺構4基が集中して営まれている。

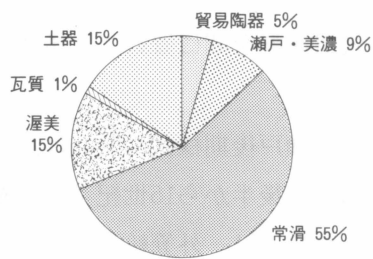
芝野遺跡で確認された方形竪穴遺構は、底面に杭や柱の痕跡を残すものがあり、上部には簡単な屋根構造の存在を推定することができる。この方形竪穴遺構の機能については、現段階では断定できないが、この北側の後背低地には、隣接する横田郷の状況から²¹⁾、畑や水田の耕作域が広がっていた可能性が高く、これらの方形竪穴遺構は、居住域と耕作域の中間に位置しており、収穫物を収納・貯蔵するような機能を想定することもできよう。

居住層の性格：ところで、芝野遺跡で出土した中世陶磁器・土器類では、古瀬戸中期様式の製品が僅かに含まれるものの、貿易陶磁器や土師質土器の量は極端に少なく、常滑窯の甕や捏鉢といった日常用品が主

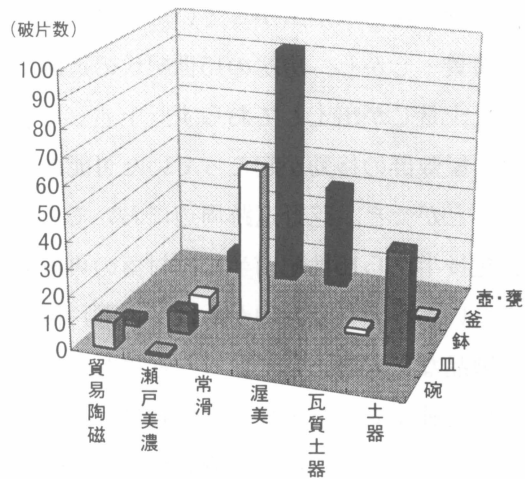
産地	貿易陶磁		瀬戸・美濃							常滑		渥美	東播	土器		合計	
	青磁		灰釉皿		深皿	天目茶碗	鉄釉播鉢	水注	捏鉢	壺・甕	甕	捏鉢	東海系羽釜	カワラケ			
	碗	皿	縁釉皿	卸皿													
破片数	10	2	5	1	2	1	6	8	57	91	39	2	1	41	266		
	12		6		23							148		39		2	42
	12													39		2	42

時期	(判明する破片のみ)														合計	
12c後～13c前	2									5	2	3				12
13c後～14c前	3			1	1			8	8	1		1				23
14c後～15c前			3		1				1	1				1		7
15c後	1	1	1				1	1								5

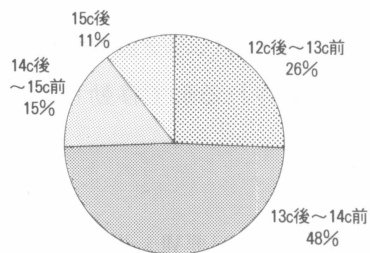
第1表 芝野遺跡全体中世陶磁器・土器組成表(破片数)



第111図 中世陶磁器・土器組成 (1)



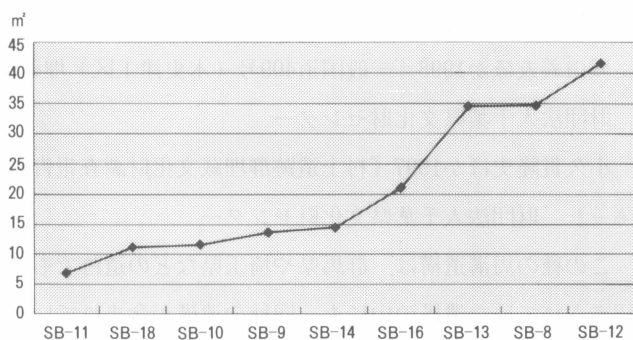
第113図 中世陶磁器・土器組成 (2)



第112図 中世陶磁器 時期別割合

古代建物規模			
	桁行・梁間規模 m	建物面積 m ²	
SB-1	7.2	4.4	31.68
SB-5	5.0	4.2	21.0
中世建物規模			
	桁行・梁間規模 m	建物面積 m ²	
SB-8	6.2	5.6	34.72
SB-9	4.0	3.4	13.60
SB-10	3.6	3.2	11.52
SB-11	3.0	2.3	6.90
SB-12	6.6	6.3	41.58
SB-13	6.6	5.2	34.32
SB-14	4.8	3.0	14.40
SB-16	5.0	4.2	21.00
SB-18	4.0	2.8	11.20

第2表 古代・中世建物規模比較表



第114図 中世建物面積分布

体となっている。また、確認した建物面積でも、主屋クラスの建物であるSB-12の41.58㎡が最大で、34㎡前後のSB-8・13、さらに21㎡のSB-16と続くが、その他の建物は全て10㎡前後の小規模なものである。このような出土遺物や建物面積の様相からすると、確認された屋敷地は武士層や上層名主層のものとは考え難い。しかし、この屋敷地や出土遺物の様相は、小糸川流域の君津市外箕輪遺跡などで抽出してきた、安定的なB類屋敷地と、小規模で不安定なC類屋敷地に類似しており、調査区中央部の屋敷地はB類屋敷地に、南部の屋敷地はC類屋敷地に対応させることができる。そして、その居住層も中央部の屋敷地は中・小名主層、南部の屋敷地は、中央部の屋敷地住人に従属する作人層を想定できるのではなかろうか²²⁾。

景観復元：以上のように、調査区中央部には継続的に営まれた中・小名主層のものと推定できる屋敷地が存在し、その南側には隣接して、作人層の短期間で不安定な屋敷地が存在していた。つまり、小櫃川に面した自然堤防上には、小規模ながら屋敷地が集合した塊村形態の屋敷群が存在したのであり、その年代は13世紀代から14世紀前半を中心としていたと考えられる。

そして、これらの屋敷群の北側には、貯蔵施設と考えられる方形竪穴遺構群を間に置いて、後背低地を中心に水田や畑の耕作域が広がっていたのである。

景観変化の背景：しかし、房総の15世紀代の遺跡では、多量に出土する古瀬戸後期様式の製品は、芝野遺跡では、ごく少量しか出土しておらず、上述したような村落景観は、14世紀後半から15世紀半には確実に変化し始め、屋敷群の移動が起こっていた可能性が高い。これと類似した状況は、外箕輪遺跡周辺でも明確に認めることができ、芝野遺跡周辺においても、外箕輪遺跡周辺同様、応永期の経済的な好況状況を受けて、14世紀後半から15世紀前半には村落の再編成が進んでいたと考えられる。限定された調査範囲からは断定できないが、調査範囲内からは、古瀬戸後期様式の製品から17・18世紀代の瀬戸窯製品や、17世紀代の信楽窯製品なども出土しており、近接して中世後半から近世、さらに近・現代の屋敷地が存在しており、芝野遺跡で確認できた小規模な屋敷群は、近隣の大規模な屋敷群に吸収される形で移動していったのではなかろうか。そして、近世以降の屋敷地の原形が形成されたのである。

注1 小沢洋・諸墨知義1996「君津地方における弥生後期～古墳前期の土器編年」『研究紀要Ⅶ』財団法人君津郡市文化財センター

甲斐博幸2000「上総地域」『第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会

2 城田義友ほか1998『一般国道409号（木更津工区）埋蔵文化財調査報告書—木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群—』財団法人千葉県文化財センター

3 小久貫隆史ほか1997『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書—市原市村上遺跡・村上山王前遺跡・廿五里十三割遺跡—』財団法人千葉県文化財センター

4 この種の周溝遺構は、群馬県や埼玉県などの遺跡でも確認されており、従来、円形周溝墓や方形周溝墓などと認識されていた遺構の中にも、同種の遺構が含まれている可能性が高い。

及川良彦1998「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』15

飯島義雄1998「古墳時代前期における周溝をもつ建物の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』9

振興財団埋蔵文化財調査事務所

岡本淳一郎1998「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究—紀要創刊号—』 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

福田聖1999「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（3）—周溝墓とは何かを探るための試み—」 『土曜考古』 23

5 高梨俊夫ほか1990『安房郡鋸南町下ノ坊遺跡B地点発掘調査報告書』 財団法人千葉県文化財センター

6 『古語拾遺』中の水口祭祀は、稲を神格化した「御歳神」を対象として、水口に陽物形と牛肉を供えて祭祀を行っており、水田に面した部分での祭祀の状況を復元できる。芝野遺跡の土器配列では、陽物形や獣骨は出土しておらず、古語拾遺の祭祀と全く同一の儀礼が行われたとは考えられないが、水田に面して行われる点では共通しており、芝野遺跡における土器配列遺構は、水田に面して食物を供献した痕跡とも考えられる。つまり、芝野遺跡の土器配列遺構についても、『古語拾遺』の水口祭祀に類似した、稲の豊作を祈願した祭祀儀礼の痕跡として考えることも可能であろう。

神野信ほか1992「木更津市芝野遺跡における水田跡について」『研究連絡誌』 34 財団法人千葉県文化財センター

安田尚道・秋本吉徳校註1976『古語拾遺・高橋氏文』新選日本古典文庫 4 現代思潮社

7 甲斐博幸ほか1996『常代遺跡群』 財団法人君津都市文化財センター

8 松本勝1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 財団法人君津都市文化財センター

矢野淳一1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 財団法人君津都市文化財センター

9 注1に同じ。

10 帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会 1999『飛鳥・白鳳の瓦と土器』

11 諸墨知義1998「大寺遺跡」『君津都市文化財センター年報No.15』 財団法人君津都市文化財センター

12 注7に同じ。

13 財団法人千葉県文化財センター1992・1993「椿古墳群」『千葉県文化財センター年報』 No.17・18

戸倉茂行ほか1985『高千穂古墳群発掘調査報告書』 財団法人君津都市文化財センター

14 宇野隆夫1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新—律令制的食器様式の確立過程—」『日本考古学』第7号 日本考古学協会

吉岡康暢2000「古代東国の首長・村民と飛鳥の王権」『東海大学校地内遺跡調査団報告 9・10』 東海大学校地内遺跡調査委員会

15 房総歴史考古学研究会1987『房総における歴史時代土器の研究』

16 注7に同じ。

17 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』

18 注17に同じ。

19 注17に同じ。

20 笹生衛・柴田龍司・鈴木哲夫・湯浅治久1995「上総国畔蒜庄横田郷の荘園調査報告」『千葉県史研究』 3

21 注20に同じ。

22 笹生衛1999「東國中世村落の景観変化と画期—西上総、周東・周西郡内の事例を中心に—」『千葉県史研究』

7 千葉県

付章 芝野遺跡の古環境変遷と稲作の消長

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小櫃川北岸の自然堤防上に位置する芝野遺跡は、東関東自動車道（千葉富津線）の建設に伴って平成元年度から3年度にかけての3回にわたって発掘調査が行われた。その結果、木製農具の未製品を伴う古墳時代前期の大溝や後期の井戸・土坑をはじめ、古代・中世の掘立柱建物跡・井戸・方形竪穴遺構等の遺構・遺物がかなり高い密度で検出された。また、これらの遺構面より下位で洪水層に覆われた水田跡が検出された。この水田面は、黄褐色の粘土層に覆われており、洪水によって埋まったものと見られている。今回、この発掘調査成果を踏まえ、財団法人千葉県文化財センターより自然科学分析の要望があった。当社では協議のうえ、その主目的として水田面とされるⅣ層で稲作が行われたかどうかの検証および当時の稲作の様態把握、さらに周辺地域における古環境の推定を目的とした自然科学分析を行うことにした。具体的には、テフラ分析による指標テフラとの対比（2点）、珪藻分析による堆積環境の推定（18点）、花粉分析による古植生の推定（8点）、植物珪酸体分析（8点）およびイネ属同定（5点）によるイネ科植物相（特に稲作について）の推定をそれぞれ行い、これらの総合解析を試みた。

1 試料

送付された柱状試料（3地点で計8本）すべてを分析調査対象とした。これらは、弥生時代の水田耕土を中心に、上位の洪水層とされるⅢ層と下位の有機質に富むⅤ層を採取したものである。柱状試料は、当社において観察・記載を行ったあと、目的等を考慮に入れて分析用の試料を採取・選択した。各地点の位置・柱状図ならびに試料採取位置を第115・116図に示す。なお、第1地点のⅤ-2層には、砂の薄層が2層準認められたため、指標テフラと対比を行うため別に採取し、テフラ分析を行った（テフラ試料1, 2）。

2 分析方法

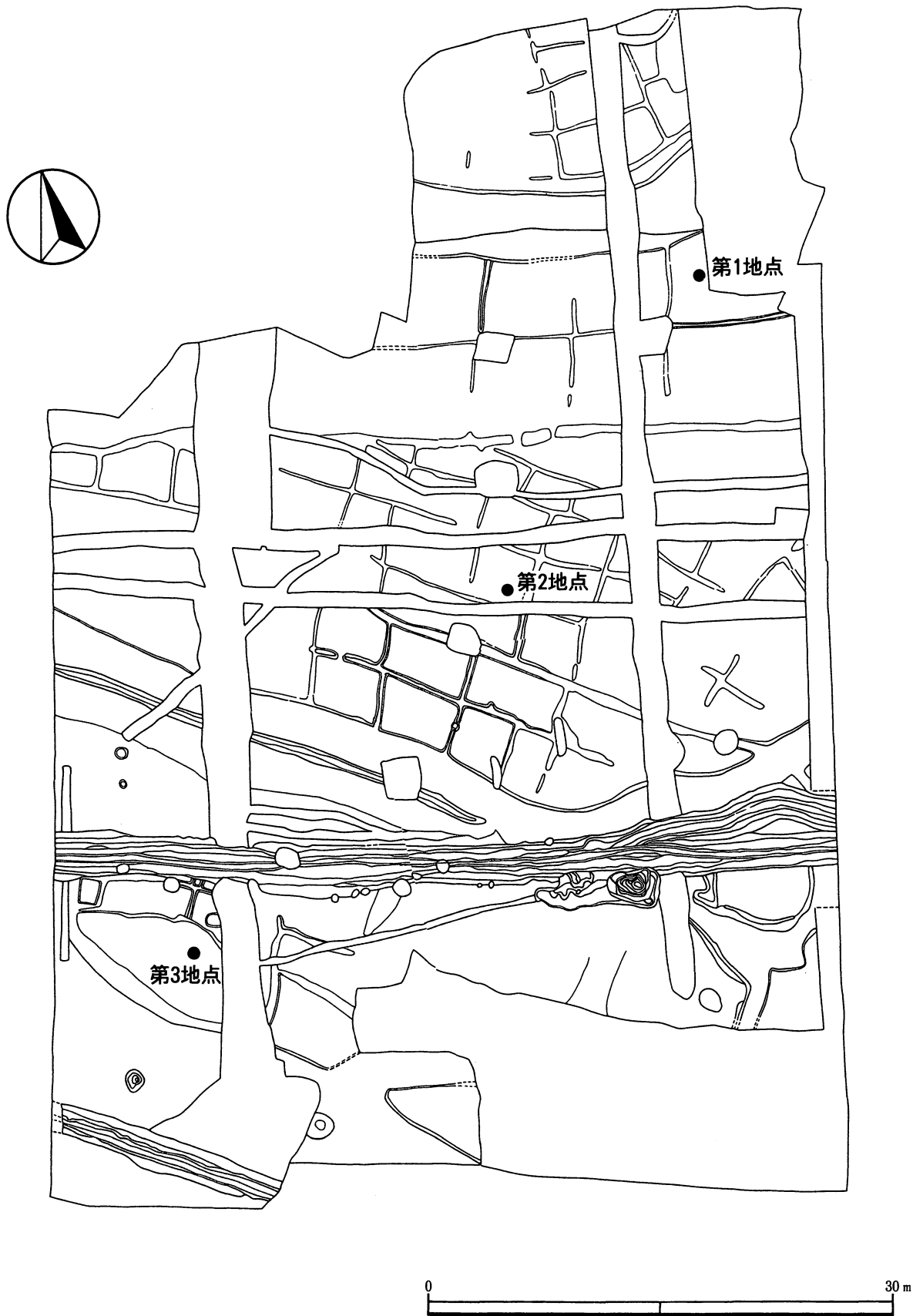
（1）テフラ分析

試料は、小型超音波洗浄装置により分散し、適宜上澄みを流して泥分を除去する。残った砂分を実体顕微鏡下で観察し、テフラの指標となる軽石・スコリア・火山ガラスの産状とそれらの特徴を調べた。

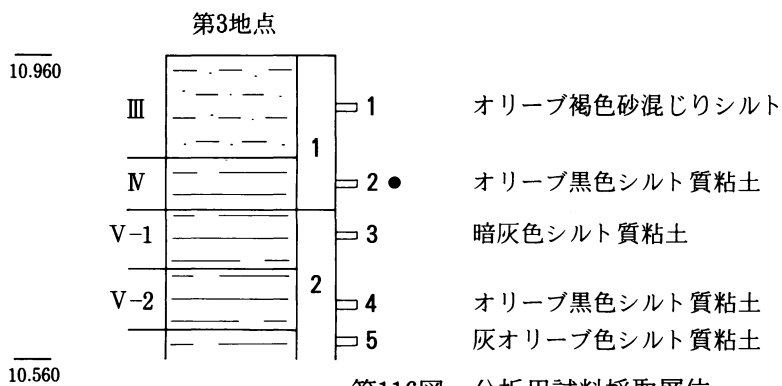
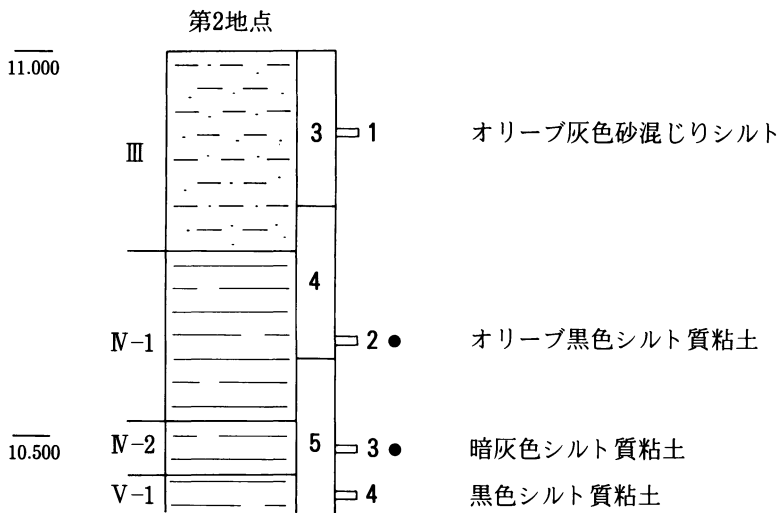
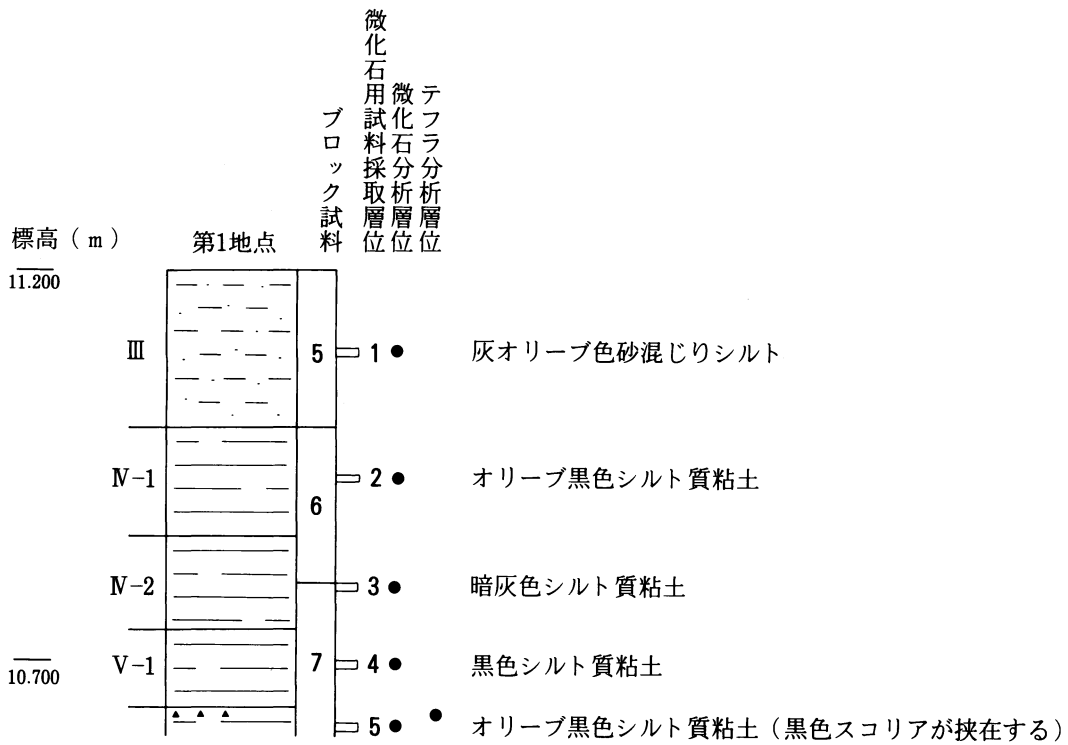
（2）珪藻分析

試料数gについて、過酸化水素水・塩酸による試料漂白および有機物の分解、自然沈降法による粘土分の除去、傾斜法による砂分の除去、の順に珪藻化石を濃集した。分析残渣を適当量に希釈し、カバーガラス上で乾燥させプレウラックスで封入した。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer & Lange-Bertalot(1986・1988・1991)などを用いた。なお、珪藻の生態性の解説を第3表に示した。堆積環境の推定にあたっては、安藤(1990)の環境指標種群等を参考にした。



第115図 試料採取地点



第116図 分析用試料採取層位

塩分濃度に対する区分		塩分に対する適応性		生育環境 (例)
海水生種	強塩生種 (Polyhalobous)	塩分濃度が40.0パーミル以上に出現するもの		低緯度熱帯海域、塩水湖など
	真塩生種 (Euhalobous)	海産性種、塩分濃度が40.0~30.0パーミルに出現するもの		一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚に深の海域)
汽水生種、中塩生種 (Mesohalobous)		汽水性種：塩分濃度30.0~0.5パーミルに出現するもの	強中塩生種 (α -Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
			弱中塩生種 (β -Mesohalobous)	
淡水生種	貧塩生種 (Oligohalobous)	淡水生種：塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの。		一般陸水域 (ex 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉)
塩分・pH・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性		
塩分に対する適応性	貧塩・好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方がよく生育するもの		高塩類域 (塩水遡上域・温泉・耕作土壌)
	貧塩・不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの		一般陸水域 (湖沼・池・沼・河川・沼沢地など)
	貧塩・嫌塩性種 (Halophobic)	少量の塩分にも耐えることができないもの		湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの		一般淡水~汽水域
pHに対する適応性	真酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・火口湖(酸性水域)
	好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・沼沢地
	pH-不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの		一般陸水 (ex 湖沼・池・沼・河川)
	好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの		
	真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最もよく出現するもの		
流水に対する適応性	真止水性種 (Limnobiontic)	止水域にのみ出現するもの		流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種 (Limnophilous)	止水域に特徴的であるが、流水域にも出現するもの		湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種 (Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの		河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種 (Rheophilous)	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの		河川・川・小川・上流域
	真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの		河川・川・流れの速い川・溪流・上流域
陸生珪藻	好気性種 (Aerophilous)	好気的環境 (Aerial habitats) 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で、多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中やコケの表面に生育可能 特に土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という		<ul style="list-style-type: none"> 土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 木の根元や幹に生えたコケに付着 濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 洞窟入口や内部の照明のあつた所に生えたコケに付着

註 塩分に対する区分は、Lowe(1974)、pHと流水に対する区分は、Hustedt(1937-1938)による。

第3表 珪藻化石の生態性

(3) 花粉分析

試料数 g について、水酸化カリウム処理による泥化と腐植酸の溶解、0.25mmの篩を通し大型の植物遺体や碎屑物の除去、重液分離 (臭化亜鉛:比重2.2) による有機物の濃集、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理 (無水酢酸:濃硫酸=9:1) によるセルロースの分解、の順に行い、堆積物中から花粉化石を濃集した。

処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパラートを作製し、その中に出現した全ての種類 (Taxa) について同定・計数した。イネ属花粉化石同定は、ノマルスキー微分干渉装置およびプラン・アポクロマート100倍対物レンズを使用し、中村 (1974)、鈴木・中村 (1977) の分類にしたがい、外膜の表面模様・発芽孔周辺の肥厚状況および花粉粒径などを基準として行った。

(4) 植物珪酸体分析

試料数 g について、過酸化水素水・塩酸による有機質の分解と試料の漂白、超音波処理による分散、沈定法による粘土分の除去、重液分離による軽鉱物の濃集の順に物理・化学処理を行って、植物珪酸体を分離・濃集する。分析残渣を適度に希釈し、カバーガラス上で乾燥させ、プレウラックスで封入した。検鏡は、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞

に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数を行った。

3 結果

（1）テフラ分析

柱状試料から採取した砂分2試料について検鏡した結果を記す。

・テフラ試料1（V-2層上部）

砂粒を構成するのは、ほとんど長石および石英の粒である。これに微量のスコリアが混在する。スコリアは、最大径約0.5mm、黒色を呈し、発泡は不良である。このスコリアは、市原条里制遺跡で認められたテフラのIh-2に多く含まれるスコリアに類似する。ただし、スコリアの産状から、試料が採取された砂の薄層はテフラ層ではない。したがって、地層の年代指標とはならない。

・テフラ試料2（V-2層下部）

砂粒を構成するのは、多量の長石と石英などの無色鉱物や、少量の斜方輝石、単斜輝石などの有色鉱物である。テフラの特徴を示す軽石・スコリア・火山ガラスは認められなかった。

（2）珪藻分析

分析結果を第4表・第117図に示す。珪藻化石の産状は、1地点の試料番号2・3および3地点の試料番号2については少なかったが、それ以外の試料からは多数産出した。種類構成の特徴としては、淡水生種が優占するが、海水生種や陸生珪藻も多産する。産出分類群数は、合計で36属147分類群（119種・22変種・種不明6種類）であり、完形殻の出現率は、40%~60%である。淡水生種の生態性の特徴は、塩分に対しては不定性種、pHに対しては好アルカリ性種が優占する。また、水の流動に対しては流水不定性種が優占するが、流水生種や止水生種も産出する。

以下、各地点別に産出種の特徴を述べる。

・第1地点

V-2・V-1層（試料番号5・4）は、海水浮遊性の*Thalassionema nitzschioides*が多産し、水生珪藻では沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis* var. *minor*, *Navicula elginensis*, *Gomphonema gracile*, 中~下流性河川指標種群（安藤, 1990）の*Cymbella turgidula*, *Rhoicosphenia abbreviata*などを伴う。また、試料番号4からは、好止水性の*Fragilaria virescens*を伴う。

試料番号1は、中~下流性河川指標種群（安藤, 1990）の*Cymbella turgidula*, 好流水性の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*, *Nitzschia linearis*, 流水不定性の*Anomoeoneis sphaerophora*, 陸生珪藻のA群の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Pinnularia schroederii*などが産出する。また、海水浮遊性の*Thalassionema nitzschioides*が産出するがその多くは破片である。

・第2地点

N-2層（試料番号3）は、流水不定性の*Diploneis ovalis*, 陸生珪藻のA群の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *N. tokyoensis*, *N. contenta*, 陸生珪藻の*Pinnularia schroederii*などが産出する。また、海水浮遊性の*Thalassionema nitzschioides*が産出するがその多くは破片

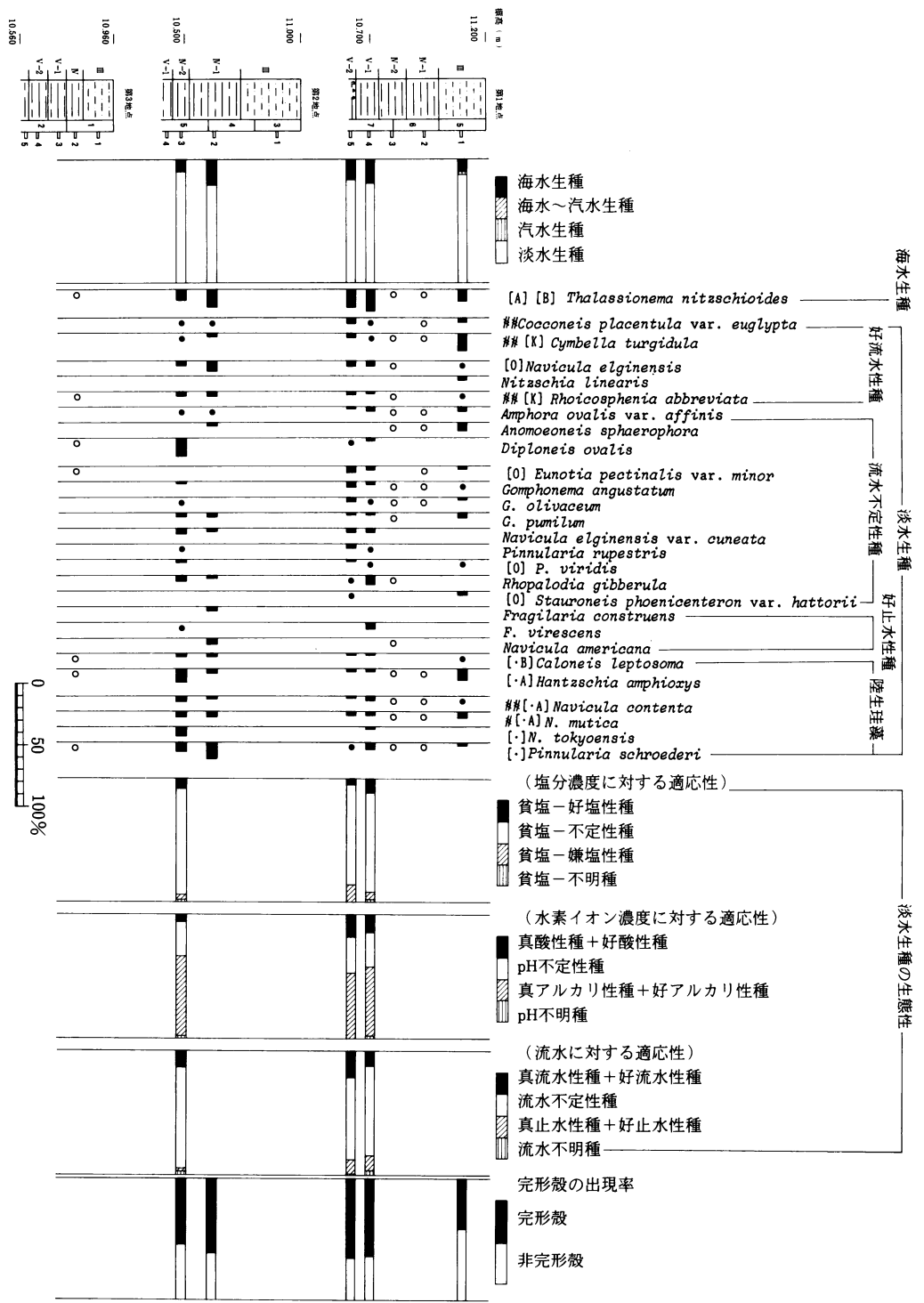
Species Name	Ecology			第1地点				第2地点			第3地点
	H.R.	pH	C.R.	1	2	3	4	5	2	3	2
Actinocyclus ingens Rattray	Euh			-	-	-	-	1	1	-	-
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh			-	-	-	-	-	1	-	-
Denticulopsis hustedtii (Simonsen and Kanaya)Simonsen	Euh			1	-	-	1	-	2	-	1
Denticulopsis lauta (Bali.) Simonsen	Euh			1	-	-	1	-	2	-	-
Nitzschia marina Grunow	Euh			-	-	-	-	1	-	-	-
[B] Palalia sulcata (Ehr.) Cleve	Euh			-	-	-	-	2	-	-	-
Stephanopyxis turris Grev. and Arn.	Euh			-	-	-	1	-	-	-	-
[A] [B] Thalassionema nitzchioides Grnow	Euh			9	10	8	37	28	16	11	3
Thalassionema nitzchioides var. parva Heiden and Kolbe	Euh			-	-	-	-	1	1	-	-
[A] Thalassiosira spp.	Euh			-	2	-	2	1	-	1	-
Thalassiothrix longissima Cleve and Grnow	Euh			1	-	-	-	-	-	-	-
[E2] Diploneis smithii (Berb.) Cleve	Euh-Me			-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula flabellata Meister	Euh-Me			1	-	-	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Euh-Me			1	-	-	-	-	-	-	-
Rhaphoneis sp.	Euh-Me			-	-	-	-	1	-	-	-
[D1] Achnanthes brevipes var. intermedia (Kuetz.) Cleve	Meh			-	1	-	-	-	1	-	-
[E2] Melosira sp. n.	Meh			-	-	-	-	1	-	-	-
Achnanthes inflata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
[K] Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	1	-
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
# # Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	-	-	-	1	-	-	-	-
Achnanthes tropica Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	2	1	1	1
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	1	-	-
[· A] Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-	-	-	-	-	-
[· A] Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	1	-	-	-
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.) V.Heurck	Ogh-ind	al-bi	ind	3	1	3	6	3	1	1	-
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	1	-	-	-
Amphora veneta Kuetzing	Ogh-hil	al-bi	l-ph	-	-	-	-	2	-	-	-
Anomooneis sphaerophora (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-hil	al-bi	ind	6	1	5	-	-	2	-	-
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	1	1	-	2	-	-
Caloneis bacillum (Grun.) Mereschkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	1	-	-	-	-	-	-
# Caloneis lagerstedtii (Lagerst.) Cholnoky	Ogh-hob	al-il	ind	-	1	-	-	1	2	-	-
[· B] Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	3	3	2	3	1
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	2	-	-	2	-
[·] Caloneis sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	1	-
[·] Caloneis sp.-2	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	2	-
# # Cocconeis pediculus Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	2	-	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-
# # Cocconeis placentula var.euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	3	2	-	1	8	1	1	-
# # Cocconeis placentula var.lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	1	-
# # [O] Cymbella cistula (Hemp.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
[O] Cymbella ehrenbergii Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	-	1	-	-	-	-	-
Cymbella lanceolata (Ehr.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella leptoceros (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	3	-	-	1
[O] Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	2	1	-	-
# # Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	2	-	1	-
# # Cymbella tumida (Breb.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	1	-	-	1
# # [K] Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	15	4	1	2	7	2	1	-
# # Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzov	Ogh-ind	ind	r-ph	-	-	-	-	3	-	-	-
[· A] Diatomella balfouriana (W.Smith) Grevil	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-	1	4	-	-	-
Diploneis finnica (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	1	-	-	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	4	2	-	19	1
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	3	-	1	-	-
[·] Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	4	-	-	1	-
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-	-	-	-	1
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	1
Epithemia sorex Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	l-bi	1	-	-	-	1	-	-	-
Epithemia turgida (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	2	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia gracilis (Ehr.) Rabenhorst	Ogh-hob	ind	l-bi	-	-	-	-	1	-	-	-
Eunotia lunaris (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	1	-	-	1	-	-	-	-
Eunotia lunaris var.subarcuata (Naeg.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
[O] Eunotia pectinalis (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-
[O] Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	2	3	-	7	11	-	-	1
[O] Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. ventralis (Ehr.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	2	-	-	-	-	-	-	-
[· B] [O] Eunotia praeupta var.bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	4	1	-	2	-	-	-
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	4	-	-
# Fragilaria construens var.venter (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
# # Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	1	-	-	-
Fragilaria virescens Ralfs	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	10	-	-	1	-
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	2	-	-	-
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
[O] Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	1	4	8	-	2	-
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk	-	-	-	1	1	-	-	-
# # Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	-	-	-	-	3	-	-	-
[O] Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	2	1	-	4	4	-	-	-

第4表 珪藻分析結果

Species Name	Ecology			第1地点					第2地点		第3地点
	H.R.	pH	C.R.	1	2	3	4	5	2	3	2
Gomphonema olivaceum (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	2	2	3	1	7	-	1	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	4	4	2	-	1
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	4	-	1	3	3	3	4	-
Gomphonema subclavatum (Grun.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema spp	Ogh-unk	unk	unk	2	1	-	-	-	1	-	-
Gyrosigma spencerii (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	1	-
[·A] Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	9	3	2	5	4	4	14	4
[·A] Melosira roseana Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	1	1	-	-	-
[K] Melosira varians Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	-	-	-	1	-	-	-	-
## [K] Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	-	-	-	2	-	-	-	-
Navicula americana Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	1	-	-	6	-	-
Navicula capitata var. linealis Oestrup	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	1	-	-	-
# [·B] Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	1	-	-	-	-	-	-
## [·A] Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	1	7	3	2	5	-
# Navicula cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	1	-	-	1	-	-
Navicula cf. digitulus Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
[O] Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	-	1	8	8	9	5	-
Navicula elginensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	7	6	2	6	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	-	1	1	2	-	1	-
Navicula laevisissima Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	ind	1	-	-	-	1	-	-	-
# [·A] Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	5	1	3	6	6	5	5	-
Navicula perrotettii Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
# Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	1	-	1	-
[·] Navicula tokyoensis H.kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	4	-	-	9	-
[K] Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula viridula var. slesvicensis (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	1	-	-	-	-	-	-
Neidium affine var. longiceps (Greg.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	1	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	2	1	-	3	3	-	-	1
[·] Neidium bisulcatum (Lagerst.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	1	1	-	-	-
Neidium hercynicum A.Mayer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	2	3	1	2	-
[·B] Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	-	1	-	1	-	1	-	-
[·B] Nitzschia debilis (Arnott) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
[·A] Nitzschia denticula (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	1	-	-	3	1	-	-	-
Nitzschia linearis W.Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	3	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia palustris Hustedt	Ogh-ind	ind	unk	-	-	-	2	-	-	1	-
[·] Nitzschia terrestris (Pet.) Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	1	-	-
[O] Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	-	-	1	-	-	-	-
[·A] Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	2	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	1	-	-	-
[O] Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	1	-	1	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia maior Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	1	-
[O] Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	4	-	1	-
Pinnularia ornata H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	7	-	1	-
[·] Pinnularia schroederi (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	3	3	2	12	2	15	9	1
Pinnularia stomatophor (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	-	3	1	-	-
[·B] Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	2	-	1	-
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	1	-	-	-
[O] Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	1	-	-	1	3	-	3	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	3	-	3	-	1	-	-
## [K] Rhoicosphenia abbreviata (Ag.) Lange-Bertalot	Ogh-hil	al-il	r-ph	1	-	1	3	4	4	4	2
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-hil	al-bi	ind	-	-	1	14	1	2	6	-
[·] Stauroneis borrichii (Pet.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis laenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis laenburgiana fo.angulata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	1	-
[·B] Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-
[O] Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
[O] Stauroneis phoenicenteron fo. gracilis (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	-	1	-	-	1	-	-
[O] Stauroneis phoenicenteron var. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	3	-	-	-	1	-	-	-
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	1	-
[·B] Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-	-
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	1	1	-	1	-
Synedra parasitica (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-
Synedra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	1	1	-	-	-
Marine Water Species				12	12	8	42	34	23	12	4
Marine to Brackish Water Species				2	-	-	-	1	-	1	-
Brackish Water Species				-	1	-	-	1	1	-	-
Fresh Water Species				91	45	40	170	170	92	124	17
Total Number of Diatoms				105	58	48	212	206	116	137	21

凡例
H.R.:塩分濃度に対する適応性 pH:水素イオン濃度に対する適応性 C.R.:流水に対する適応性
Kuh:海水性種 al-bi:弱アルカリ性種 l-bi:真止水性種
Kuh-Meh:海水性種-(汽水性種) al-il:好アルカリ性種 l-ph:好非水性種
Meh:汽水性種 ind:不定性種 ind:流水不定性種
Ogh-hil:好塩性種 ac-il:好酸性種 r-ph:好流水性種
Ogh-ind:好塩不定性種 ac-bi:真酸性種 r-bi:真流水性種
Ogh-hob:好塩偏塩性種 unk:pH不明種 unk:流水不明種
Ogh-unk:好塩不明種

環境指標種
[AI]:海洋指標種 [BI]:内湾指標種 [DI]:海水砂質土指標種 [E2]:汽水(水混)土指標種 (以上は小杉1988による)
[FI]:中〜下流性河川指標種 [MI]:海沼浮遊性種 [OI]:沼沢地付着性種 (以上は安藤1990による) 井:好汚濁性種
井:好汚濁性種 (以上は渡辺ほか1986による) [L]:陸生貝類 (LAI:A群, LBI:B群,伊藤・船内, 1991による)



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は1%未満の産出、○は100個体未満の試料において産出した種類を示す。
 環境指標種: A: 外洋指標種, B: 内湾指標種, K: 中〜下流性河川指標種, O: 沼沢地付着性種, #: 好汚濁性種, #: 好清性種, [·]: 陸生珪藻 (·A: A群, ·B: B群)

第117図 珪藻化石層位分布図

である。

V-1層（試料番号2）は、陸生珪藻の *Pinnularia schroederii*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, 沼沢湿地付着生種群（安藤, 1990）の *Navicula elginensis*, 好止水性の *Fragilaria construens*などが産出する。また、海水浮遊性の *Thalassionema nitzschioides*が産出するがその多くは破片である。

・第3地点

本地点は、珪藻化石が少なかった。

（3）花粉分析・イネ属同定

分析結果を第5表・第118図に示す。花粉化石が良好に検出されたのは第1地点の試料番号3～5のみであり、他の地点からは検出されなかった。花粉化石が検出されたV-2層～Ⅲ層（試料番号5～3）では、ほぼ同様な組成を示す。木本花粉では、スギ属およびコナラ属アカガシ亜属が多く、ニレ属-ケヤキ属やコナラ属コナラ亜属を比較的多く伴っている。草本花粉は、全体的に出現率が低いが、イネ科などが比較的多く検出される。特に試料番号3では、ハス属・ヒシ属などの浮葉植物をはじめ、栽培植物であるイネ属の花粉化石も検出される。

なお、イネ属の花粉化石は第1地点のV層から少量検出されたが、他の試料からは検出されなかった。

（4）植物珪酸体分析

結果を第6表・第119図に示す。イネ科起源の植物珪酸体は、全試料で短細胞・機動細胞珪酸体ともに検出され、保存状態が良好である。以下各地点の産状を述べる。

・第1地点

栽培種であるイネ属は、V-2層～Ⅲ層（試料番号5～1）まで連続して検出され、特にV-2層・V-1層（試料番号3・2）で多く検出される。また、V-2層～V-2層（試料番号5～3）まではヨシ属が優占し、タケ亜科・キビ族・ウシクサ族・マコモ属などが随伴するのに対し、V-1層・Ⅲ層（試料番号2・1）では、タケ亜科が多く検出され、ヨシ属・キビ族・ウシクサ族・イチゴチナギ亜科などが随伴する。

・第2地点

栽培種であるイネ属は、V-2層・V-1層（試料番号3・2）で検出され、特に試料番号2で多い。他の種類では、タケ亜科・ヨシ属・キビ族・ウシクサ族・イチゴチナギ亜科などが検出される。

・第3地点

V層（試料番号2）では、イネ属が少数検出され、タケ亜科・ヨシ属が多産し、キビ族・マコモ属・スキ属などが随伴する。

4. 周辺の森林植生

本地域の森林植生については、これまで村田川水系についての研究が多くなされており（辻ほか, 1983: 辻 1986: パリノ・サーヴェイ, 1988, 1989など）、また市原条里制遺跡など、分析調査が現在進められている地点もある。これらの研究成果から村田川下流部の植生変遷を概略すると次のようになる。縄文海進が最盛期を向かえた時期は、ナラ類やクリなどからなる落葉樹林が周囲の丘陵を占めていた。それが約3,500年前以降になるとカシ類やスギが増加し、海退した低地にはハンノキ湿地林が覆うようになる。

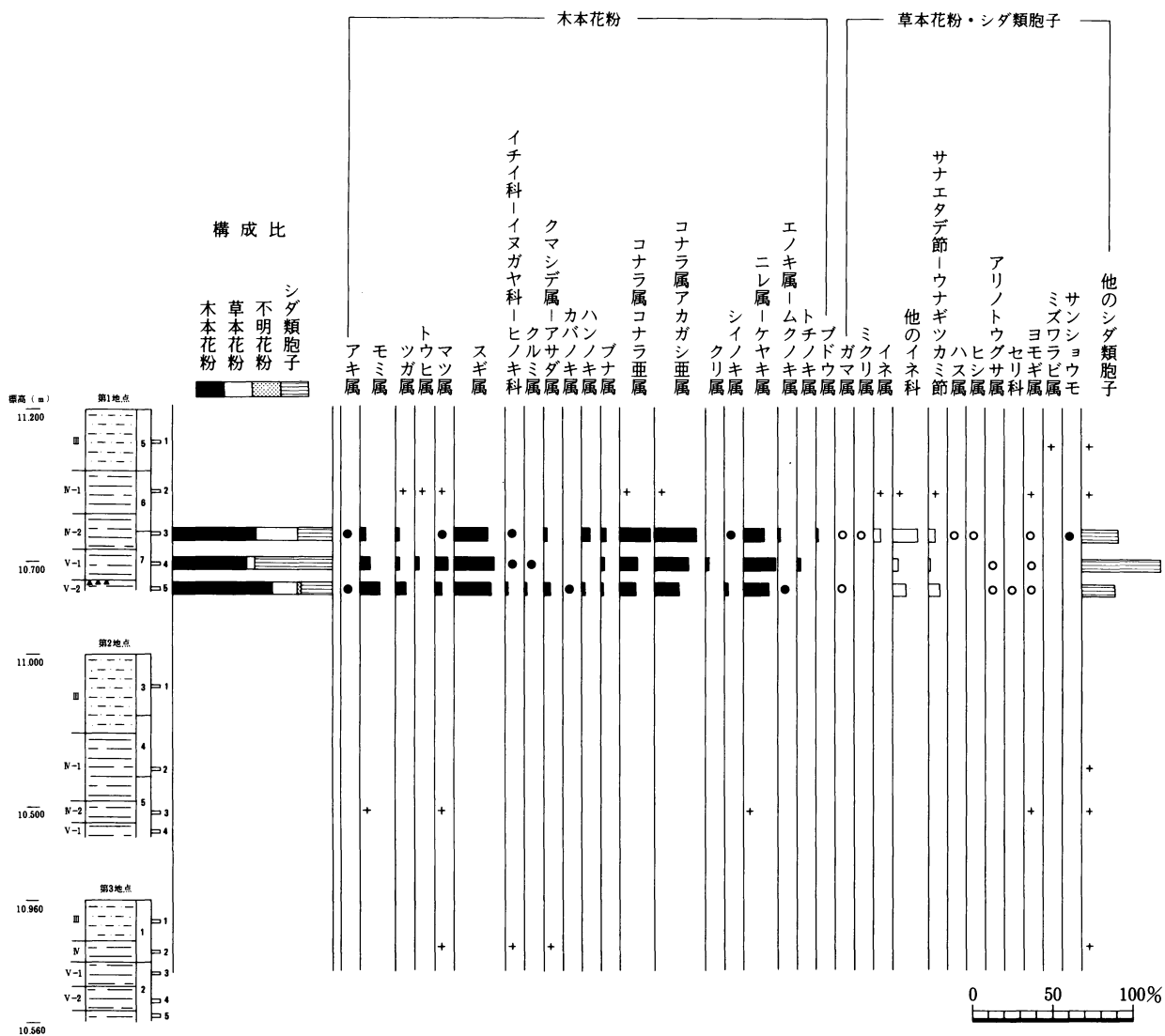
種類 (Taxa)	試料番号	第1地点					第2地点		第3地点
		1	2	3	4	5	2	3	2
木本花粉									
マキ属		-	-	1	-	1	-	-	-
モミ属		-	-	6	7	20	-	1	-
ツガ属		-	1	4	2	11	-	-	-
トウヒ属		-	1	-	2	-	-	-	-
マツ属		-	1	1	10	7	-	2	1
スギ属		-	-	44	32	39	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	1	1	2	-	-	1
クルミ属		-	-	-	1	2	-	-	-
クマシデ属-アサダ属		-	-	5	-	7	-	-	1
カバノキ属		-	-	-	-	1	-	-	-
ハンノキ属		-	-	10	-	4	-	-	-
ブナ属		-	-	6	2	2	-	-	-
コナラ属コナラ亜属		-	1	40	14	17	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属		-	1	54	26	25	-	-	-
クリ属		-	-	-	2	-	-	-	-
シイノキ属		-	-	1	-	3	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属		-	-	27	25	28	-	3	-
エノキ属-ムクノキ属		-	-	3	-	1	-	-	-
トチノキ属		-	-	-	2	-	-	-	-
ブドウ属		-	-	3	-	-	-	-	-

草木花粉									
ガマ属		-	-	2	-	1	-	-	-
ミクリ属		-	-	2	-	-	-	-	-
イネ属		-	3	17	-	-	-	-	-
他のイネ科		-	2	62	8	22	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	1	15	4	18	-	-	-
ハス属		-	-	1	-	-	-	-	-
ヒシ属		-	-	3	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属		-	-	-	2	1	-	-	-
セリ科		-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属		-	1	3	1	2	-	1	-
不明花粉		1	-	1	-	5	-	-	-

シダ類孢子									
ミズワラビ属		1	-	-	-	-	-	-	-
サンショウモ		-	-	1	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子		98	63	89	133	54	3	18	30

合 計									
木本花粉		0	5	206	126	170	0	6	3
草本花粉		0	7	105	15	45	0	1	0
不明花粉		1	-	1	-	5	-	-	-
シダ類孢子		99	63	90	133	54	3	18	30
総花粉・孢子		100	75	402	274	274	3	25	33

第5表 花粉分析結果



出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料において出現した種類を示す。

第118図 花粉化石層位分布図

種類 (Taxa)	試料番号	第1地点					第2地点		第3地点
		1	2	3	4	5	2	3	2
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属		5	3	8	2	-	4	-	1
イネ族マコモ属		-	-	2	1	-	-	-	-
キビ族キビ属		1	2	2	-	-	2	3	-
キビ族エノコログサ属		-	-	-	-	1	1	1	-
キビ族チゴザサ属		-	5	3	-	-	1	8	-
キビ族(その他)		7	13	12	7	3	3	8	3
タケ亜科ネザサ節		9	1	1	2	-	-	1	-
タケ亜科(その他)		73	43	38	64	82	48	42	39
ヨシ属		20	68	94	220	102	95	71	61
ウシクサ族コブナグサ属		2	6	7	-	1	5	11	2
ウシクサ族ススキ属		3	6	-	1	-	1	10	5
イチゴツナギ亜科オオムギ族		3	1	-	-	1	-	2	2
イチゴツナギ亜科(その他)		8	17	5	6	2	1	90	2
不明キビ型		53	63	68	90	39	91	194	42
不明ヒゲシバ型		22	44	45	157	127	81	86	40
不明ダンチク型		48	72	39	106	117	48	103	55

イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属		25	41	32	1	1	54	1	1
イネ族マコモ属		-	1	4	1	2	4	-	3
キビ族		-	-	-	2	-	2	9	2
タケ亜科ネザサ節		5	1	1	1	1	1	2	-
タケ亜科(その他)		43	16	13	30	39	14	18	42
ヨシ属		3	12	8	20	40	9	25	26
ウシクサ族		4	6	5	3	2	3	4	-
不明		35	32	39	45	24	39	50	44

合計									
イネ科葉部短細胞珪酸体		254	344	324	656	475	381	630	252
イネ科葉身機動細胞珪酸体		115	109	102	103	109	126	109	118
検出個数		369	453	426	759	584	507	739	370

組織片									
イネ属類珪酸体		1	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列		1	-	-	-	-	-	-	-
キビ型短細胞列		-	-	-	1	-	-	1	-

第6表 植物珪酸体分析結果

弥生時代以降になると、やがて低地が切り開かれ水田が始まることにより、低地には草本類が多くなる。さらに中世以降になると、周囲の森林に対する人間の植生干渉が進みマツが増加する。

今回分析を行った層準は、スギ・カシ類の増加期～水田耕作開始時期にあたる。今回の結果では、スギ・カシ類の高率出現は村田川流域の結果と近似しており、縄文時代末～弥生時代（V・IV層）には、村田川流域と同様にスギ・カシ類の増加がみられたものと推測される。この時期は世界的にもネオグレイシェイション（Neoglaciation）とよばれる寒冷な時期に相当し（Denton and Karlen,1973）、日本では「弥生の小海退」と呼ばれている。この時期におけるスギ・カシの増加は南関東地方の多くの分析結果に同様にみられる傾向であり（辻ほか, 1987a : 辻ほか, 1987b : 辻, 1988など）、この原因については「弥生の小海退」にともなう気候変動（多雨・冷涼化）によってもたらされたと考えられている（辻, 1983）。なお、本遺跡ではハンノキ属の花粉化石の割合が少なく、水田開始時期において村田川流域のような大きな減少が見られない。同時期の堆積物を比較しても、市原条里制遺跡における縄文時代末期の堆積物は有機質に富む堆積物なのに対し、芝野遺跡では無機質な碎屑物が多い。また、珪藻化石の結果からもV層は不安定な堆積状況であったとされている。このようなことから考えると、芝野遺跡の立地は洪水などにより碎屑物が多くもたらされる比較的不安定な場所で、市原条里制遺跡のような湿地林が形成され木本質泥炭が堆積するような環境ではなかったものと考えられる。弥生時代の水田層が洪水によって覆われているのも、このような不安定な立地環境を示唆しているものと考えられる。

5 低地の環境と稲作

V層の珪藻化石群集は、明らかに異地性と見られる海水浮遊生種や絶滅種を多く含み、中～下流性河川指標種群や陸生珪藻が比較多く産出することから、流水の影響下で堆積した不安定な堆積物と考えられる。V層堆積時は小櫃川の氾濫の影響等を強く受けており、ほぼ同時代に市原条里制遺跡など村田川流域でみられるような湿地林の形成や泥炭層堆積が行われなかったものと推測される。なお、V層中からはイネ属の植物珪酸体が検出されるが、出現率が低く上位層からの落ち込みなどの影響が考えられる。また、ヨシ属が多産することから、周囲にはヨシなどが生育する湿地が存在していたものと考えられる。

IV層は弥生時代後期前半の水田関連土層とされているが、珪藻化石の検出状況が良くなく、また明らかに異地性である群集を含むことから、V層同様不安定な状況下で堆積した層であると見られる。花粉化石についても第1地点のIV-2層以外は保存状態が悪く、十分な情報が得られなかった。第1地点のIV-2層については、ガマ属・ミクリ属・ハス属・ヒシ属・サンショウモなど水生植物の花粉・胞子化石が検出されたが、珪藻化石の状況などから判断すると異地性の可能性があり、周辺の池沼・沼沢地などからの流入が考えられる。植物珪酸体は比較的保存が良く、ヨシ属の植物珪酸体が多産するが、これは水田周辺の湿地などからもたらされたのであろう。一方、イネ属の植物珪酸体が高率に産し、花粉化石も検出されることから、当時稲作が行われていたことを裏付ける結果となった。なお、現水田耕作土層における植物珪酸体の出現率を調査した例として近藤（1988）がある。これによれば、10ha当り500kgのイナワラを堆肥する作業を8年間続けた水田耕作土層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%とされている。実際には水田の様態等が違うため一概には比較できないが、今回検出された植物珪酸体分析結果はこの値よりも高く、弥生時代における稲作の検証につながった。今回の結果は、各微化石の組成が堆積物ごとに様態が異なっているが、この要因については、微化石の堆積物中の挙動といった基礎的な問題を解決していかな

ればならない。しかし、少なくともⅣ層は比較的不安定な堆積状況を示しており、洪水性の堆積物を改めて耕作し、水田として稲作を行っていたものと考えられる。弥生時代の水田層が洪水によって覆われているのも、このような不安定な立地環境を示唆しているものと考えられる。

Ⅲ層になると中～下流性河川指標種群や陸生珪藻が多産し、異地性の珪藻化石も多産することから、付近に分布する海成層を削剥して堆積した氾濫性の堆積物と考えられる。花粉化石はほとんど検出されないが、珪藻化石の産状も考慮に入れると、堆積速度が早く花粉化石が堆積物中に多く取り込まれなかった可能性がある。なお、本層は弥生時代後期後半の洪水層とされており、珪藻化石群集から推定される環境と調和的である。

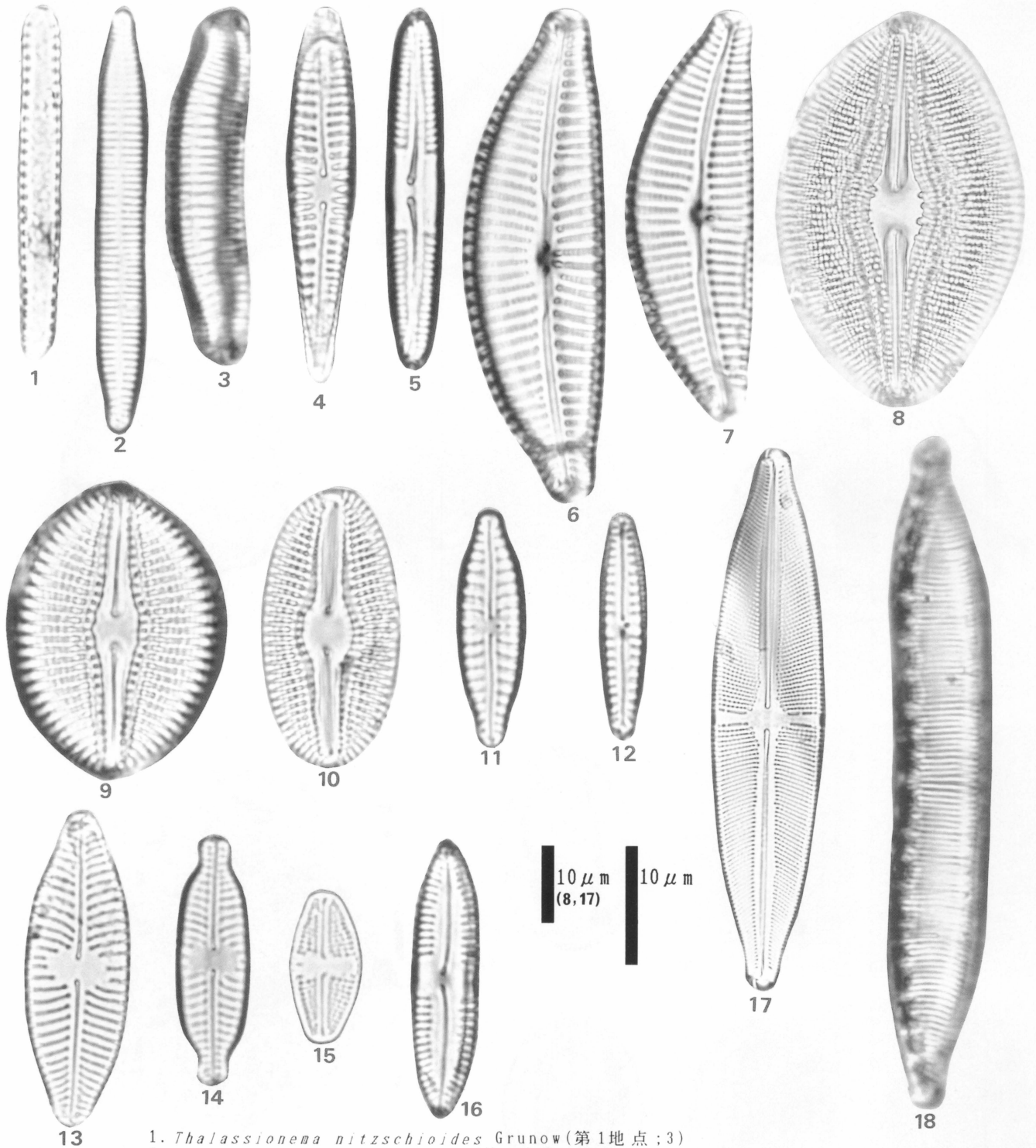
6 まとめ

縄文時代末～弥生時代にかけての森林植生は、カン類やスギなどが卓越する森林であったと推測される。この結果は、市原条里制遺跡をはじめとする村田川流域の結果とよく一致する。村田川流域の研究では、ハンノキ湿地林を切り開き、水田が営まれたと推定されている。しかし、本地点の場合はしばしば洪水が起こるような比較的不安定な場所で、当時泥炭層は形成されない。このような場所で弥生時代の水田が営まれている。この水田層もその後の洪水に伴う堆積物に寄って埋積されており、そのために畦畔などの遺構が良好に保存された。なお、水田層については、イネ属の植物珪酸体が検出されており、弥生時代の稲作を裏付ける結果となった。このように洪水堆積物を改めて耕土とした水田耕作は、近接する菅生遺跡の結果と同様であり、小櫃川の氾濫が広域かつ頻繁にあったことが予想される。菅生・芝野両遺跡の弥生時代の水田層を覆っている洪水層は、時期的には近いものであると考えられるが、同一のものかどうかについては今回の分析調査結果のみからは判断できない。

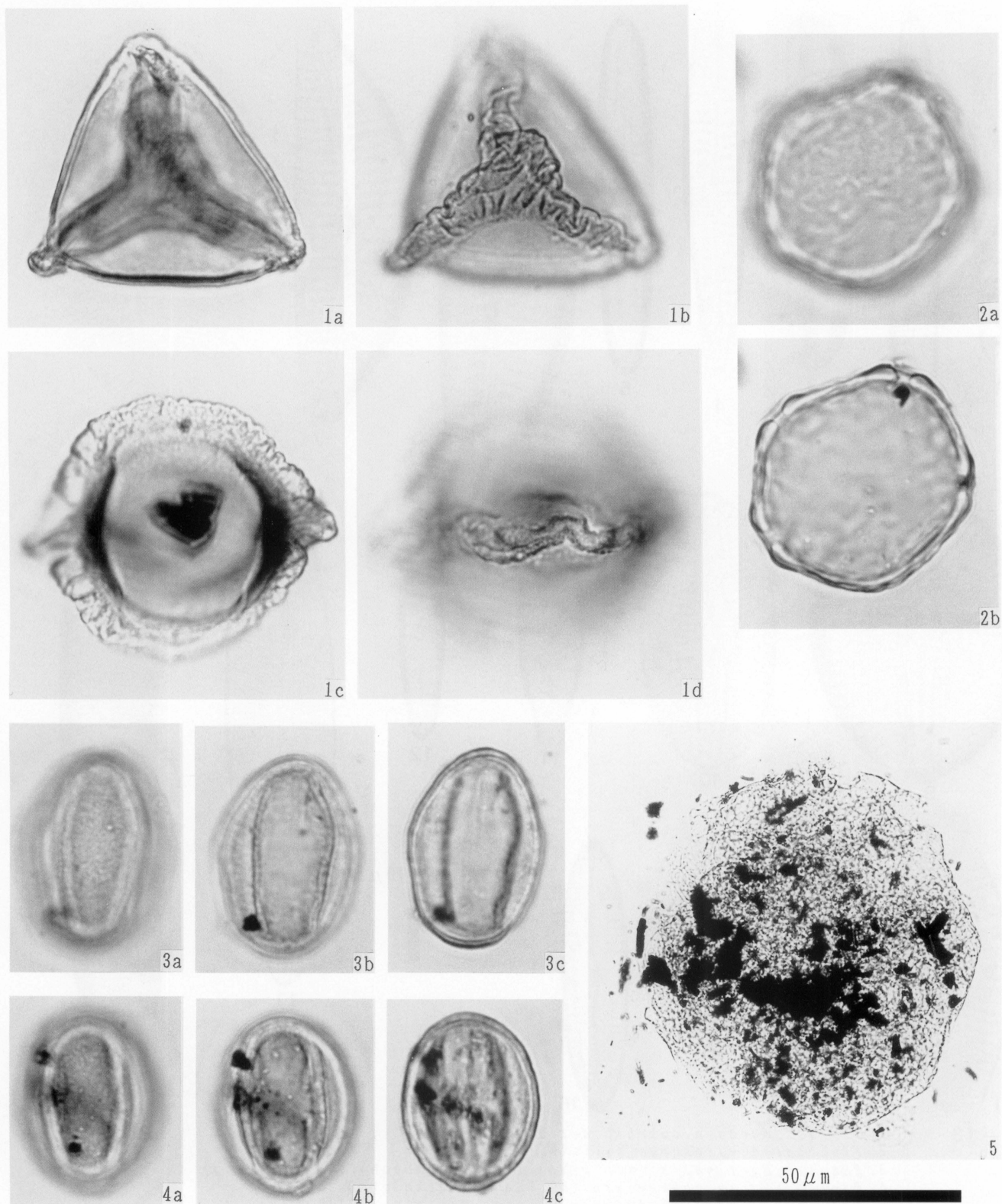
<引用文献>

- 近藤鍊三・佐瀬隆(1986)植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 近藤鍊三(1988)十二遺跡の植物珪酸体分析. 鑄師屋遺跡群十二遺跡-長野県北佐久郡御代田町十二遺跡 発掘調査報告書, 御代田町教育委員会, p.377-383.
- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理,42, p.73-88.
- Hustedt, F.(1937-1938)Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen- Flora von Java, Bali und Sumatra. I～III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15 p.131-809, 16 p.1-155, 274-394.
- Hustedt, F.(1959)Die Kieselalgen Deutschlands. 2.Teil. Rabenhorst's Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz. Bd.7. p.845.
- 小杉正人(1989)珪藻化石群集の形成過程と古生態解析. 日本ベントス研究会誌, 35/36, p.17-28.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot.(1986・1988・1991) Bacillariophyceae, Suesswasser flora von Mitteleuropa 2(1・2・3):p.1-876,p.1-585,p.1-576.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 Diatom,no.6, p.23-45.
- Lowe, R.L.(1974)Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. p.1-334. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environ-mental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.

- 中村 純(1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀 研究 13巻, p.187-193.
- 鈴木功夫・中村 純 (1977) イネ科花粉の堆積に関する基礎的研究, 文部省科研特定研, 古文化財, 稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究-中間報告-(中村純編), p.1-10.
- パリノ・サーヴェイ (1988) 浜野川遺跡群の確認調査にともなう花粉分析報告, 千葉市浜野川遺跡群(低湿地における遺跡確認調査), p.122-131, 財団法人 千葉県文化財センター.
- パリノ・サーヴェイ (1989) 千葉市浜野川神門遺跡の堆積物に関する諸分析, 千葉市浜野川神門遺跡(低湿地貝塚の発掘調査), p.88-127, 財団法人 千葉県文化財センター.
- 辻 誠一郎(1983) 下末吉期以降の植生変遷と気候変化, アーバンクボタ 21, p.44-47.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小池裕子(1983) 縄文時代以降の植生変化と農耕-村田川流域を例として-, 第四紀研究 第22巻3号, p.251-266 .
- 辻 誠一郎(1986) 日本の第四紀植生史研究の諸問題, 植生史研究 1, p.3-18.
- 辻 誠一郎・橋屋光孝(1987a) 東京都中里遺跡の縄文時代以降の花粉学, 中里遺跡2 -遺跡と古環境2 -, p.185-251, 東北新幹線中里遺跡調査会.
- 辻 誠一郎・橋屋光孝, 鈴木 茂(1987b) 川口市赤山陣屋遺跡の花粉化石群集, 赤山一般国道298号(東京外かく環状道路)新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 古環境編, 埼玉県・川口市遺跡調査会, p.105-130.
- 辻 誠一郎(1988) 袋低地遺跡の縄文時代以降の花粉化石群集, 袋低地遺跡 -自然科学編1 - p.337-365, 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・東日本旅客鉄道株式会社.
- 渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視(1988) 珪藻群集による有機汚濁指数(DA I po)の止水域への適用, 水質汚濁研究 vol.11,no.12,p.765-773.



1. *Thalassionema nitzschioides* Grunow (第1地点; 3)
2. *Fragilaria virescens* Ralfs (第1地点; 4)
3. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (第1地点; 5)
4. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange-Bertalot (第1地点; 5)
5. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot (第1地点; 5)
6. *Cymbella turgidula* Grunow (第1地点; 5)
7. *Cymbella turgidula* Grunow (第1地点; 5)
8. *Diploneis yatukaensis* Horikawa et Okuno (第1地点; 5)
9. *Diploneis parva* Cleve (第1地点; 4)
10. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (第1地点; 4)
11. *Gomphonema angustatum* var. *linearis* Hustedt (第2地点; 3)
12. *Gomphonema pumilum* (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot (第1地点; 5)
13. *Navicula elginensis* var. *cuneata* H. Kobayasi (第1地点; 4)
14. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (第2地点; 3)
15. *Navicula nutica* Kuetzing (第2地点; 3)
16. *Pinnularia schroederi* (Hust.) Krammer (第1地点; 4)
17. *Stauroneis phoenicenteron* var. *hattorii* Tsumura (第1地点; 5)
18. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (第1地点; 5)



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. ヒシ属 (第1地点;3) | 2. ニレ属-ケヤキ属 (第1地点;3) |
| 3. コナラ属コナラ亜属 (第1地点;3) | 4. コナラ属アカガシ亜属 (第1地点;3) |
| 5. サンショウモ (第1地点;3) | |

第121図 花粉化石



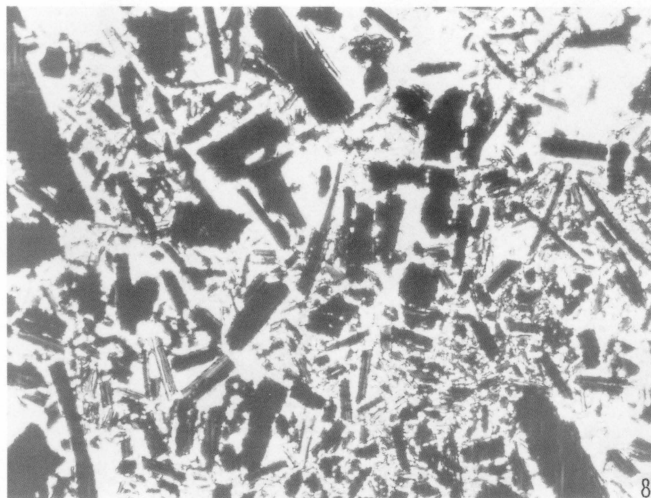
6a



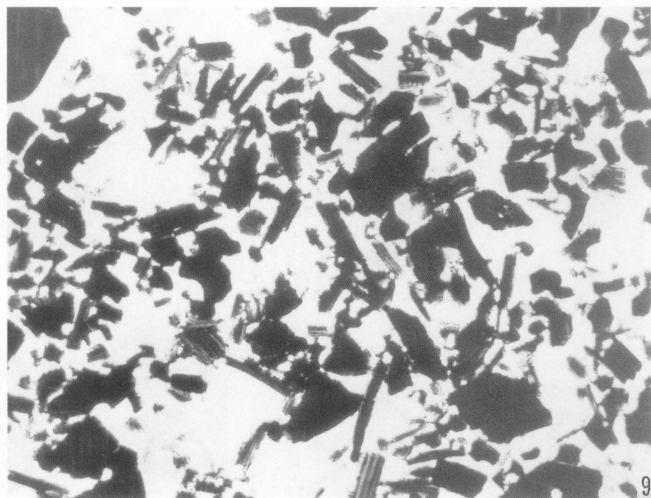
6b



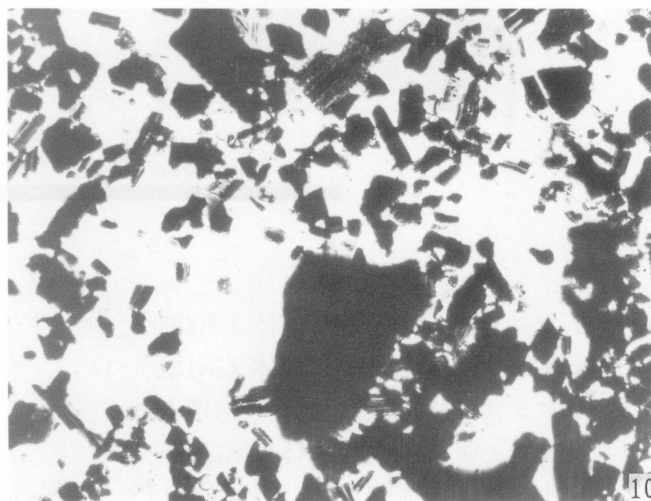
7



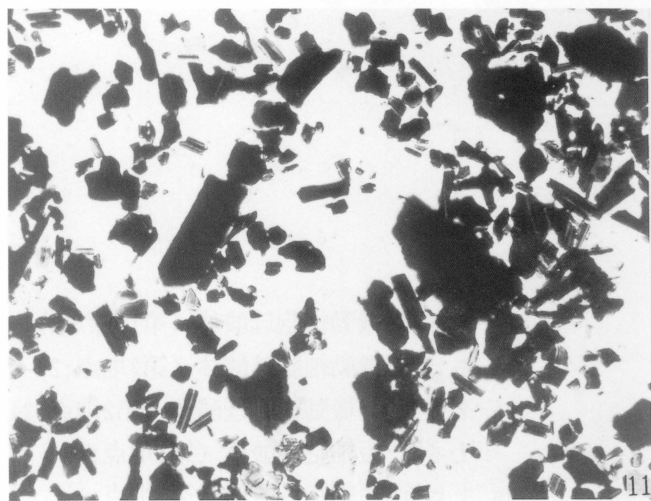
8



9



10



11

50 μ m

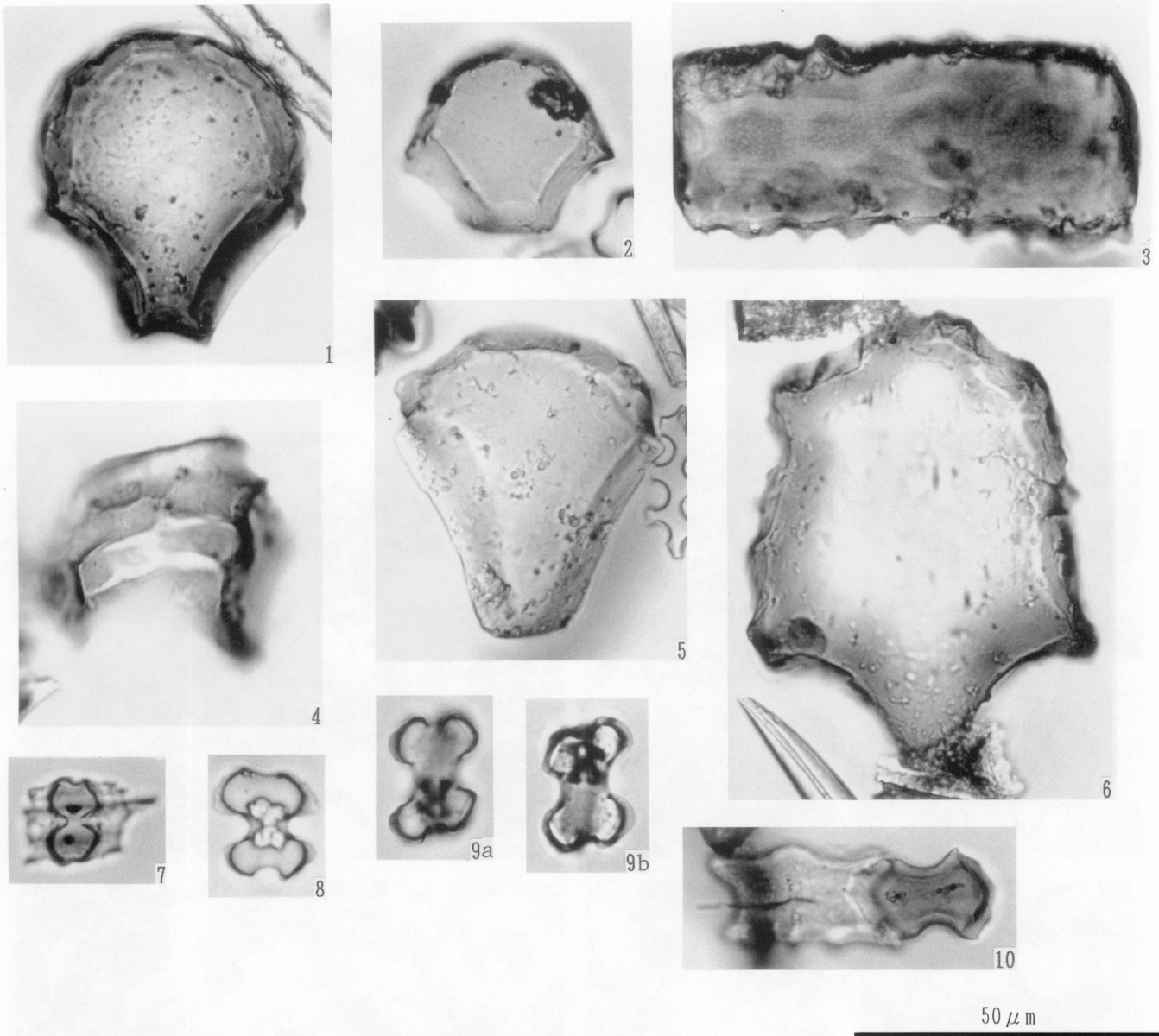
(6, 7)

100 μ m

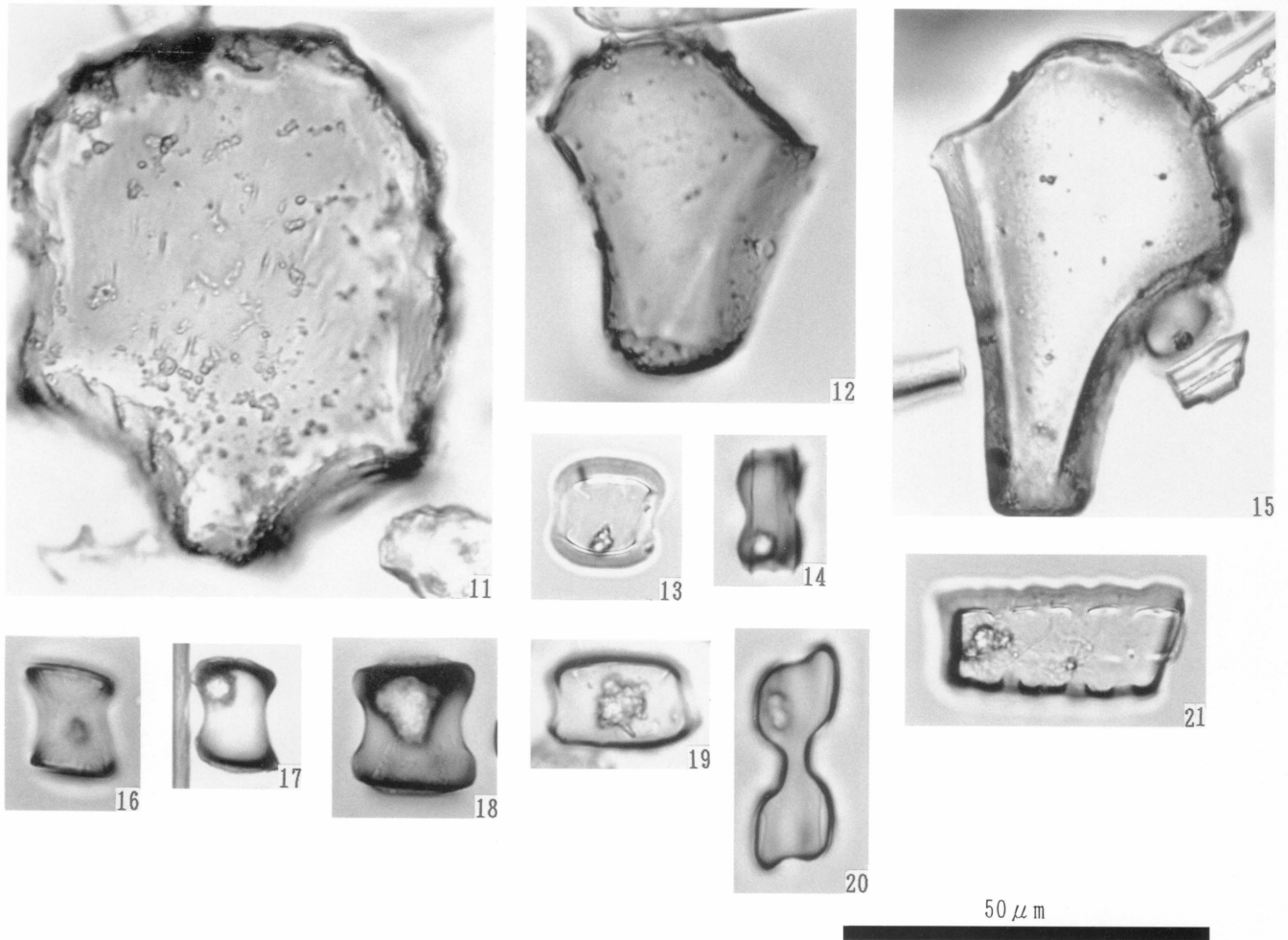
(8-11)

- 6. スギ属 (第1地点;3)
- 8. 状況写真 (第1地点;5)
- 10. 状況写真 (第2地点;3)

- 7. イネ科 (第1地点;3)
- 9. 状況写真 (第2地点;2)
- 11. 状況写真 (第3地点;2)



- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属:機動細胞珪酸体 (第1地点;2) | 2. マコモ属:機動細胞珪酸体 (第2地点;2) |
| 3. キビ族:機動細胞珪酸体 (第3地点;2) | 4. ネザサ節:機動細胞珪酸体 (第1地点;3) |
| 5. タケ亜科:機動細胞珪酸体 (第2地点;2) | 6. ヨシ属:機動細胞珪酸体 (第1地点;5) |
| 7. イネ属:短細胞珪酸体 (第1地点;1) | 8. マコモ属:短細胞珪酸体 (第1地点;4) |
| 9a. キビ族:短細胞珪酸体 (第1地点;1) | 9b. キビ族:短細胞珪酸体 (第1地点;1) |
| 10. チゴザサ属:短細胞珪酸体 (第1地点;2) | |

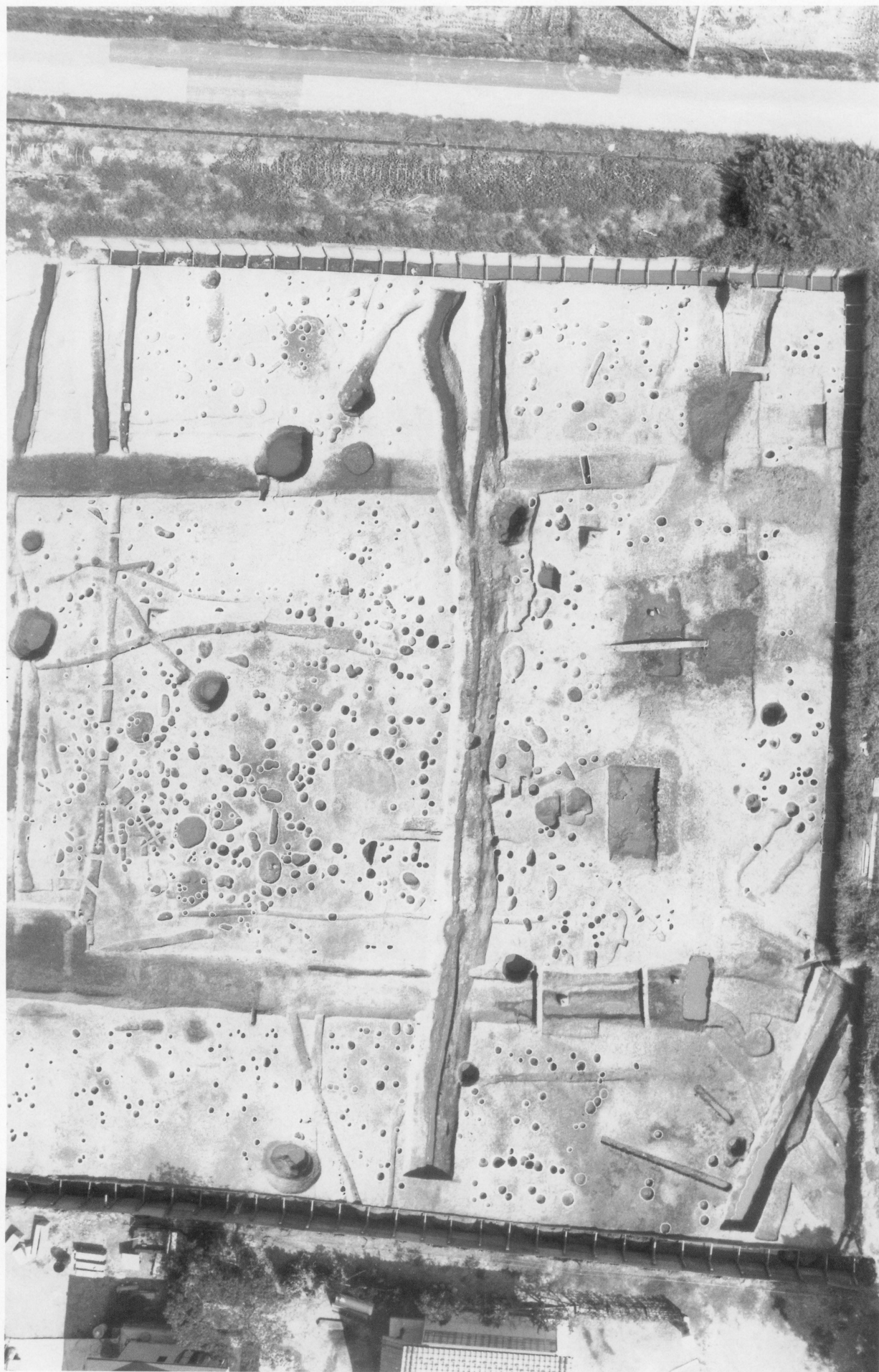


- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 11. ヨシ属:機動細胞珪酸体 (第1地点;5) | 12. ウシクサ族:機動細胞珪酸体 (第2地点;2) |
| 13. ヨシ属:短細胞珪酸体 (第1地点;1) | 14. コブナグサ属:短細胞珪酸体 (第2地点;2) |
| 15. ウシクサ族:機動細胞珪酸体 (第2地点;2) | 16. ネザサ節:短細胞珪酸体 (第3地点;2) |
| 17. タケ亜科:短細胞列珪酸体 (第2地点;2) | 18. タケ亜科:短細胞列珪酸体 (第2地点;2) |
| 19. ヨシ属:短細胞珪酸体 (第2地点;2) | 20. ススキ属:短細胞列珪酸体 (第3地点;2) |
| 21. オオムギ族:短細胞列珪酸体 (第1地点;1) | |

写 真 图 版



遺跡周辺航空写真(平成4年撮影)



Ⅲ層上面の遺構



SB - 5



SB - 11



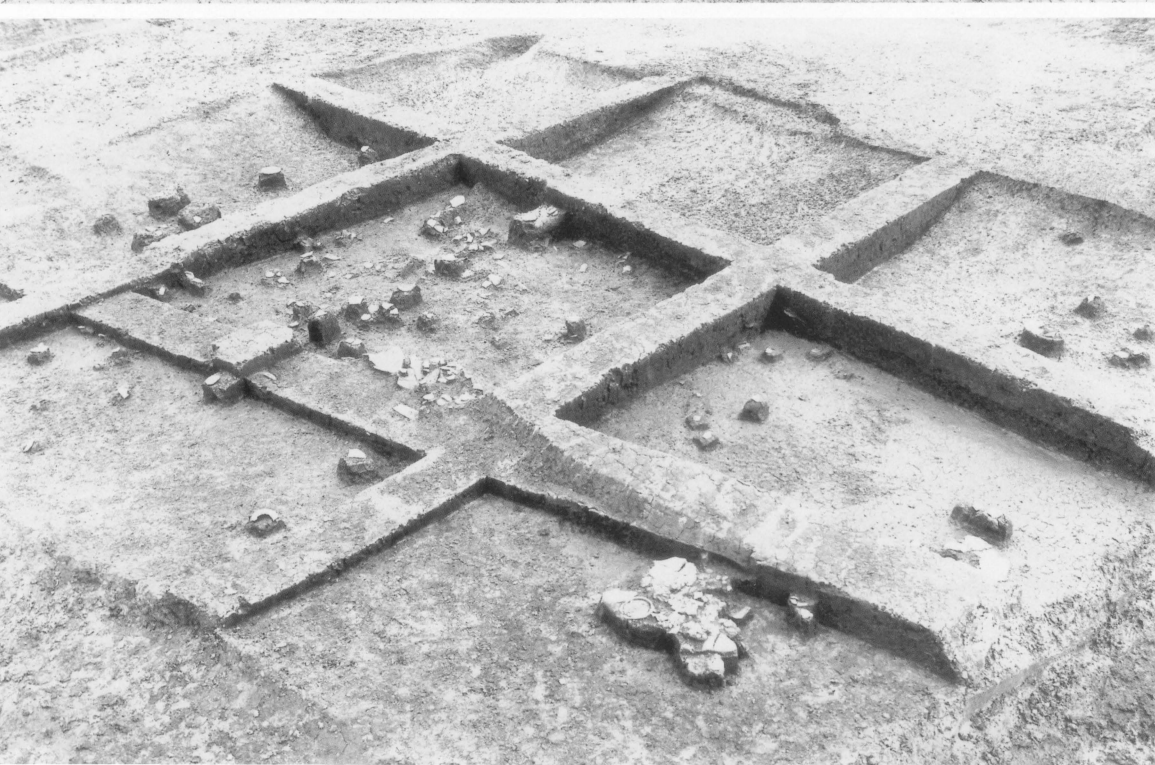
SB - 13



SI-1



SI-2



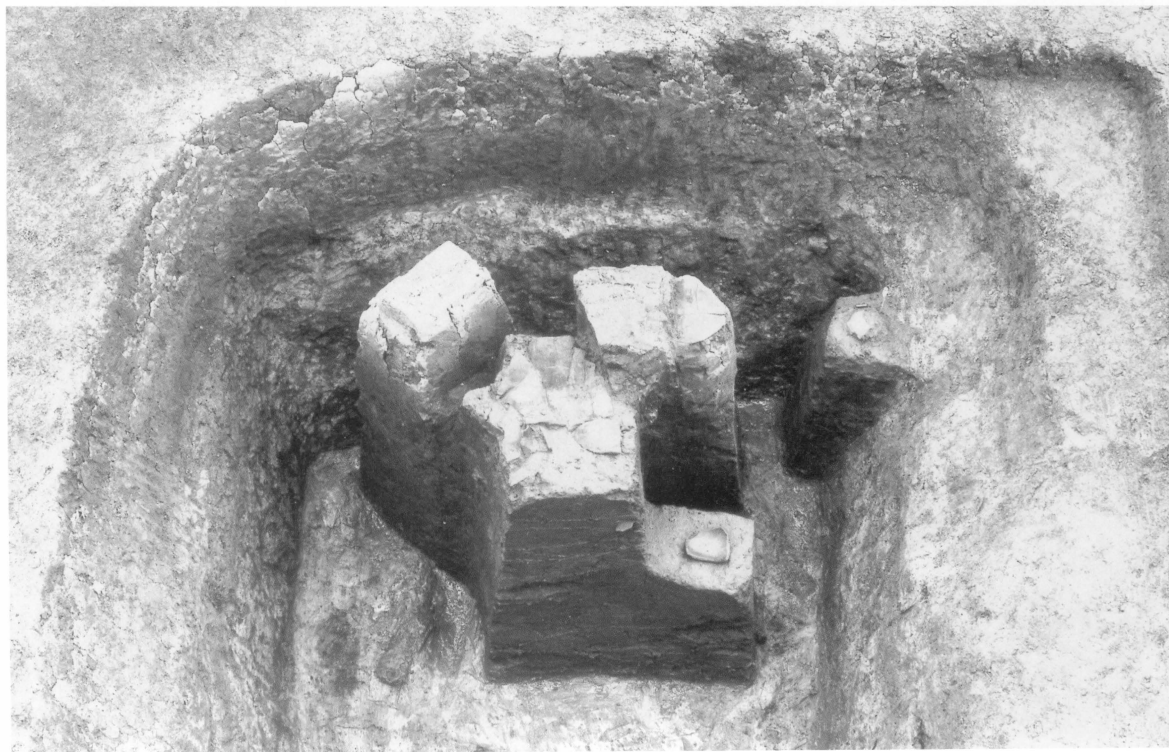
SB-4



SE-1



SE-2



SE-2



SE - 3



SE - 4



SE - 5



SE-5



SE-5



SE-8



SE - 9



SE - 10



SE - 11



SE - 11



SE - 11



SE - 11



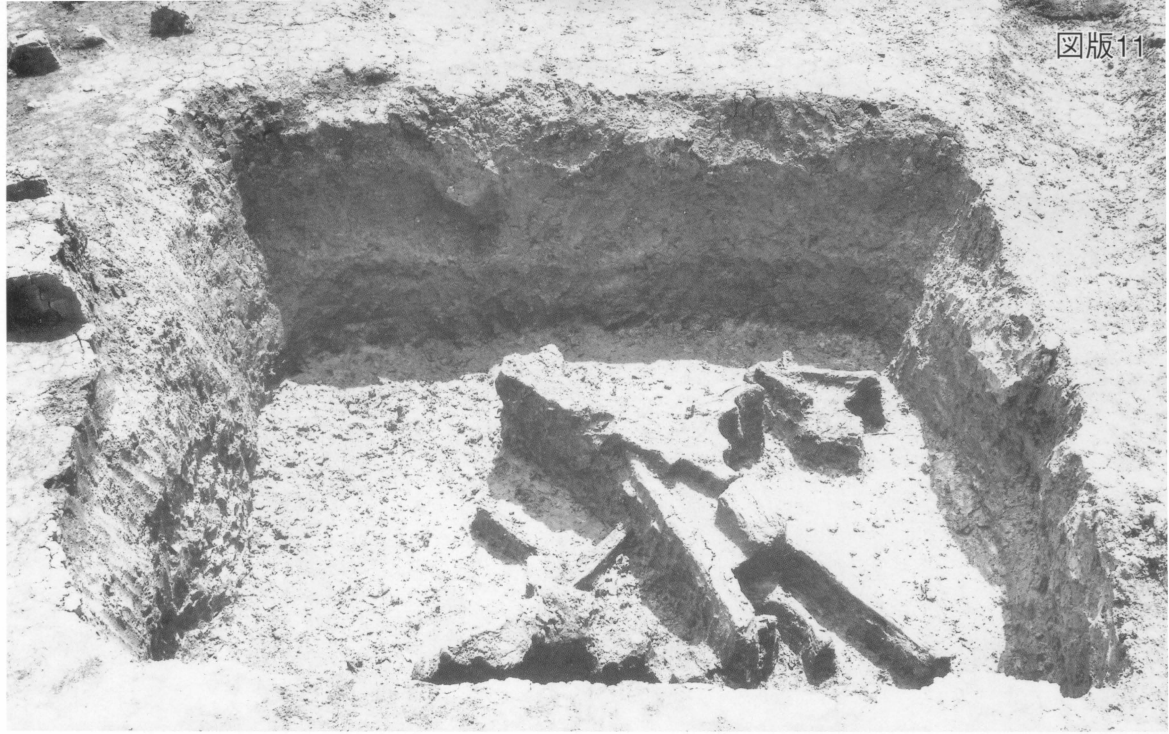
SE - 16



SE - 17



SE - 18



SE-12



SK-5



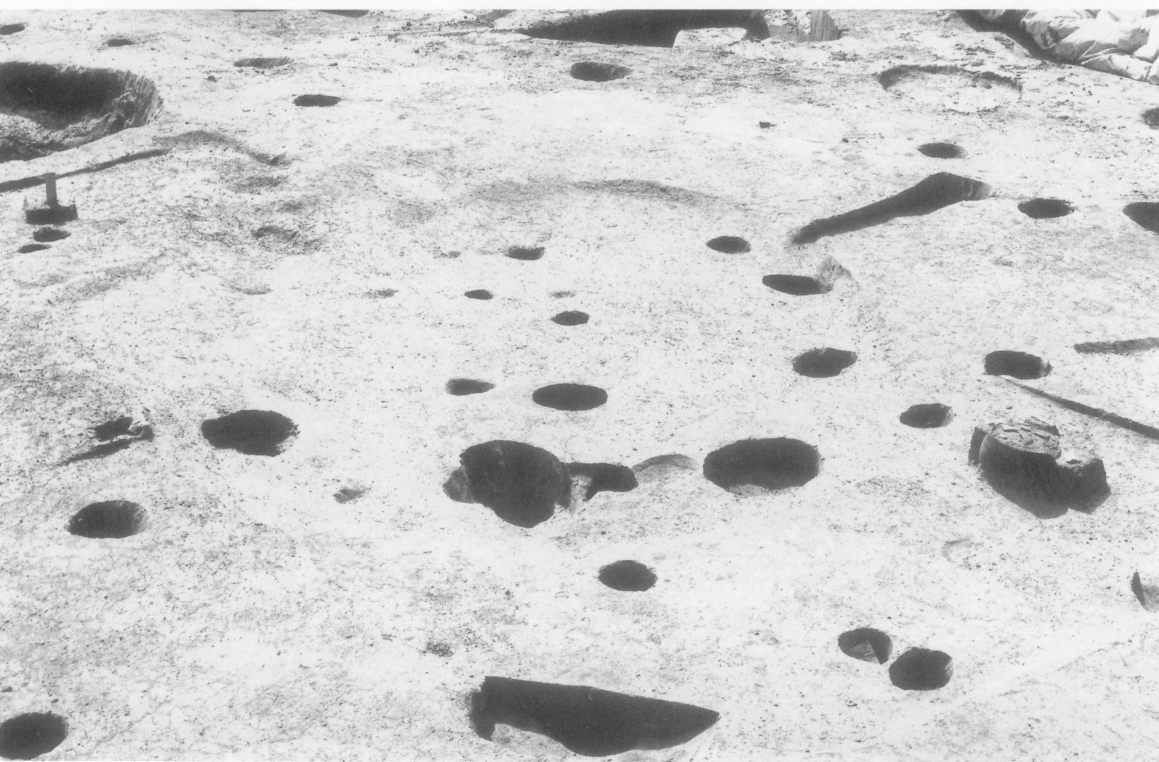
SK-9



SK-14



SD-29·30



SX-2



SD-41



SD-41



SD-44



IV層上面の遺構



1号・2号周溝遺構



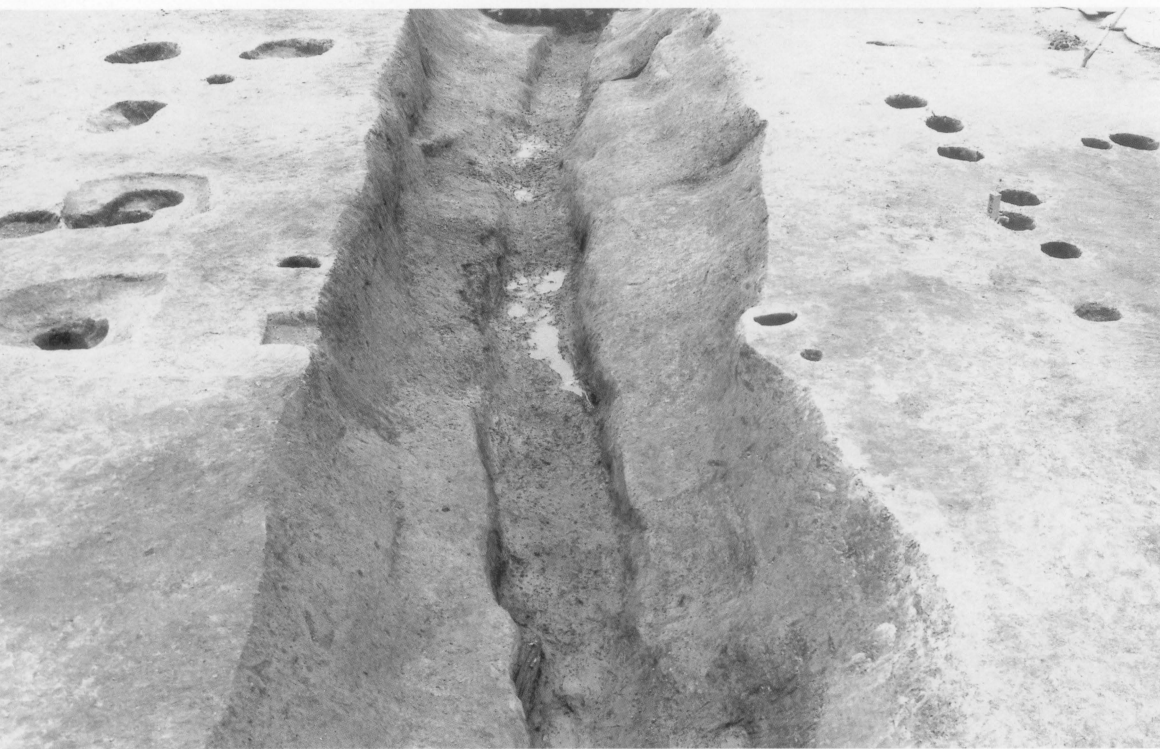
1号周溝遺構



2号周溝遺構



SD - 45



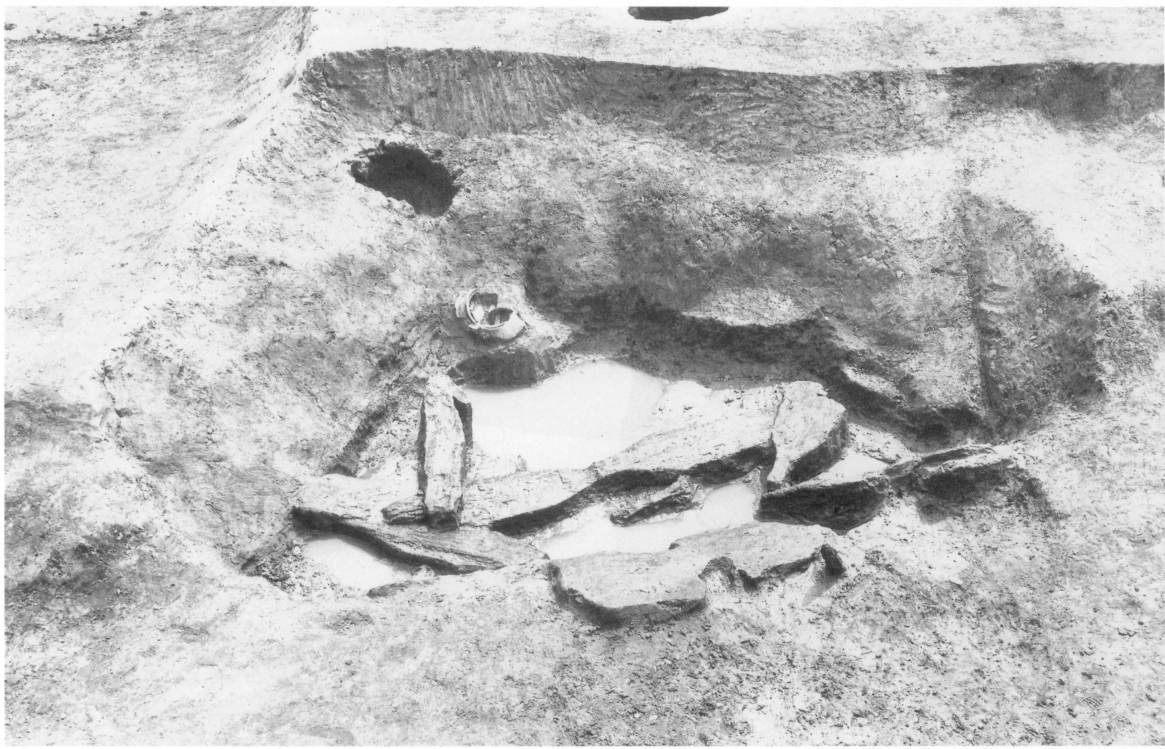
SD - 45



SD - 45



SD-45



SD-45



SD-45



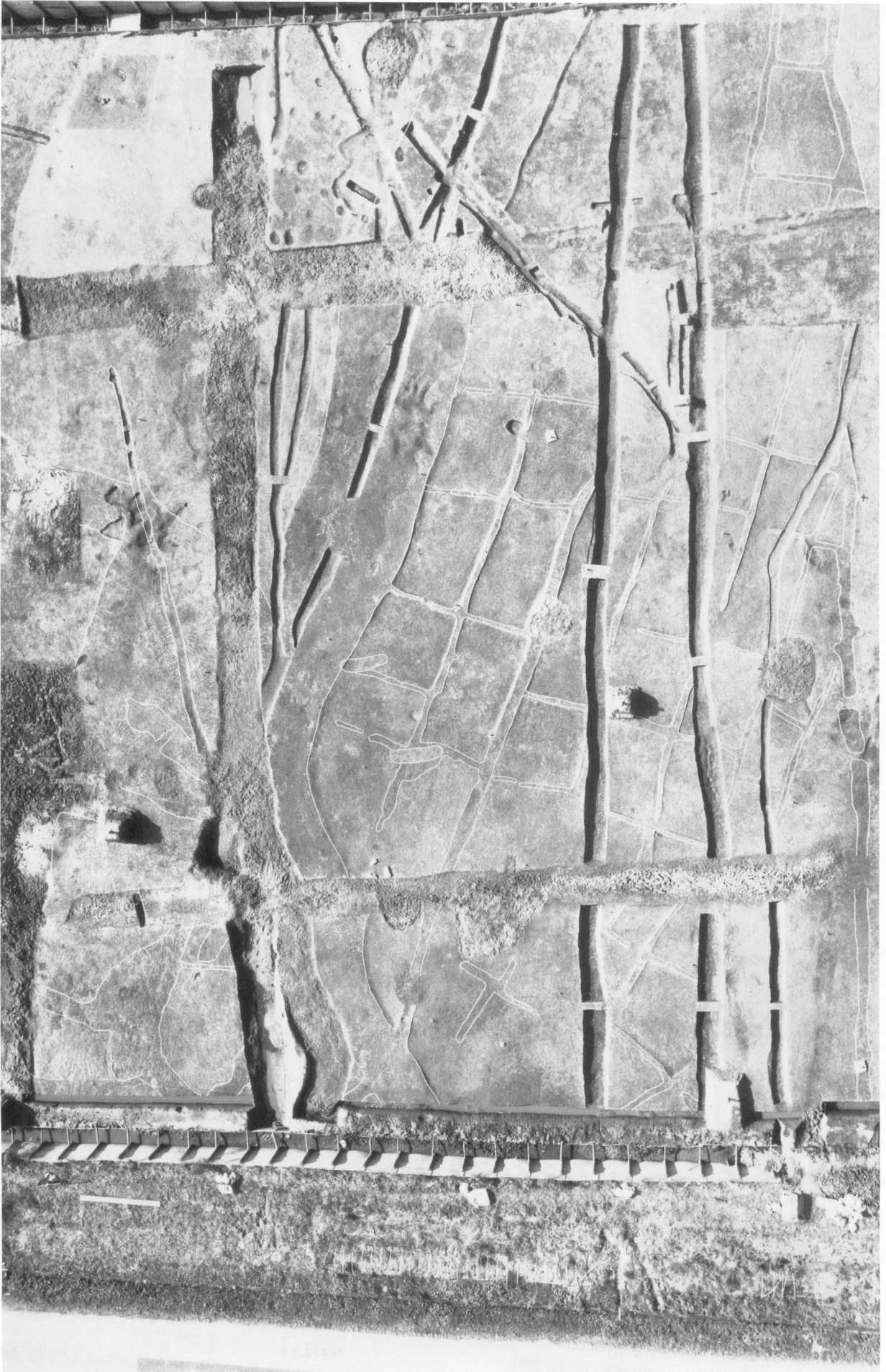
畦畔



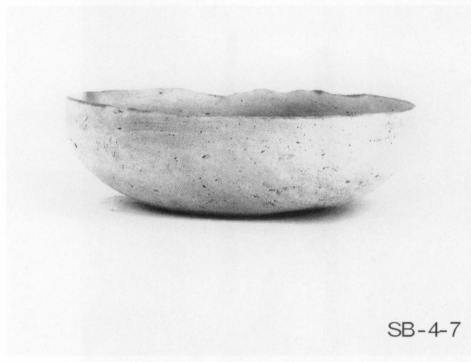
畦畔



土器配列遺構



水田跡



出土土器 (1)



SB-4-15



SB-4-16



SE-1-1



SB-4-17



SE-1-2



SE-2-1



SE-2-3

出土土器 (2)



SE-2-8



SE-8-2



SB-8-1



SE-11-3



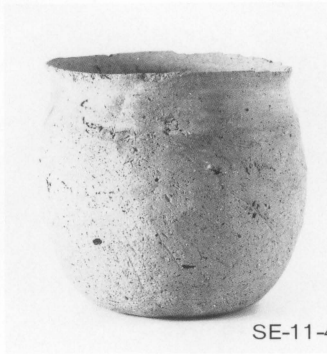
SB-8-4



SE-11-5



SE-11-2



SE-11-4



SE-12-4



SE-12-8



SE-13-3



SE-14-3



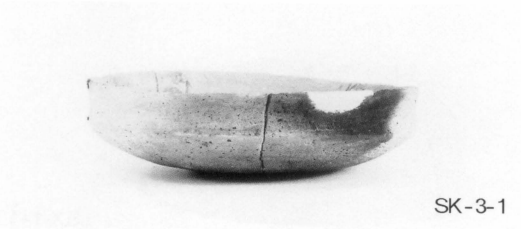
SE-14-4



SE-15-1



SK-1-1



SK-3-1



SK-3-2



SK-3-3



SK-3-4



SK-3-5



SK-3-8



SK-3-9



SK-3-12



SX-1-1



SX-1-2



SX-1-5



SX-1-8



SX-1-9



SX-1-10



SX-1-11



SX-1-14



SX-1-15



SX-1-16



SX-1-17



SX-1-20



SX-1-22



SX-1-25



SX-1-30



SX-1-34



SX-1-33



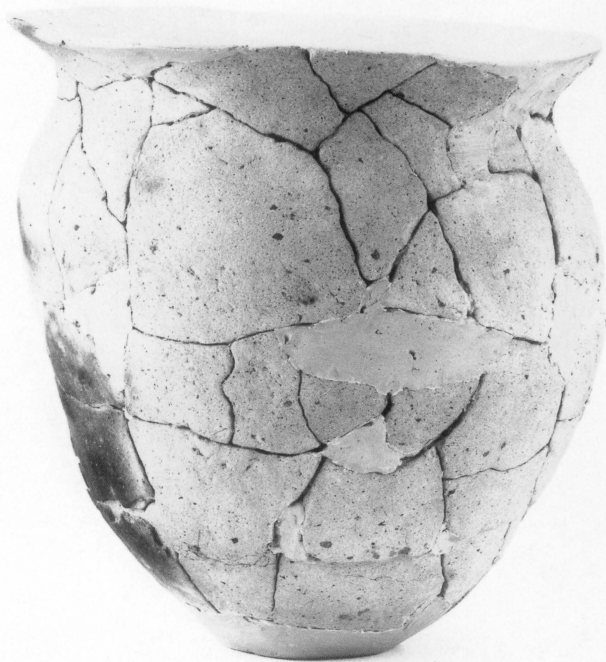
SX-1-45

出土土器 (6)





SX-1-53



SX-1-54



SX-2-5



Pit430-3



Pit430-2



Pit430-4



SD-41-10



SD-44-1



SD-44-2



SB-3-2



SD-44-3



SB-3-3



SB-3-4



1号周溝-2



1号周溝-3



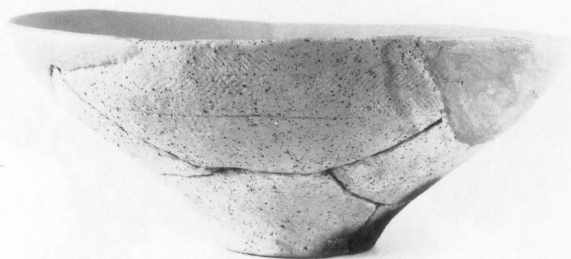
1号周溝-4



1号周溝-7



1号周溝-8



2号周溝-2



2号周溝-1



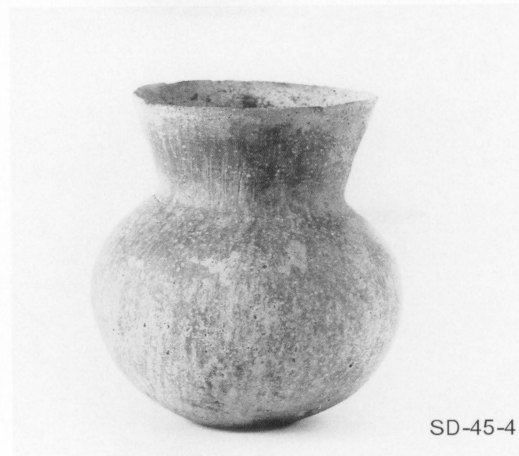
2号周溝-9



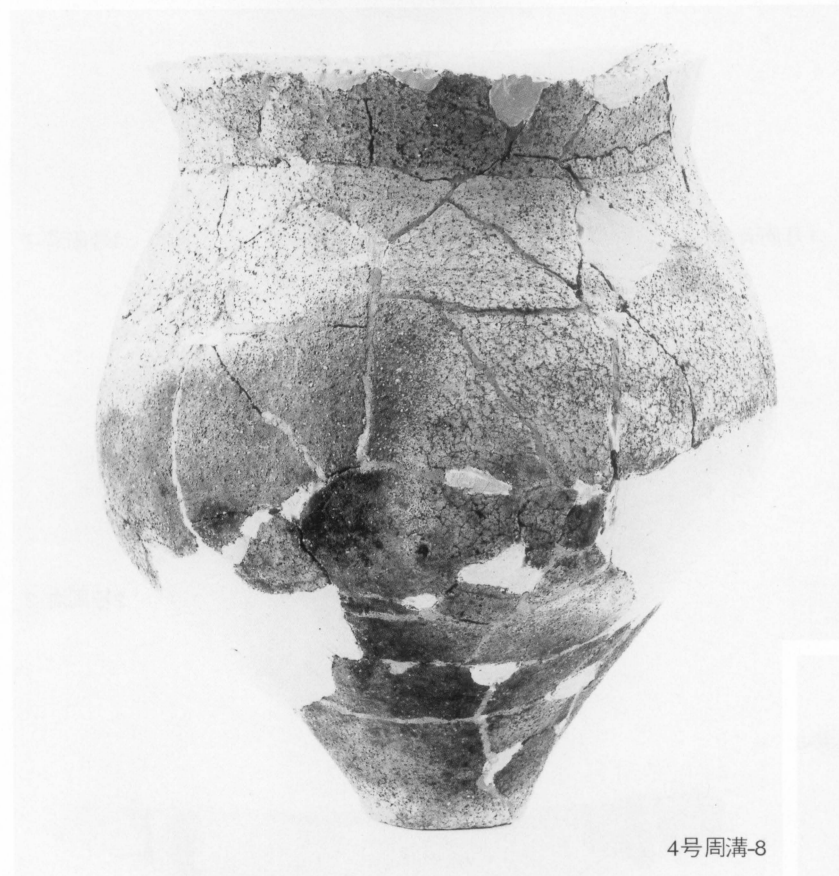
2号周溝-15



SD-45-1



SD-45-4



4号周溝-8



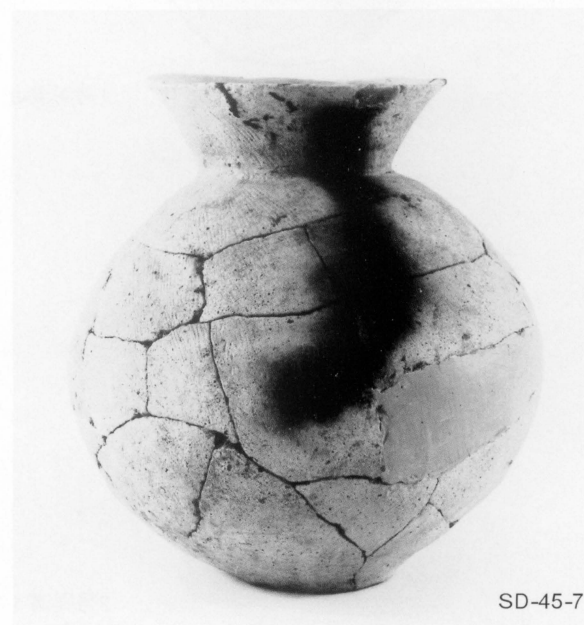
SD-45-5



SD-45-32



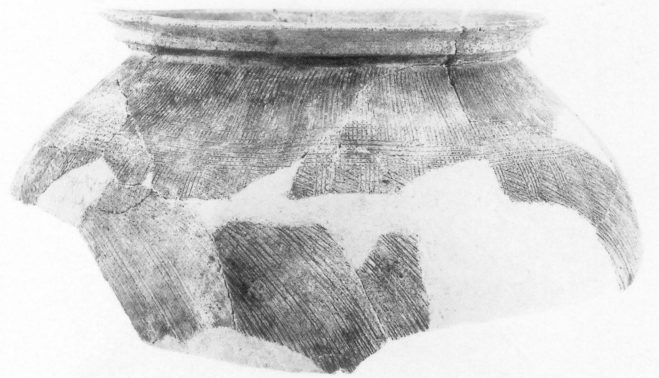
SD-45-33



SD-45-7



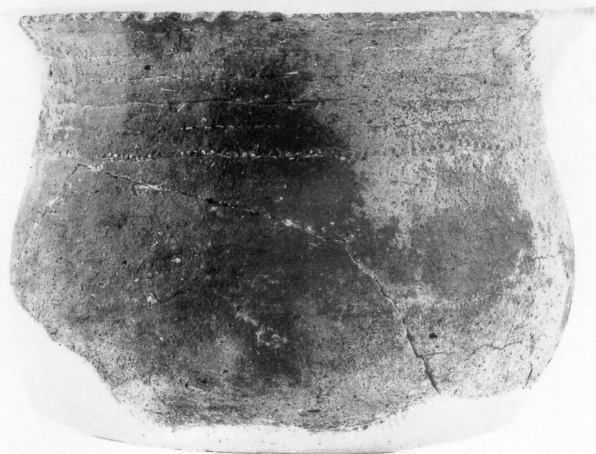
SD-45-41



SD-45-49



SD-45-44



配列-6



配列-5



配列-1



遺構外-1



遺構外-3



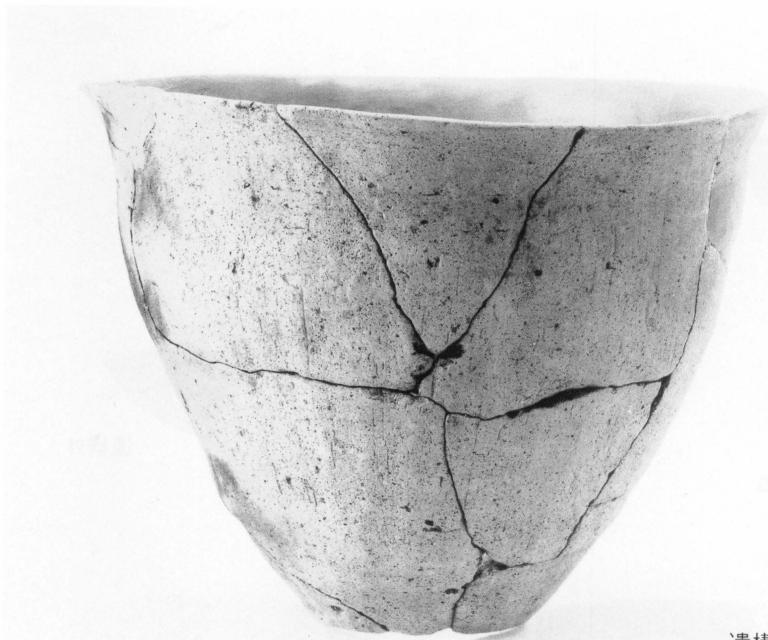
遺構外-4



遺構外-18



遺構外-5



遺構外-4



遺構外-7



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-5



遺構外-13



遺構外-28



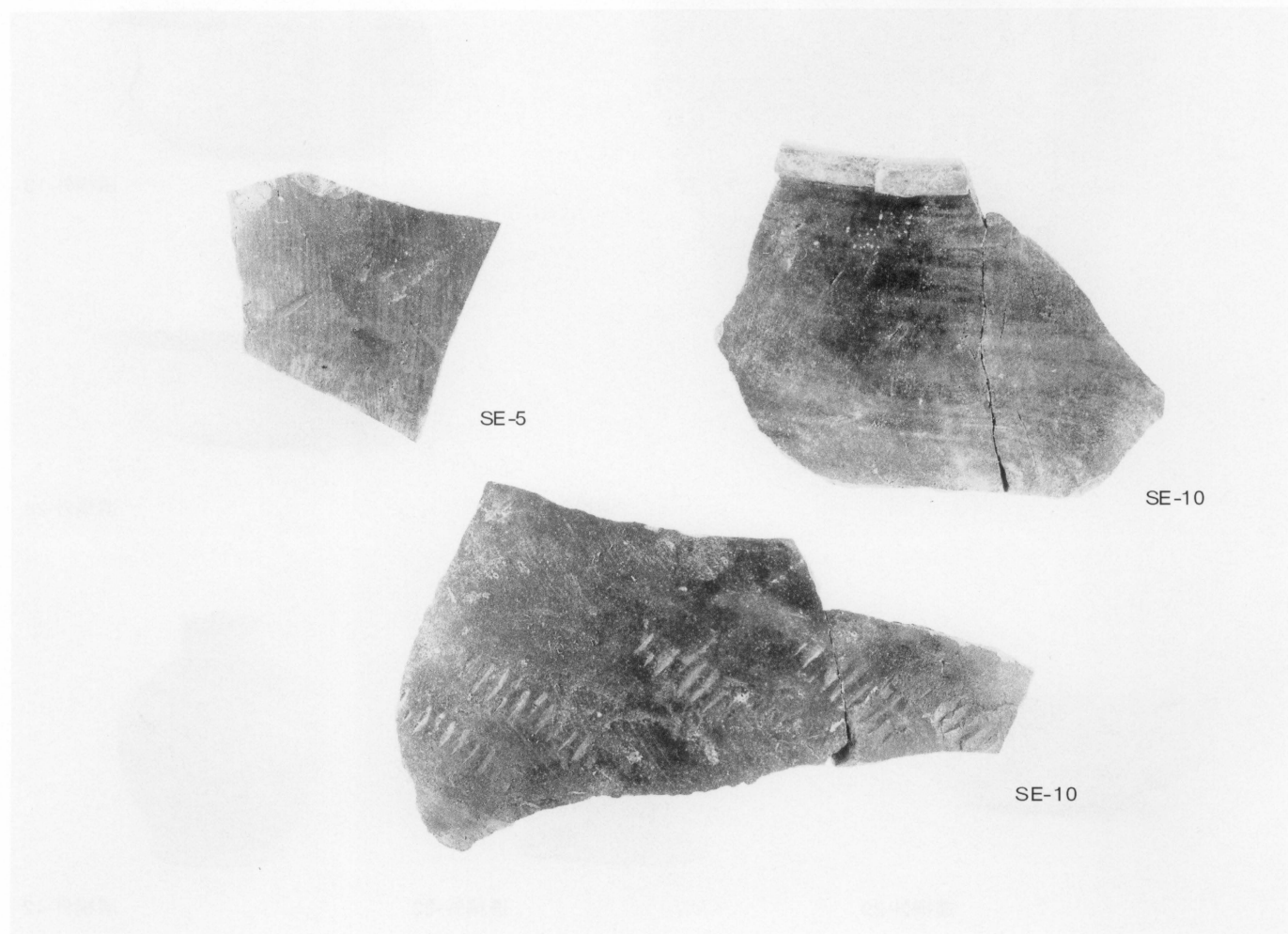
遺構外-29

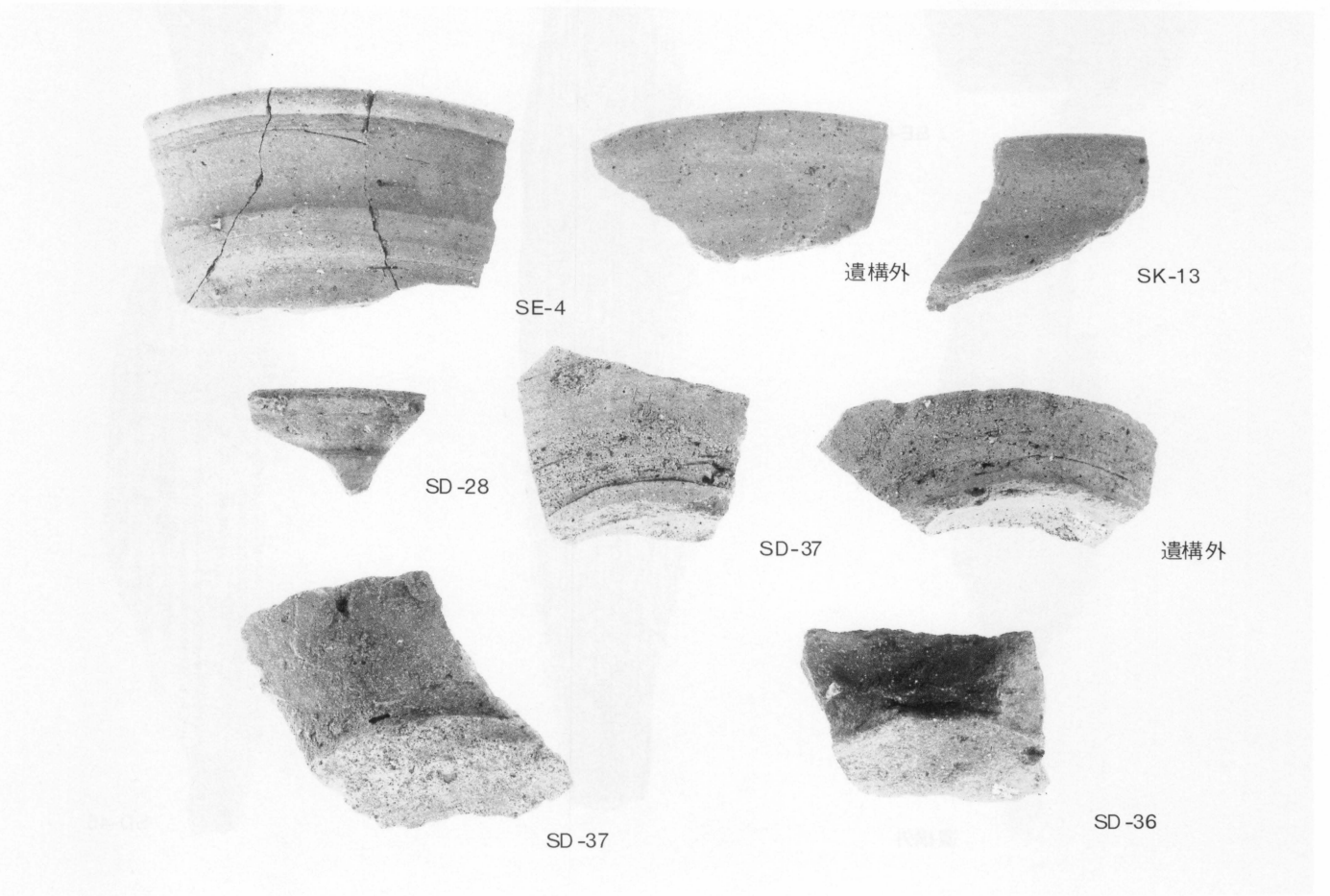
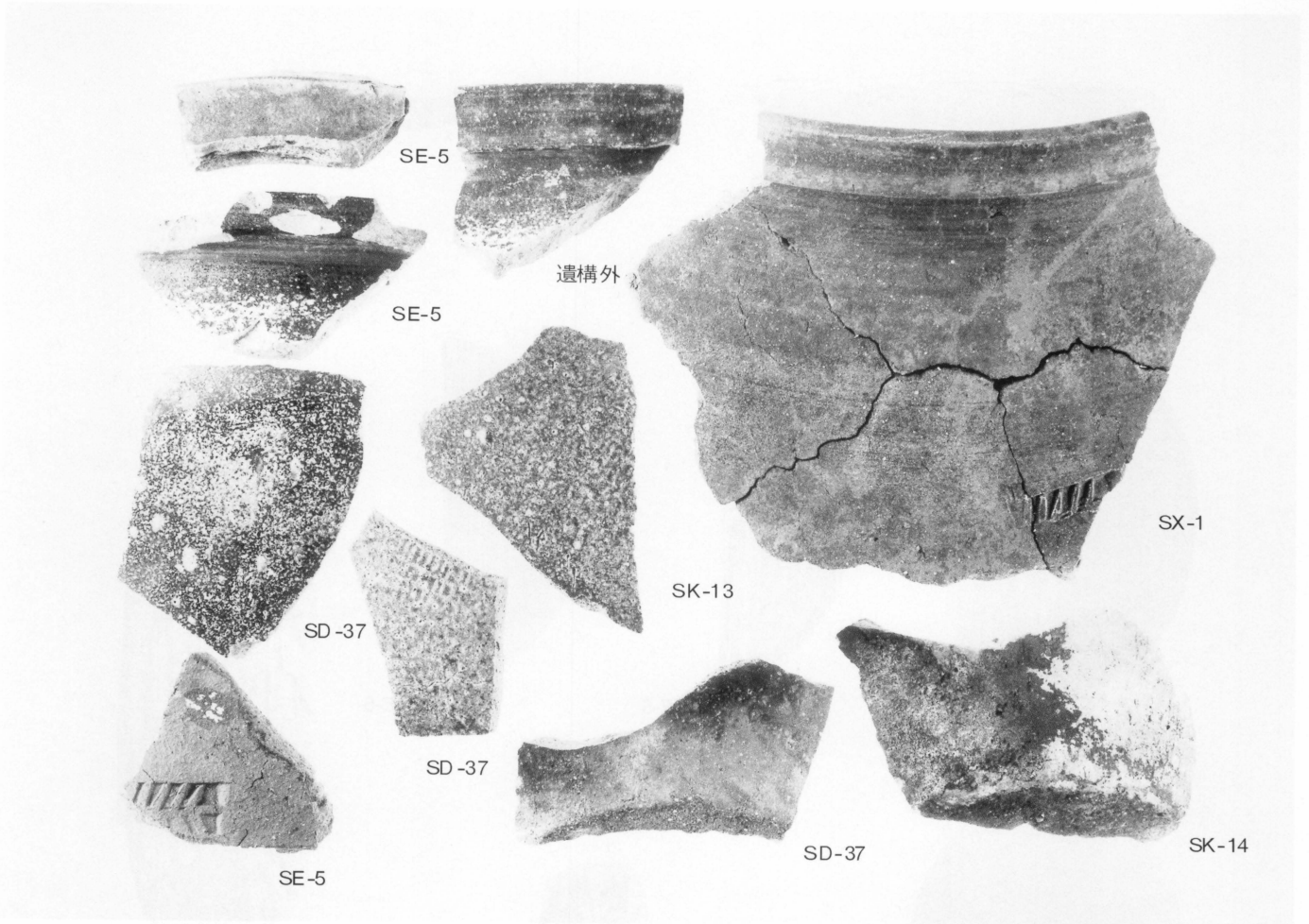


遺構外-32



遺構外-42





中世陶磁器 (2)



SE-5



SE-5



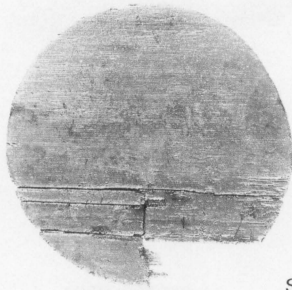
SE-5



SE-5



SE-5



SE-6



遺構外



SD-45



SD-45

報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどう(ちば・ふつつせん)まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書							
副書名	木更津市芝野遺跡							
巻次	7							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第409集							
編著者名	笹生 衛							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しほの 芝野遺跡	きさらづししもうだあざ 木更津市下望陀字 しほの 芝野507ほか	12206	002	35度 23分 33秒	140度 0分 30秒	19890401～ 19890628 19900117～ 19900331 19910401～ 19911130	8,100	道路(東関東自動車道) 建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
芝野遺跡	集落跡	弥生	竪穴住居跡・水田 円形周溝遺構 土器配列遺構	弥生土器		竪穴住居跡・円形周溝遺構からなる居住域と小区画水田がセットで検出された		
		古墳	大溝・竪穴住居跡 井戸・土坑・古墳 土器集積遺構	土師器・須恵器 木製品		前期の大溝と付属する溜井内から木製品が検出された 後期の土器集積遺構は祭祀的な性格が推定される		
		奈良・平安	柱穴・井戸・溝	土師器・須恵器 灰釉陶器				
		中世	方形竪穴遺構・井戸 掘立柱建物跡・溝	常滑・瀬戸窯製品 青磁・木製品		13世紀から14世紀前半まで掘立柱建物跡・井戸で構成される屋敷地が形成されていた		

千葉県文化財センター調査報告第409集

東関東自動車道（千葉・富津線）
埋蔵文化財調査報告書 7

－木更津市芝野遺跡－

平成13年3月31日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	日 本	道 路 公 団
			東京都港区虎ノ門1-18-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿渡809-2
印	刷	大 和 美 術	印 刷 株 式 会 社
			木更津市潮浜2-1-10
